2024 年度社会調査実習報告書

—高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査—

2025 年 3 月

関西大学総合情報学部

はじめに

本報告書は、高槻市と関西大学が共同で、高槻市民を対象に実施した令和 6 年度市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」の成果を取りまとめたものです。この調査は、関西大学総合情報学部で開講している「社会調査実習」（2024 年度）の授業の一環として行われているもので、当授業の受講生が、調査票の設計からデータの入力作業まで、実施全体に大きく関わっています。たとえば、春学期には、受講生各自の関心から調査テーマを設定した上で調査票の設計を行います。そして、秋学期には、調査票のデータ入力と分析、最終報告書の執筆を行うことで、社会調査の実施に必要となる一連の過程を経験します。

このような背景から、例年、この調査では、大学生らしい自由な発想の調査テーマが選ばれる特長があります。今年度も、地域への愛着、ご当地キャラ、食生活、インターネット、旅行、演劇、ニュース、犯罪不安など、若者にとって身近なものから、地域や社会の問題に関わるものまで、多様で独創的なテーマが並びました。これらの調査結果は、単に一つの地域の市民調査という枠を超えて、学術的にもさまざまな知見を提供するものだといえるでしょう。

本調査は今回で 14 回目となり、回収率は 56.5％でした。回収率が 60％前後を推移していた過去の 13 回の調査からやや低下しましたが、高い回収率を達成できたといえるでしょう。これは関係各位の皆さまのご協力があってこそ、成しえたことです。まず、関西大学総合情報学部の松本渉先生には、調査の準備から報告書の取りまとめまでのすべての段階で、毎回、的確で丁寧なご助言をいただきました。本調査を無事終えることができたのは松本先生にご尽力いただいたおかげです。また、ティーチング・アシスタントの高山理名さん、スチューデント・アシスタントの雷新雨さんには、これまでの社会調査の経験やスキルを活かして、受講生に寄り添った立場から様々なサポートをしていただきました。

この「社会調査実習」の授業では、大規模な郵送調査を実施する都合上、時間的制約のなかで、社会調査の一連の過程を一つずつ進めていく必要があります。受講生の皆さんには、調査テーマの設定、データ入力作業、データ分析と報告書執筆などすべての段階で、熱心に粘り強く、調査や作業に取り組んでもらいました。今年度の受講者は 13 名と比較的多く、データ入力作業はスムーズに進めることができましたが、1 年間で調査を実施し、報告書を完成させることは大変だったと思います。この報告書は、こうした受講生の皆さんの努力によって完成したものといえます。

最後に、本調査の実施にあたり、高槻市市民生活環境部市民生活相談課の皆さま、関西大学総合情報学部オフィスの皆さまに多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。そして何より、本調査にご協力いただきました高槻市民の皆さまに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2025 年 3 月

関西大学総合情報学部教授　阪口　祐介

目次

はじめに			i
第 1 章	調査の概要	阪口祐介・松本渉	1
第 2 章	調査結果の概要	高山 理名	8
第 3 章	属性と朝食習慣の関連性	數岡 美咲	119
第 4 章	市営バスの利用頻度の関係について	井上 勝喜	127
第 5 章	劇場へ足を運ぶ人の特徴	石崎 璃	136
第 6 章	詐欺不安の傾向とメディア利用の関係	田井 豊浩	142
第 7 章	学歴と性別役割分業意識の関連	細川 夏実	149
第 8 章	収入と幸福度	松村 咲希	157
第 9 章	公園がもたらす運動への影響	山岡 由依	165
第 10 章	ＳＮＳの利用が人々にもたらす影響	吉田 百花	172
第 11 章	情報収集におけるメディア選択	和田 枝里子	180
第 12 章	ネット情報からの人々の購買行動	喜多 涼陽	187
第 13 章	宿泊旅行頻度の傾向	久保 侑汰	194
第 14 章	近隣住民との親密度	角田 渉睦	201
第 15 章	ご当地キャラクターの市民に対する影響	福壽 志穂	209
資料			217
予告はがき			219
調査票			221

第１章　調査の概要

阪口 祐介・松本 渉

1. 調査の概要とスケジュール

高槻市と関西大学による市民意識調査「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」は、2024（令和 6）年 8 月から 9 月にかけ、高槻市と関西大学総合情報学部によって行われた。社会調査実習の一環として、春学期には調査票の作成が、夏休みには調査票発送作業が、秋学期にはデータ入力、データ作成、分析等が行われた（表 1）。

表１　高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査スケジュール

	日付	授業内	授業外
春学期	4/11	「社会調査実習」前期授業開講	高槻市と関西大学の
	4/18～7/18	調査票の作成	打ち合わせ（随時）
夏休み	7/31		サンプリング
	7/11～7/25		調査票印刷
	8/7	調査票発送準備作業	
	8/19		予告はがき発送
	8/21		調査票発送
	9/6		返送締切日
秋学期	9/26	「社会調査実習」秋学期授業開講	
	9/26～11/14	データの入力・読み合わせ	
	11/14～12/5		データクリーニング
	11/21～12/5	分析方法の習得	
	12/12～1/16	中間レポートの提出・報告	速報版報告書執筆
	1/16	最終授業（最終レポートの提出）	報告書執筆
	1/16～2/28		報告書編集

2. サンプリング

調査対象者: 18 歳以上 85 歳未満の高槻市民(1939 年 8 月 1 日～2006 年 7 月 31 日出生)

抽出名簿: 住民基本台帳 (2024(令和 6)年 7 月 31 日現在)

標本抽出法:層化抽出法

(具体的な手順)

1. 2024(令和 6)年 6 月末現在の人口に基づいて、性別と年齢によって作成された 12 の層の人口を算出する。次に、その人口の比率に従って、計画標本 2,000 を各層に割り当てる(表 2)。

表 2 層化の基準日の人口構成と計画標本の割り当て

	令和 6 年 6 月末現在の人口			計画標本の割り当て		
	男	女	男女計	男	女	男女計
18・19 歳	3,392	3,130	6,522	25	23	48
20 代	16,584	16,966	33,550	118	121	239
30 代	17,222	17,473	34,695	126	129	255
40 代	22,723	23,478	46,201	170	176	346
50 代	26,702	27,254	53,956	186	189	375
60 代	17,347	19,200	36,547	123	138	261
70 代以上	28,224	37,357	65,581	206	270	476
合計	132,194	144,858	277,052	954	1,046	2,000

2. 各層で割り当てられた人数を系統的に無作為抽出する。

3. 調査実施上の工夫

この調査では、調査および回収を円滑に実施するために、過年度と同様の工夫を行っている。

予告はがきの送付

調査票が届き次第、スムーズに回答できるように調査票発送の 2 日前に予告はがきを送付した(昨年度は 5 日前に送付)。このように事前に調査の実施を通知することで、調査対象者は心の準備をすることができ、また調査に対する期待感を高められると考えたからである。なお、見やすくシンプルな文面とするため、ご挨拶以外にはがきに掲載した情報は最低限(「近日中に大きな茶封筒(ボールペン入り)が届くこと」「対象者が無作為で選ばれたこと」の 2 点)にとどめた。今回は 8 月 19 日(月)に予告はがきを送付した。

調査票送付日

調査票の送付は、大学の窓口の盆休み終了後、最初の水曜日である 2024（令和 6）年 8 月 21 日（水）に行った。勤め人の夏休みを避けた上で、金曜日頃に調査票を受け取るためである。なお、2022 年度までは、調査票の送付は木曜日であったが、2023 年度から水曜日に変更している。2021 年 10 月より土曜日の郵便配達が休止されたことで、以前は土曜日に届いていた配達が月曜日になったため、週末に調査票が届くように 1 日発送を早くした。

同封物

筆記具を探す必要がないようにという配慮から、箱入りボールペンを同封した。また、箱を同封することで封筒の形状を目立たせ、ほかの郵便物に紛れなくなるという効果もある。なお事前にも事後にも金銭的な謝礼は一切行っていない。

調査票の用紙

目立つように、水色（なお前年はうす水色）の紙を使用した。また、やや重くなるが、裏面が透けて読みにくくならないように厚手の紙を利用した。

調査票における挨拶文

すぐに質問文が目に入るようにするため、挨拶文は 1 ページの上段のみにとどめた。その主な内容は、①調査目的以外に一切利用しないこと、②結果の公表を約束すること、③住所や名前を記入しないことをお願いすることの 3 点である。それぞれ、①安心感の付与、②社会還元の明示、③匿名性の担保を示している。

調査票の構成デザイン

二段組にすることによってスペースを有効に利用し、A4 サイズ 8 ページ（両面）の範囲に収まる調査票とした。文字フォントは、質問文を太字の MS ゴシック、選択肢を MS 明朝としてメリハリをつけた。

封筒

調査票送付用封筒については、A4 サイズの調査票を折り曲げずに済むように、角 2 サイズの糊付封筒を利用した。

一方、返信用の封筒については、ハイシール加工済みの角 2 サイズの封筒を利用した。調査対象者が、回答票を封入して返送しやすくするためである。

催促状（なし）

催促状の送付は行っていない。

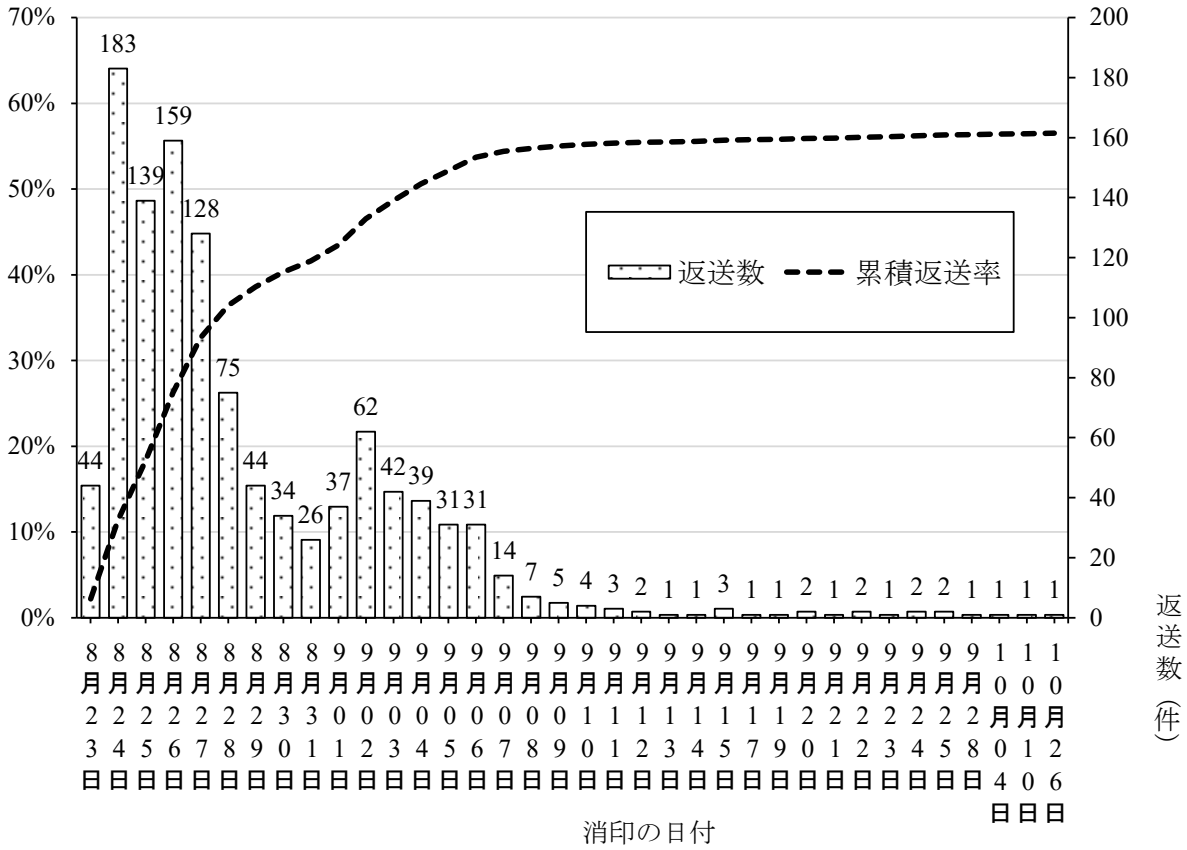
4. 調査票の回収状況

4.1. 返送状況

調査票の返送状況について述べる。図 1 は、消印の日付から調査票の返送状況の経過を示したものである。

最も早い消印は翌 8 月 23 日（金）である。返送日の山が二つみられる。第 1 の山は、最大の返送数 183 となった 8 月 24 日（土）であり、調査票受取直後の記入・返送のピークといえる。第 2 の山は、返送数 159 であった 8 月 26 日（月）である。調査票受領後にすぐにおとずれた土日を利用した記入・返送のピークといえる。これに続く山は、返送数 37 であった 9 月 1 日（日）から返送数 31 であった 9 月 6 日（金）までの期間であり、調査票受取直後の時期に生じる 2 つのピークの後に、平坦な山が続く返送のパターンはおおむね例年の調査と同様といえる。

累積返送率については、例年と同じく、調査票の返送受け取り期間の前半で返送率が 50%台後半に達している。累積返送率のグラフ（図 1）が示しているように、回収期間後半に入ってもなだらかに上昇を続け、受け取り締切日頃には返送率が 55%を推移する結果になった。



（注1）返送数とは、回答票の返送日ごとの件数（日付は消印による）
（注2）累積返送率とは、その日までに返送された件数の累計を計画標本サイズで割った値

図 1　時系列に見た調査票の返送状況

4.2.　回収率と調査不能の内訳

郵送調査の特質上、締切日の 9 月 6 日（金）以降も調査票の返送が続いた。そのためしばらくの間返送を受け付け、10 月 26 日（土）で打ち切った。返送されてきた調査票総数は 1,132 件であり、無効調査票は 2 であった。最終的に有効な回答票数を 1,130 件、回収率を 56.5%とした。調査不能の内訳も含めた調査の状況は表 3 の通りである。

表 3　回収率と調査不能の内訳

		件数	(%)
1. 調査不能	尋ね当たらず等	4	(0.2%)
	未返送	864	(43.2%)
	無効調査票	2	(0.1%)
	計	870	(43.5%)
2. 有効回答票		1,130	(56.5%)
3. 計画標本サイズ（合計）		2,000	100.0%

4.3.　回収率の詳細

男女別の回収率については、男性 48.4%、女性 61.9%となり、女性の方が 13%ほど高い（表 4）。年齢層別の回収率では、70 代以上で 67.0%、60 代で 71.6%と高く、年齢が下がるにつれて回収率が低下し、20 代で 31.8%、18･19 歳で 25.2%まで低下する（表 5）。社会調査において、男性よりも女性において、若年層よりも高年齢層において回収率が高くなることは一般的な傾向である。

表 4　男女別の回収率

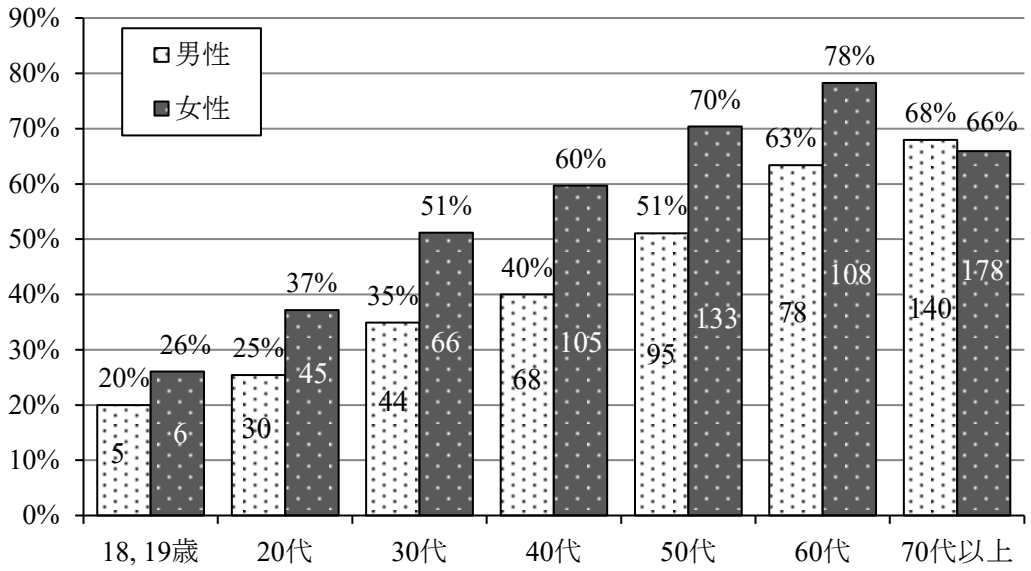
	男性	女性	不明	合計
回収標本	462	647	21	1,130
計画標本	954	1046	—	2,000
回収率（%）	48.4%	61.9%	—	56.5%

（注）男女別の回収率の計算には、不明分21が含まれていない。

表 5　年齢層別の回収率

	18, 19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
回収標本	12	76	111	174	230	187	319	21	1,130
計画標本	48	239	255	346	375	261	476	—	2,000
回収率（%）	25.2%	31.8%	43.6%	50.3%	61.3%	71.6%	67.0%	—	56.5%

（注）年齢別の回収率の計算には、不明分21が含まれていない。



（注1）棒グラフの高さおよび上側の数字は、回収率をあらわしている。
（注2）棒グラフの内側の数字は、各層における実際の回収数である。

図２　男女・年齢層別の回収率

5.　回収標本の特徴

前述した男女別・年齢層別の回収率の違いにより、回収標本が母集団からある程度ずれている可能性があるため、その確認を行った。

表 6 は、母集団における男女・年齢別の人口分布と回収標本における男女・年齢別の人口分布を比較したものである。適合度検定*から、男女・年齢別の人口分布について、回収標本が母集団と乖離していることが統計学的に示されている。とりわけ、20 代から 50 代の男性といった回収率の低い層では母集団よりも過小な人口割合である一方で、70 代以上の男性、30 代以上の女性といった回収率の高い層では母集団より過大な人口割合である。

高槻市の統計では、世帯人数別の人口分布もわかるので、この点についても回収標本と母集団との間の人口分布の比較を行った（表 7）。その結果、この比較においても適合度検定*から両者が乖離していることが統計学的に示された。一人暮らしの多い 20 代、30 代の回収率の低さがここにも影響したと考えられる。

*適合度検定

観測したデータの分布が、理論上の分布にあてはまっているかどうかを調べる統計学的手法。表 6 と表 7 では、2024（令和 6）年 6 月末時点での高槻市全体の人口の分布を理論上の分布としている。なお、表 6 と表 7 の注釈にある統計量 χ^2 は適合度基準と呼ばれる値で、この値が 0 の場合二つの分布は同一であり、値が大きいほど乖離していることを示している。*df* は、自由度と呼ばれる値（表 6 と表 7 では、「性別と年齢」「世帯人員数」の各カテゴリ数から 1 を引いた数に相当）である。*p* は、二つの分布が同一の分布である確率を表しており、統計量 χ^2 と自由度 *df* から計算されている。

表６　男女・年齢別の人口分布の比較

性別	年齢	回収標本	%	R6年6月末 人口	%
男性	18, 19歳	5	0.5%	3,392	1.2%
男性	20代	30	2.7%	16,584	6.0%
男性	30代	44	4.0%	17,222	6.2%
男性	40代	68	6.2%	22,723	8.2%
男性	50代	95	8.6%	26,702	9.6%
男性	60代	78	7.1%	17,347	6.3%
男性	70～84歳	140	12.7%	28,224	10.2%
女性	18, 19歳	6	0.5%	3,130	1.1%
女性	20代	45	4.1%	16,966	6.1%
女性	30代	66	6.0%	17,473	6.3%
女性	40代	105	9.5%	23,478	8.5%
女性	50代	133	12.1%	27,254	9.8%
女性	60代	108	9.8%	19,200	6.9%
女性	70～84歳	178	16.2%	37,357	13.5%
合計		1,101	100.0%	277,052	100%

（注1）表左側の回収標本には、性別または年齢の不明分29件が含まれていない。
（注2）表右側のR6年6月末人口は、高槻市全体の人口である
（https://www.city.takatsuki.osaka.jp/soshiki/11/33243.html）参照
（適合度検定）χ^2=85.5008, df=13, p<0.0001

表７　世帯人員別世帯数分布の比較

世帯人員数	回収標本	%	R6年6月末 世帯人員数別人口	%
1人	138	12.2%	68,349	19.7%
2人	368	32.6%	94,044	27.2%
3人	254	22.5%	75,372	21.8%
4人	218	19.3%	78,528	22.7%
5人	70	6.2%	24,610	7.1%
6人	17	1.5%	3,948	1.1%
7人	0	0.0%	1,078	0.3%
8人	1	0.1%	176	0.1%
9人	0	0.0%	81	0.0%
10人	0	0.0%	40	0.0%
11人以上	0	0.0%	22	0.0%
無回答	64	5.7%	—	—
合計	1,130	100.0%	346,248	100.0%

（注1）表右側の世帯人数別人口は母集団の分布であり、高槻市の人口
（https://www.city.takatsuki.osaka.jp/soshiki/11/33243.html）から算出した。ただし、回収標本が18～84歳で構成されているのに対し、表右側の世帯人数別人口には未成年および85歳以上も含まれている。
（適合度検定）χ^2=57.1227, df=10, p<0.0001

第２章　調査結果の概要

高山 理名

1. 調査対象者の属性

調査票の質問順とは異なるが、はじめに本調査における回答者の属性を確認する。ただし、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを表示している。よって合計%は 100.0%になるとは限らない。回答者の性別は男性が 462 人で女性が 647 人であり女性の方が多い（図 1）。年齢は 70 代が約 3 割と多く、18 歳、19 歳と 20 代は 1 割未満と少ない（図 2）。男女別に年齢を確認してもほぼ同様の傾向がみられる（図 3）。

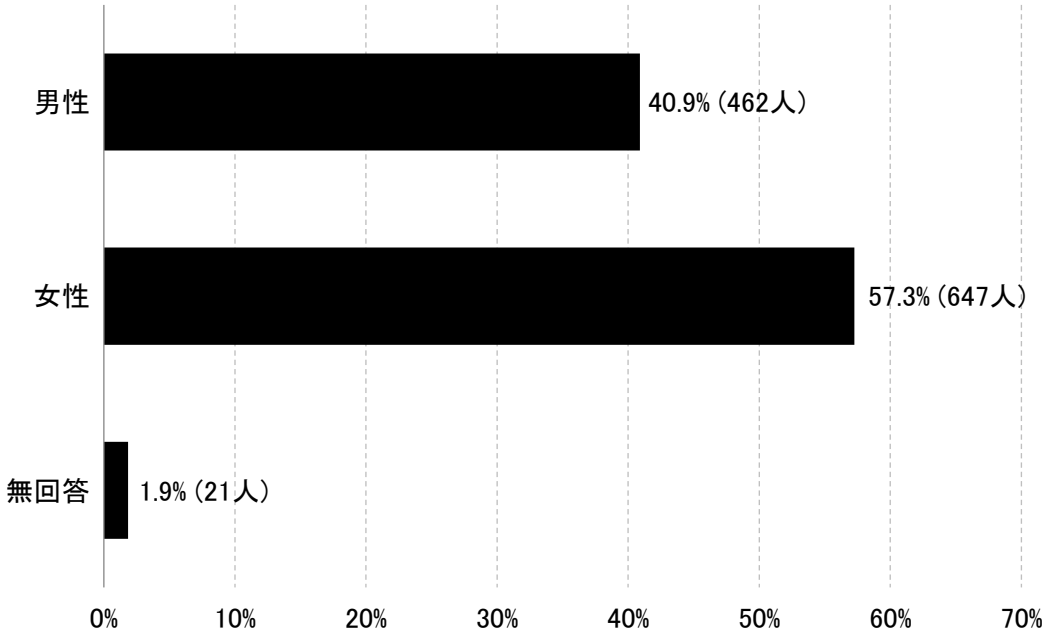


図 1　Q51 性別

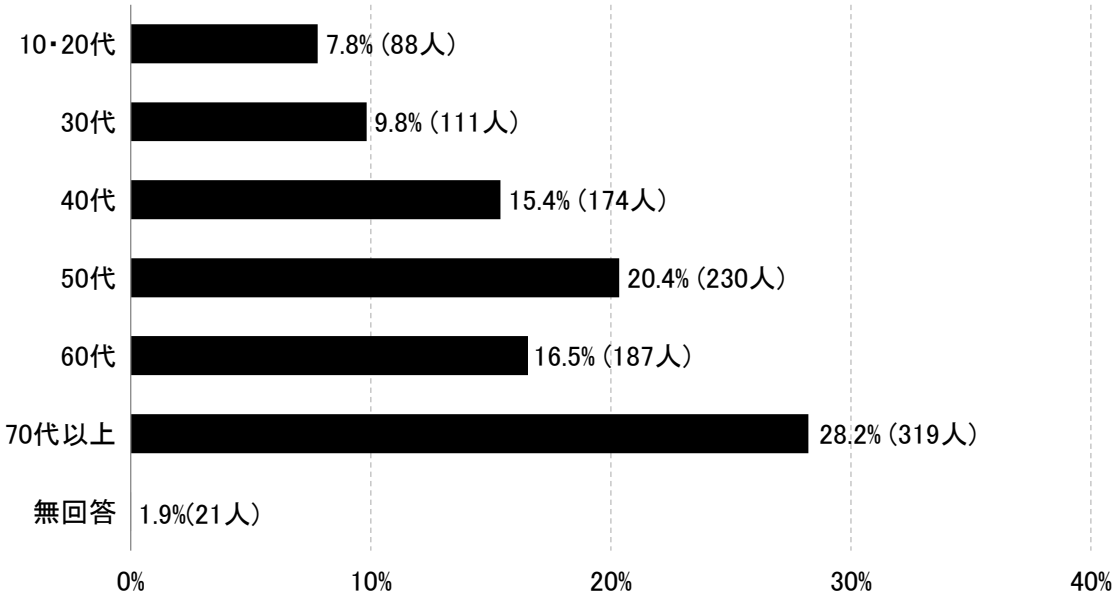


図 2　Q52 年齢

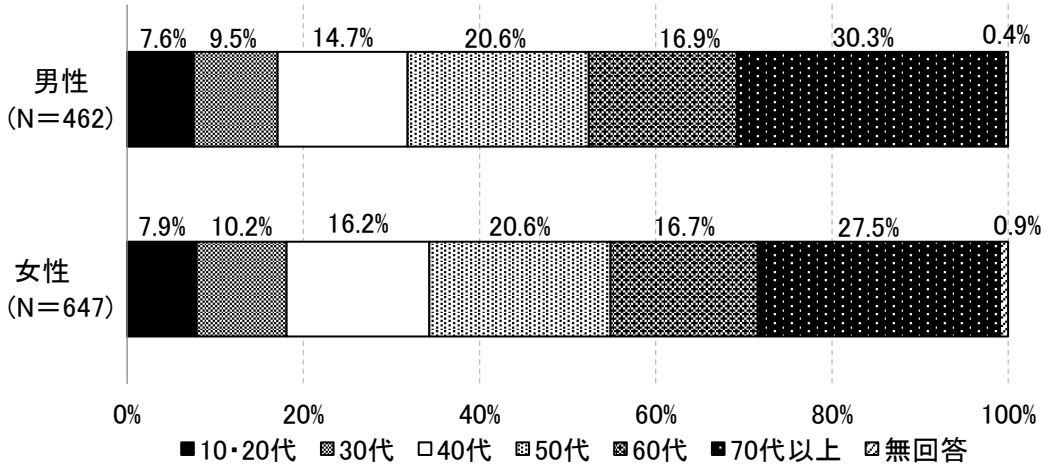


図 3　性別×年齢

以降、基本的には全ての質問項目に関して性別・年齢とのクロス集計を提示する。ただし、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。なお、本調査の全回答者数は 1,130 人である。性別・年齢の内訳については図 1 と図 2 を参照のこと。また、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧については本章の最後を参照のこと。

職業は、合計をみると常時雇用者が 30.2%と最も多く、次いで無職が多い。男女別でみると、男性は常時雇用者が 43.5%と最も多く、女性は臨時雇用、パート、アルバイトが 26.4%と最も多い。年代別でみると、60 代・70 代以上で常時雇用者の割合が大きく減少し、無職が大きく増加している。臨時雇用、パート、アルバイトと回答した人は、30 代から 60 代が 2 割以上となっている（**表 1**）。

表 1　Q53 職業

（%）

		常時雇用の勤め人	臨時雇用、パート、アルバイト	自営業主	自営業の家族従業者	経営者、役員	家事専業	学生	無職	その他	無回答
	合計 (N=1130)	30.2	19.4	4.0	2.0	2.6	11.4	2.5	24.0	1.1	2.9
男女別	男性 (N=462)	43.5	10.2	5.4	1.1	4.1	0.4	2.6	29.2	1.7	1.7
男女別	女性 (N=647)	21.0	26.4	3.1	2.8	1.5	19.6	2.3	20.2	0.6	2.3
年代別	10・20代 (N=88)	52.3	9.1	2.3	0.0	2.3	3.4	28.4	2.3	0.0	0.0
年代別	30代 (N=111)	50.5	29.7	2.7	1.8	0.9	8.1	1.8	2.7	0.9	0.9
年代別	40代 (N=174)	52.9	27.0	4.6	3.4	2.3	6.9	0.0	1.1	0.0	1.7
年代別	50代 (N=230)	45.7	25.2	3.5	2.2	3.0	8.7	0.4	7.0	2.2	2.2
年代別	60代 (N=187)	20.9	25.7	5.3	2.1	3.2	15.0	0.0	24.6	1.6	1.6
年代別	70代以上 (N=319)	0.6	7.8	4.4	1.9	2.8	17.2	0.0	62.4	0.9	1.9

最終学歴は、男女別でみると、男性が「大学（旧高専）・大学院」が 49.4%と最も多いのに対し、女性が 26.1%と男性よりも少ない。女性で最も多いのは「高校（または旧制中学など）」であり、31.8%である。また、「短大・高専（5 年制）」は男性が 3.7%と最も少ないのに対して、女性が 20.1%と「高校（または旧制中学など）」や「大学（旧高専）・大学院」に次いで 3 番目の多さである。年代別でみると、10・20 代が「大学（旧高専）・大学院」が 65.9%であるが、年代が上がるごとに減少傾向にあり、70 代以上が 21.0%である。反対に、10・20 代は「高校（または旧制中学など）」が 12.5%であるが、年代が上がるごとに増加し、70 代以上が 50.2%となっている（図 4）。

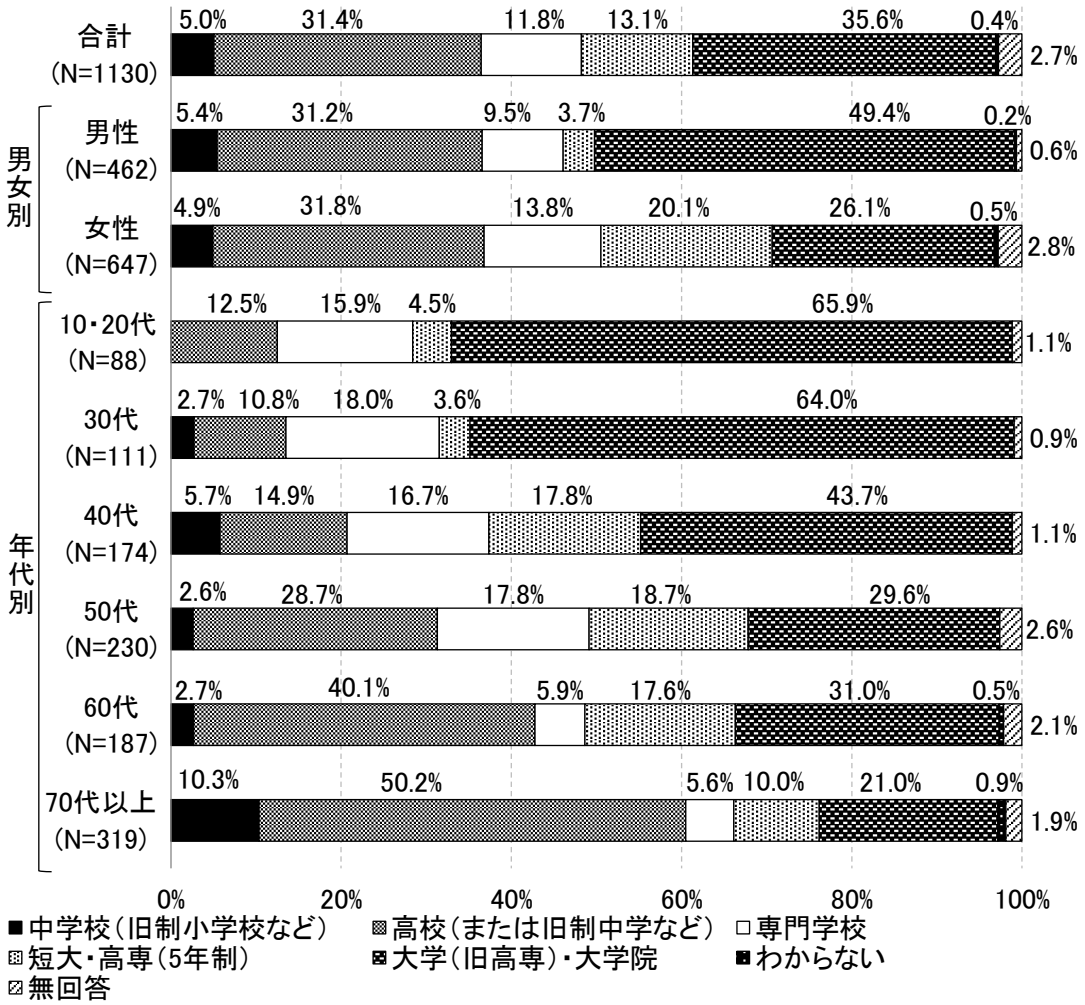


図 4　Q54 最終学歴

居住地域については昨年のとおり、単純集計のみを提示する。ここでの地区とは小学校の校区を参考にしている。各地区と該当小学校区は、樫田地区（樫田小学校）、高槻北地区（芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校）、高槻南地区（高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校）、五領地区（五領・上牧小学校）、高槻西地区（郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校）、如是・富田地区（芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校）、三箇牧地区（三箇牧・柱本小学校）である（図 5）。

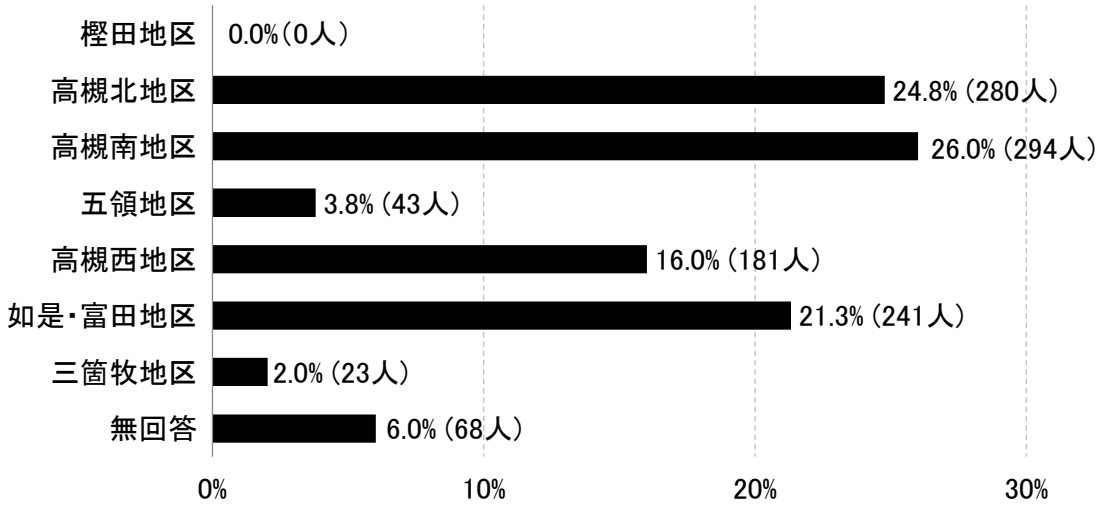


図 5　Q55 居住地域

高槻市内での居住年数に関して、全体の 8 割以上が 10 年以上市内に居住していることが分かる。年代別でみると、10・20 代が「20 年以上 30 年未満」が 43.2%と最も多く、子どものころから市内に居住していることが分かる。70 代以上が「50 年以上」が 42.6%と最も多い。なお、大きな男女差はみられない（**表 2**）。

表 2　Q56 市内居住年数

（%）

		1年未満	1年以上3年未満	3年以上5年未満	5年以上10年未満	10年以上20年未満	20年以上30年未満	30年以上40年未満	40年以上50年未満	50年以上	無回答
	合計 (N=1130)	2.1	3.6	3.5	5.5	13.8	16.1	13.8	18.3	21.3	1.9
男女別	男性 (N=462)	2.8	3.2	4.1	5.0	13.4	18.0	12.6	17.5	22.3	1.1
男女別	女性 (N=647)	1.7	3.9	3.1	5.9	14.1	14.8	14.8	19.2	21.3	1.2
年代別	10・20代 (N=88)	9.1	8.0	5.7	12.5	21.6	43.2	0.0	0.0	0.0	0.0
年代別	30代 (N=111)	6.3	19.8	19.8	7.2	9.9	11.7	25.2	0.0	0.0	0.0
年代別	40代 (N=174)	1.1	2.9	6.9	10.9	27.0	14.4	8.0	27.0	0.0	1.7
年代別	50代 (N=230)	1.3	1.7	0.0	4.8	19.1	22.2	12.2	13.5	23.9	1.3
年代別	60代 (N=187)	2.1	1.6	0.0	2.1	7.5	16.6	22.5	19.3	26.7	1.6
年代別	70代以上 (N=319)	0.0	0.0	0.0	2.5	6.3	6.0	12.9	28.8	42.6	0.9

市民の住居は男女別・年代別でみると、10・20 代を除いて、すべての層で「一戸建て」の方が「集合住宅（アパート・マンションなど)」よりも高い割合である。(図 6)。

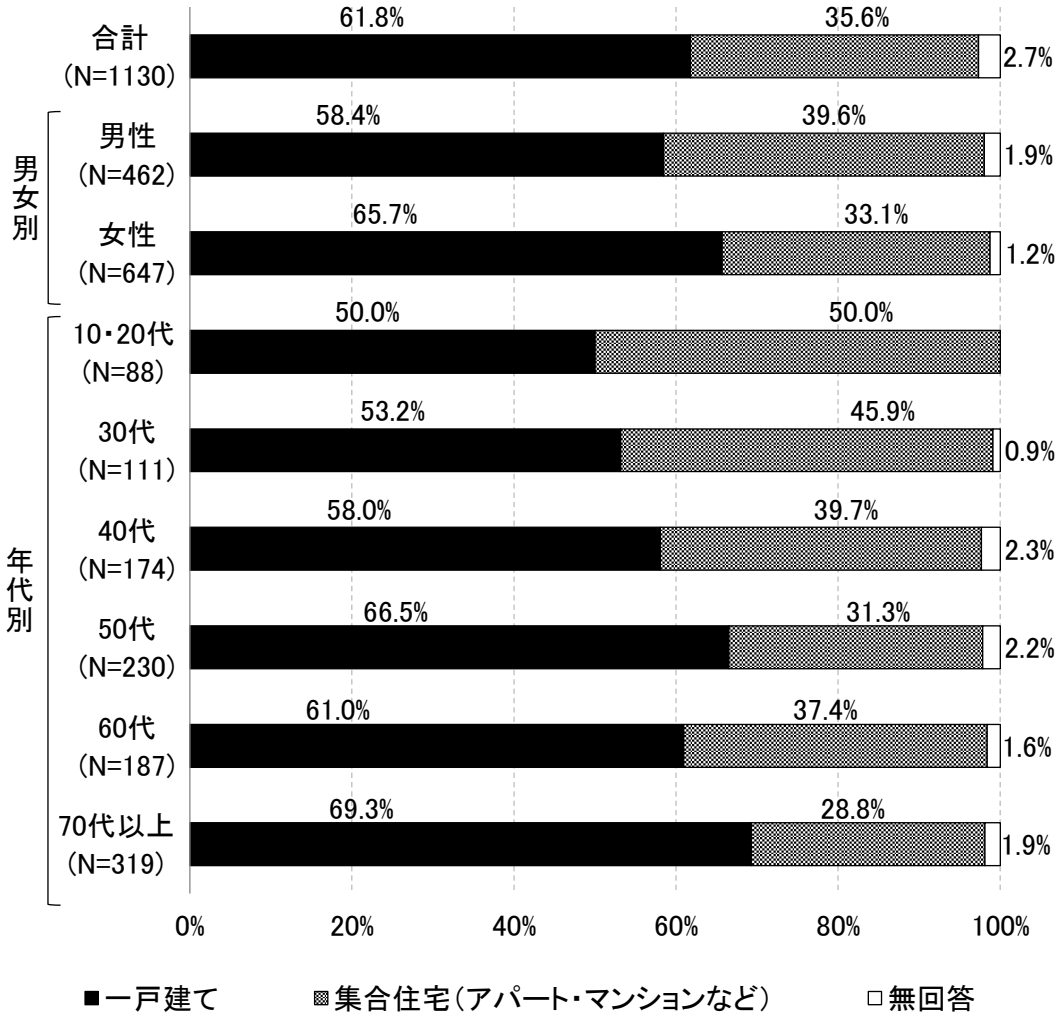


図 6　Q57 住居

居住形態は、男女別・年代別のすべての層で「持ち家」が 5 割以上と最も高い割合である。50 代以上は約 8 割以上が「持ち家」である。「民間の賃貸住宅」では、10・20 代が 30.7%と一定割合いるが、年代が上がるにつれて減少傾向にあり、70 代以上で 5.0%になる。「公社・公団等の公営の賃貸住宅」の割合は、70 代以上が 10.7%と最も高く、次いで 60 代の 7.0%である（図 7）。

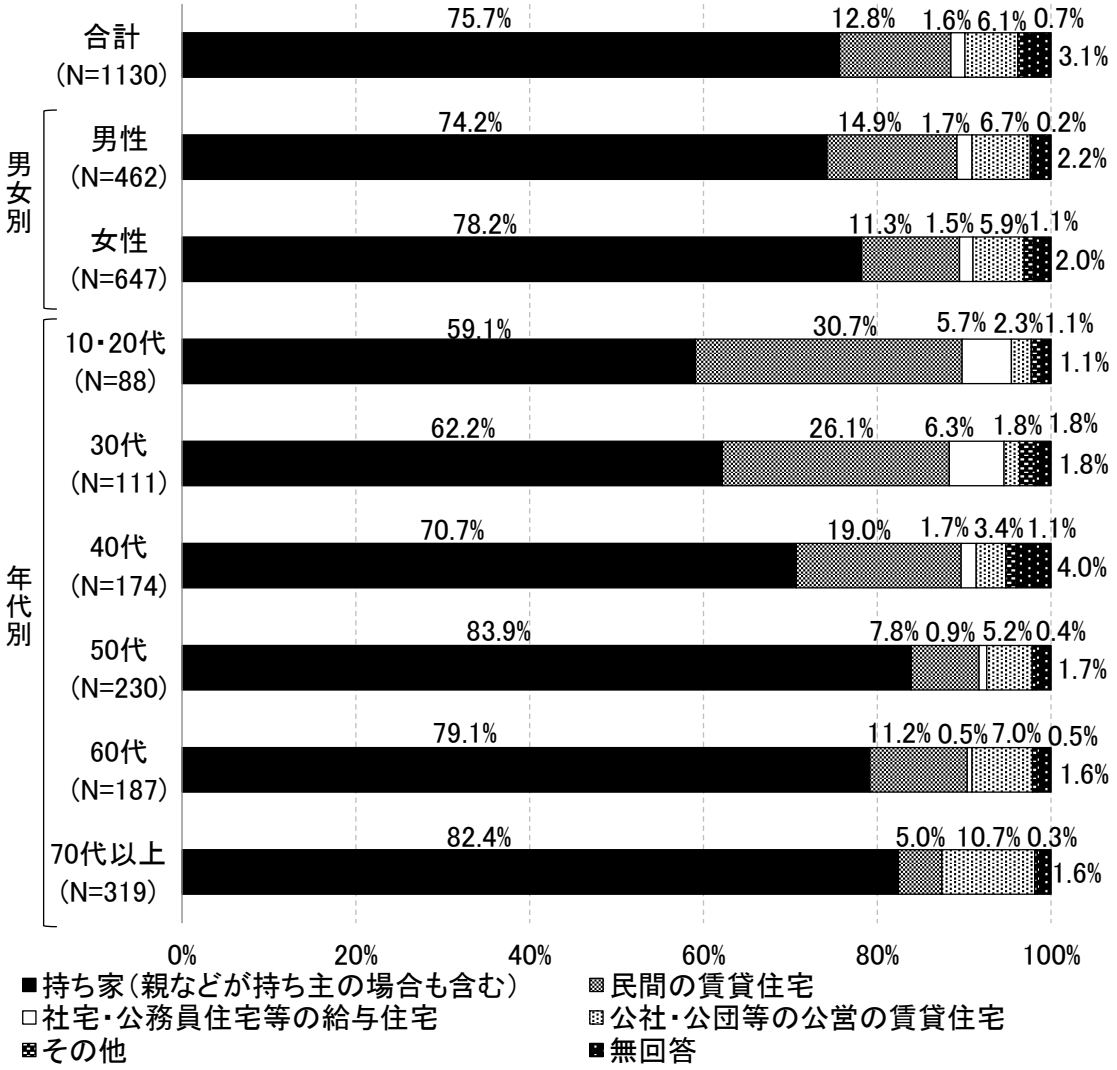


図 7　Q58 居住形態

婚姻状況に関して、男女別・年代別の 30 代以上の層で、「既婚（配偶者あり）」が最も高い割合を占める。10・20 代は「未婚」の割合が 7 割以上である。男女別でみると、「既婚（離別・死別）」の割合は、男性で 6.7%、女性で 17.0%と、女性の方が 10.3 ポイント高い（図 8）。

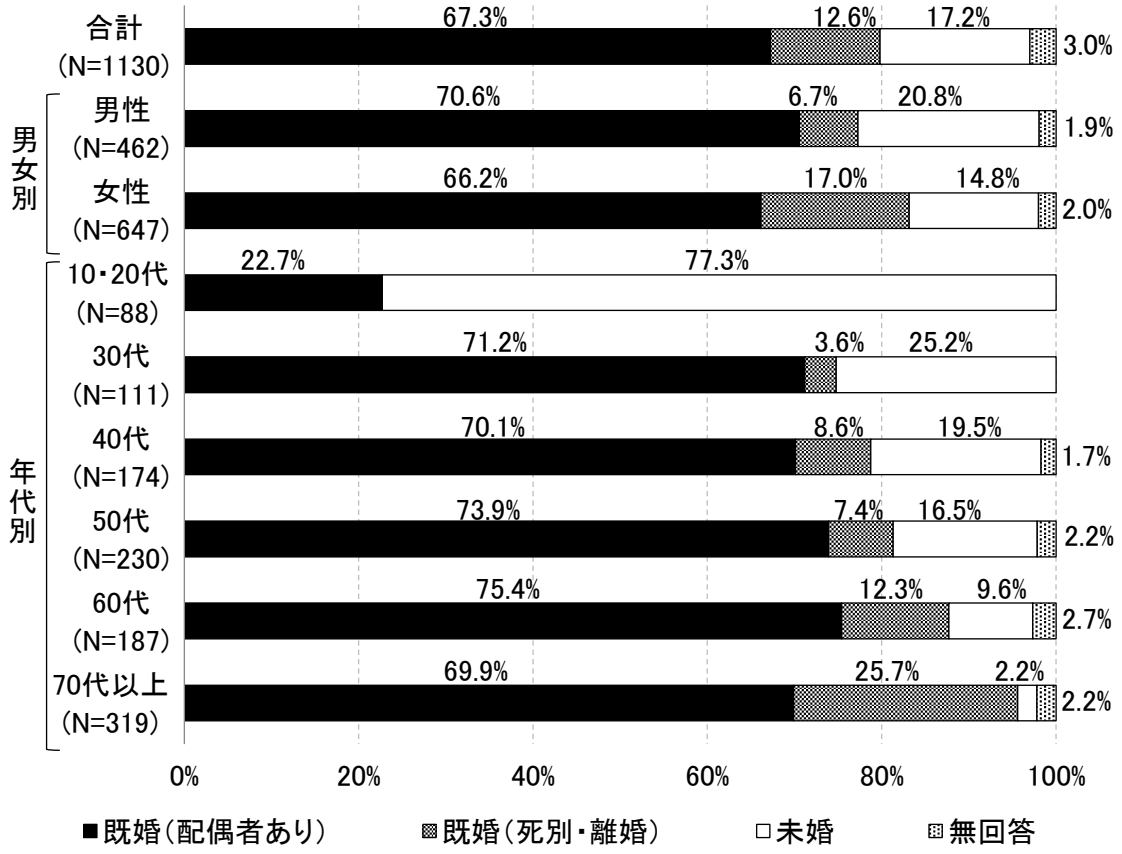


図 8　Q59 婚姻状況

子どもの有無に関して、男女別の各層・年代別の 30 代以上の層で、「いる」と回答した人の割合が「いない」と回答した人の割合より高い。10・20 代は「いない」割合が 8 割以上である。なお、「いる」と回答した人の割合は、女性の方が男性よりも 7.7 ポイント高い（図 9）。

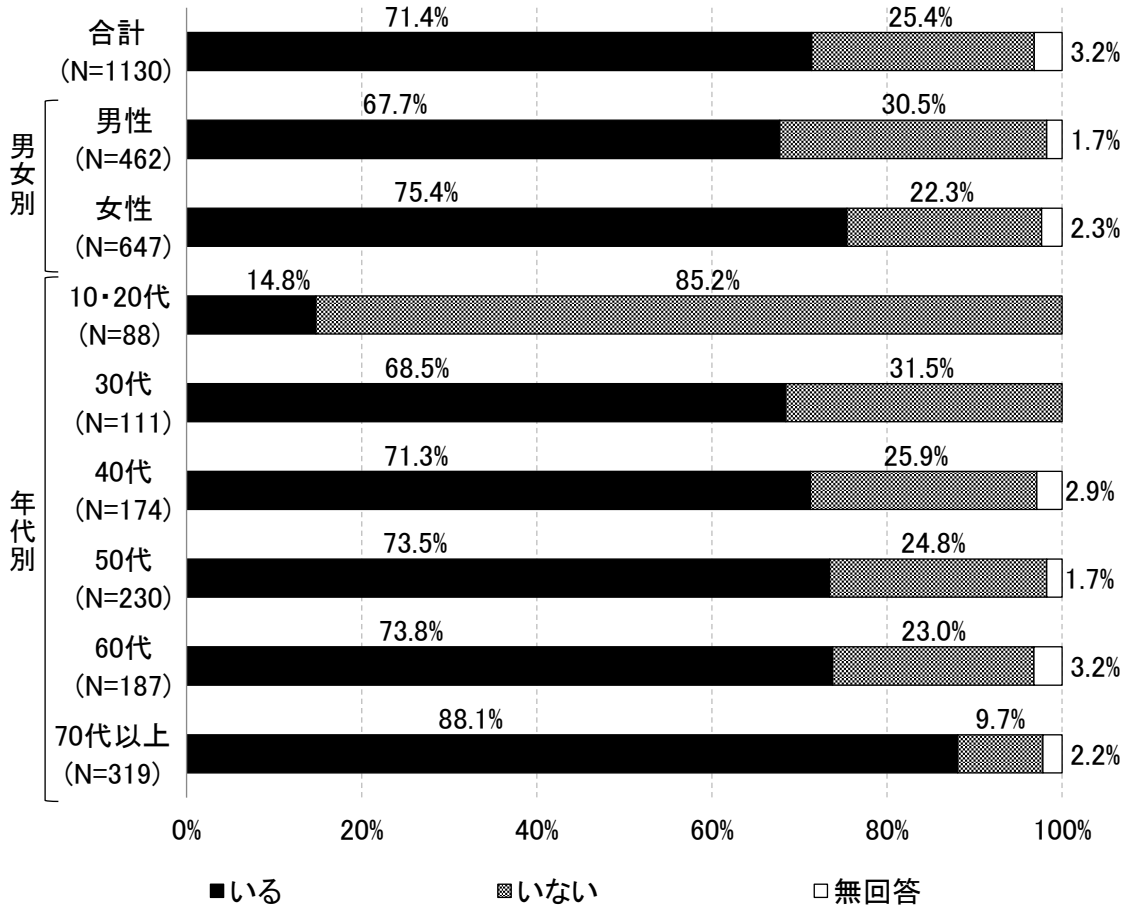


図 9　Q60 子どもの有無

世帯人数に関して、その多くは 2～4 人世帯である。年代別でみると、30 代、50 代は 3 人世帯が最も多い。一方で、10・20 代、40 代は 4 人世帯が最も多い。また、60 代、70 代以上は 2 人世帯が 4 割以上を占めている（**表 3**）。

表 3　Q61 世帯人数

(%)

		1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人以上	無回答
	合計 (N=1130)	12.2	32.6	22.5	19.3	6.2	1.5	0.1	5.7
男女別	男性 (N=462)	13.0	34.8	23.6	16.7	6.1	1.7	0.2	3.9
男女別	女性 (N=647)	11.9	31.5	22.3	21.6	6.3	1.4	0.0	4.9
年代別	10・20代 (N=88)	12.5	14.8	25.0	33.0	9.1	3.4	0.0	2.3
年代別	30代 (N=111)	8.1	14.4	32.4	28.8	11.7	0.9	0.0	3.6
年代別	40代 (N=174)	9.8	13.2	23.6	33.3	14.4	1.1	0.6	4.0
年代別	50代 (N=230)	8.3	25.7	28.3	27.8	4.3	0.9	0.0	4.8
年代別	60代 (N=187)	14.4	41.7	23.0	11.2	3.7	0.0	0.0	5.9
年代別	70代以上 (N=319)	16.9	56.1	14.4	4.1	2.2	2.8	0.0	3.4

世帯年収は、合計および男性・女性では「200～400 万円未満」が最も多い。年代別でみると、「わからない」を除いて割合が最も高いのは、10・20 代が「200 万円～400 万円未満」、30 代が「400 万円～600 万円未満」、40 代、50 代が「600 万円～800 万円未満」と、年代が上がるごとに年収が高額になっている。ただし、60 代と 70 代以上は「200 万円～400 万円未満」の割合が最も高い（**表 4**）。

表 4　Q62 世帯年収

(%)

		100万円未満	100万円～200万円未満	200万円～400万円未満	400万円～600万円未満	600万円～800万円未満	800万円～1000万円未満	1000万円～1500万円未満	1500万円以上	わからない	無回答
	合計 (N=1130)	5.3	10.8	23.4	13.5	11.3	8.8	7.0	3.5	6.5	9.7
男女別	男性 (N=462)	4.8	9.7	25.3	15.2	14.1	10.4	7.6	3.7	3.9	5.4
男女別	女性 (N=647)	5.9	11.7	22.6	12.7	9.7	8.0	6.6	3.6	8.3	10.8
年代別	10・20代 (N=88)	4.5	11.4	22.7	8.0	12.5	8.0	8.0	2.3	20.5	2.3
年代別	30代 (N=111)	6.3	7.2	15.3	17.1	9.9	13.5	9.9	5.4	8.1	7.2
年代別	40代 (N=174)	6.3	5.2	11.5	17.8	19.0	11.5	6.3	7.5	5.2	9.8
年代別	50代 (N=230)	3.0	4.3	12.6	15.2	17.0	12.6	16.5	4.3	6.1	8.3
年代別	60代 (N=187)	6.4	10.2	27.8	16.0	9.1	9.1	3.7	2.7	5.3	9.6
年代別	70代以上 (N=319)	5.6	20.4	39.5	9.7	5.3	3.8	1.6	1.3	4.4	8.5

2. 各質問項目の結果

ここからは回答者個人の属性だけでなく、意識や行動などの項目についての結果の概要を示す。ここでも基本的には性別・年齢によるクロス集計を提示する。なお、一部の回答者のみに回答が求められている質問項目に関して、その項目に該当しない者を非該当者として分析から除外している。回答者の性別と年齢の分布については、図 1 と図 2 を参照のこと。

なお、グラフや表、本文中における百分率(%)は、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを表示している。よって合計%は 100.0%になるとは限らない。

Q1 の生活満足度に関して、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「満足」または「やや満足」と回答している。年代別でみると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 10・20 代が 79.5%と最も高く、60 代が 62.0%と最も低い（図 10）。

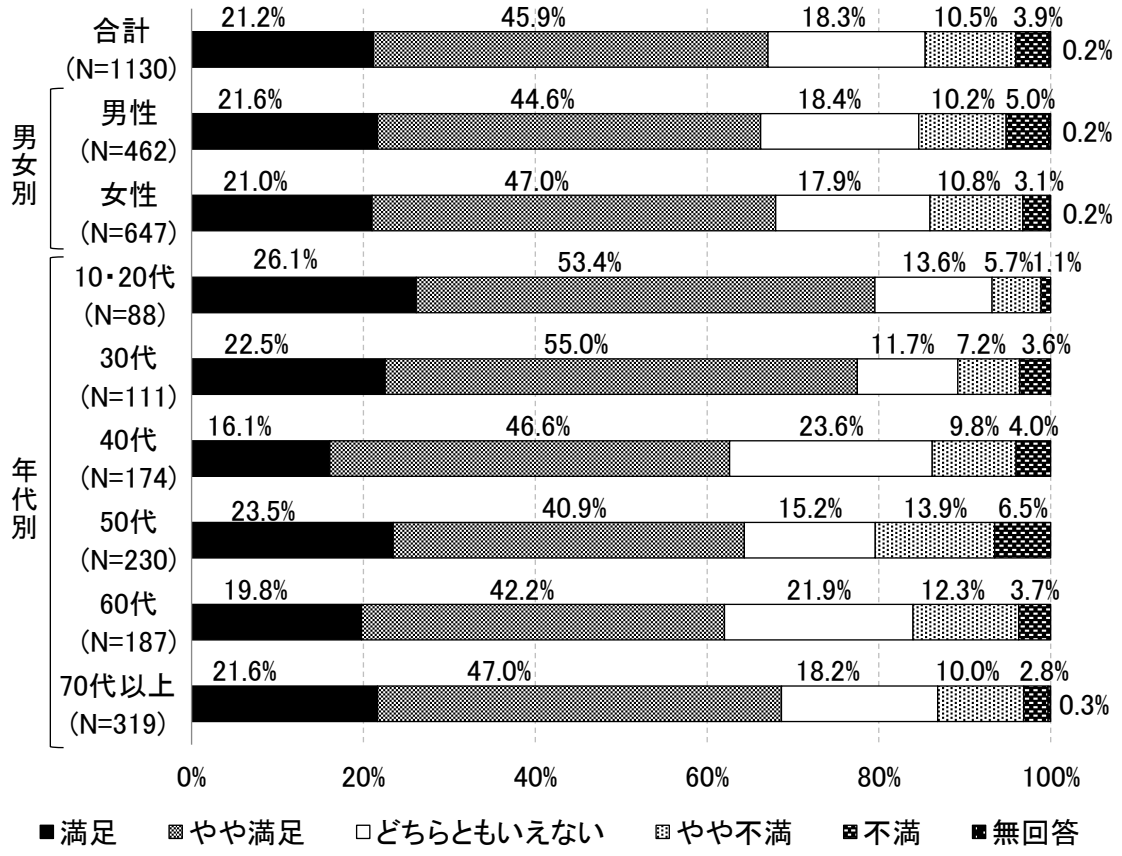


図 10　Q1 生活満足度

Q2 の幸福度に関して、男女別でみると、男女ともに「幸せ」または「やや幸せ」と回答した人の割合は 7 割程度である。年代別でみると、「幸せ」または「やや幸せ」と回答した人の割合はすべての層で 6 割を超えており、30 代が 86.5%と最も高い（図 11）。

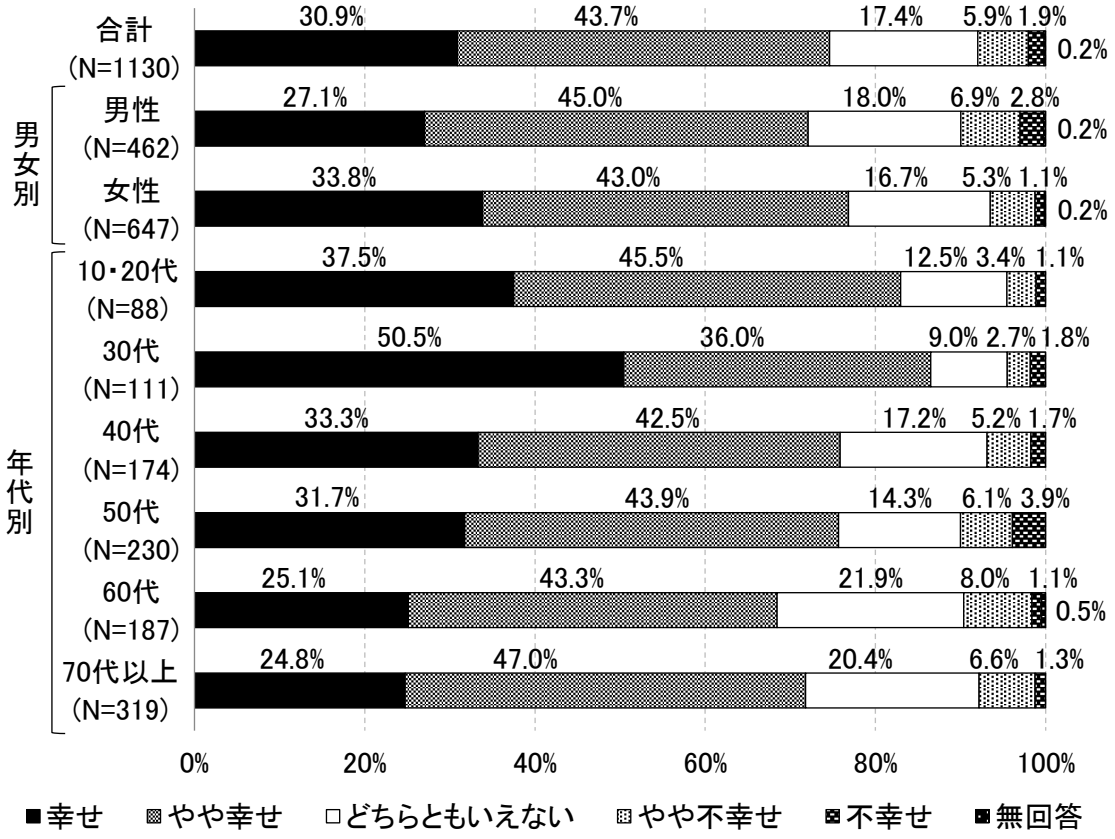


図 11　Q2 幸福度

Q3 の居住地域は暮らしやすいかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が 7 割以上である。年代別でみると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 30 代が 90.1%と最も高い。反対に 60 代が 78.1%と最も低い（図 12）。

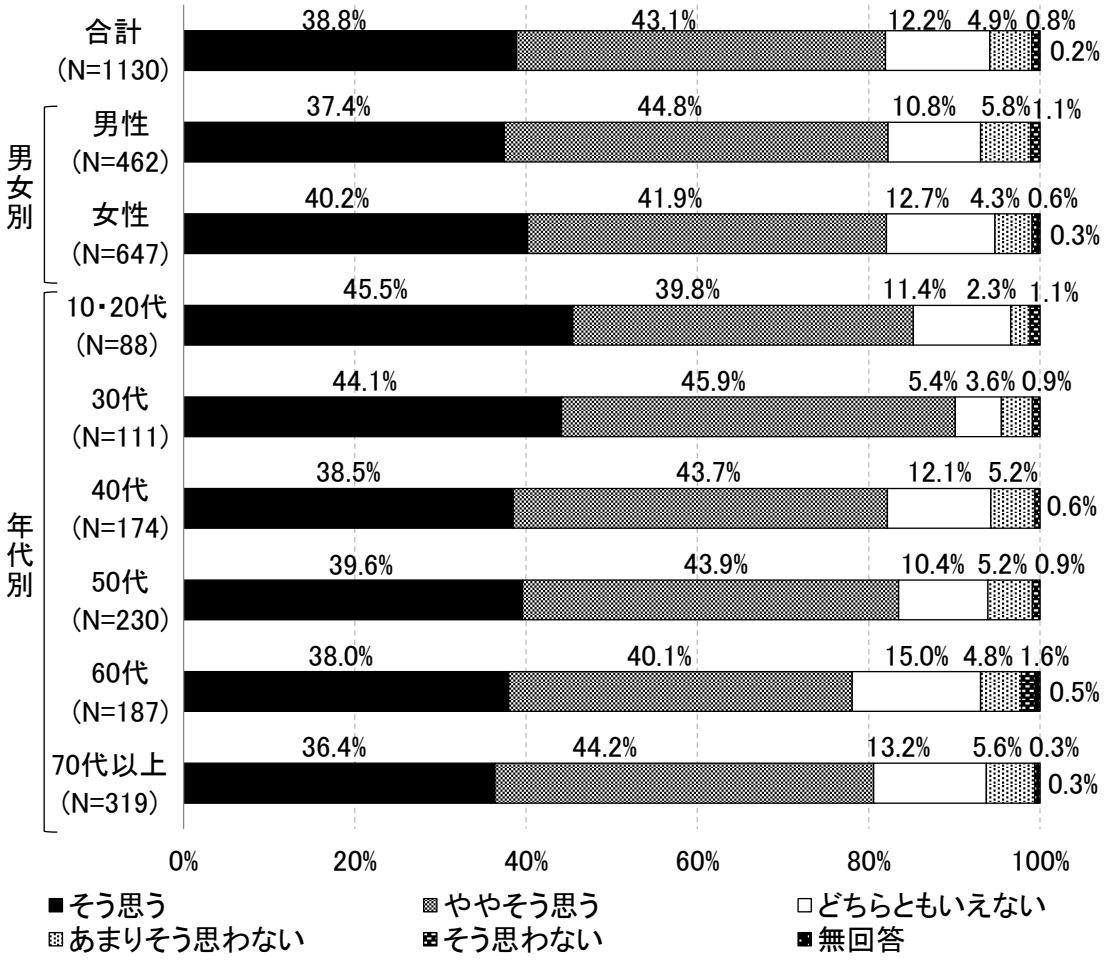


図 12　Q3 居住地域は暮らしやすいか

Q4 の地域に住み続けたいかに関して、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「ずっと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答している。年代別でみると、「ずっと住み続けたい」または「住み続けたい」と回答した人の割合は 70 代以上が 70.5%と最も高い。反対に、40 代は 57.5%と最も低い（図 13）。

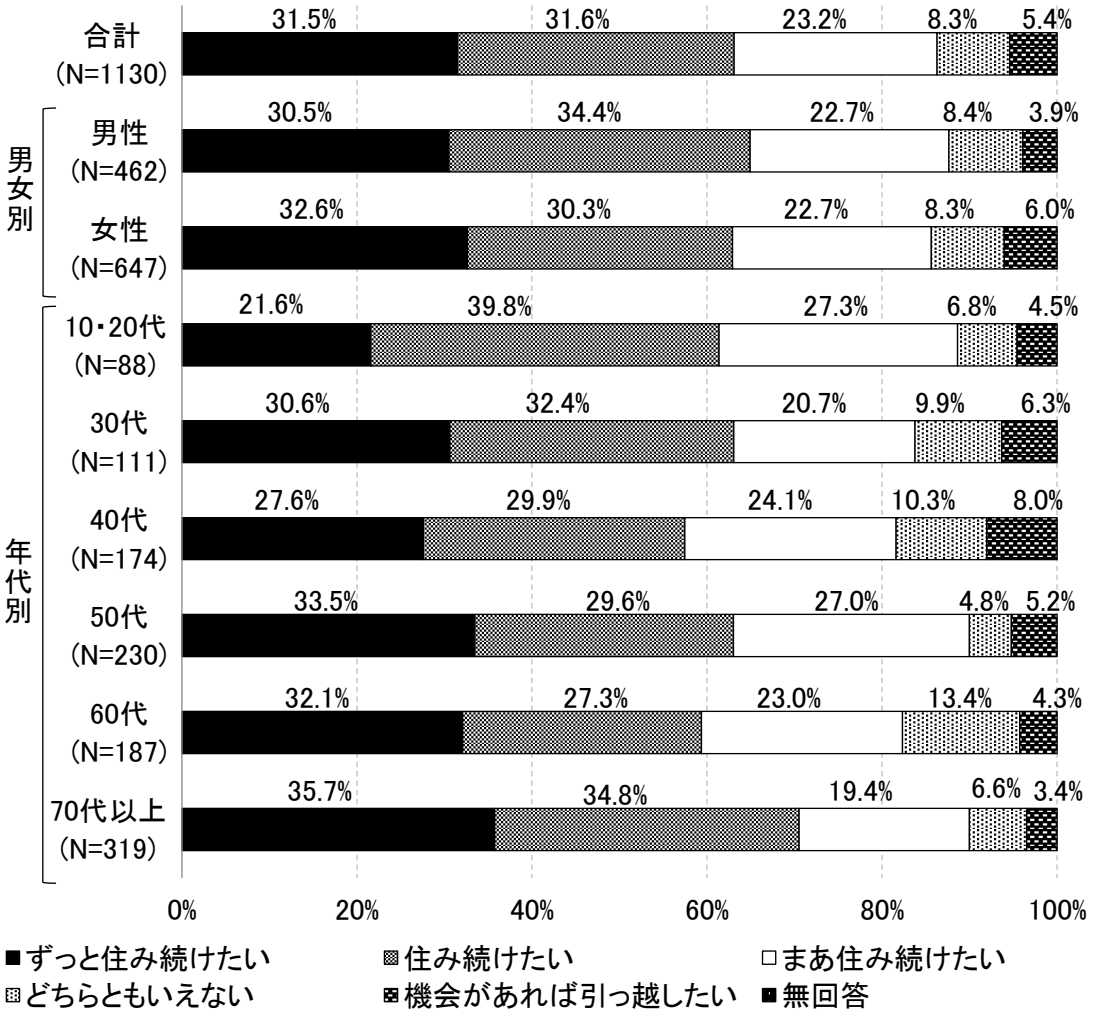


図 13　Q4 地域に住み続けたいか

Q5 の高槻市に地域ブランドがあると思うかに関して、男女別でみると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合が男性で 43.5%、女性が 38.6%であり、男性の方が 4.9 ポイントほど高い。年代別でみると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は 30 代が 46.8%と最も高い。反対に、10 代・20 代は 37.5%と最も低い（図 14）。

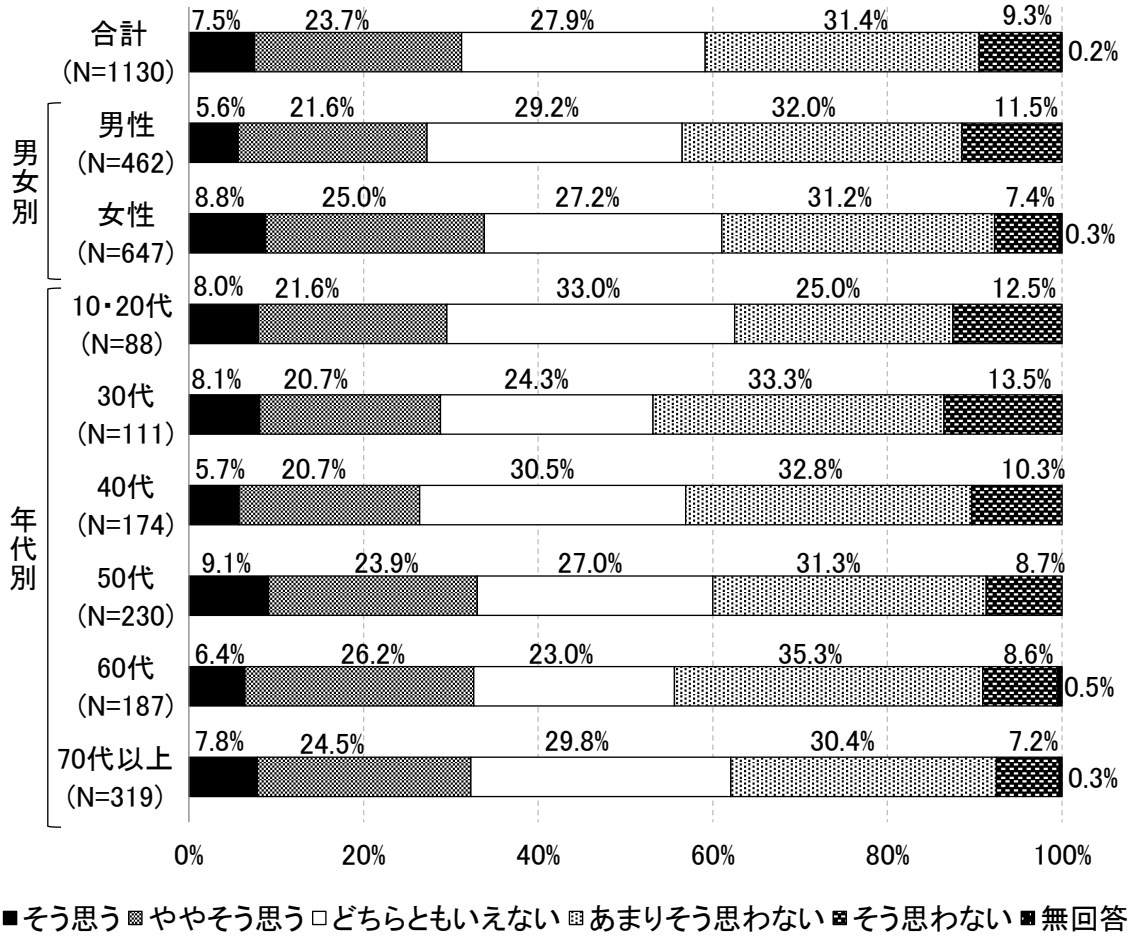


図 14　Q5 高槻市に地域ブランドがあると思うか

Q6 の中心市街地に行く頻度が 7 年前と比べて増加したかに関して、男女別でみると、「増加した」または「少し増加した」と回答した人の割合が男性で 32.0%、女性が 33.8%であり、女性の方が 1.8 ポイントほど高い。年代別でみると、「増加した」または「少し増加した」と回答した人の割合は 10 代・20 代が 51.1%と最も高い。反対に、70 代以上は 22.6%と最も低い（図 15）。

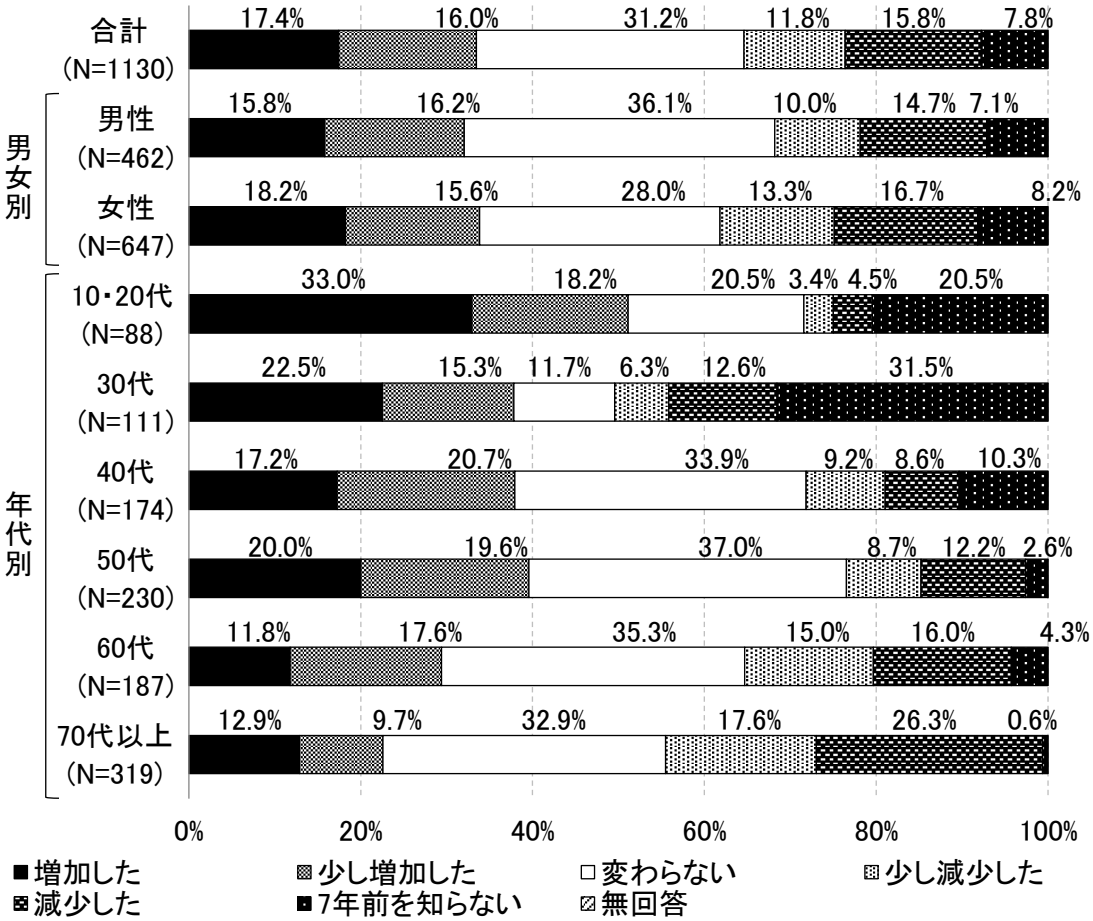


図 15　Q6 中心市街地に行く頻度が 7 年前と比べて増加したか

Q7A～Q7F が、中心市街地において、それぞれが７年前と比べて向上したか、低下したかを質問している。

Q7A の７年前と比べた場合の中心市街地の防災面での安全性や快適性に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また、男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合が１割以下である。一方で、「向上した」の割合は男女別・年代別のすべての層で２割以上である（図 16）。

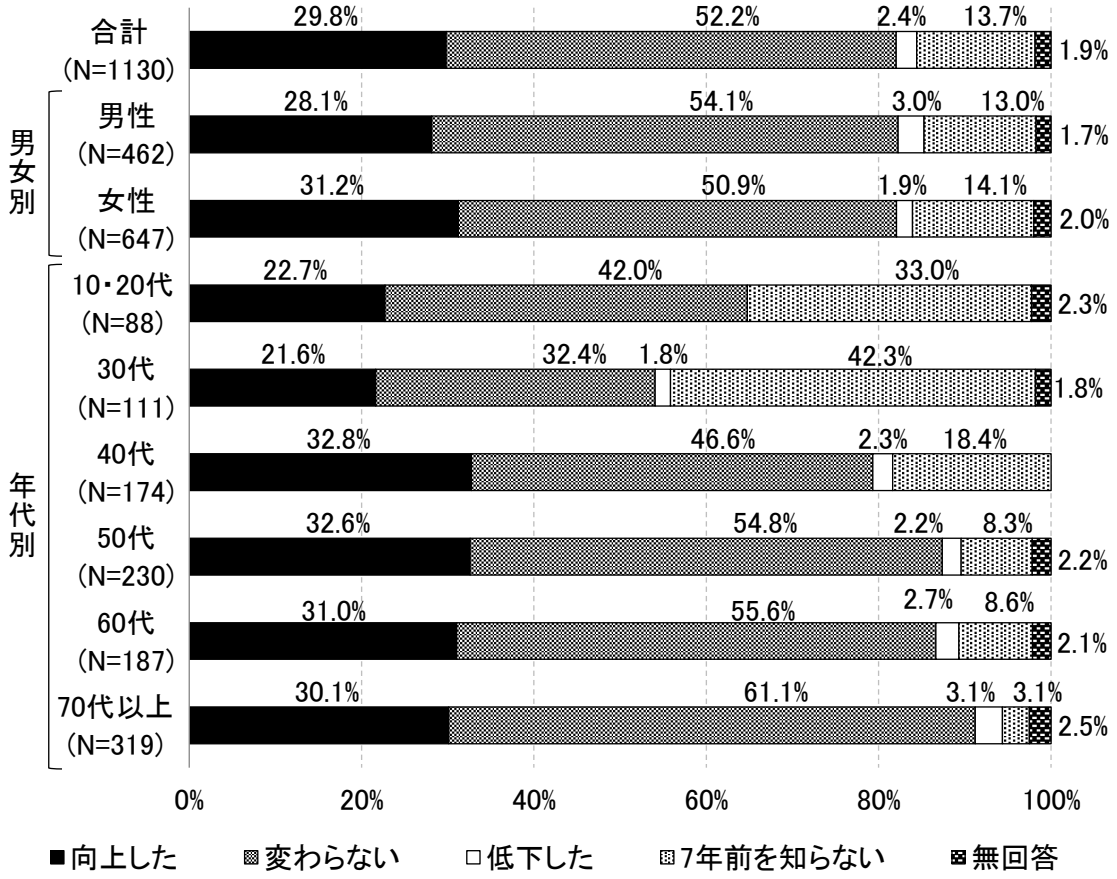


図 16　Q7A 中心市街地で７年前と比べて向上したか　（防災面での安全性や快適性）

Q7B の７年前と比べた場合の中心市街地の防犯面での安全性や快適性に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合を年代別でみると、40 代が 21.8%と最も高く、10 代・20 代が 15.9%と最も低い（図 17）。

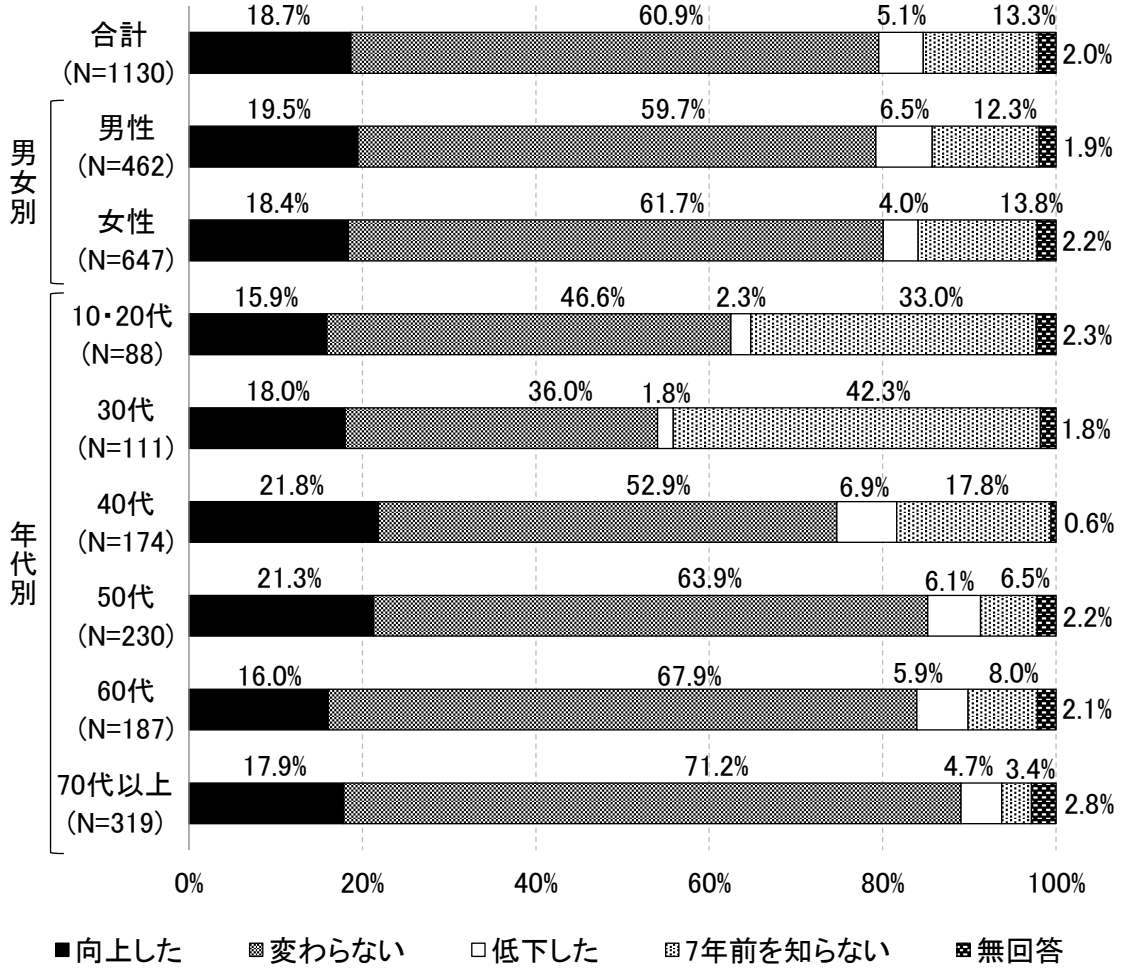


図 17　Q7B 中心市街地で７年前と比べて向上したか （防犯面での安全性や快適性）

Q7C の７年前と比べた場合の中心市街地の居住環境に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また男女別・年代別のすべての層で「低下した」の割合が２割以下である。また「向上した」の割合を年代別でみると、50 代が 30.0%と最も高く、70 代以上が 20.1%と最も低い（図 18）。

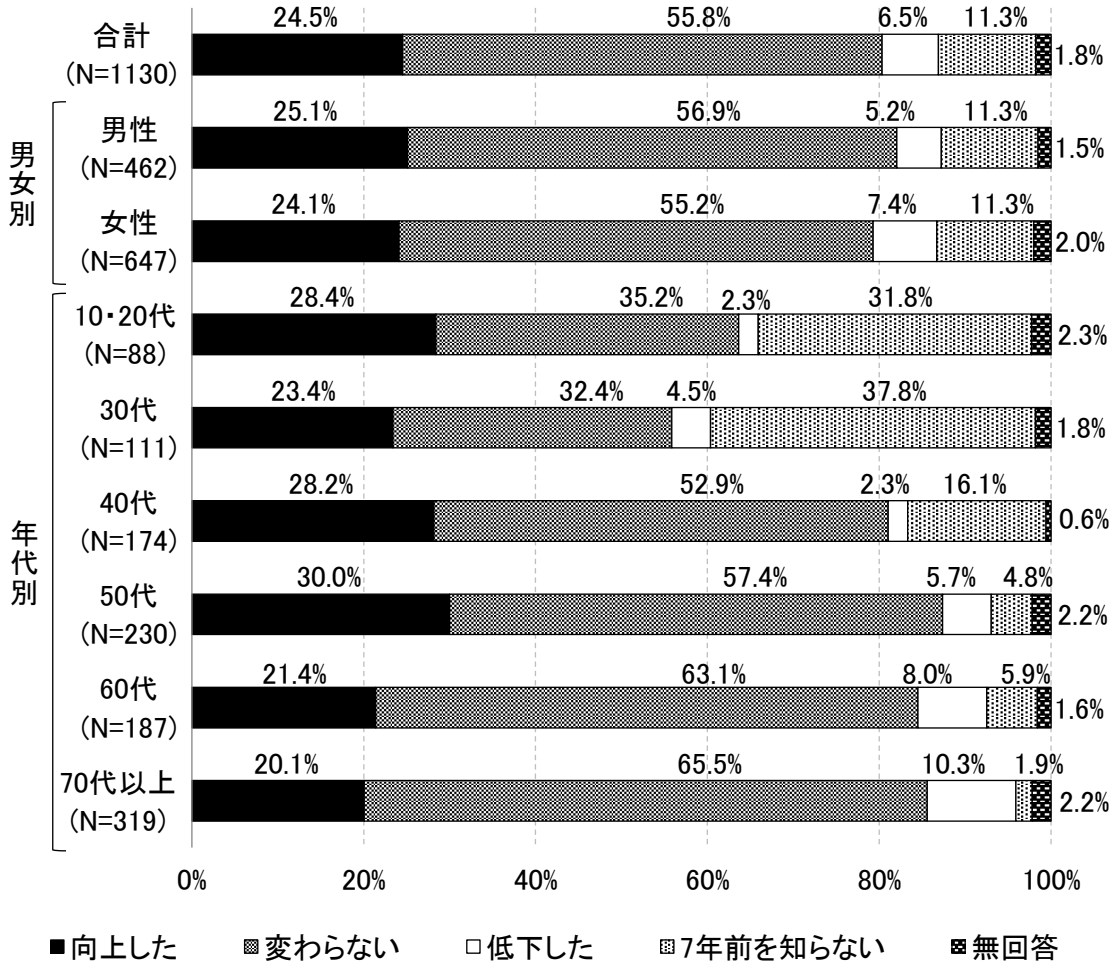


図 18　Q7C 中心市街地で７年前と比べて向上したか （居住環境）

Q7D の７年前と比べた場合の中心市街地の公共交通機関の利便性に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合は、男女ともに約 2 割である。また「向上した」の割合を年代別でみると、10 代・20 代が 23.9%と最も高く、60 代が 15.0%と最も低い（図 19）。

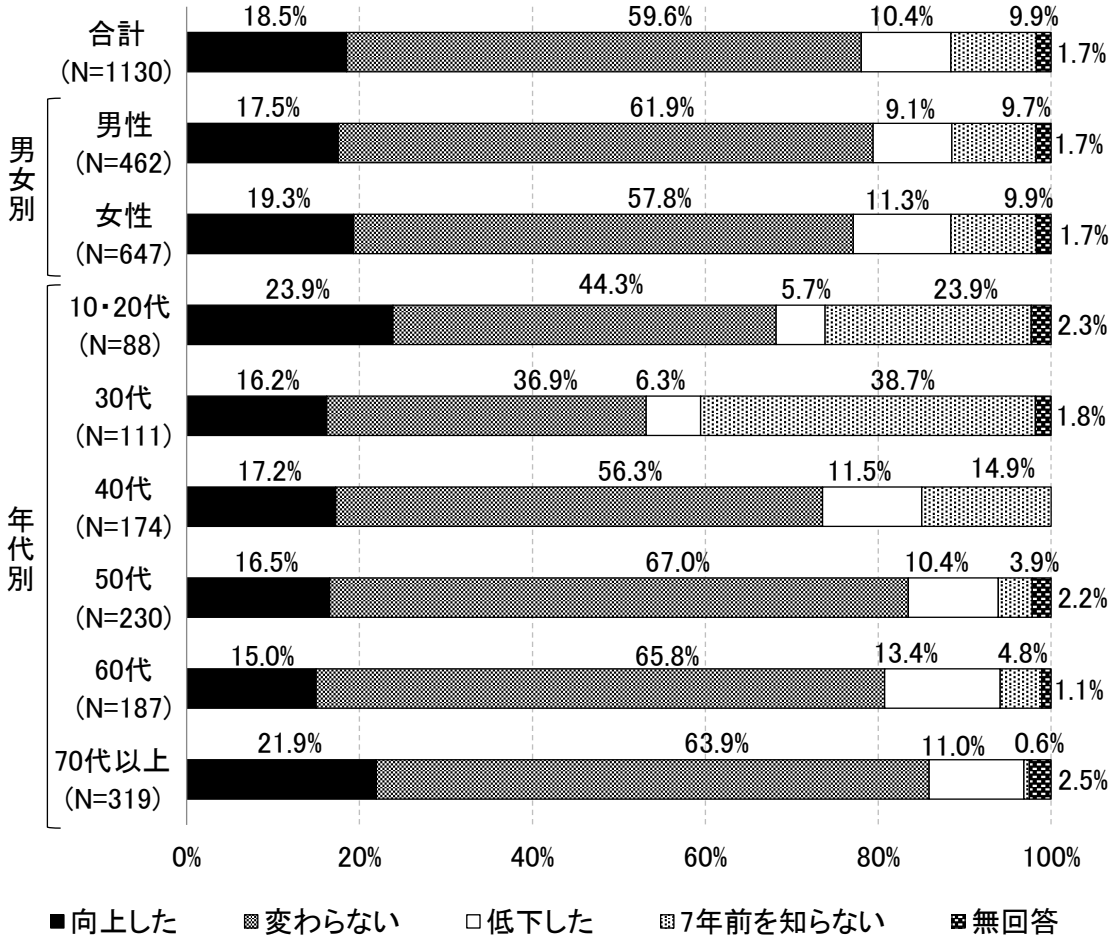


図 19　Q7D 中心市街地で７年前と比べて向上したか　（公共交通機関の利便性）

Q7E の７年前と比べた場合の中心市街地の歩行者にとっての歩きやすさに関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合を年代別でみると、10 代・20 代が 28.4%と最も高く、30 代が 13.5%と最も低い（図 20）。

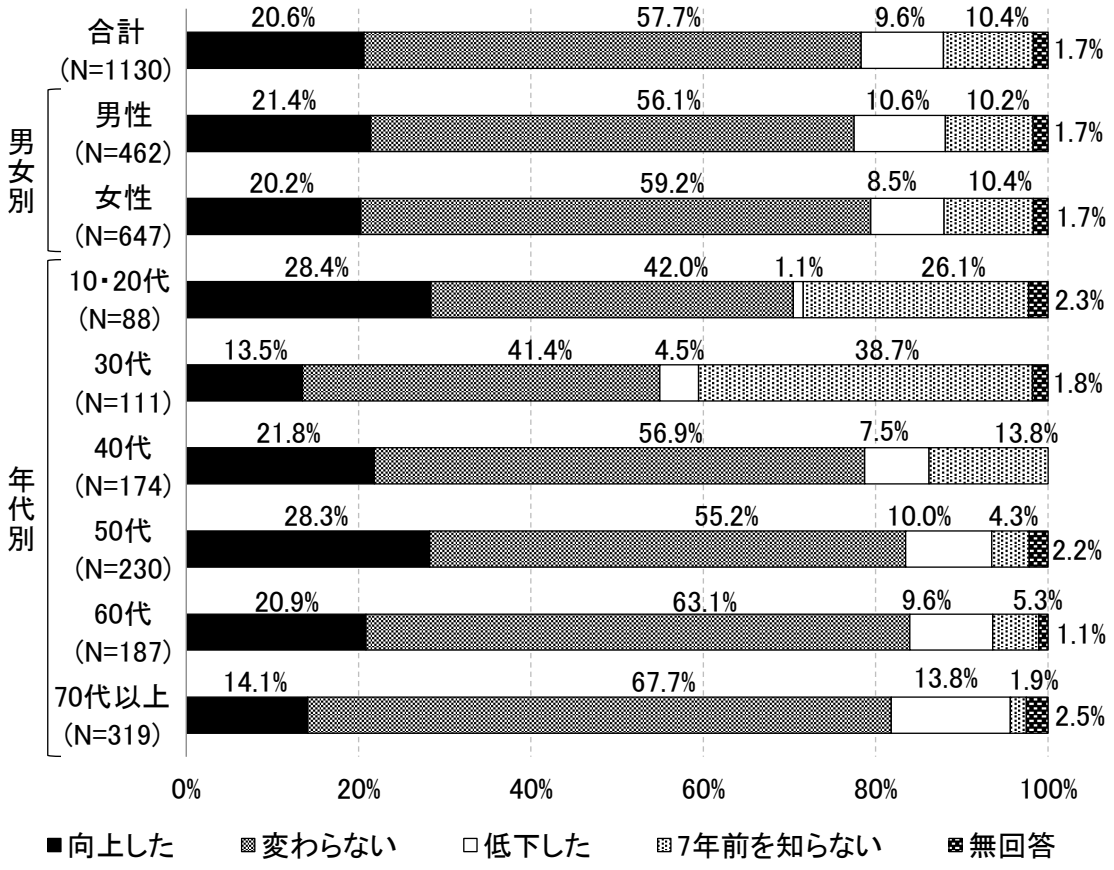


図 20　Q7E 中心市街地で７年前と比べて向上したか （歩行者にとっての歩きやすさ）

Q7F の７年前と比べた場合の中心市街地の風紀や治安に関して、男女別・年代別のすべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また「向上した」の割合を年代別でみると、40 代が 14.9%と最も高く、60 代が 8.0%と最も低い（図 21）。

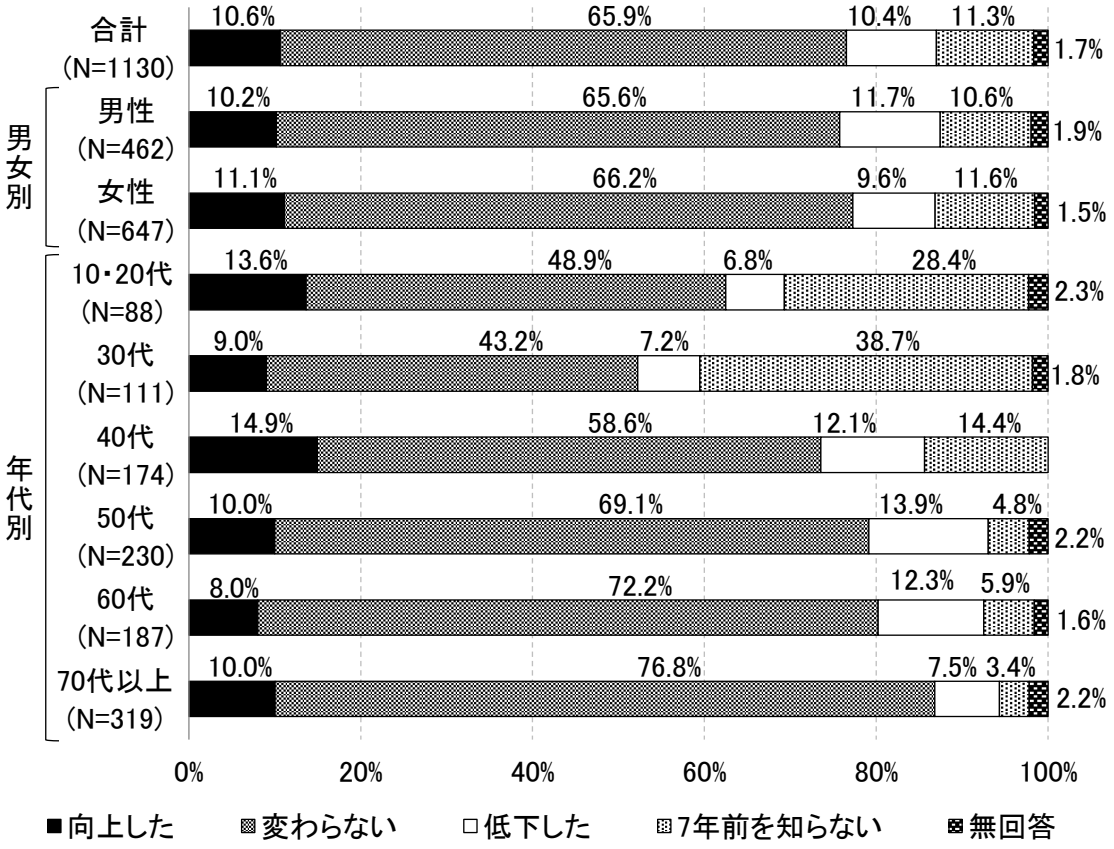


図 21　Q7F 中心市街地で７年前と比べて向上したか （風紀や治安）

Q8A～Q8L が、中心市街地において、それぞれが７年前と比べて増加したか減少したかを質問している。なお、Q8A～Q8K のいずれにおいても、30 代で「７年前を知らない」の割合が高くなっていることに注意が必要である。

Q8A の文化活動に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合を男女別・年代別でみると、30 代を除いて、すべての層で３割程度である。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で１割に満たない（図 22）。

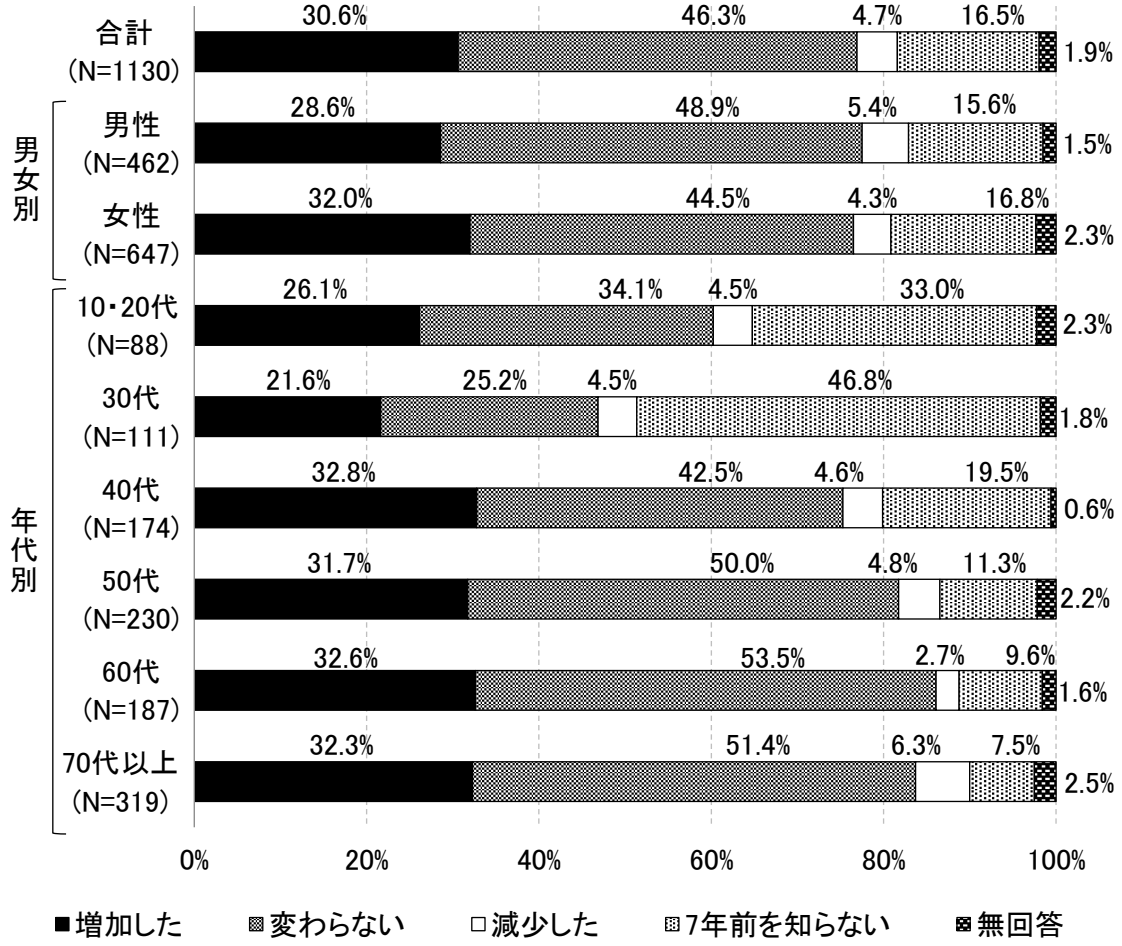


図 22　Q8A 中心市街地で７年前と比べて増加したか　（文化活動）

Q8B のコミュニティ活動に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別すべての層で 3 割未満である。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 2 割に満たない（図 23）。

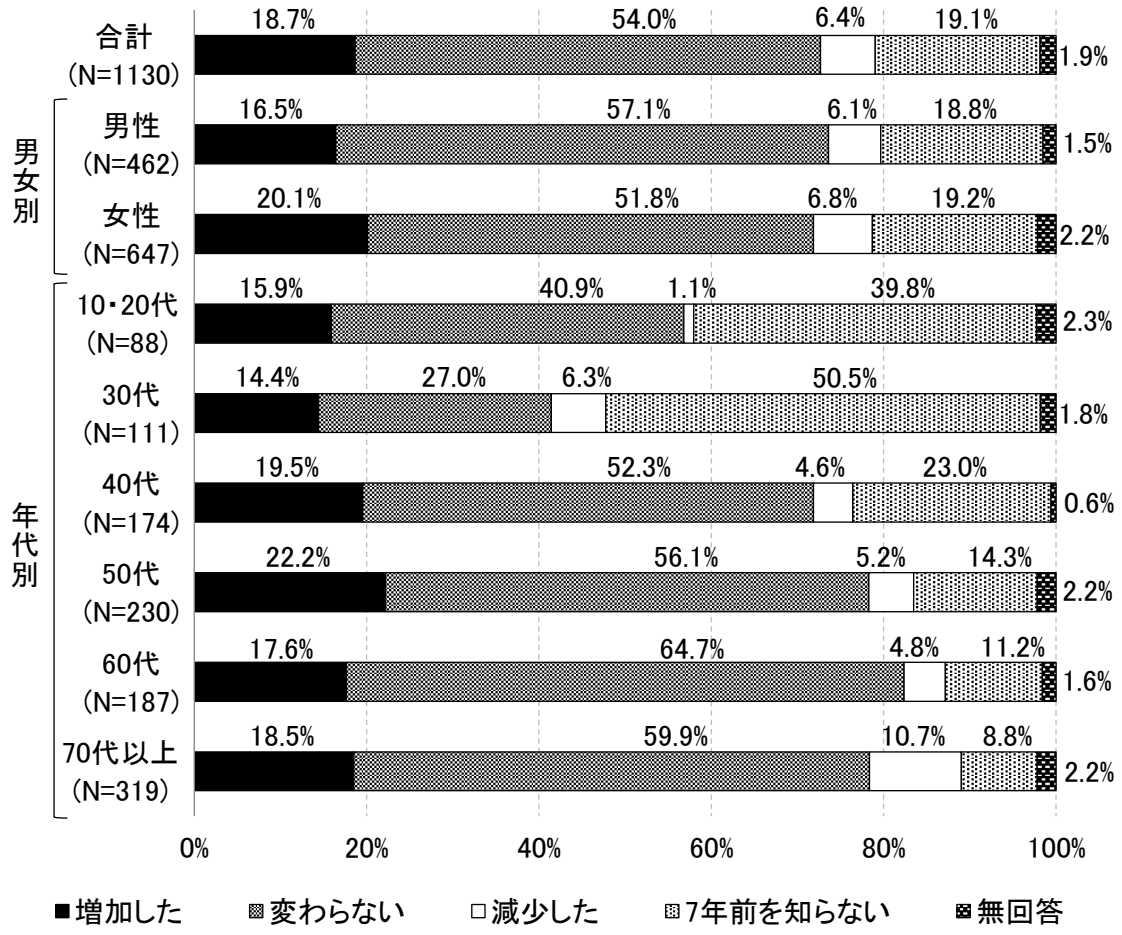


図 23　Q8B 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか （コミュニティ活動）

Q8C の商店街の魅力に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いて、すべての層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 2 割未満である。「減少した」の割合は、10・20 代と 30 代を除くすべての年代で 3 割程度である（図 24）。

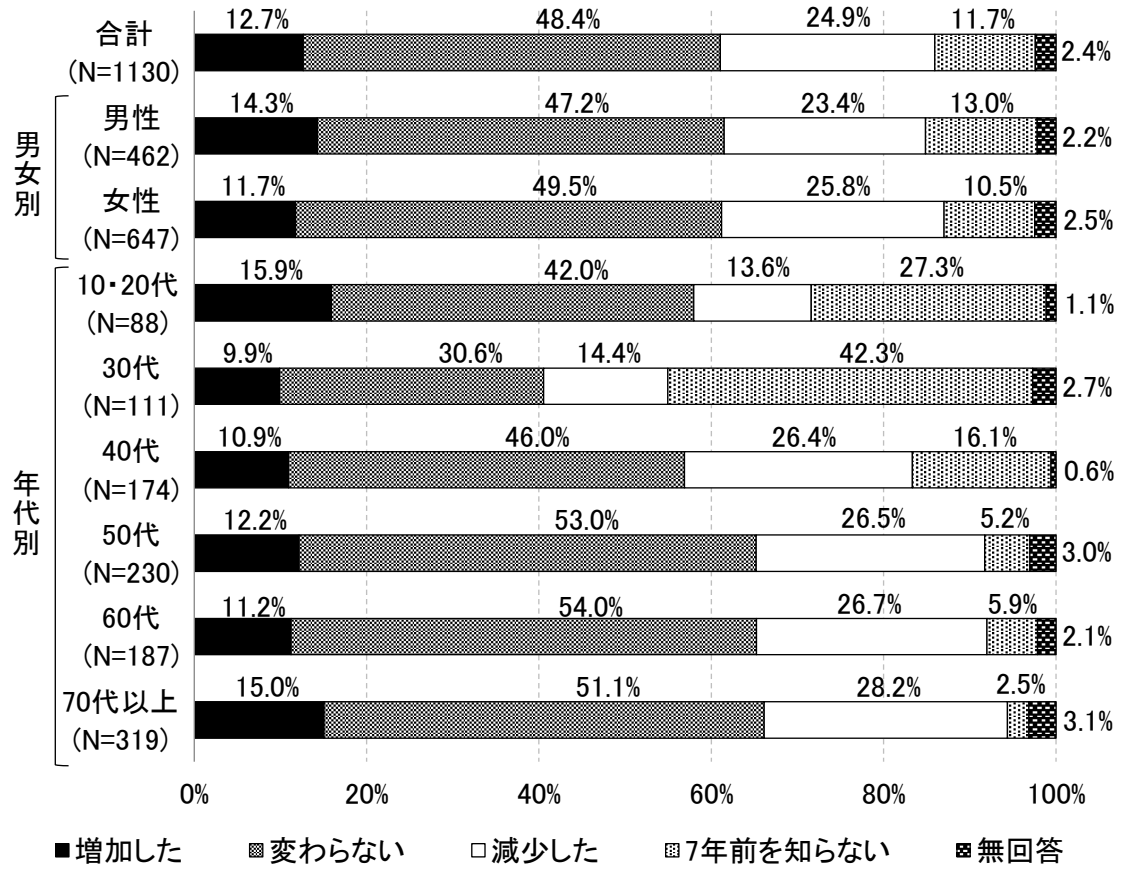


図 24　Q8C 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか （商店街の魅力）

Q8D の百貨店などの大型店の魅力に関して、男女別・年代別でみると、30 代は「7 年前を知らない」と「増加した」が同じ 37.8%で最も高い割合である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別すべての層で 3 割未満であり、30 代が 4.5%と最も低い（図 25）。

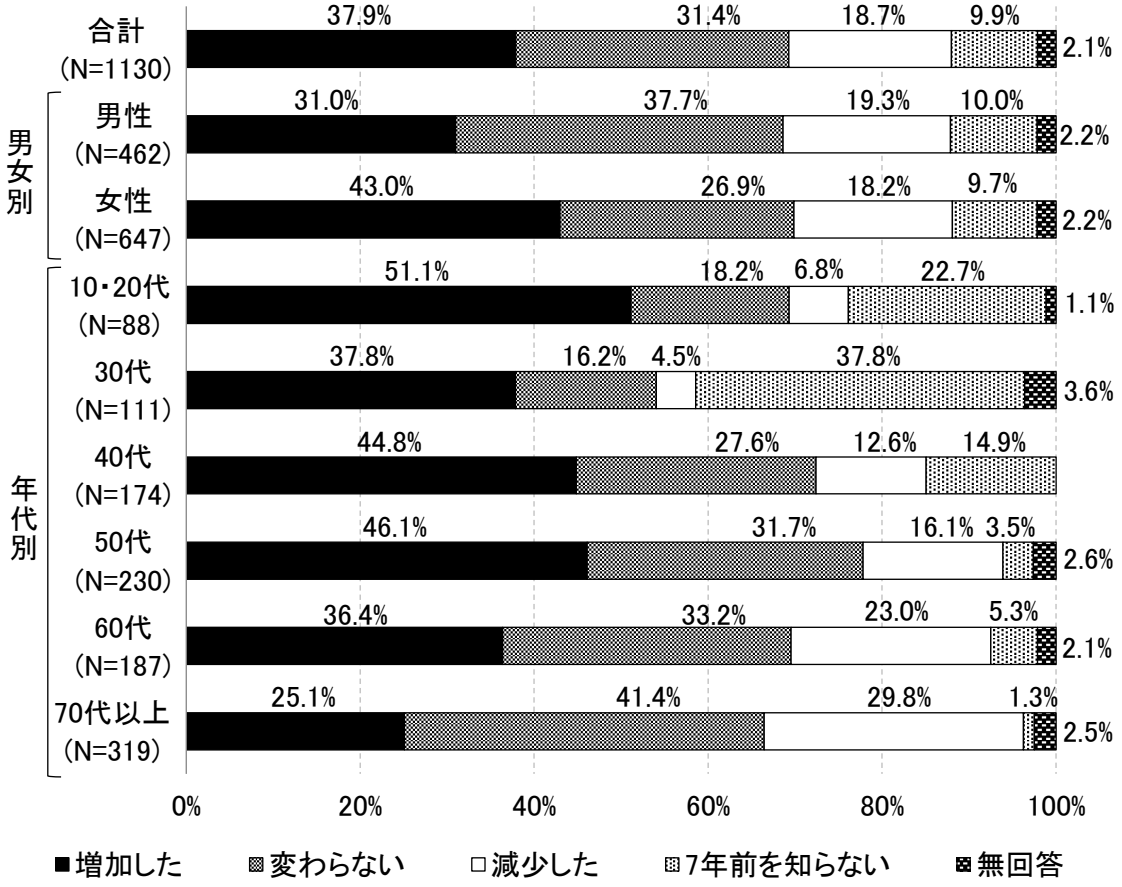


図 25　Q8D 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか （百貨店などの大型店の魅力）

Q8E の買い物やイベントでのにぎわいに関して、男女別・年代別でみると、10・20 代、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別すべての層で４割未満である。「減少した」の割合は、男女別・年代別すべての層で２割未満である（図 26）。

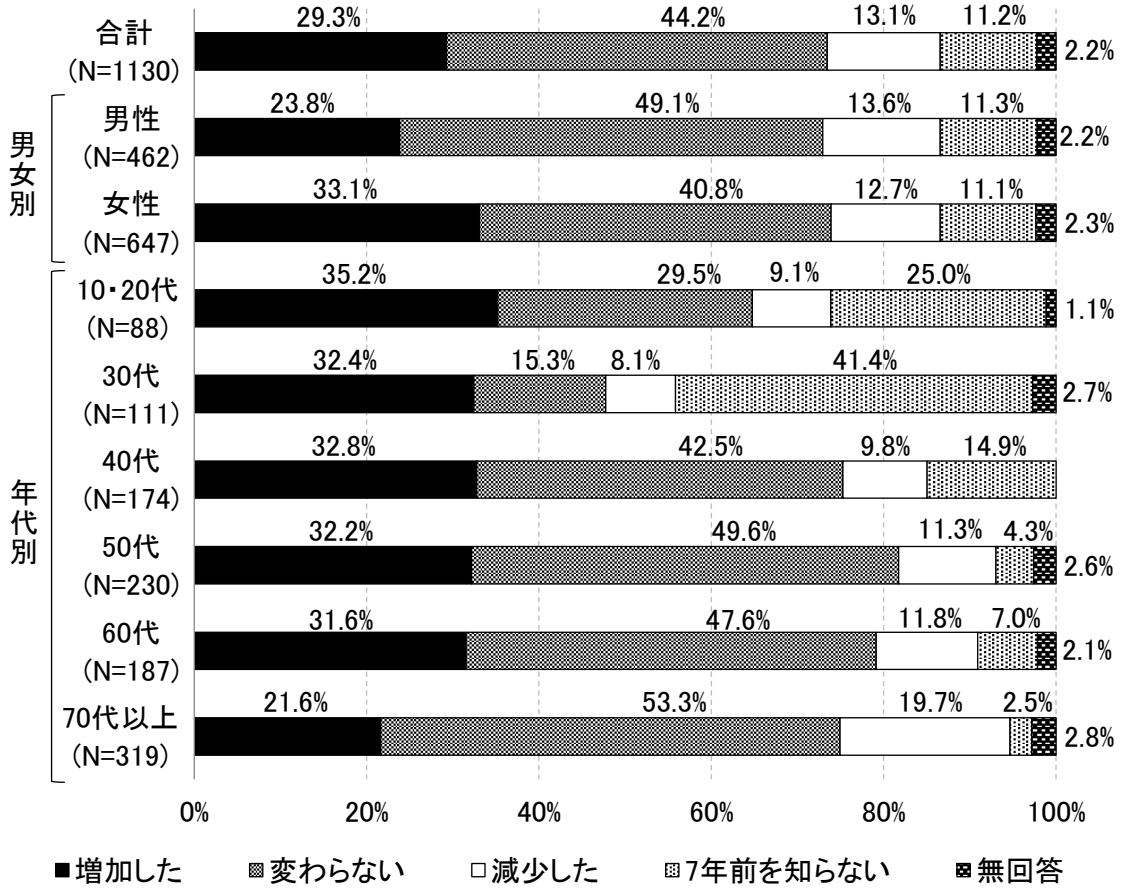


図 26　Q8E 中心市街地で７年前と比べて増加したか
（買い物やイベントでのにぎわい）

Q8F の魅力的な飲食店に関して、男女別・年代別でみると、10・20 代～40 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合を年代別でみると、10・20 代が 44.3%と最も高く、反対に 70 代以上で 18.8%と最も低い（図 27）。

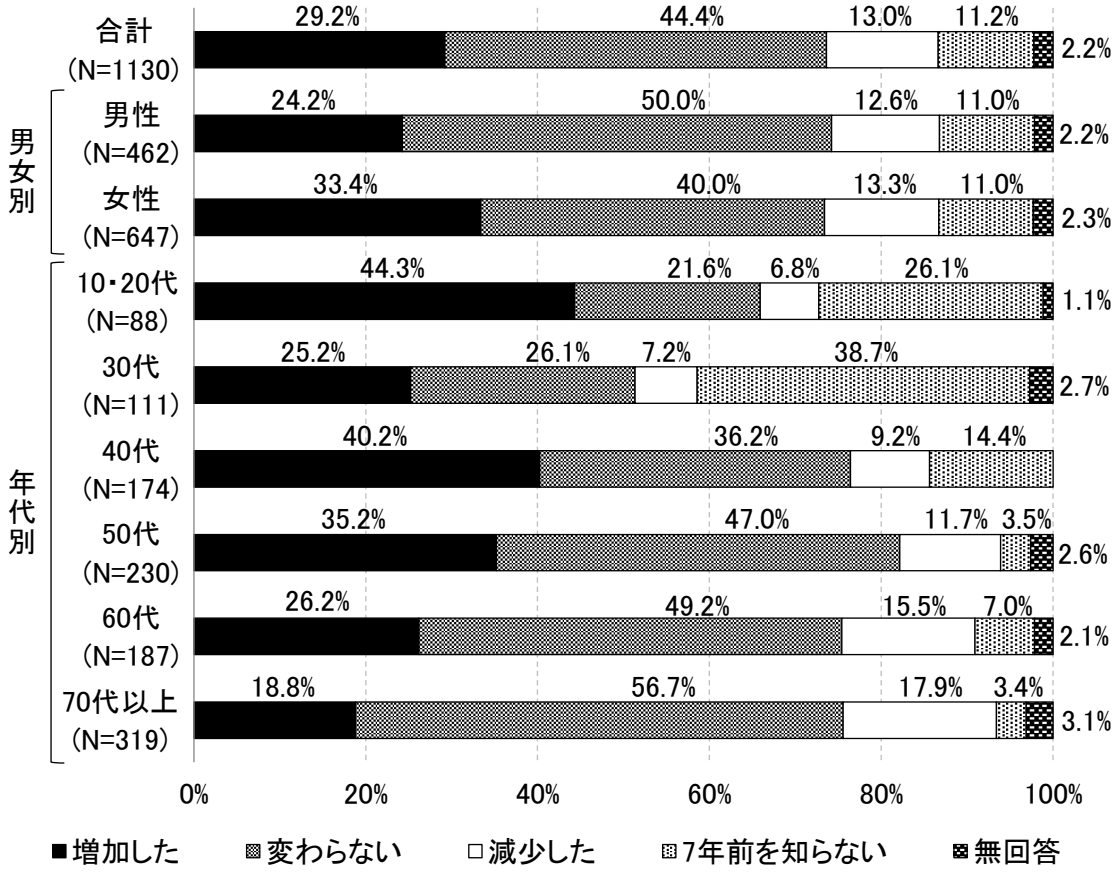


図 27　Q8F 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか （魅力的な飲食店）

Q8G のオフィスなどの業務施設に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また、「増加した」の割合は、男女別・年代別の 10・20 代を除く、すべての層でいずれも 1 割未満である（図 28）。

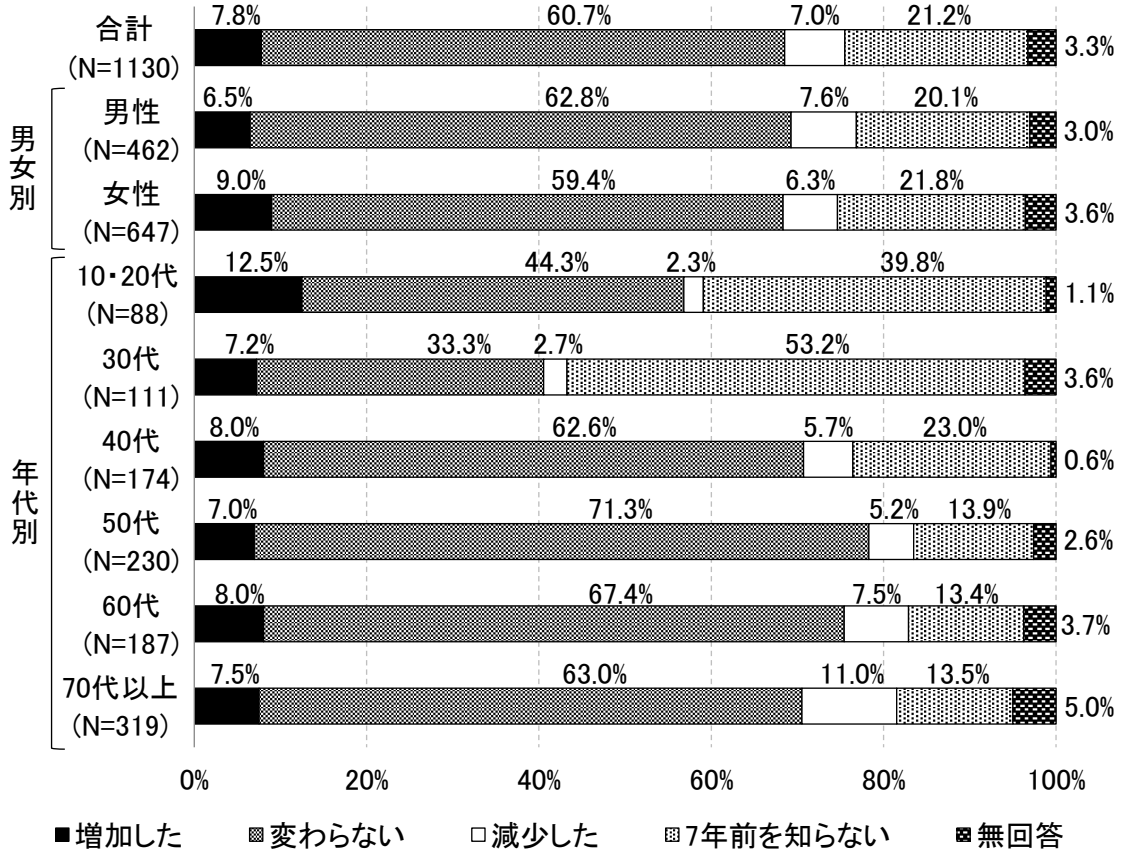


図 28　Q8G 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか （オフィスなど業務施設）

Q8H の病院などの医療機関に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。また、年代別でみると、「増加した」の割合は 50 代、70 代以上は 3 割を超えているが、30 代は 24.3%と最も低い。「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 1 割未満である（図 29）。

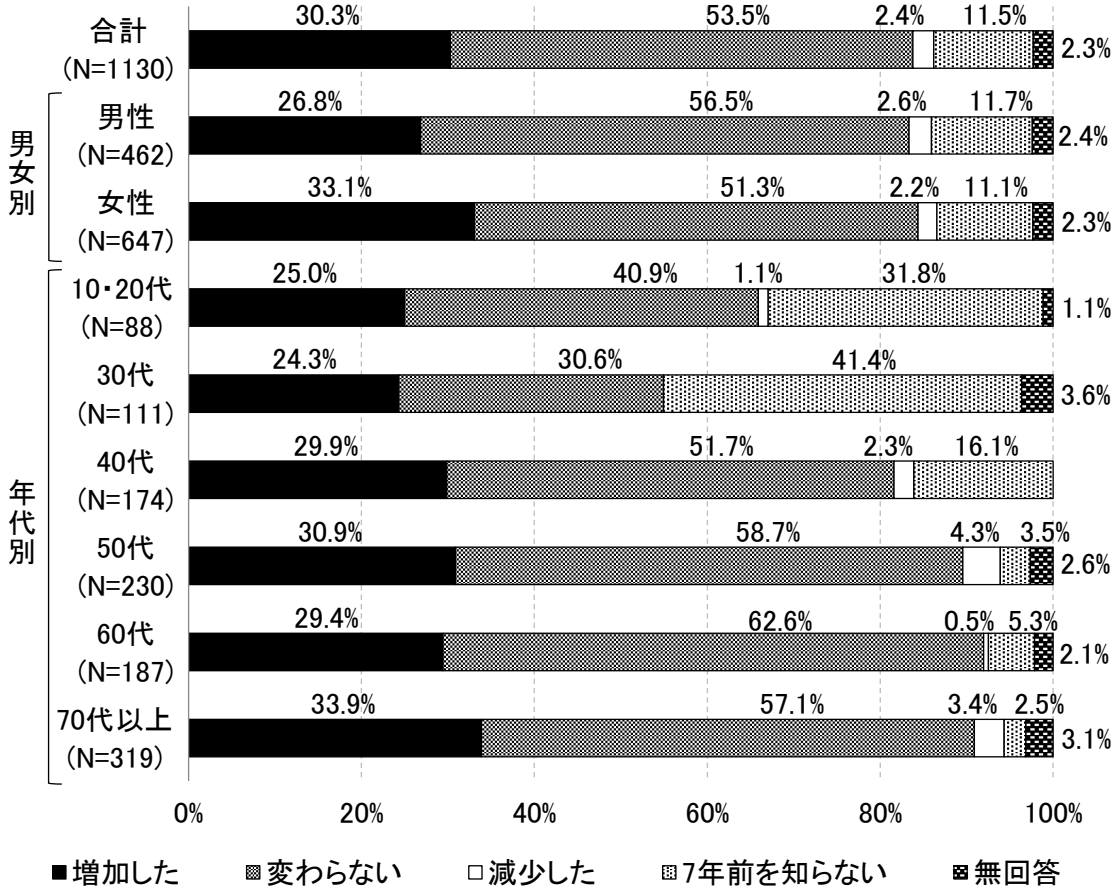


図 29　Q8H 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか （病院などの医療機関）

Q8I の道路の渋滞に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別でみると、「増加した」の割合は、すべての年代で 3 割未満である。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 1～2 割程度である（図 30）。

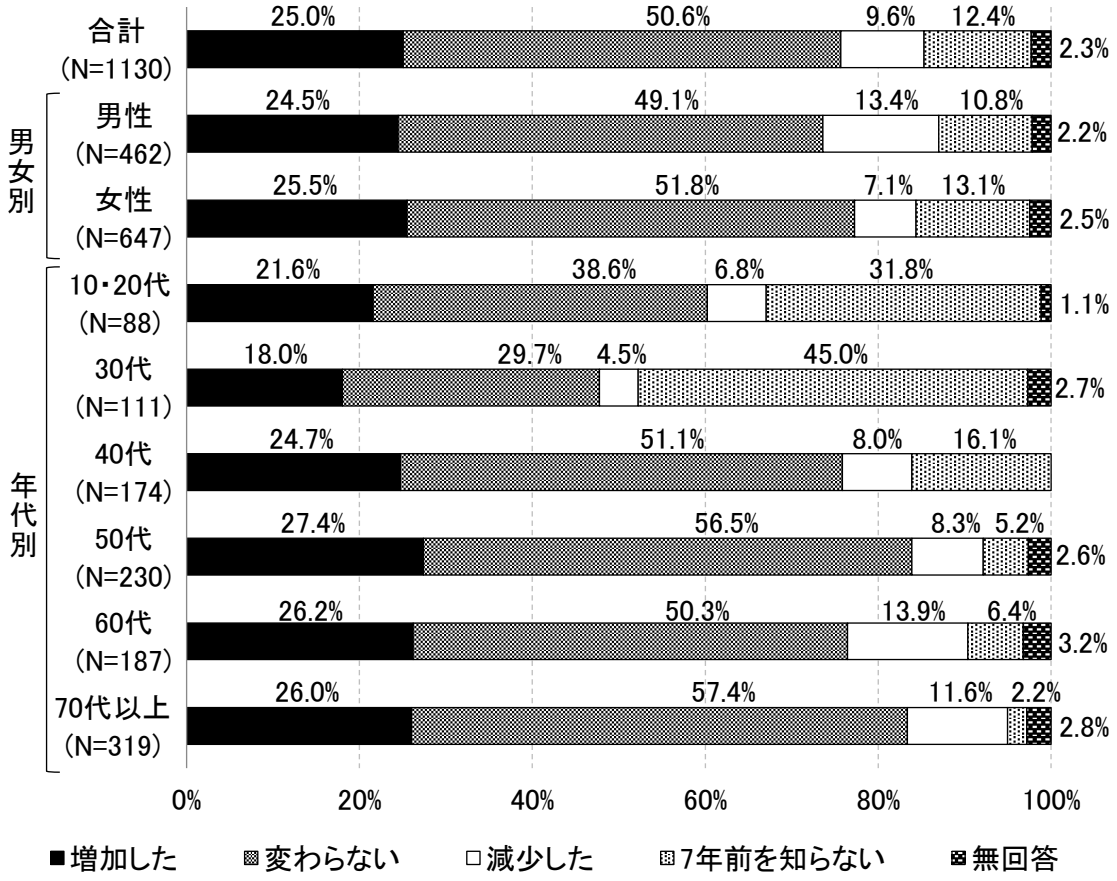


図 30　Q8I 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか　（道路の渋滞）

Q8J の駐輪場に関して、男女別・年代別でみると、10・20 代は「7 年前を知らない」と「変わらない」が同じ 34.1%で最も高い割合である。年代別でみると、「増加した」の割合は、70 代以上が 28.8%と最も高く、30 代が 17.1%と最も低い。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 1 割以下である（**図 31**）。

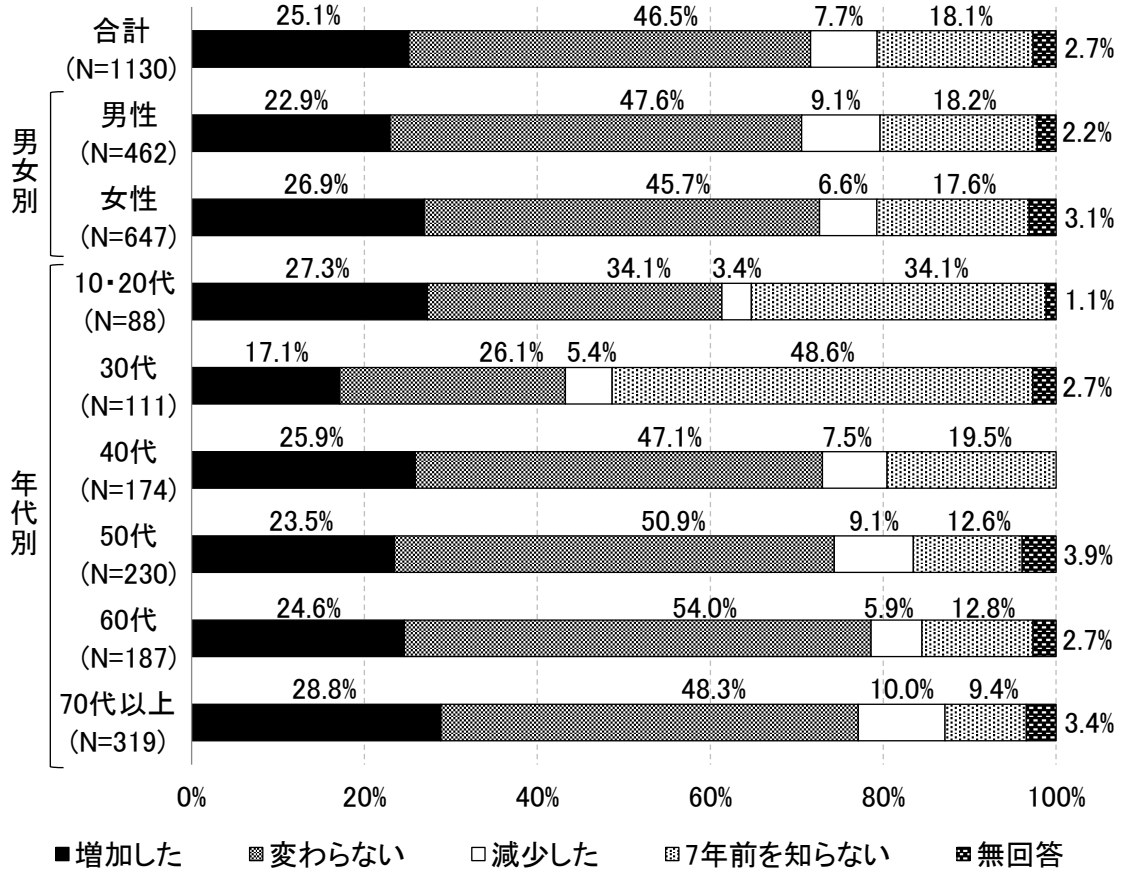


図 31　Q8J 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか　（駐輪場）

Q8 K の駐車場に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別でみると、「増加した」の割合は、70 代以上が 22.6%と最も高く、反対に 30 代が 10.8%と最も低い。また、「減少した」の割合は、男女別・年代別のすべての層で 2 割未満である（図 32）。

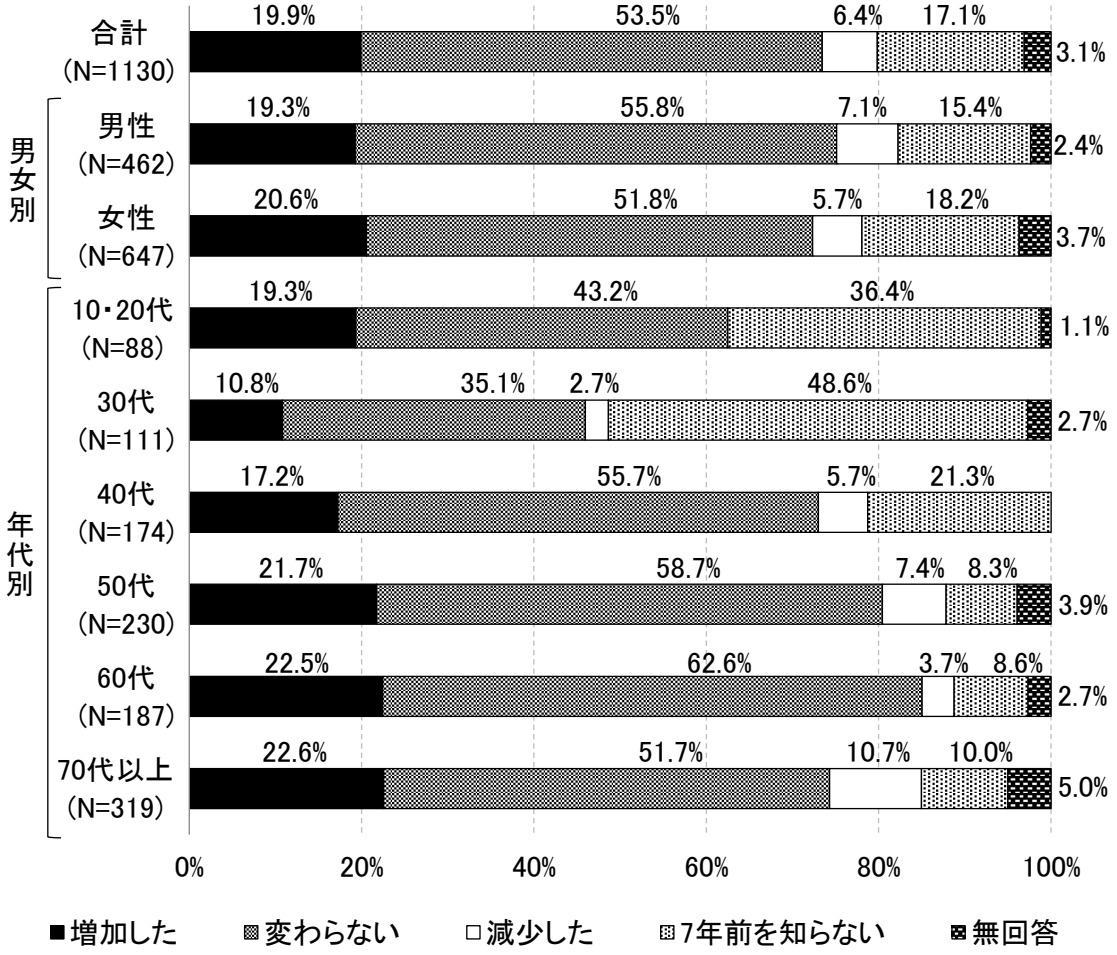


図 32　Q8K 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか （駐車場）

Q8L の街なかの緑や潤いに関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた層で「変わらない」が最も高い割合である。年代別でみると、「増加した」の割合は、50 代が 18.7%と最も高く、30 代が 12.6%と最も低い。「減少した」の割合は、すべての年代で 3 割未満である（図 33）。

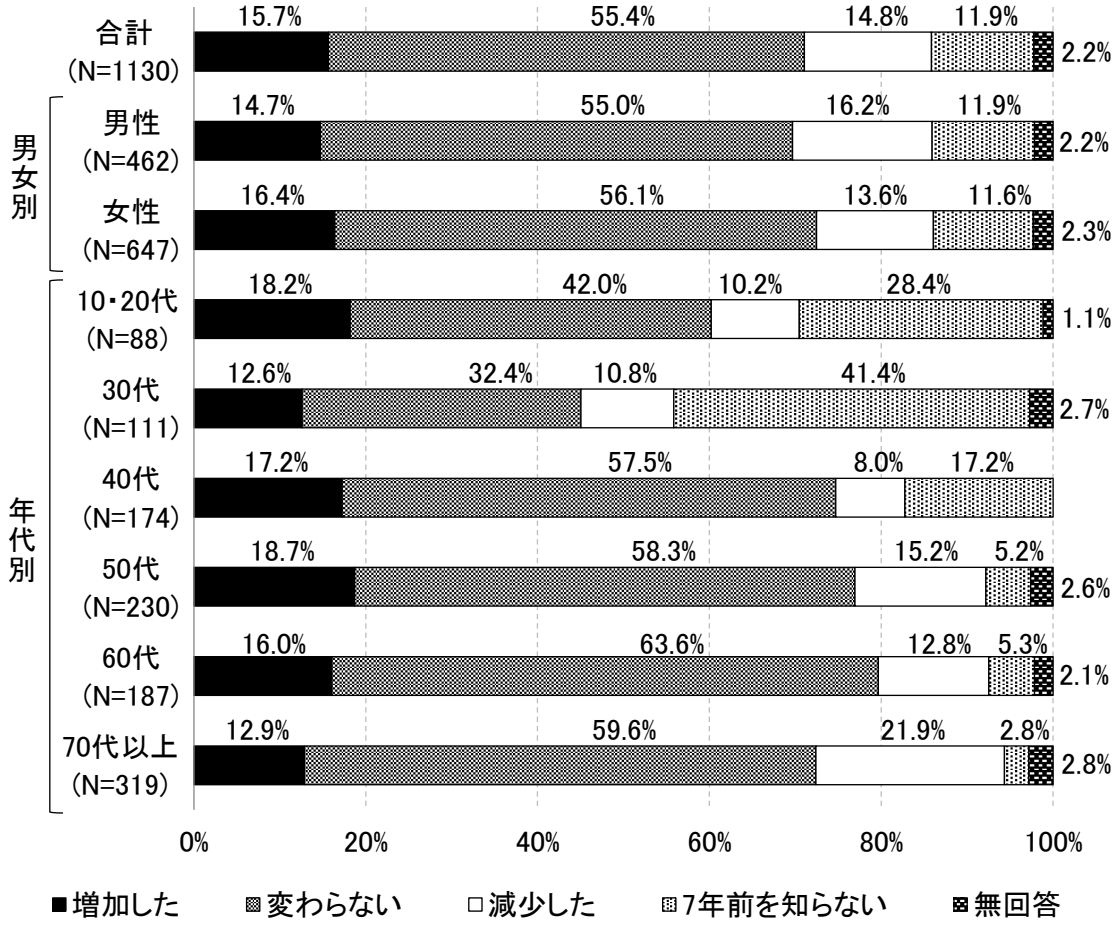


図 33　Q8L 中心市街地で 7 年前と比べて増加したか （街なかの緑や潤い）

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、「治安・防犯の向上」が 48.8%と最も高く、「街のバリアフリー化」が 47.3%と続く（図 34）。

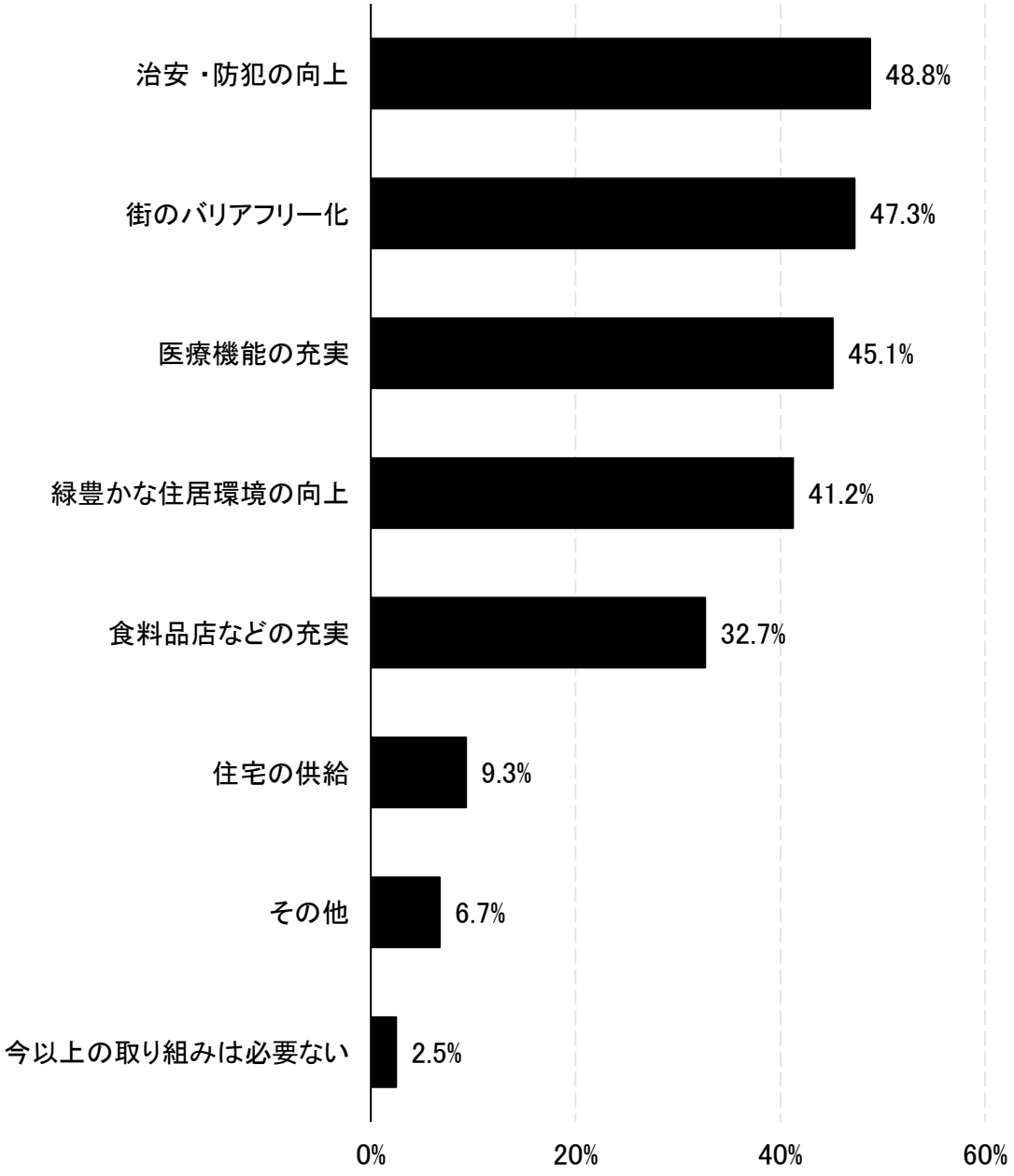


図 34　Q9 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・全体 N=1130）

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、男女別でみると、「治安・防犯の向上」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 7.0 ポイント高い（図 35）。

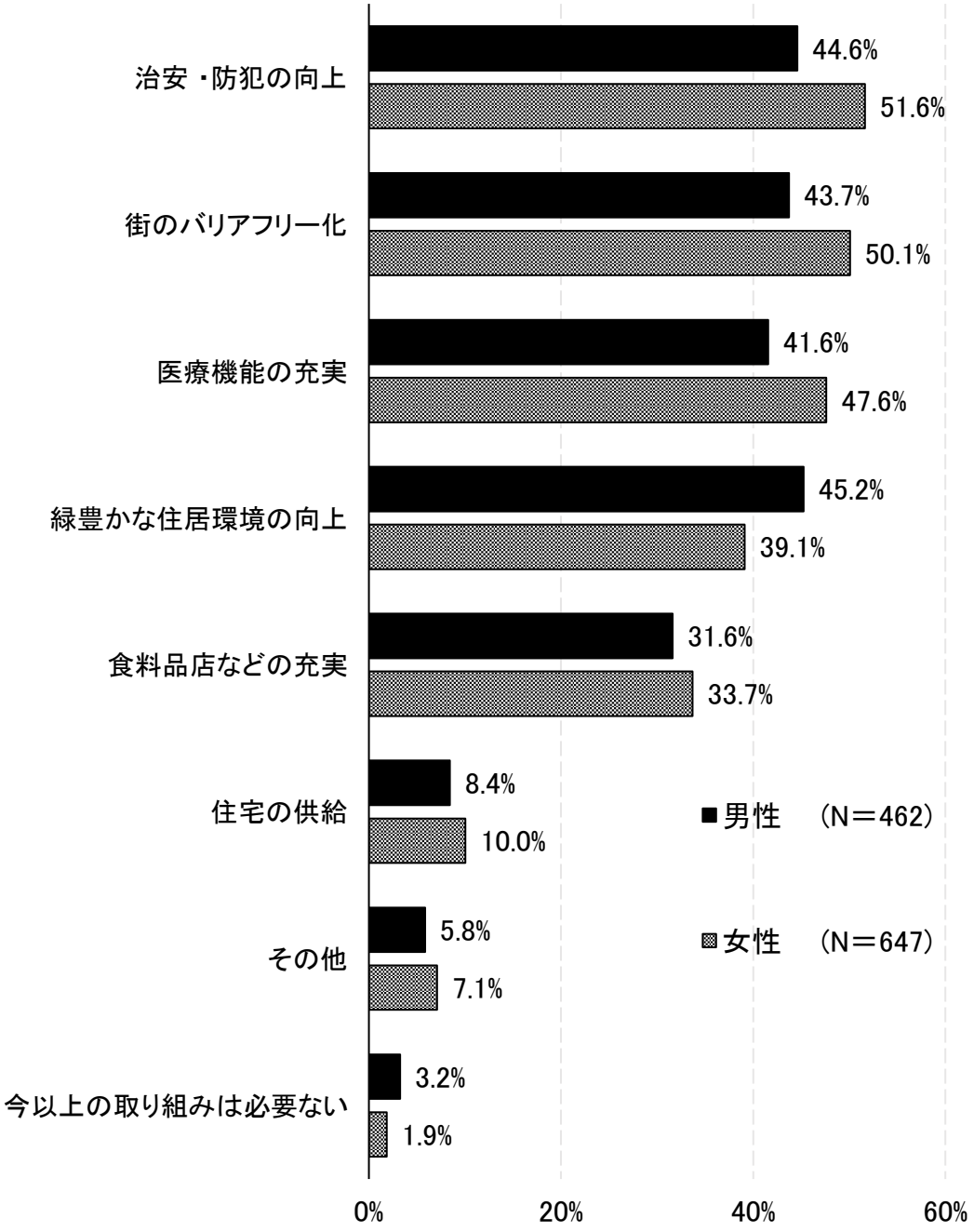


図 35　Q9 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・男女別）

Q9 の中心市街地を住み良い街にするための必要な取り組みに関して、年代別でみると、「街のバリアフリー化」は、年代が上がるにつれて割合が高まる傾向にある（図 36）。

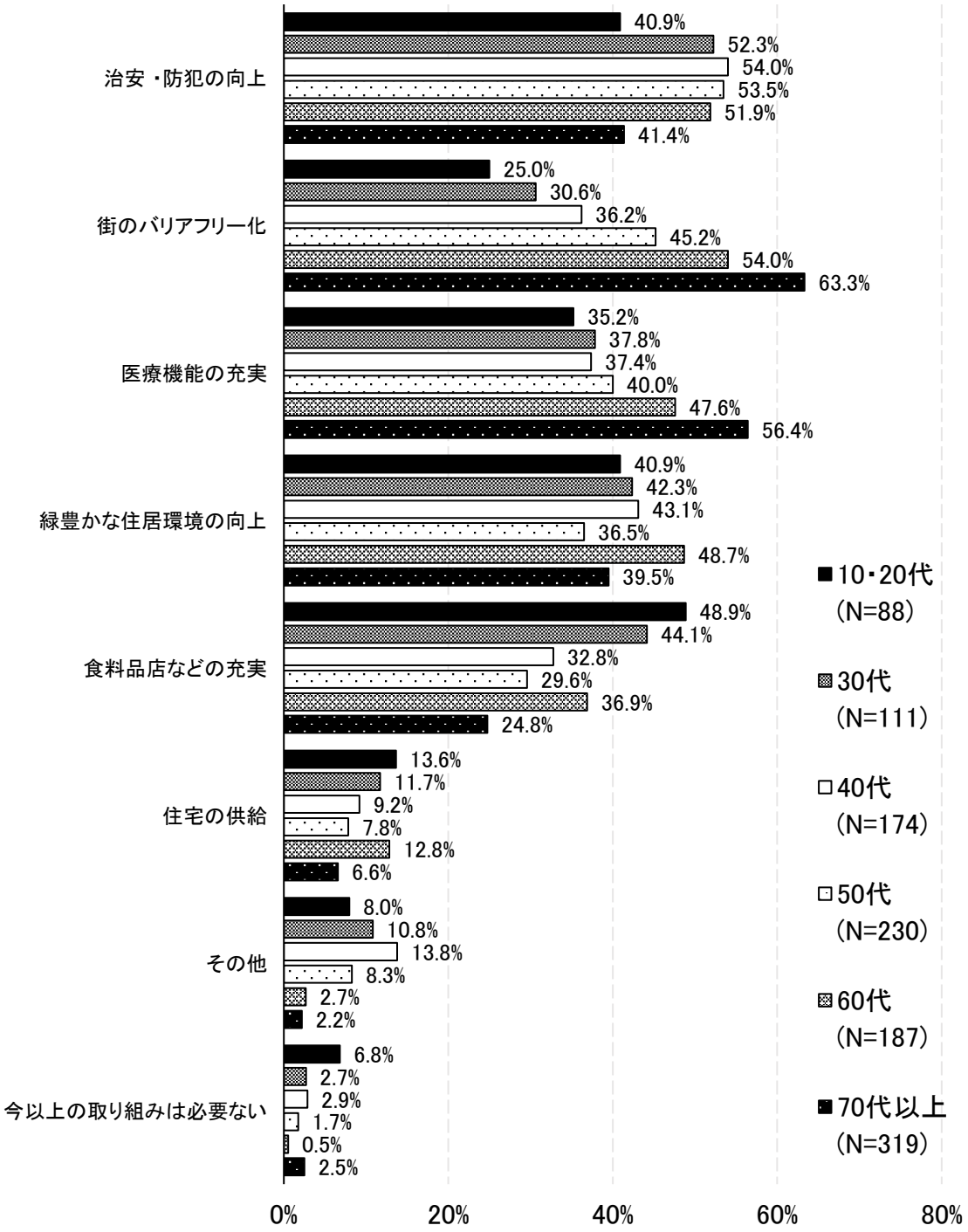


図 36　Q9 中心市街地で必要な取り組み（複数回答・年代別）

Q10 の JR 高槻駅の利用に関して、年代別でみると、男女別・年代別のすべての層で「利用する」と回答した人の割合が「利用しない」と回答した人の割合よりも高い。また、「利用する」と回答した人の割合は全ての年代で５割以上であり、10・20 代が 72.7%と最も高い（図 37）。

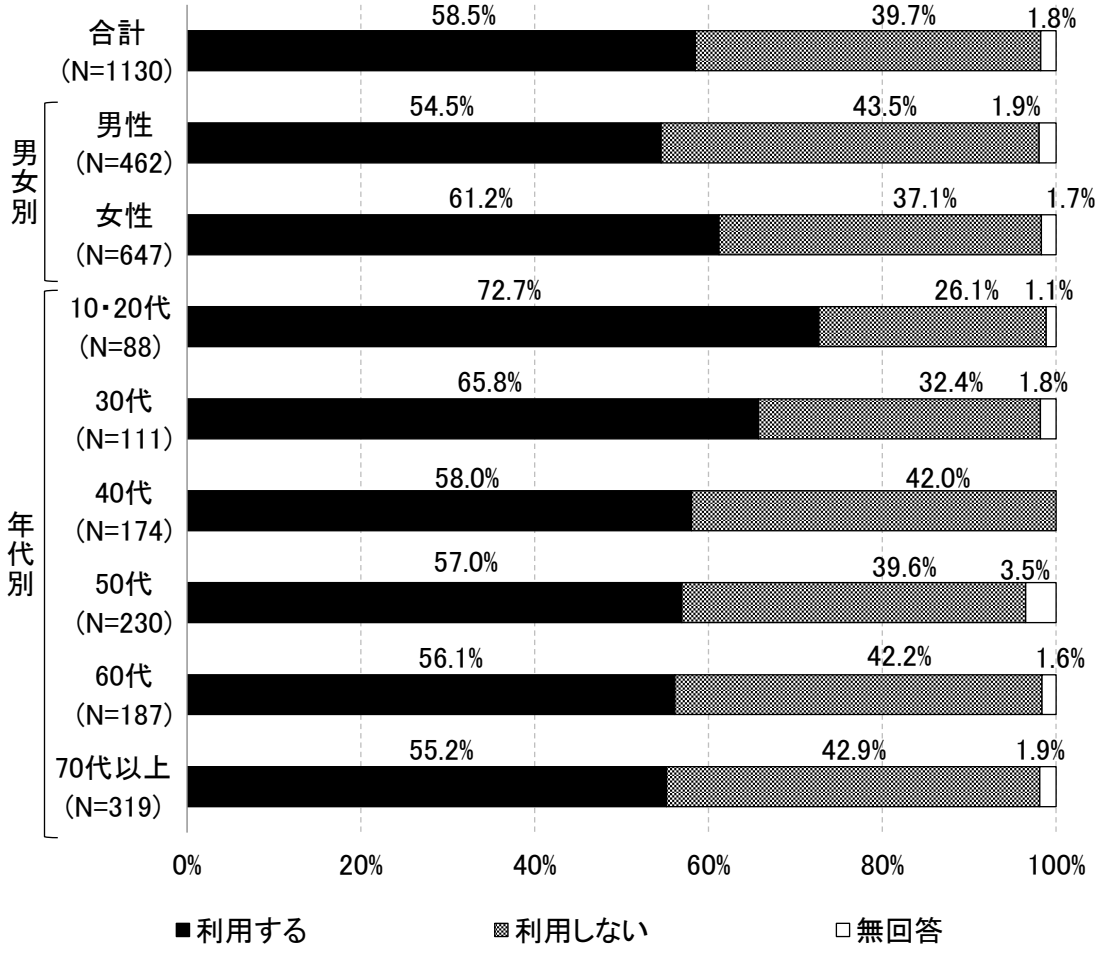


図 37　Q10 JR 高槻駅の利用

Q11 の JR 高槻駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるかに関して、男女別・年代別のすべての層で 5 割以上が「感じる」または「やや感じる」と回答している。年代別でみると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 10・20 代が 70.5%と最も高い（図 38）。

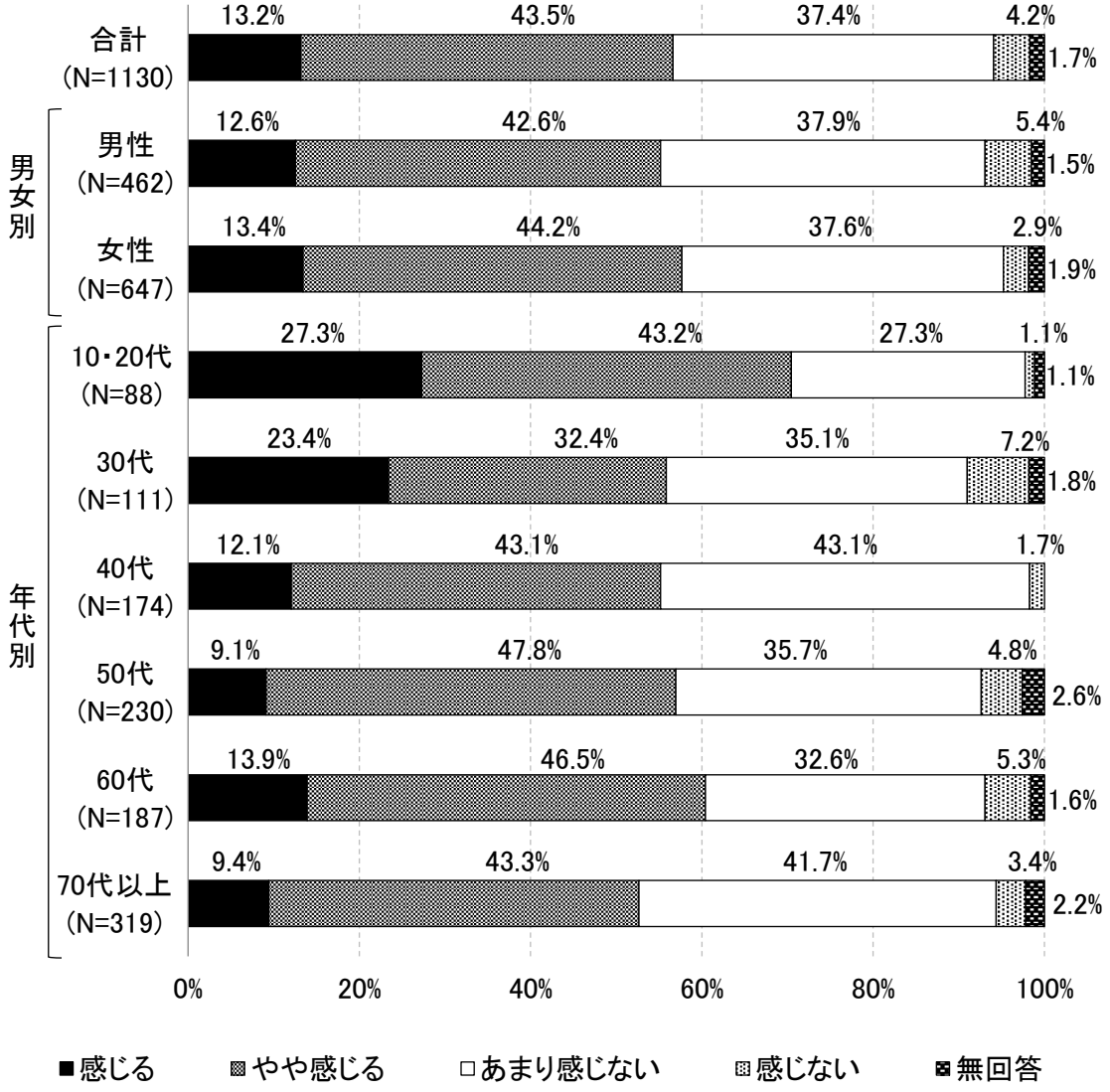


図 38　Q11 JR 高槻駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるか

Q12 の阪急高槻市駅の利用に関して、男女別・年代別でみると、女性、10・20 代、30 代を除く、すべての層で「利用しない」と回答した人の割合が「利用する」と回答した人の割合よりも高い。また、「利用しない」と回答した人の割合は全ての年代で 3 割以上であり、40 代が 56.3%と最も高い（図 39）。

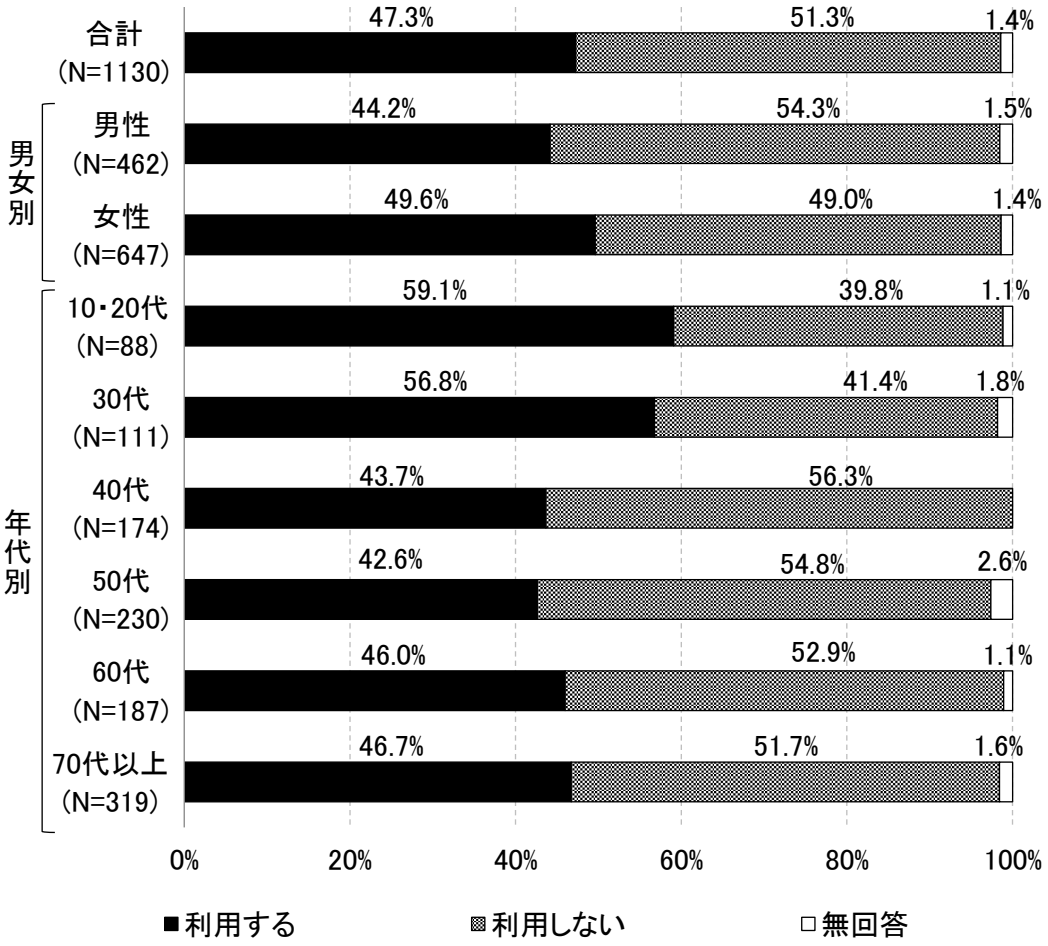


図 39　Q12 阪急高槻市駅の利用

Q13 の阪急高槻市駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるかに関して、男女別・年代別でみると、10・20 代～40 代を除き、すべての層で 5 割以上が「あまり感じない」または「感じない」と回答している。年代別でみると、「あまり感じない」または「感じない」と回答した人の割合は 70 代以上が 69.9%と最も高い（図 40）。

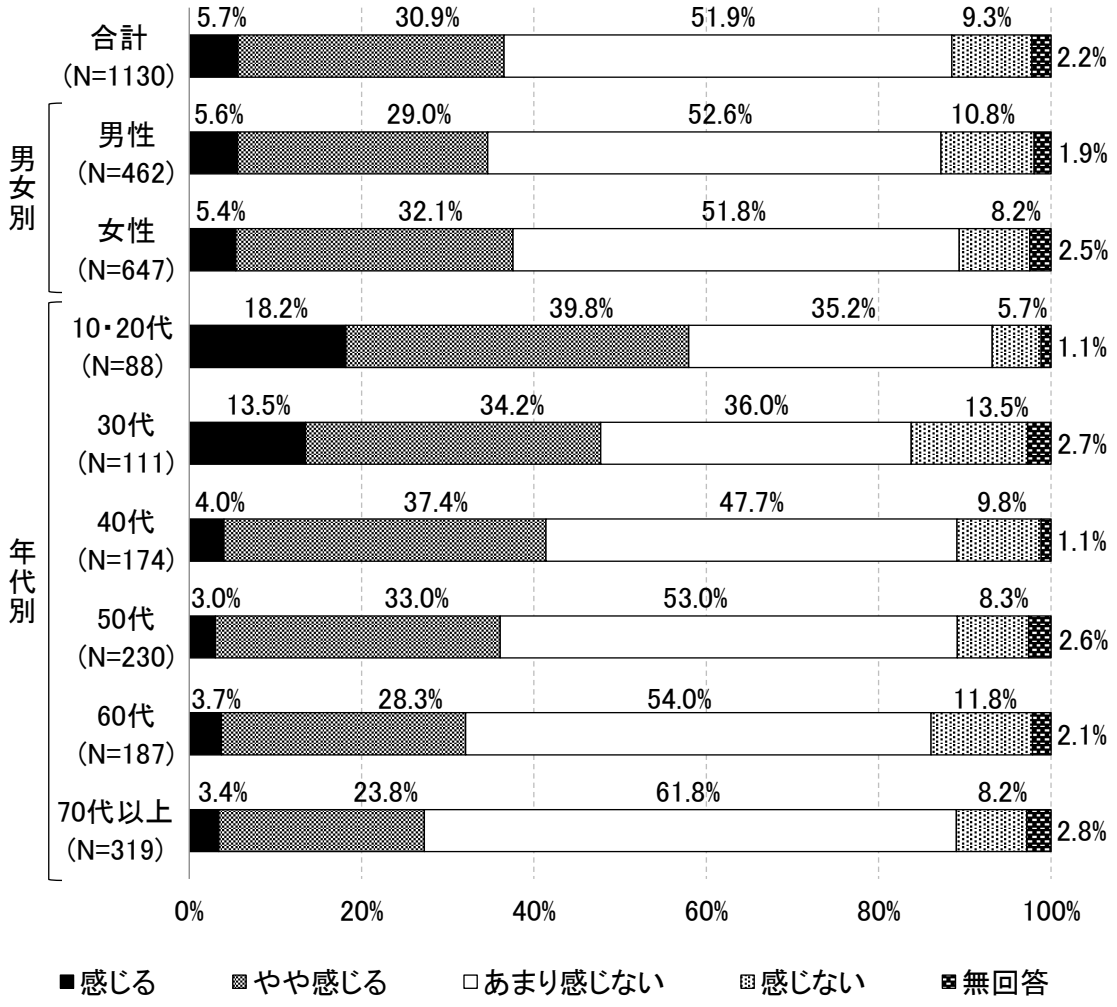


図 40　Q13 阪急高槻市駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるか

Q14 の高槻市のイメージに関して、男女別・年代別のすべての層で「良い」または「やや良い」と回答した人が７割以上である。年代別でみると、「良い」または「やや良い」と回答した人の割合は 30 代が 85.6%と最も高く、反対に 70 代以上が 78.4%と最も低い（図 41）。

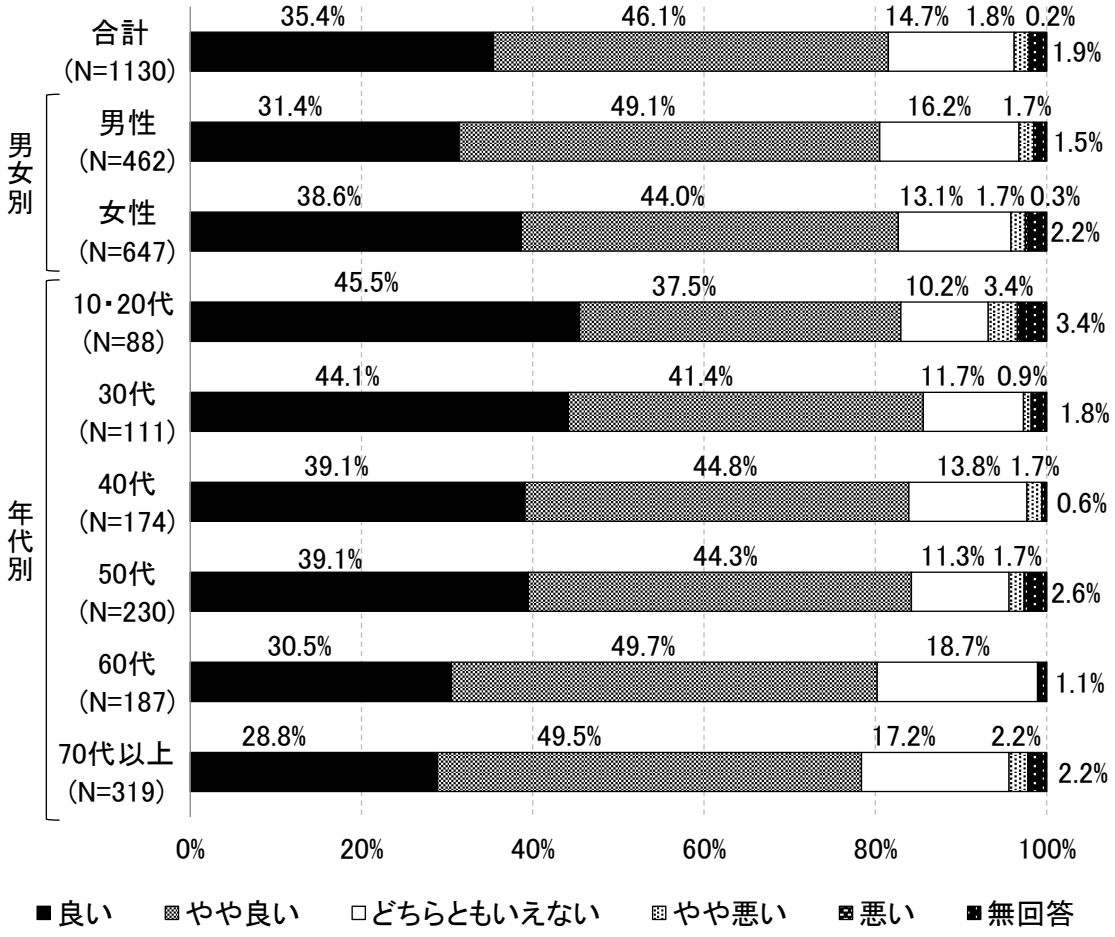


図 41　Q14 高槻市のイメージ

Q15 の高槻市に愛着を感じるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「感じる」または「やや感じる」と回答した人が 7 割以上である。年代別でみると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 50 代が 83.5%と最も高く、反対に 10・20 代が 76.1%と最も低い（図 42）。

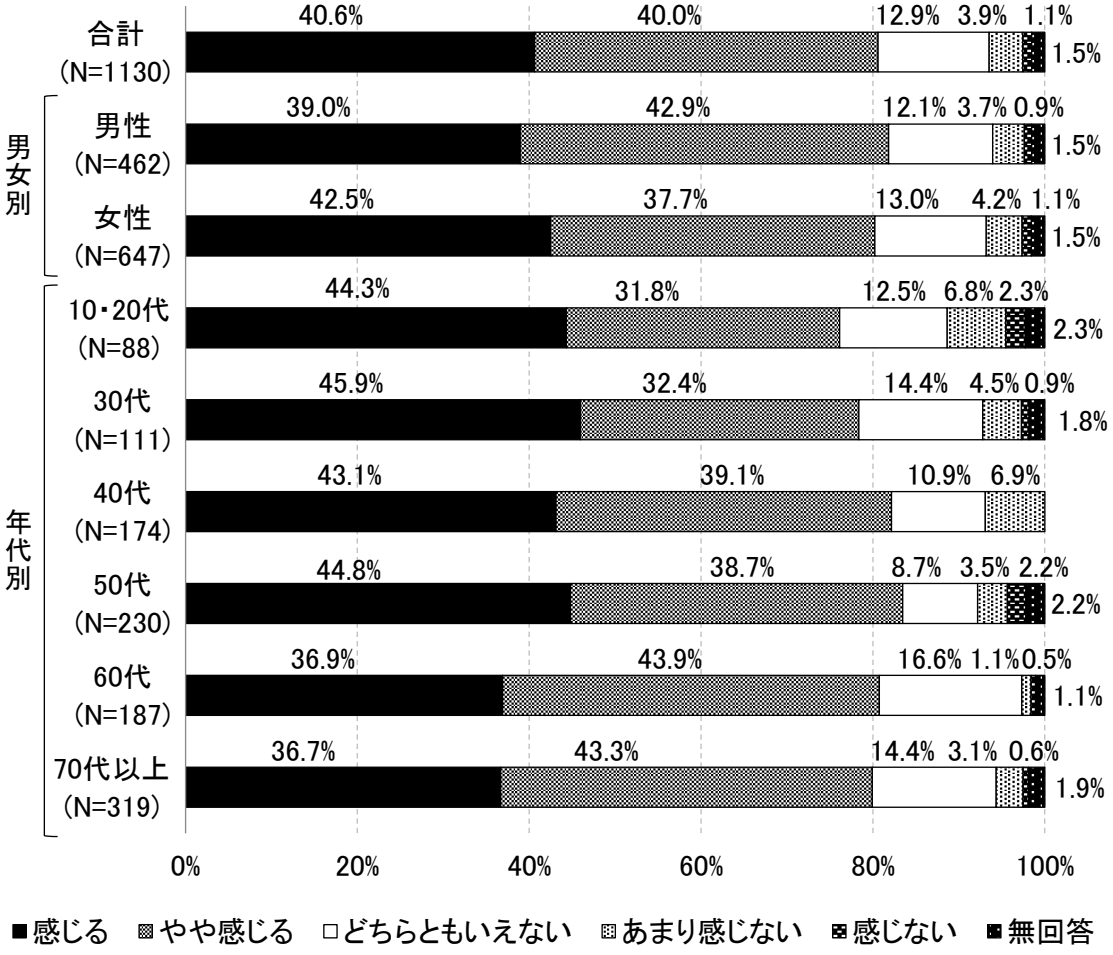


図 42　Q15 高槻市に愛着を感じるか

Q16 の高槻市のご当地キャラクター「はにたん」に愛着を感じるかに関して、男女別・年代別でみると、70 代以上を除き、すべての層で 5 割以上が「感じる」または「やや感じる」と回答している。年代別でみると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 40 代が 79.3%と最も高く、反対に 70 代以上が 48.6%と最も低い（図 43）。

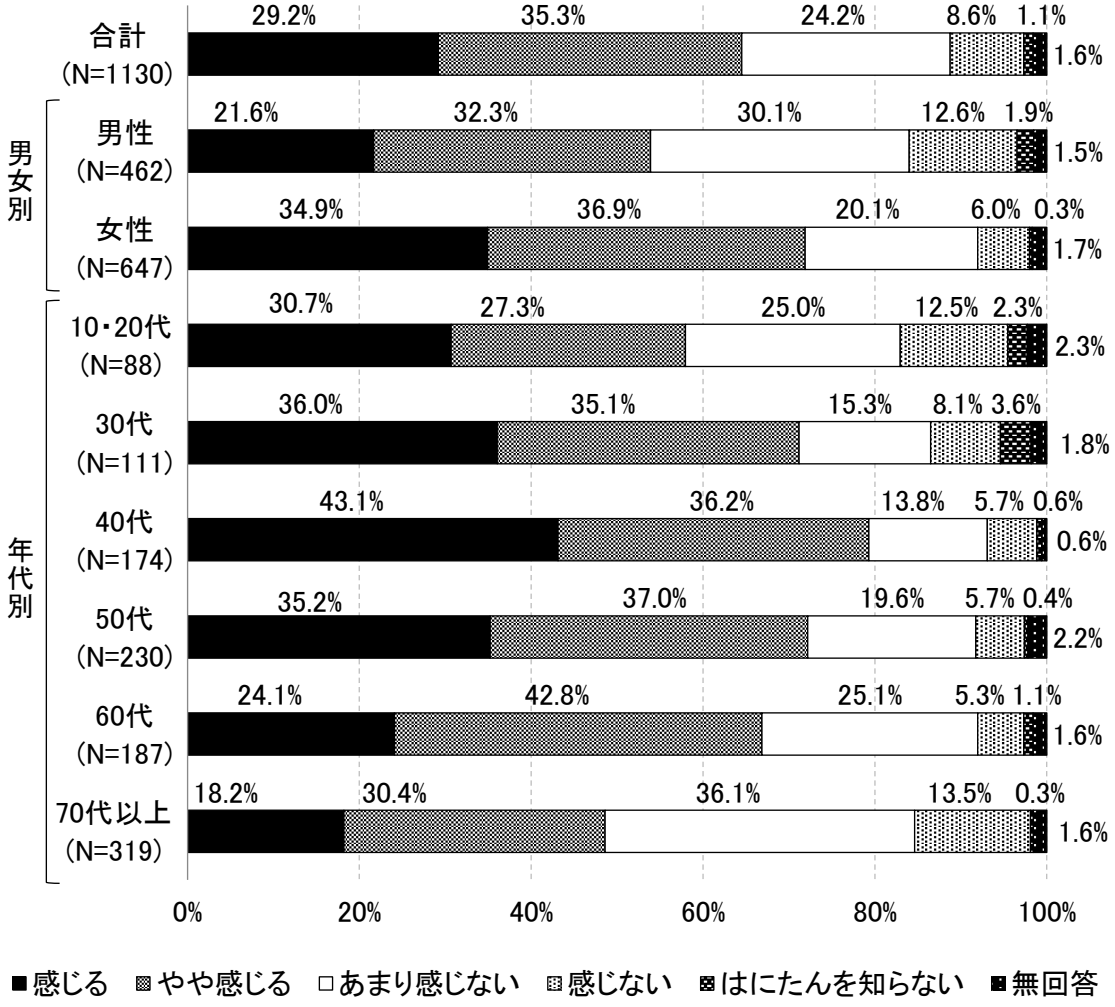


図 43　Q16 高槻市のご当地キャラクター「はにたん」に愛着を感じるか

Q17 の高槻市営バスへの満足度に関して、男女別・年代別でみると、すべての層で 5 割以上が「満足」または「やや満足」と回答している。年代別でみると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 70 代以上が 78.1%と最も高く、反対に 60 代が 52.4%と最も低い（図 44）。

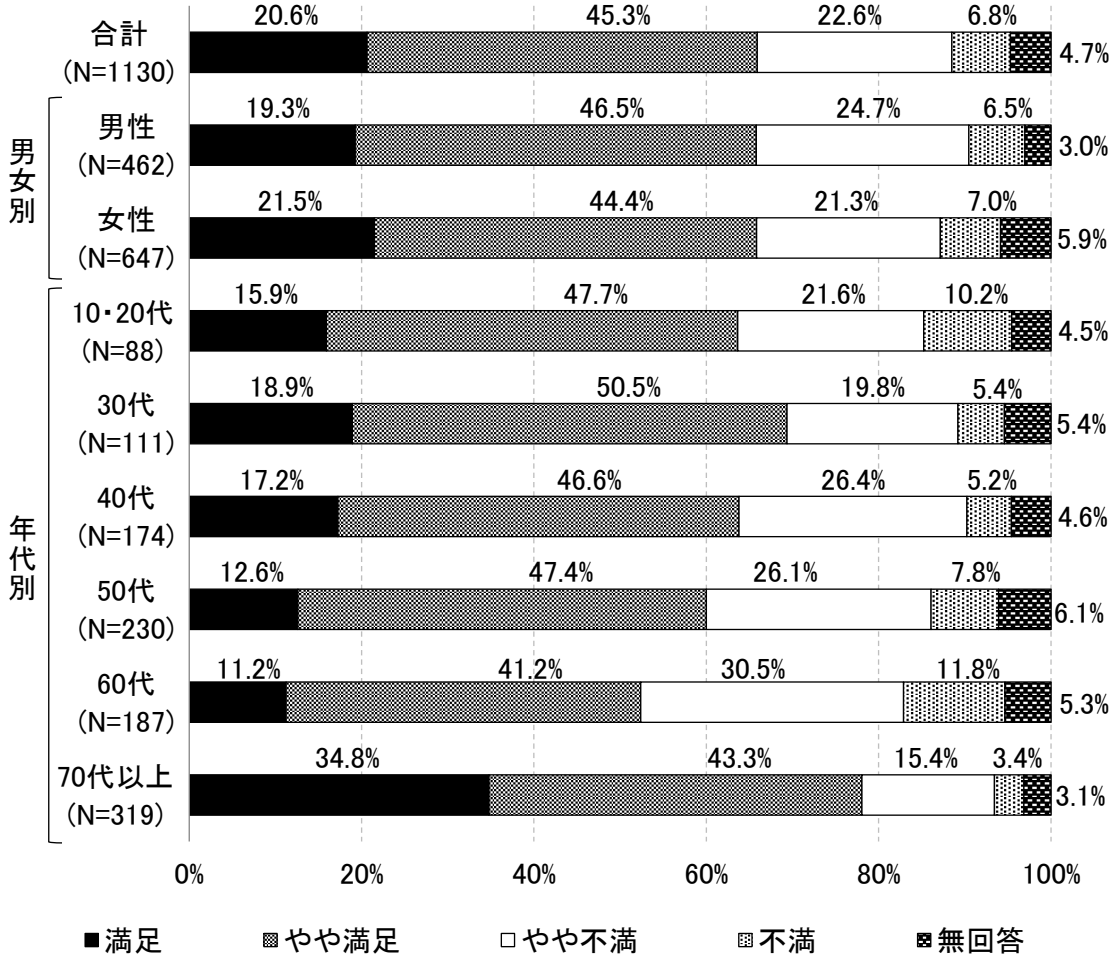


図 44　Q17 高槻市営バスへの満足度

Q18 の高槻市営バスの利用頻度に関して、男女別でみると、「月に数日以上」（「ほぼ毎日」または「週に 3～4 日」または「週に 1～2 日」または「月に数日」）と回答した人の割合は、男性では 52.4%、女性では 56.1%である。また、年代別でみると、「利用しない」と回答した人の割合は 40 代が 53.4%と最も高く、反対に 70 代以上が 24.8%と最も低い（図 45）。

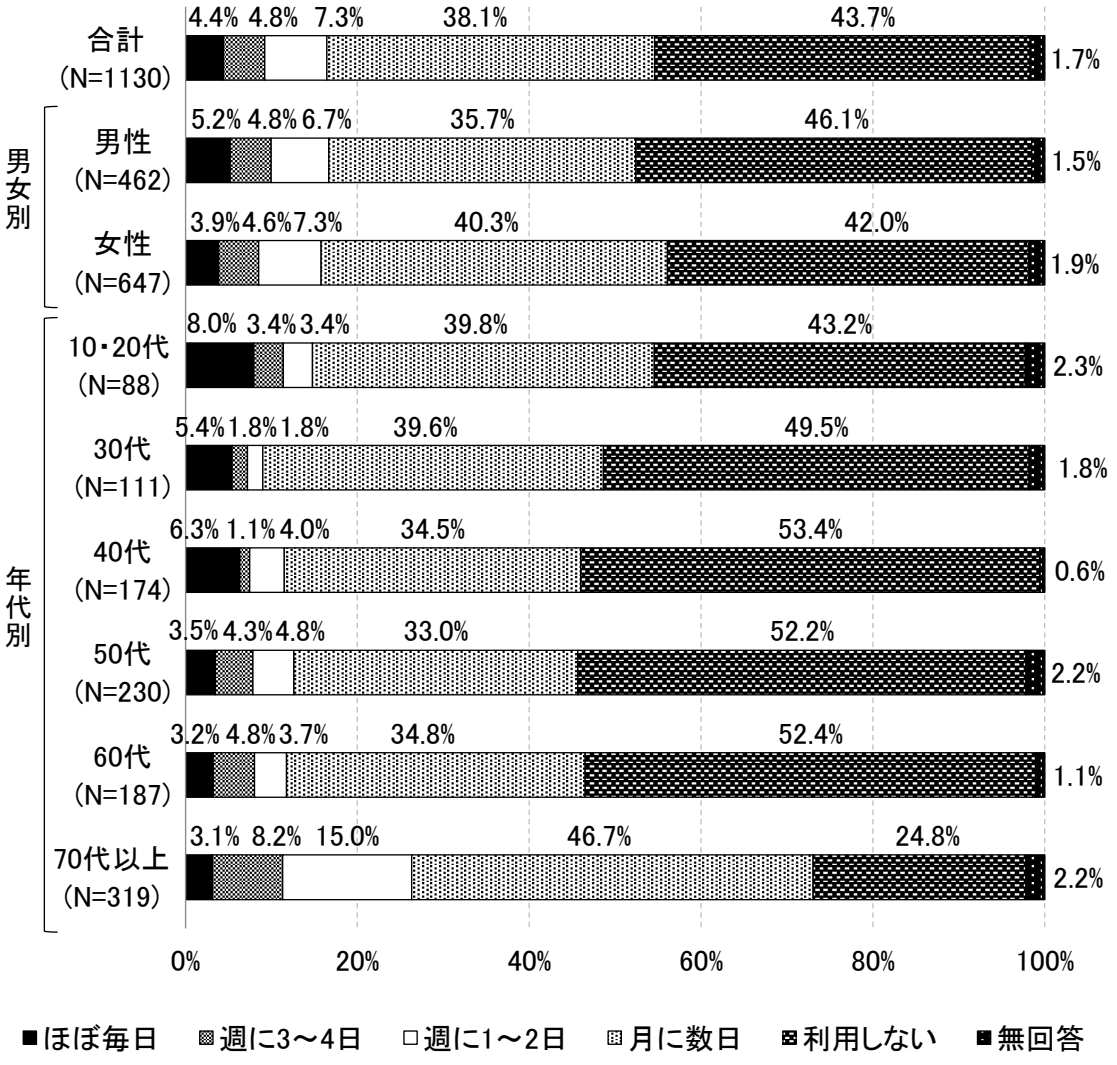


図 45　Q18 高槻市営バスの利用頻度

Q19A の高槻市営バスの運行本数が少ないに関して、男女別・年代別でみると、30 代を除き、すべての層で 3 割以上が「そう思う」または「ややそう思う」と回答している。年代別でみると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 60 代が 40.1%と最も高く、反対に 30 代が 26.1%と最も低い（図 46）。

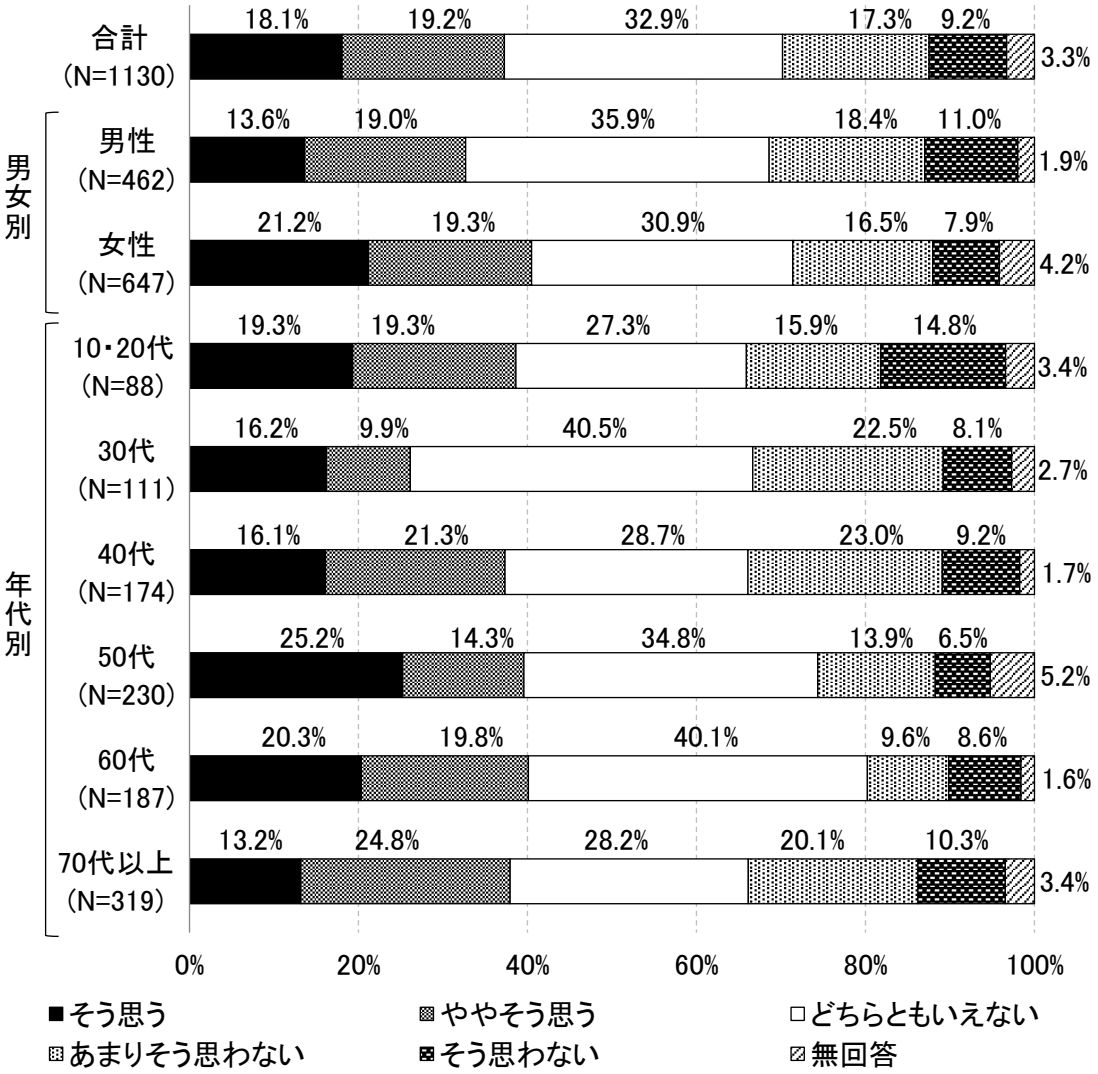


図 46　Q19A 高槻市営バスに関する考え：運行本数が少ない

Q19B の近くに高槻市営バスの路線やバス停がないに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人が 5 割以上である。年代別でみると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は 60 代が 63.1%と最も高く、反対に 10・20 代が 51.1%と最も低い（**図 47**）。

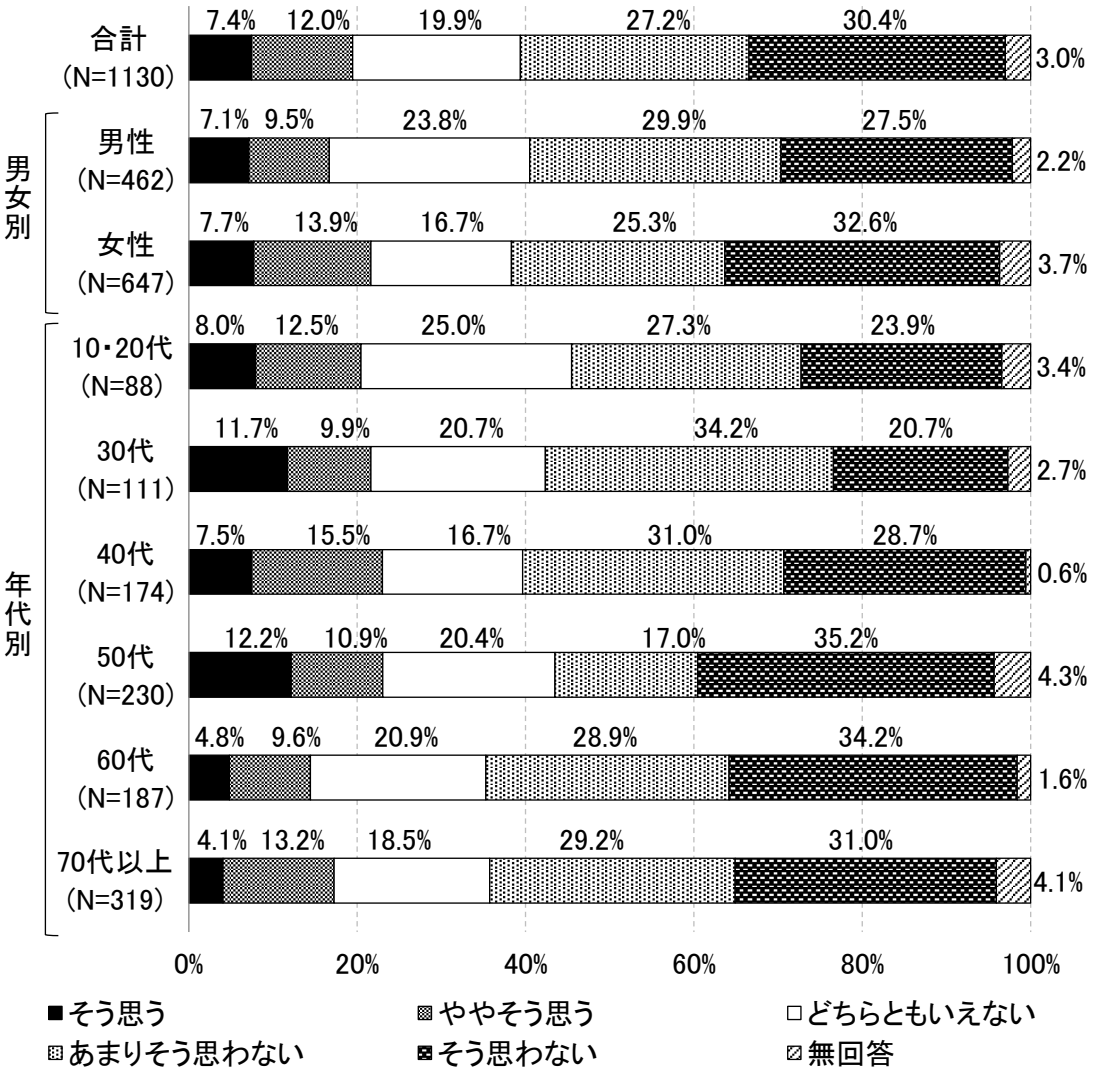


図 47　Q19B 高槻市営バスに関する考え：近くに路線やバス停がない

Q20 の環境に関する問題への関心度に関して、「異常気象」が 55.4%で最も高く、「地球温暖化」が 50.2%と続く（図 48）。

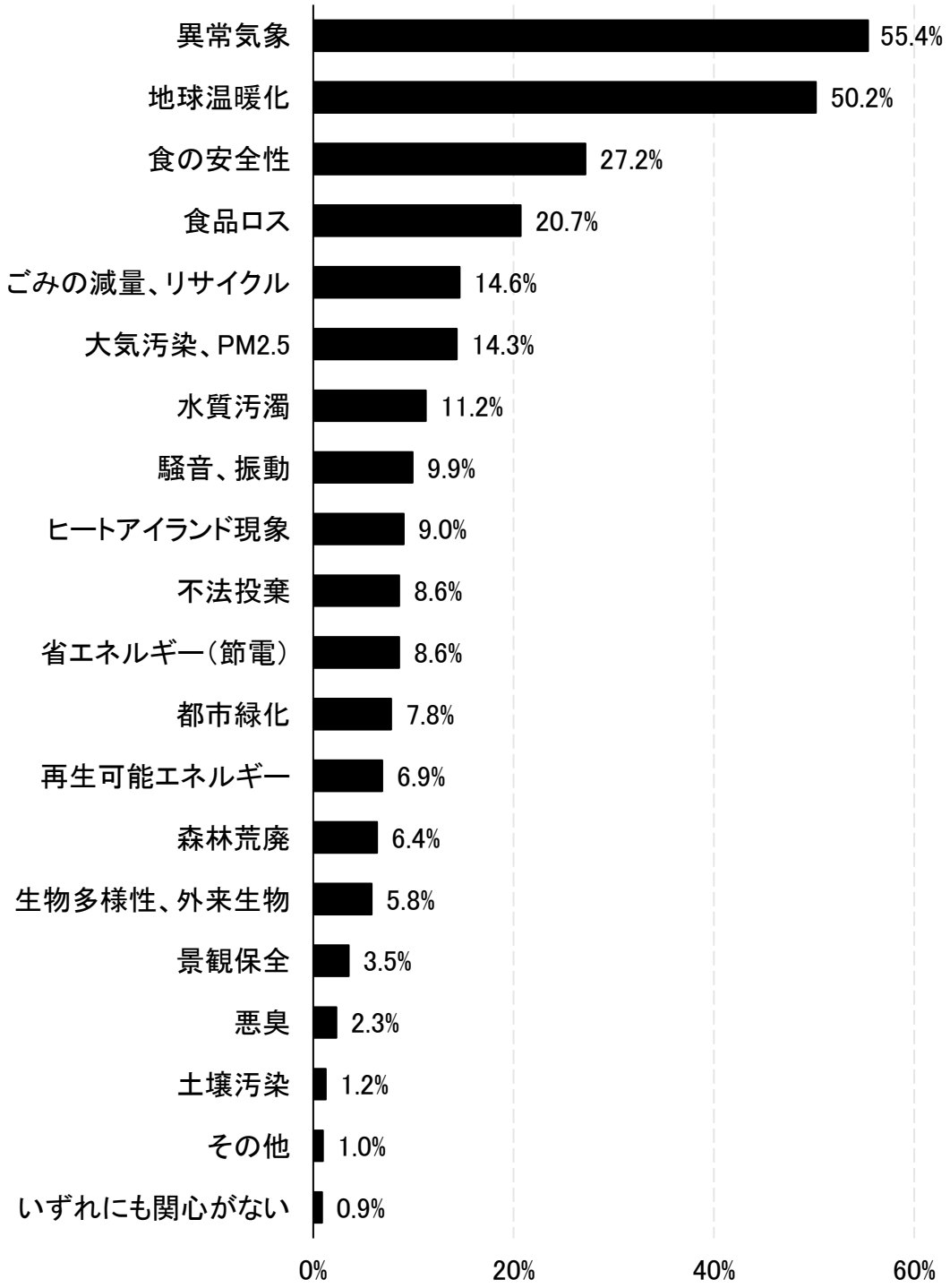


図 48　Q20 環境に関する問題への関心度（複数回答・全体　N=1130）

Q20 の環境に関する問題への関心度に関して、男女別でみると、「食の安全性」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 10.3 ポイント高い（図 49）。

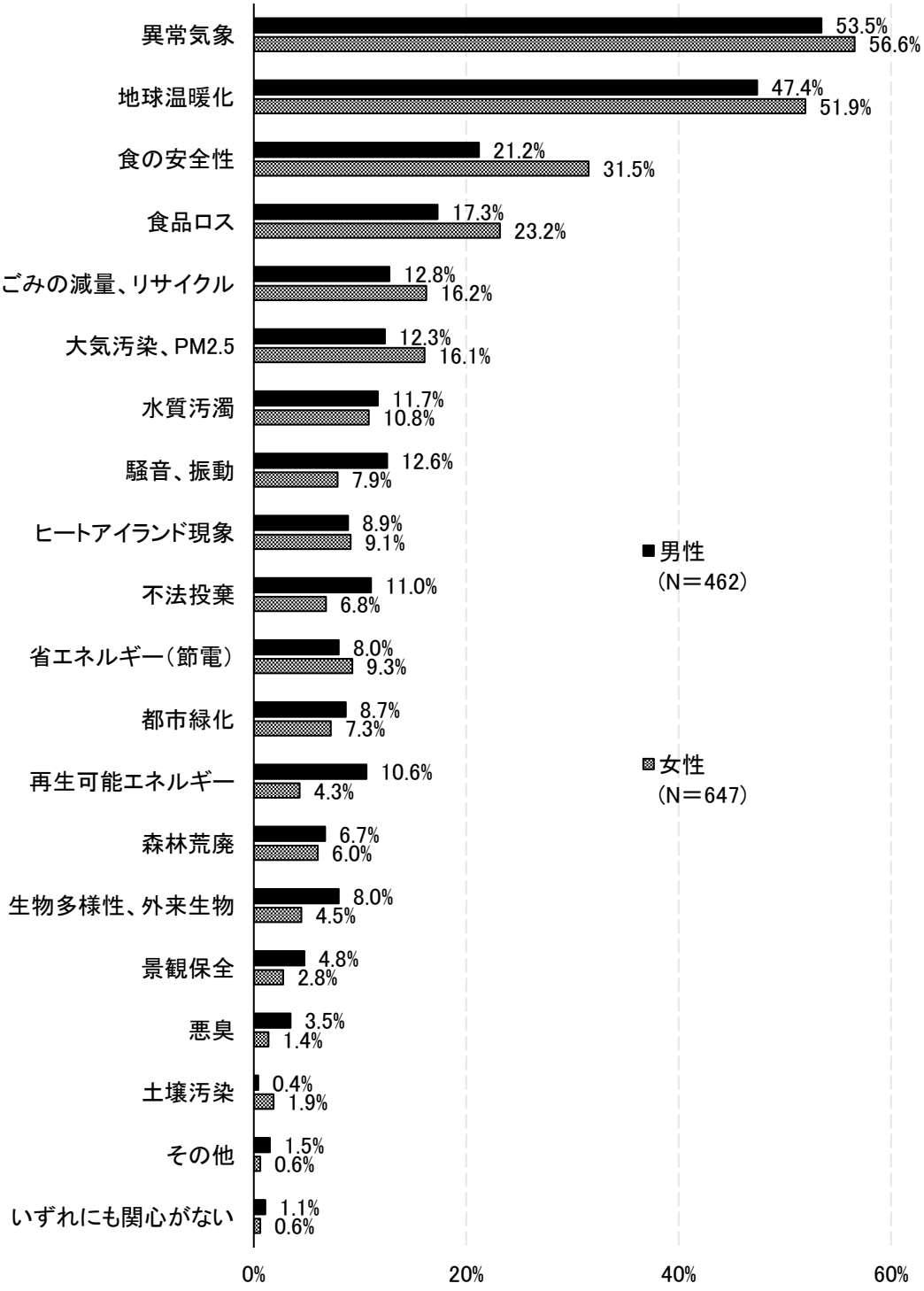


図 49　Q20 環境に関する問題への関心度（複数回答・男女別）

Q20 の環境に関する問題への関心度に関して、年代別でみると、「食品ロス」は、10・20 代が 29.5%と最も高く、60 代は 15.5%と最も低い（図 50）。

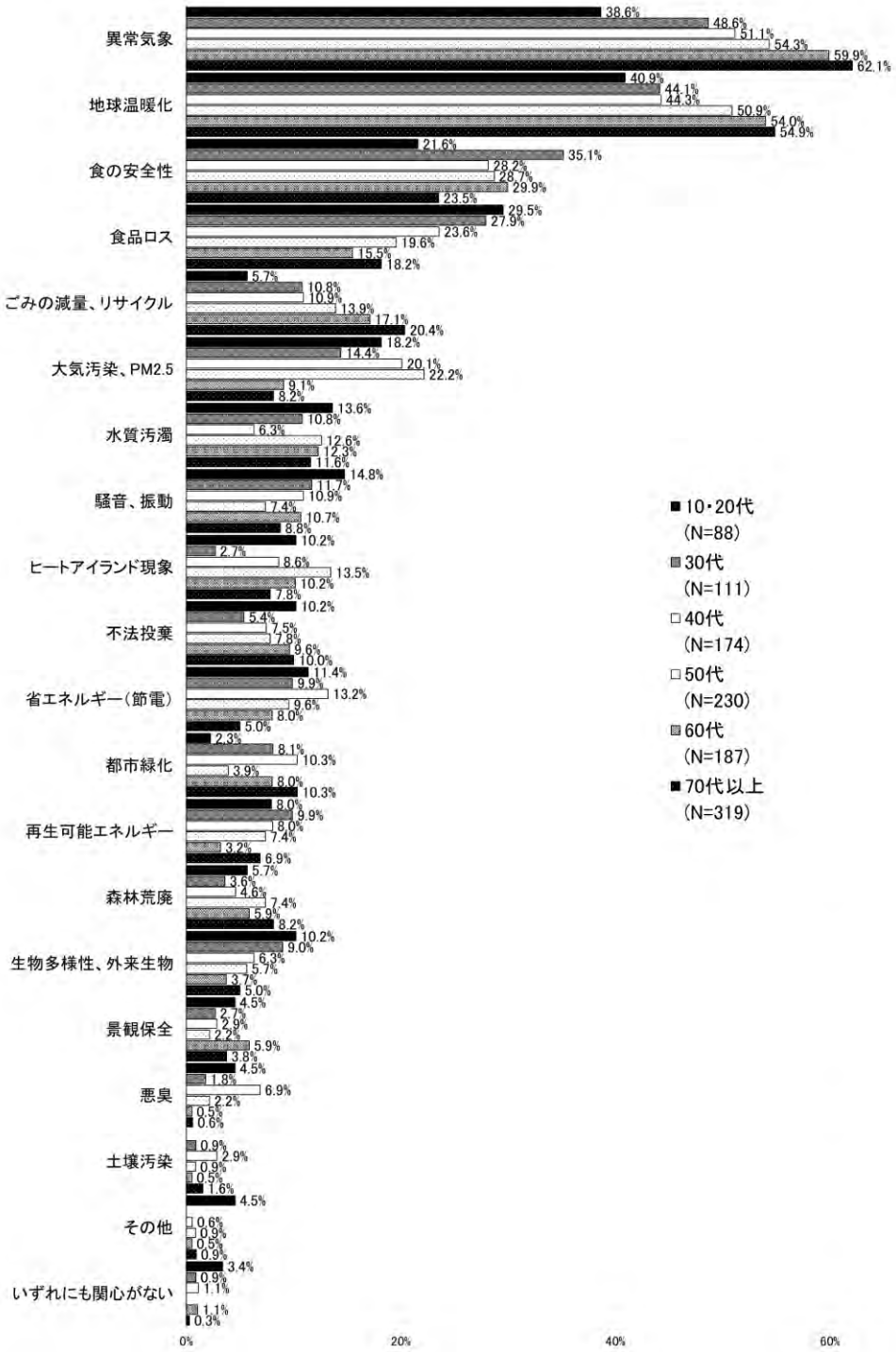


図 50　Q20 環境に関する問題への関心度（複数回答・年代別）

Q21A の身近な自然環境とのふれあいがあるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が 7 割以上である。年代別でみると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 10・20 代が 81.8%と最も高く、60 代が 72.2%と最も低い（図 51）。

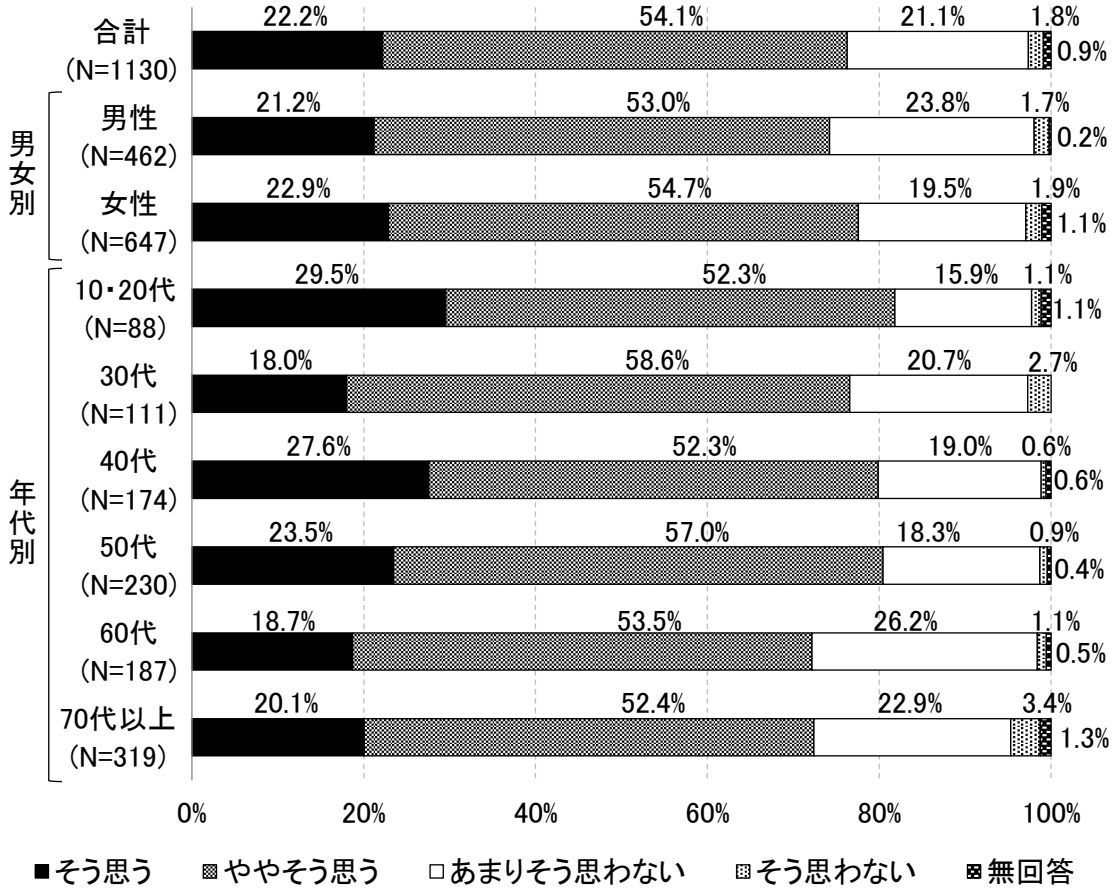


図 51　Q21A 高槻市の環境：身近な自然環境とのふれあいがあるか

Q21B の不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が 5 割以上である。年代別でみると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 40 代が 63.2%と最も高く、60 代が 58.3%と最も低い（図 52）。

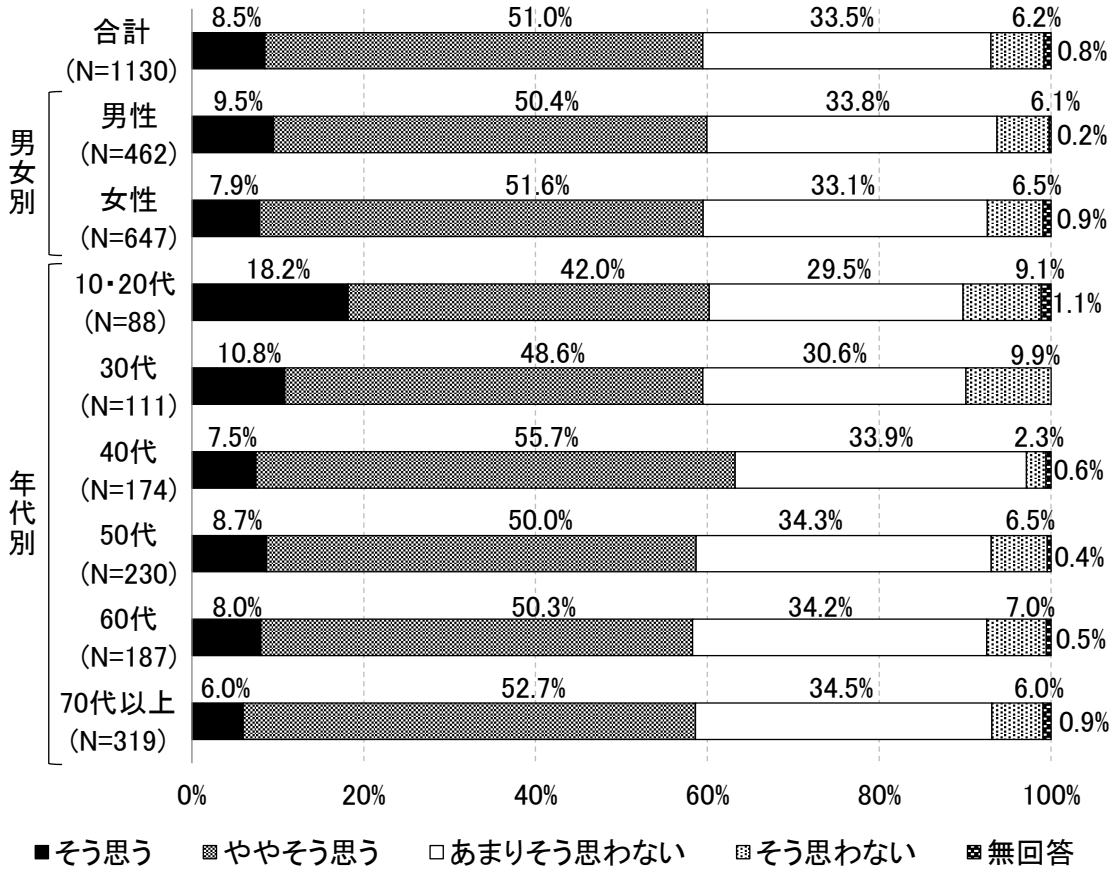


図 52　Q21B 高槻市の環境：不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちか

Q21C の良好な環境づくりを目指した活動が豊富かに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が 3 割以上である。年代別でみると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 30 代が 52.2%と最も高く、60 代が 39.6%と最も低い（図 53）。

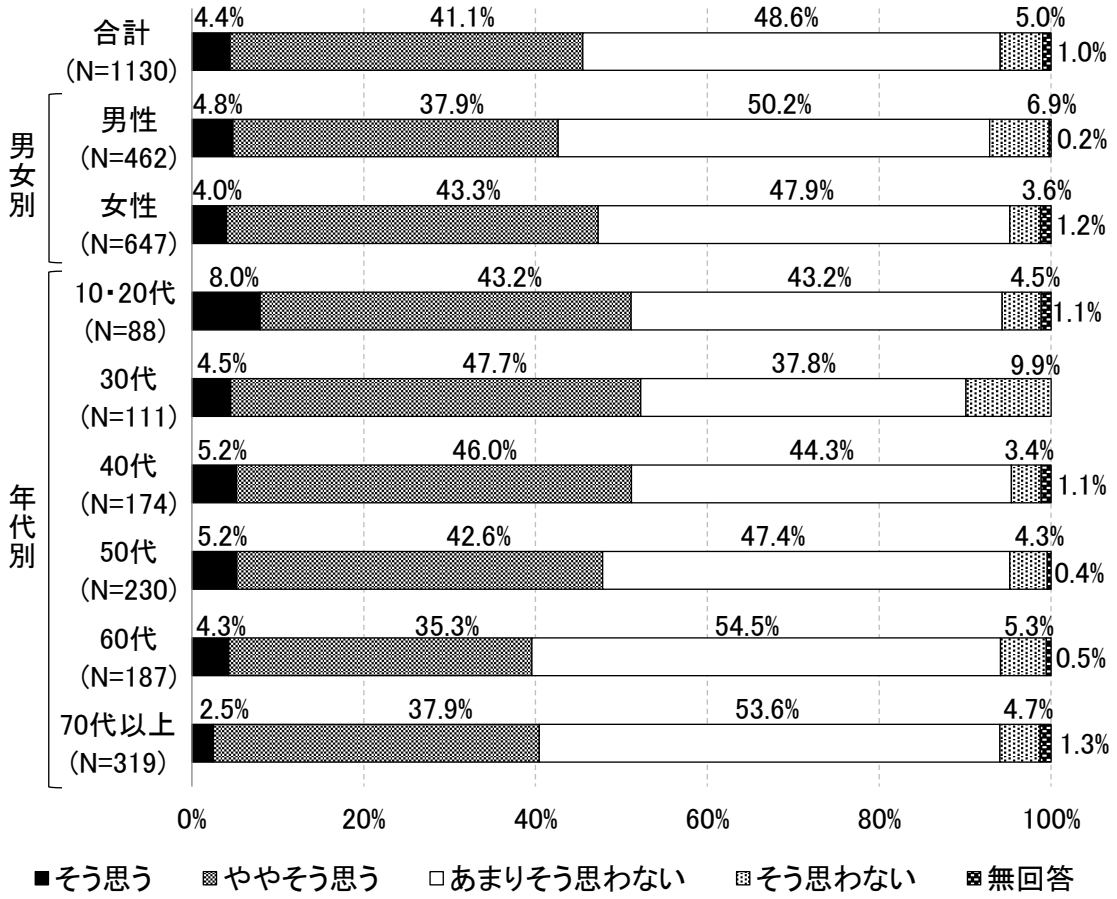


図 53　Q21C 高槻市の環境：良好な環境づくりを目指した活動が豊富か

Q21D の環境活動に関する情報や呼びかけが十分かに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人が２割以上である。年代別でみると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 30 代が 40.5%と最も高く、60 代が 25.1%と最も低い（図 54）。

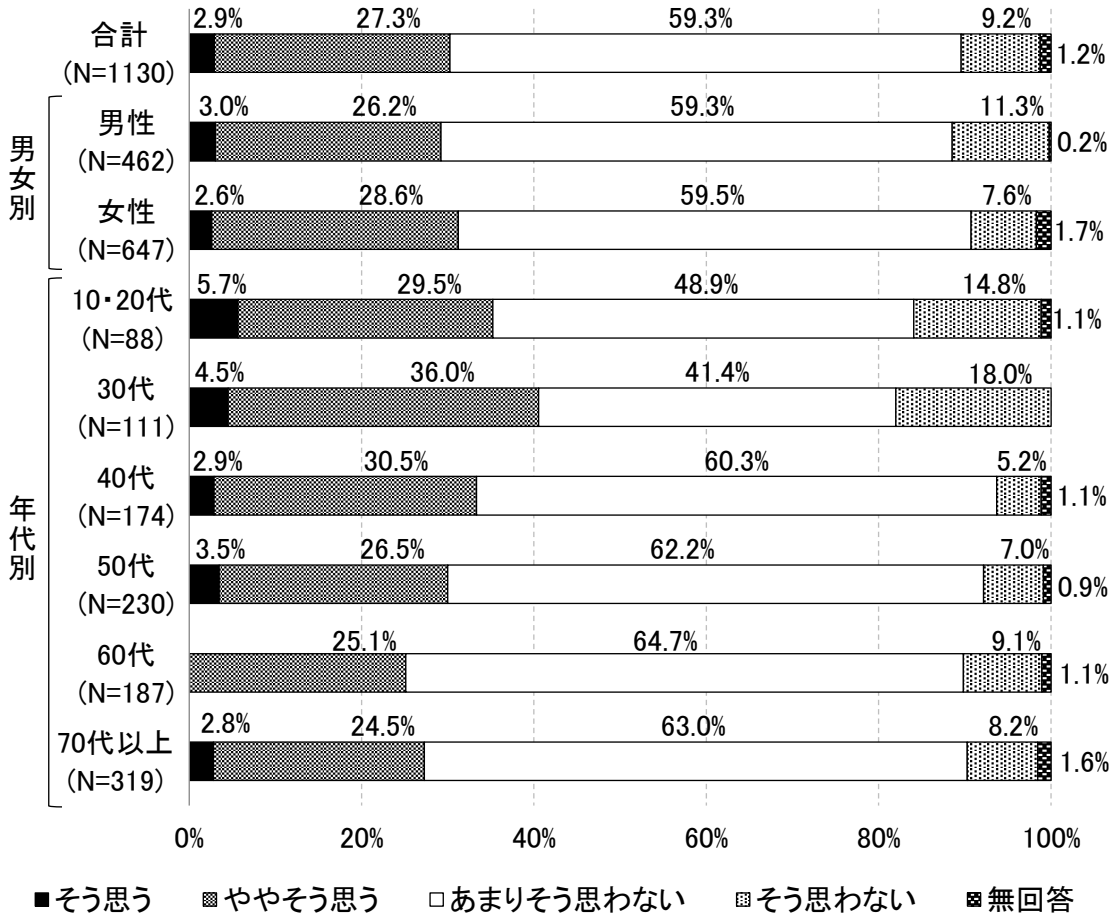


図 54　Q21D 高槻市の環境：環境活動に関する情報や呼びかけが十分か

Q22 の朝食の頻度に関して、男女別・年代別でみると、10・20 代を除いた、すべての層で「毎日」と回答した人が 6 割以上である。年代別でみると、「毎日」と回答した人の割合は 70 代以上が 92.2%と最も高く、反対に 10・20 代が 47.7%と最も低い（図 55）。

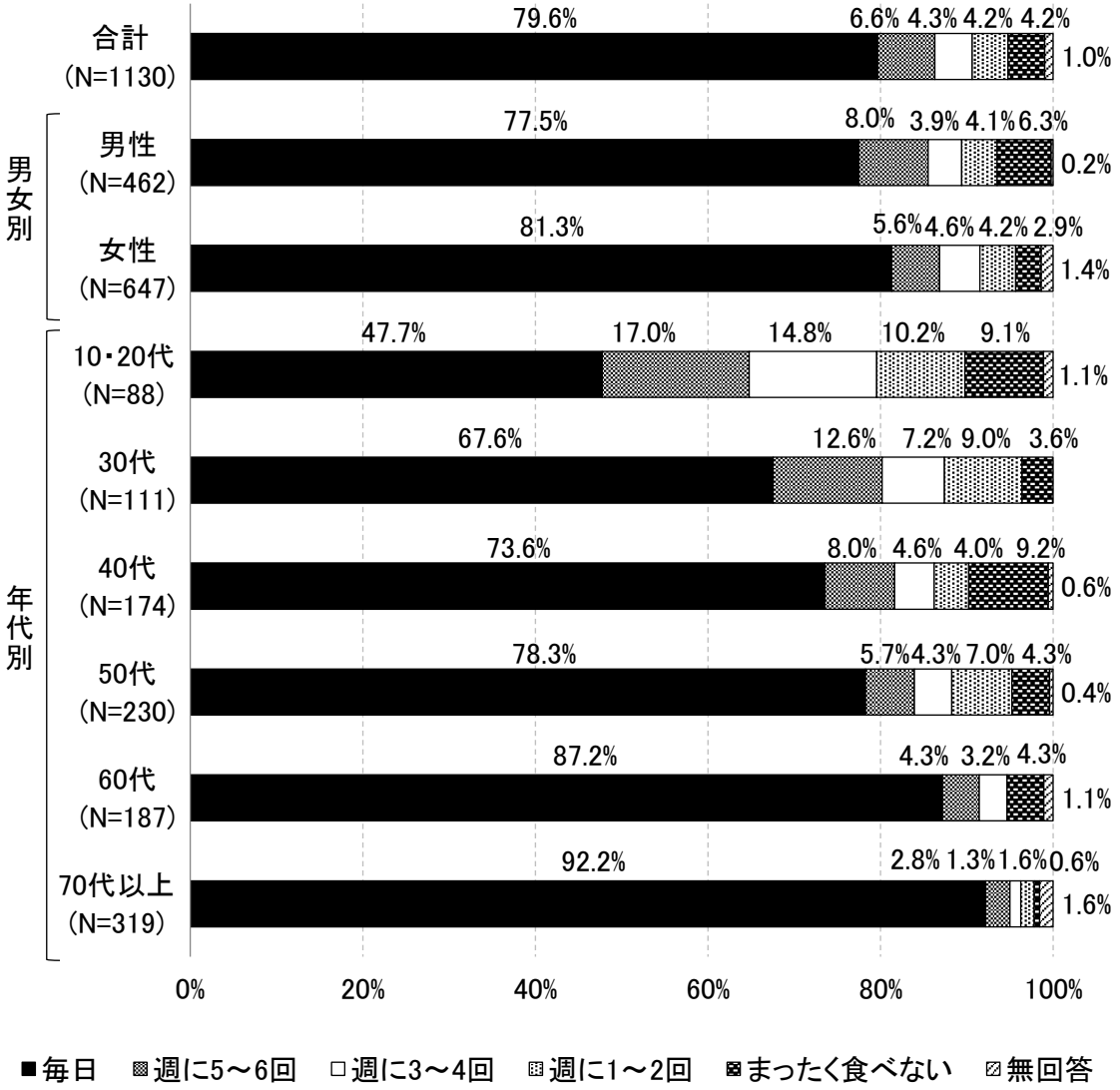


図 55　Q22 朝食の頻度

Q23 の運動の頻度に関して、男女別でみると、「週に 1 日以上」（「週に 5 日以上」または「週に 3～4 日」または「週に 1～2 日」）と回答した人の割合は、男性では 59.3%、女性では 53.2%である。年代別でみると、「まったくしない」と回答した人の割合は 30 代が 31.5%と最も高い。反対に、70 代以上は 13.5%と最も低い（図 56）。

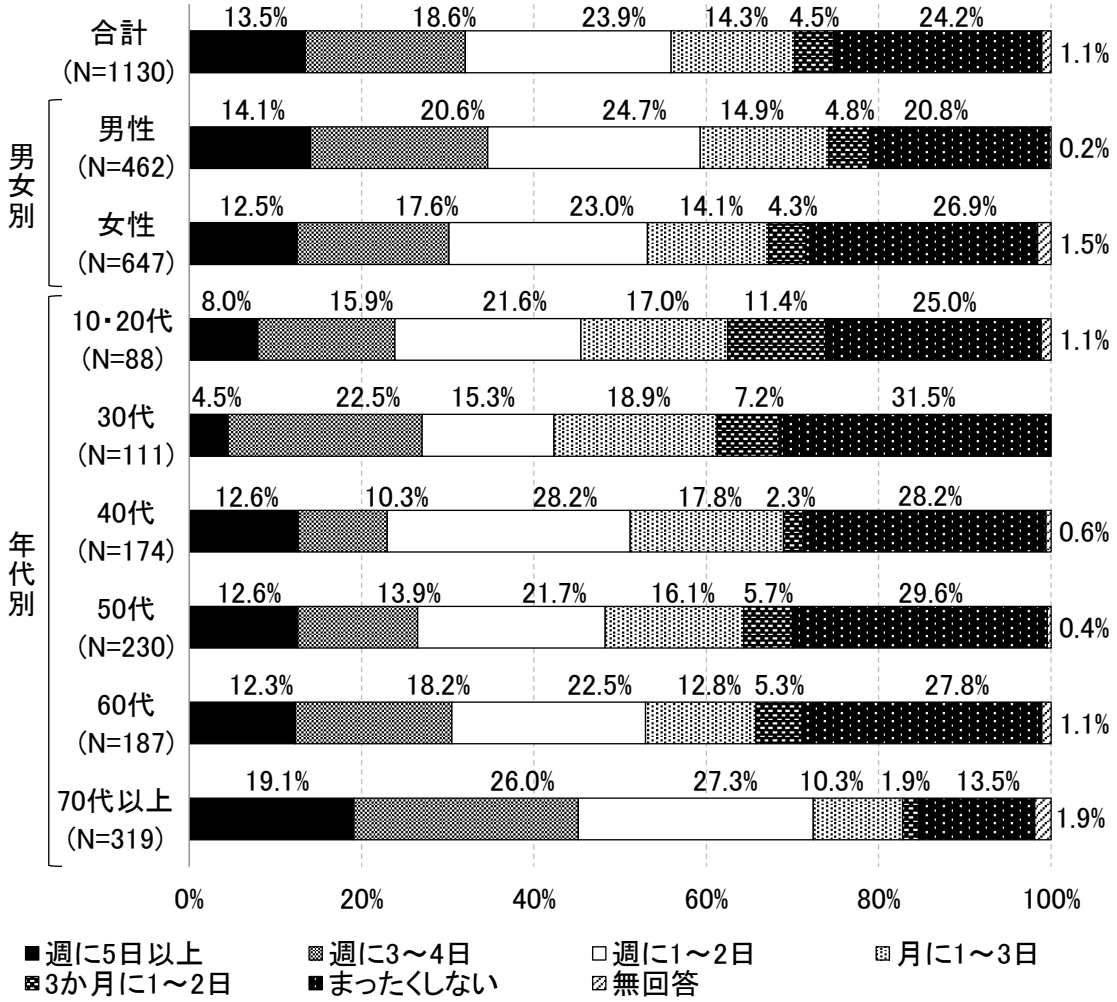


図 56　Q23 運動の頻度

Q24A の演劇を見に行くに関して、男女別・年代別のすべての層で「まったくない」と回答した人が 4 割以上である。年代別でみると、「まったくない」と回答した人の割合は 30 代が 72.1%と最も高く、反対に 70 代以上が 47.3%と最も低い（図 57）。

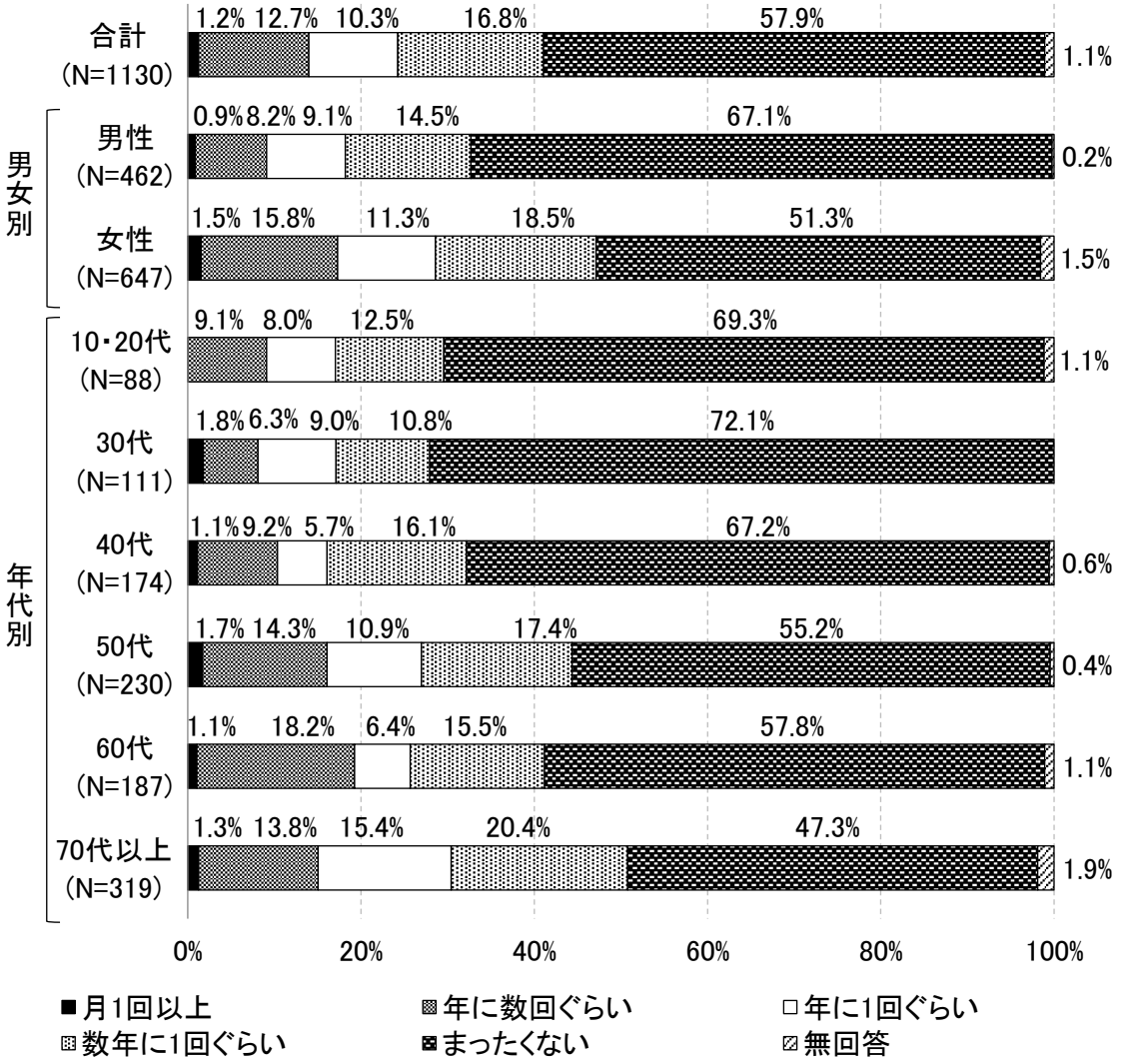


図 57　Q24A 次のような活動をどのくらいしているか：演劇を見に行く

Q24B の宿泊をともなう旅行に関して、男女別・年代別でみると、30 代を除いた、すべての層で「まったくない」と回答した人が 1 割以上である。年代別でみると、「まったくない」と回答した人の割合は 70 代以上が 29.5%と最も高く、反対に 30 代が 9.0%と最も低い（図 58）。

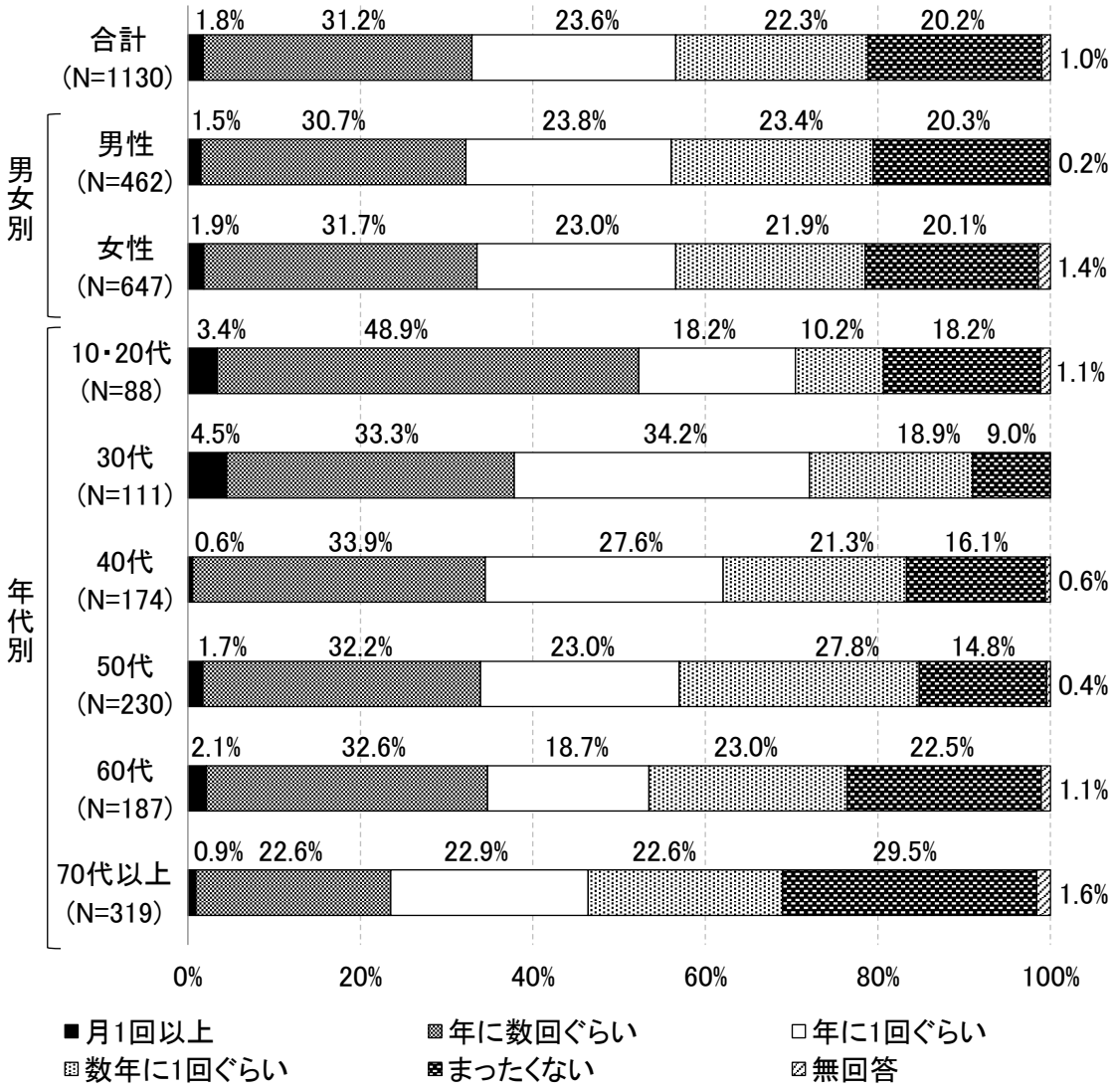


図 58　Q24B 次のような活動をどのくらいしているか：宿泊をともなう旅行

Q25 の自宅の近くに、運動ができる公園・緑地・広場はあるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「ある」と回答した人が 5 割以上である。年代別でみると、「ある」と回答した人の割合は 10・20 代が 64.8%と最も高く、反対に 30 代が 57.7%と最も低い（図 59）。

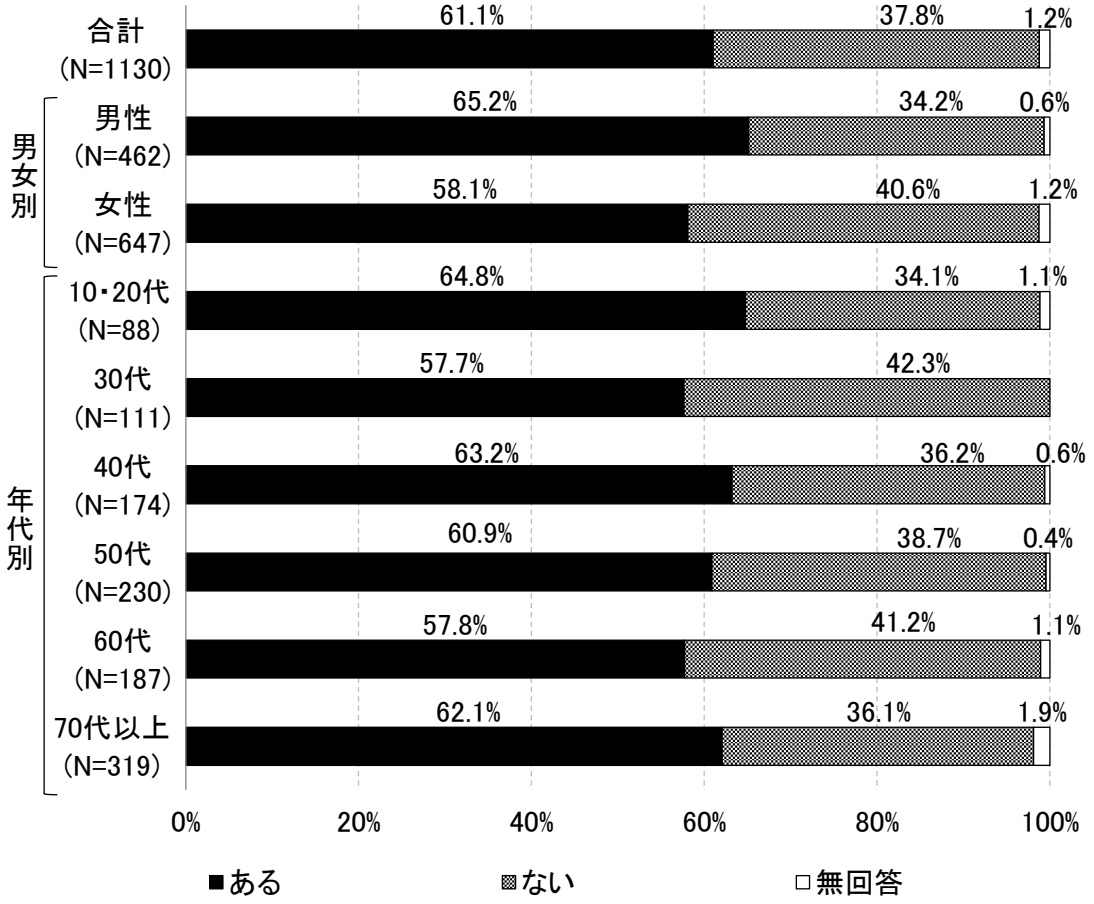


図 59　Q25 自宅の近くに、運動ができる公園・緑地・広場はあるか

Q26 のテレビの一日あたりの視聴時間に関して、男女別でみると、「1 時間未満」（「全く見ない」または「30 分未満」または「30 分以上 1 時間未満」）と回答した人の割合は、男性では 26.4%、女性では 19.9%である。また、年代別でみると、「1 時間未満」と回答した人の割合は 40 代が 47.1%と最も高い。反対に 70 代以上が 4.4%と最も低い（図 60）。

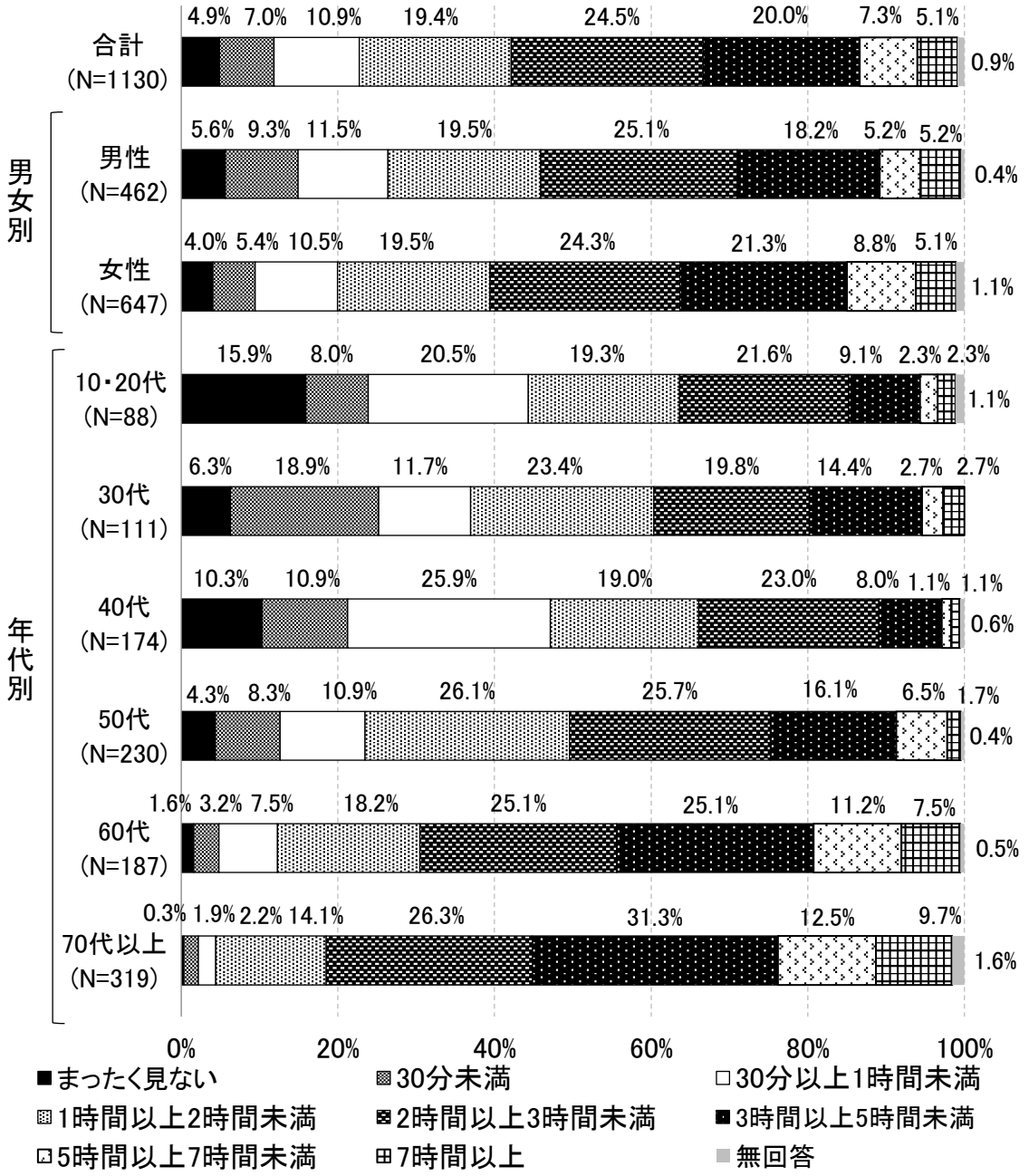


図 60　Q26 テレビの一日あたりの視聴時間

Q27 の SNS の一日あたりの利用時間に関して、男女別でみると、「2 時間以上」と回答した人の割合は、男性では 10.0%、女性では 19.5%である。また、年代別でみると、「まったく利用しない」と回答した人の割合は 70 代以上が 54.9%と最も高い。反対に 10・20 代が 3.4%と最も低い（図 61）。

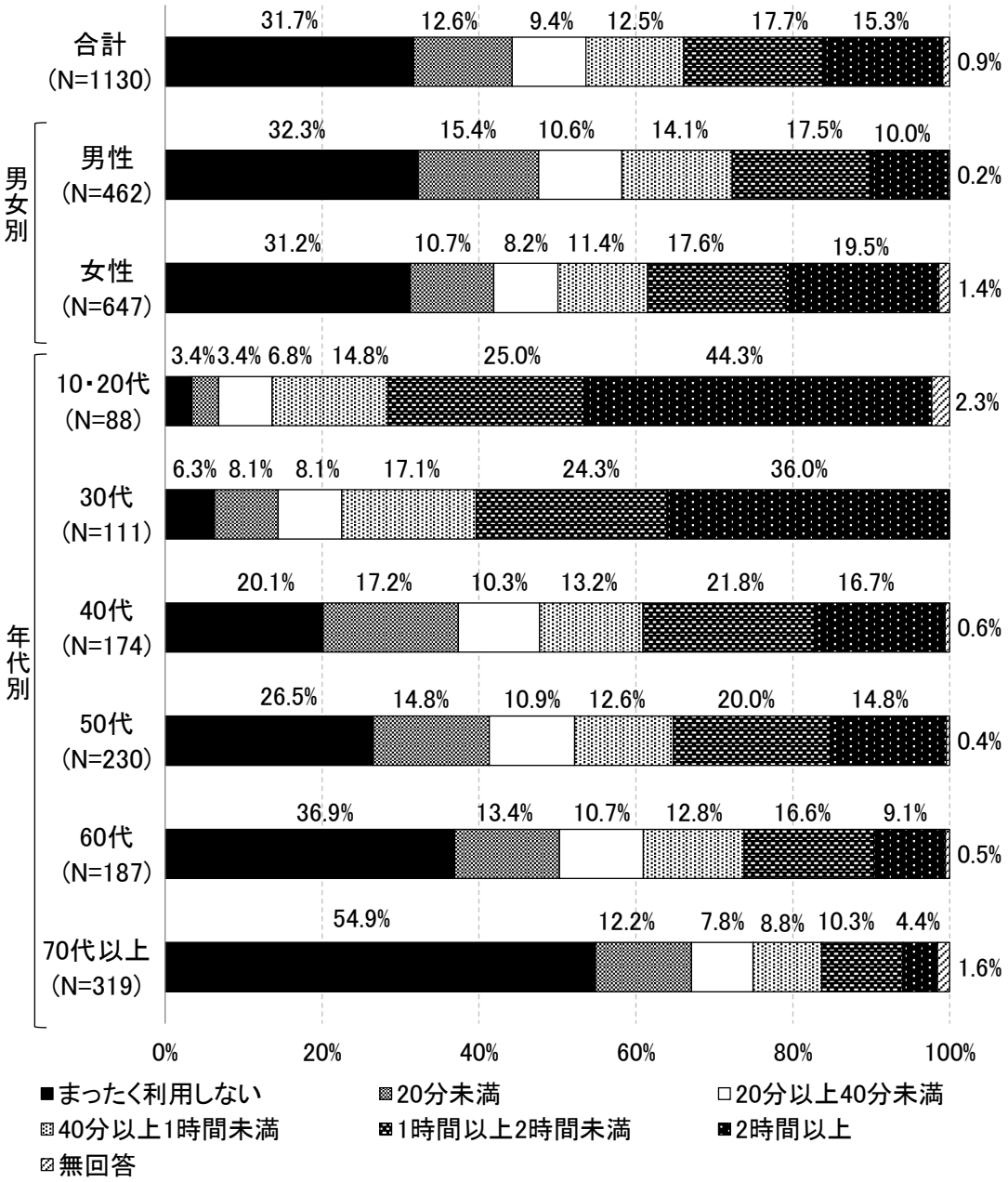


図 61　Q27 SNS の一日あたりの利用時間

Q28 のドラマを見る頻度に関して、男女別・年代別でみると、10・20 代とを除いた、すべての層で「ほぼ毎日」と回答した人の割合は 2 割以上である。年代別でみると、「ほぼ毎日」と回答した人の割合は 60 代が 40.1%と最も高く、反対に 40 代が 17.8%と最も低い（図 62）。

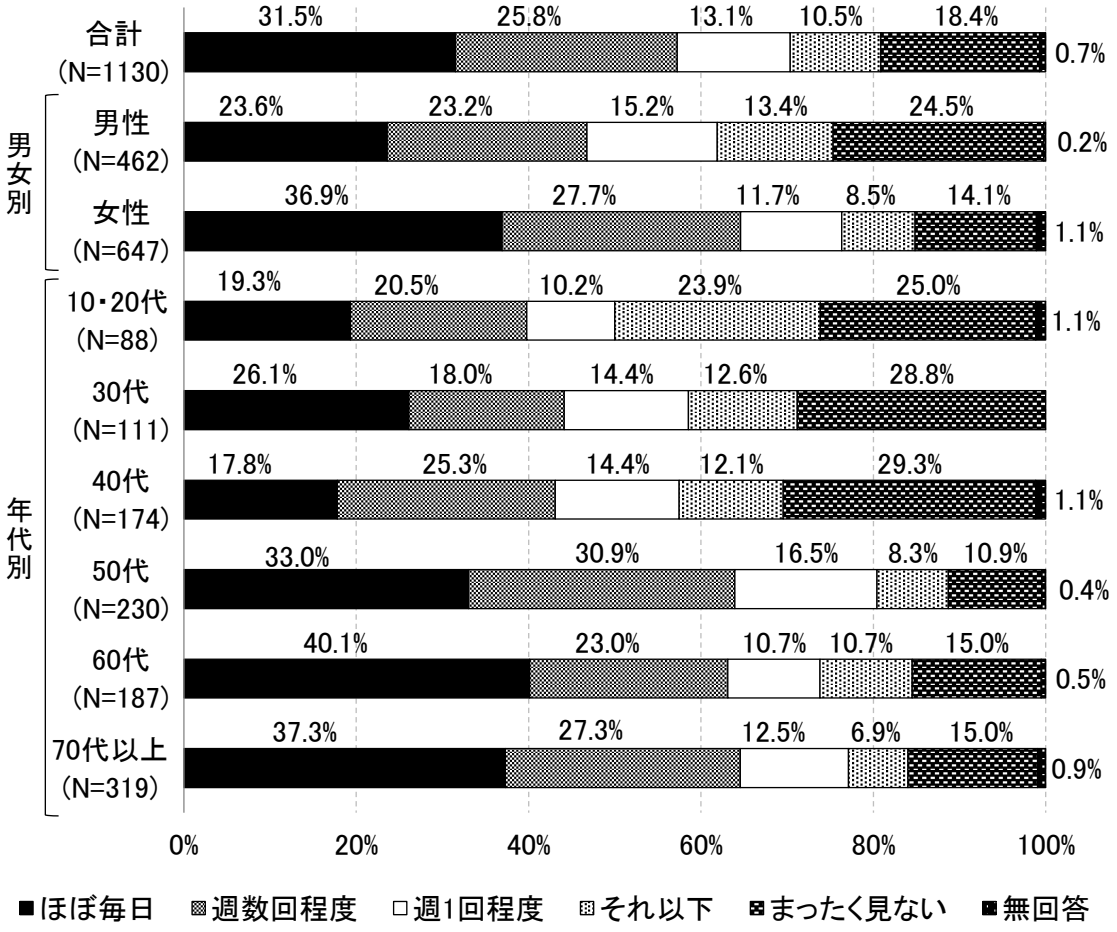


図 62　Q28 ドラマを見る頻度

Q29 の購入の際、インターネット情報を参考にするかに関して、男女別・年代別でみると、70 代以上を除いた、すべての層で「よくする」または「ときどきする」と回答した人が 6 割以上である。年代別でみると、「よくする」または「ときどきする」と回答した人の割合は 30 代が 92.8%と最も高く、反対に 70 代以上が 32.9%と最も低い（図 63）。

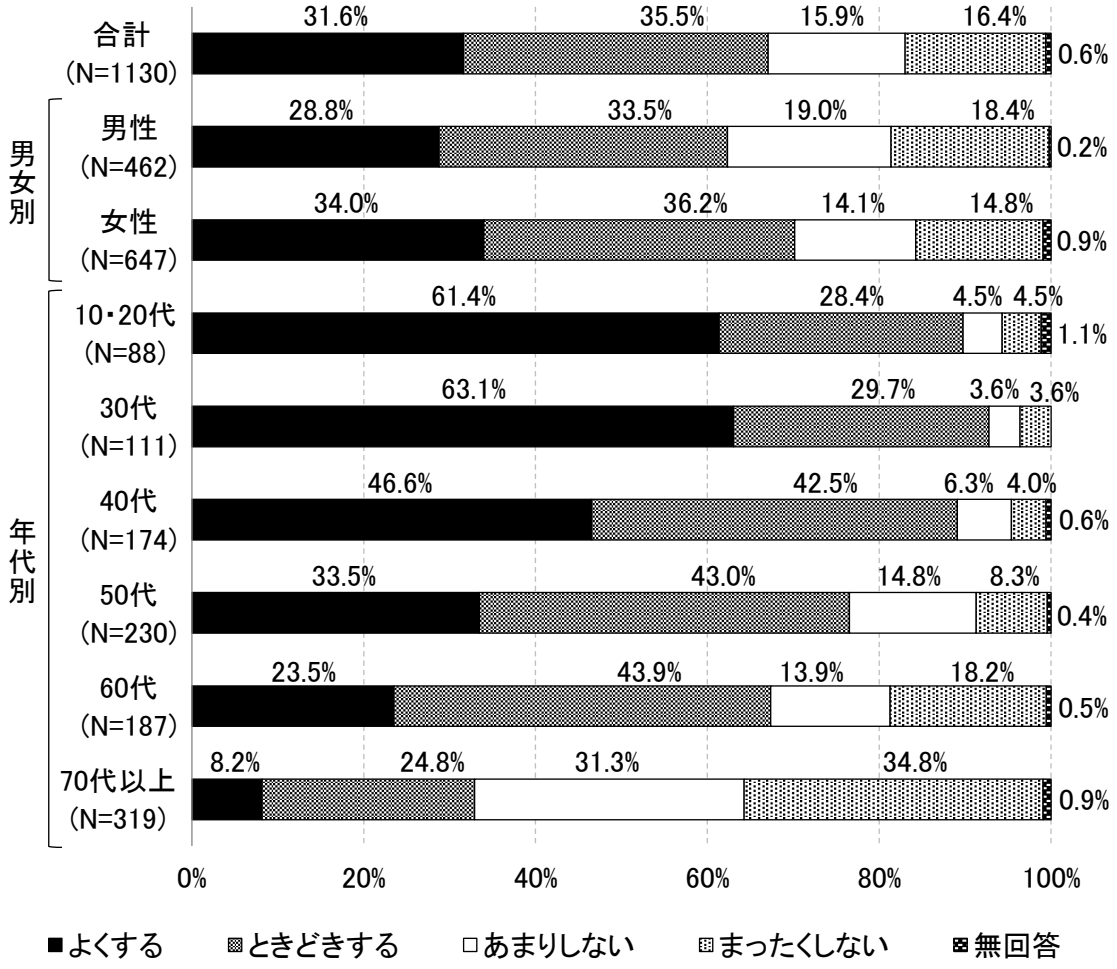


図 63　Q29 購入の際、インターネット情報を参考にするか

Q30 のどんなメディアでニュースを見聞きするかに関して、男女別・年代別でみると、男性、10・20 代～40 代を除いた層で「テレビ」と回答した人が 5 割以上である。また、年代別でみると、「インターネット」と回答した人の割合は 30 代が 76.6%と最も高い。反対に 70 代以上が 10.7%と最も低い（図 64）。

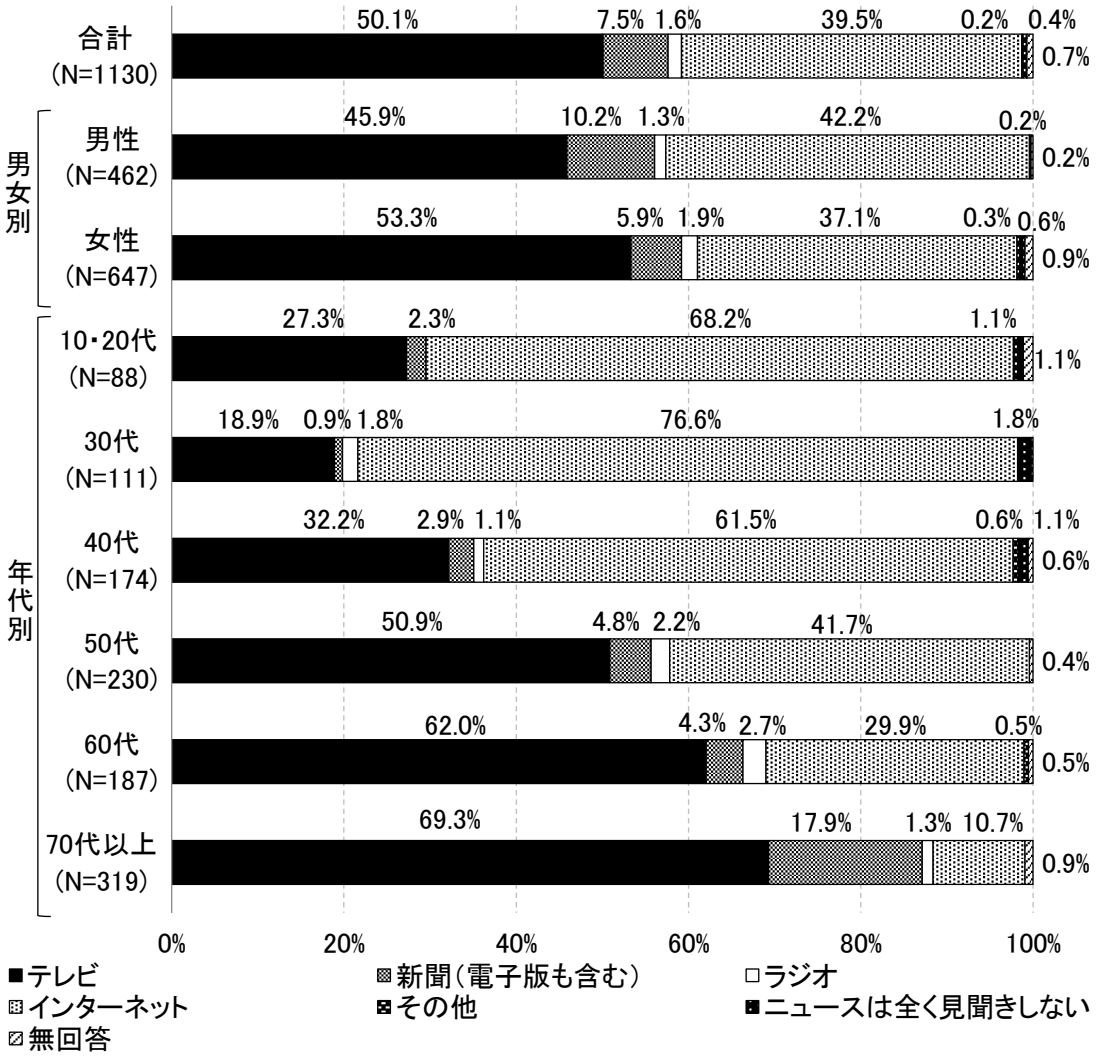


図 64　Q30 どんなメディアでニュースを見聞きするか

Q31 の年間の自殺者数の認知度に関して、男女別・年代別のすべての層で「知っている」と回答した人が 5 割以上である。年代別でみると、「知っている」と回答した人の割合は 40 代が 67.2%と最も高く、反対に 30 代が 57.7%と最も低い（図 65）。

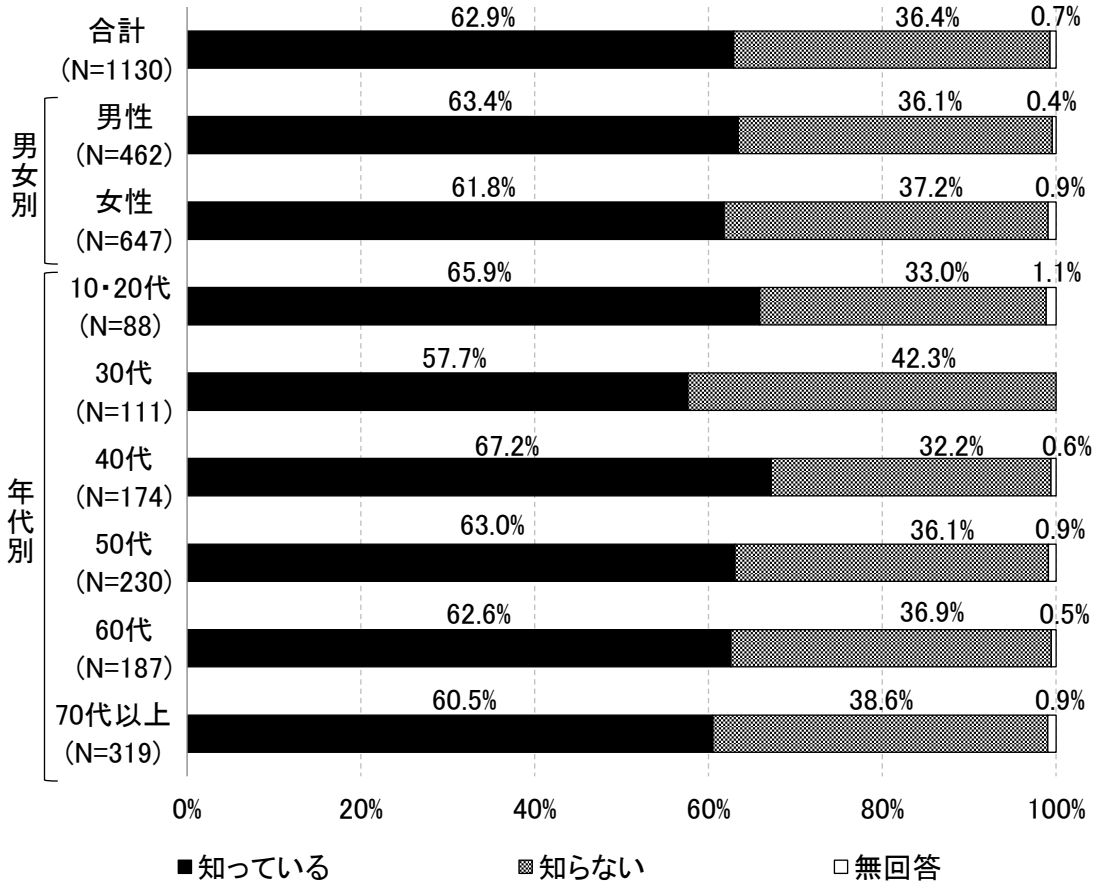


図 65　Q31 年間の自殺者数の認知度

Q32 の自殺に関する相談機関の認知度に関して、男女別・年代別のすべての層で 6 割以上が「知っている」と回答している。年代別でみると、「知っている」と回答した人の割合は 10 代・20 代が 85.2%と最も高く、反対に 70 代以上が 63.6%と最も低い（図 66）。

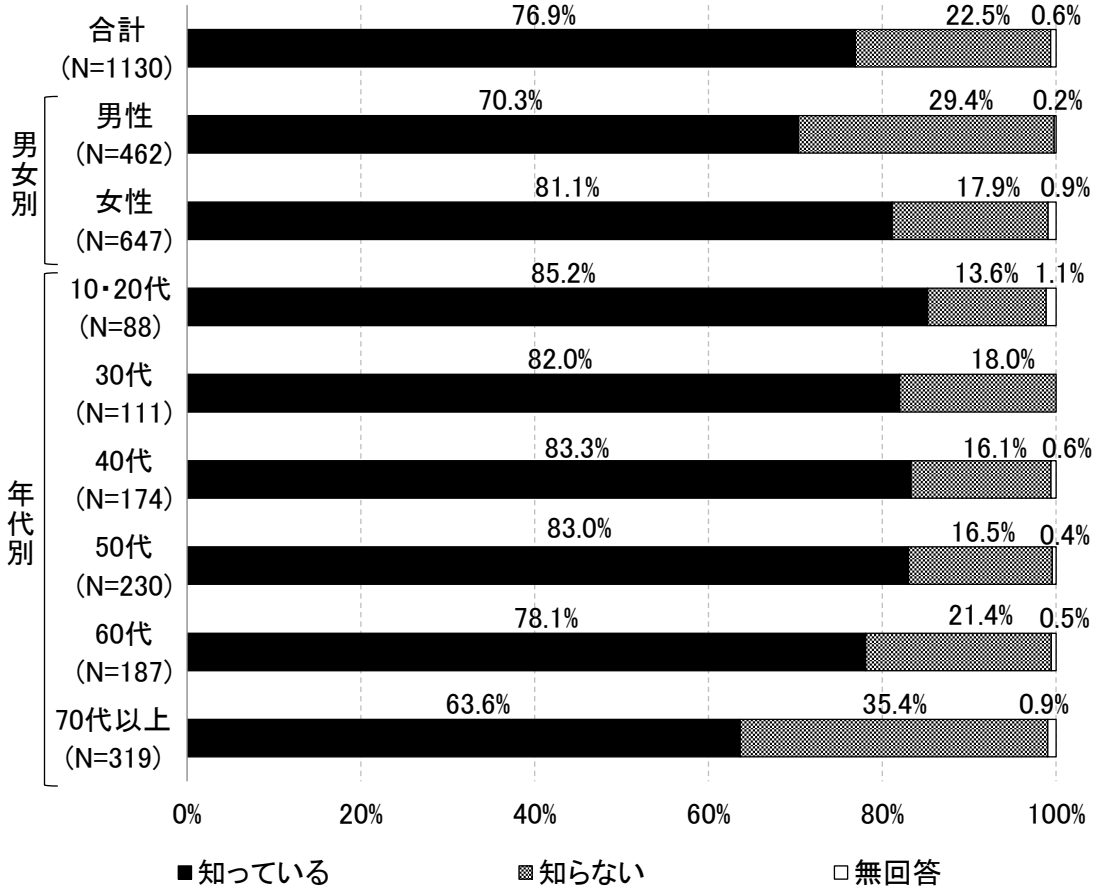


図 66　Q32 自殺に関する相談機関の認知度

Q33 の本気で自殺を考えたことがあるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「ない」と回答した人が 7 割以上である。年代別でみると、「ない」と回答した人の割合は 70 代以上が 89.7%と最も高く、反対に 30 代が 75.7%と最も低い（図 67）。

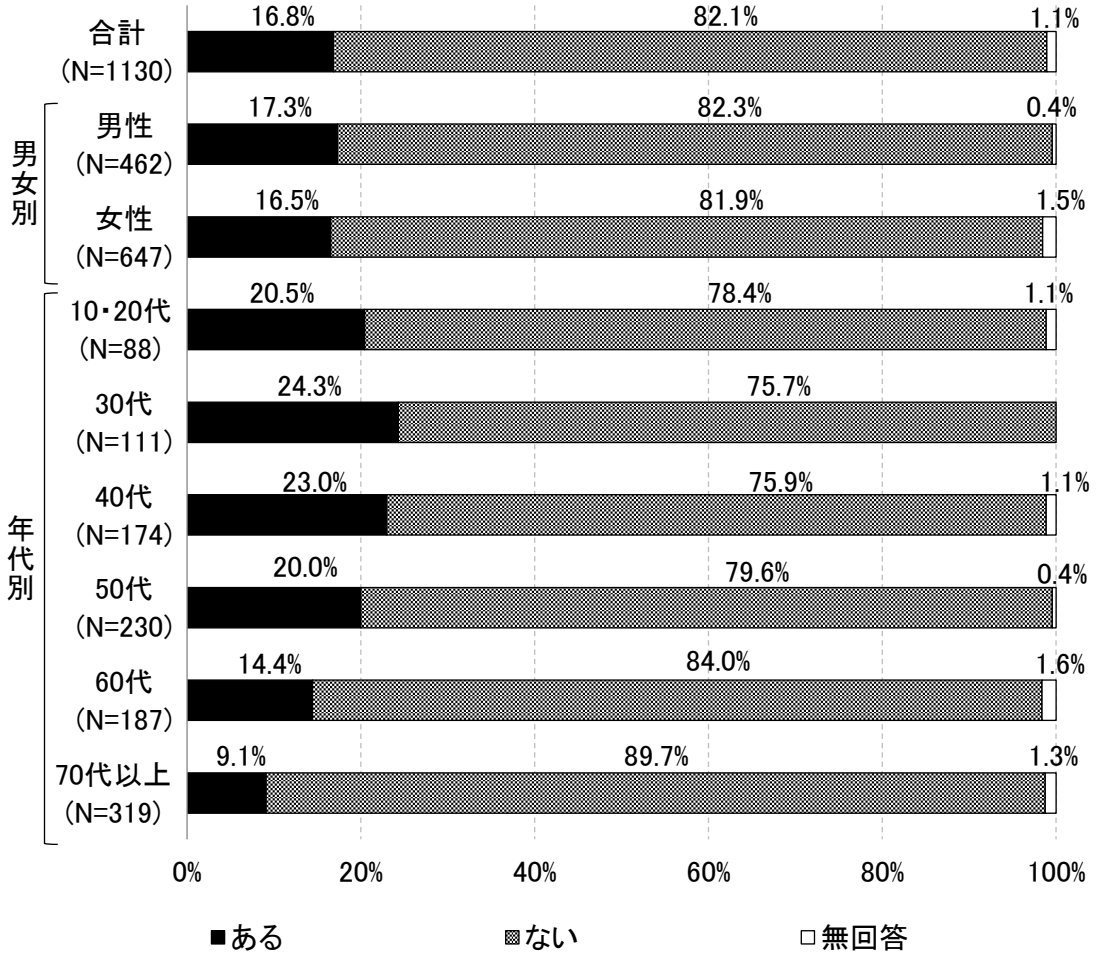


図 67　Q33 本気で自殺を考えたことがあるか

Q34 自殺願望を聞いたときの対応に関して、「耳を傾けて聞く」が 60.0%で最も高く、「共感を示す」が 45.6%と続く（図 68）。

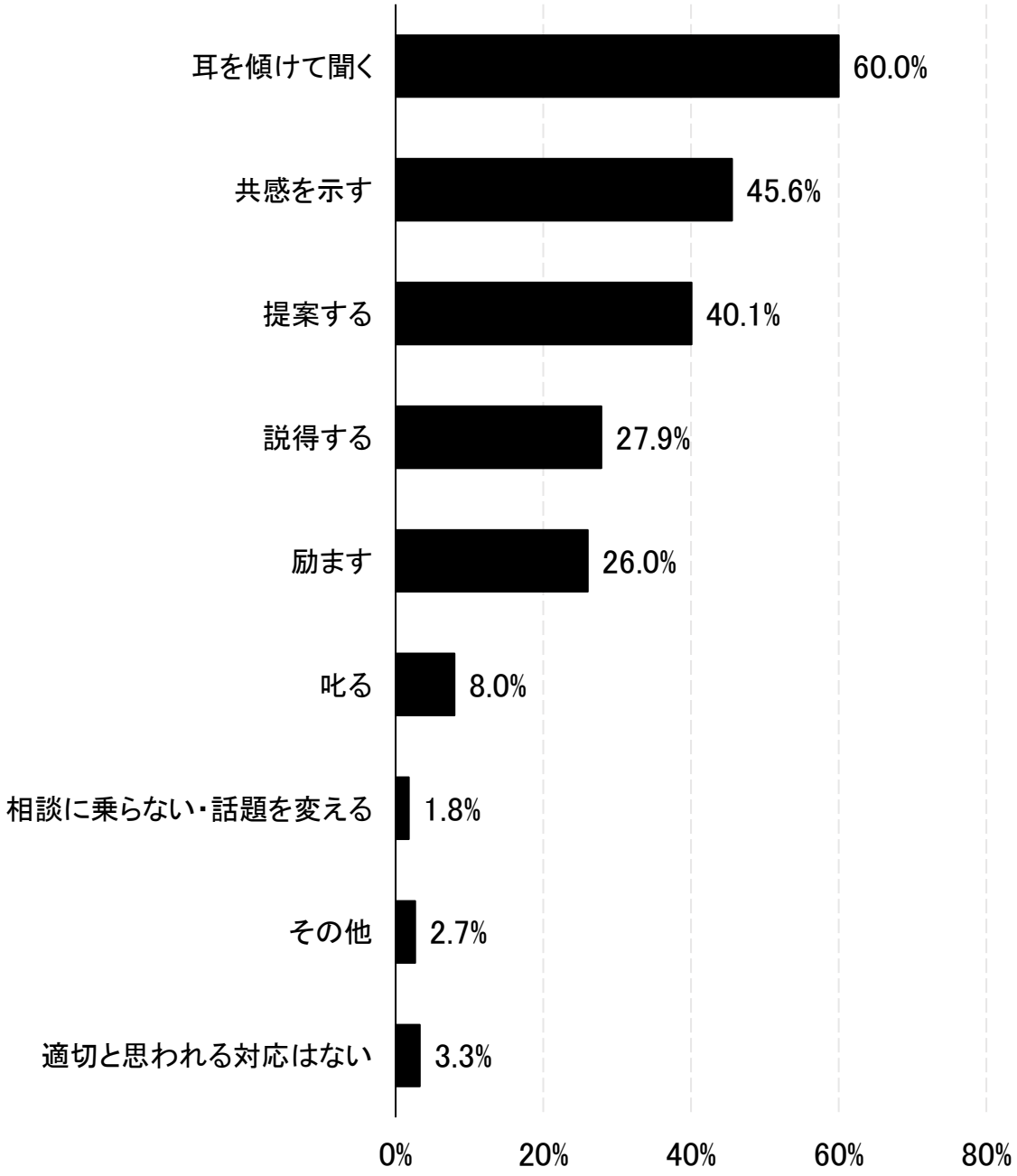


図 68　Q34 自殺願望を聞いたときの対応（複数回答・全体　N=1130）

Q34 の自殺願望を聞いたときの対応に関して、男女別でみると、「共感を示す」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 18.5 ポイント高い（図 69）。

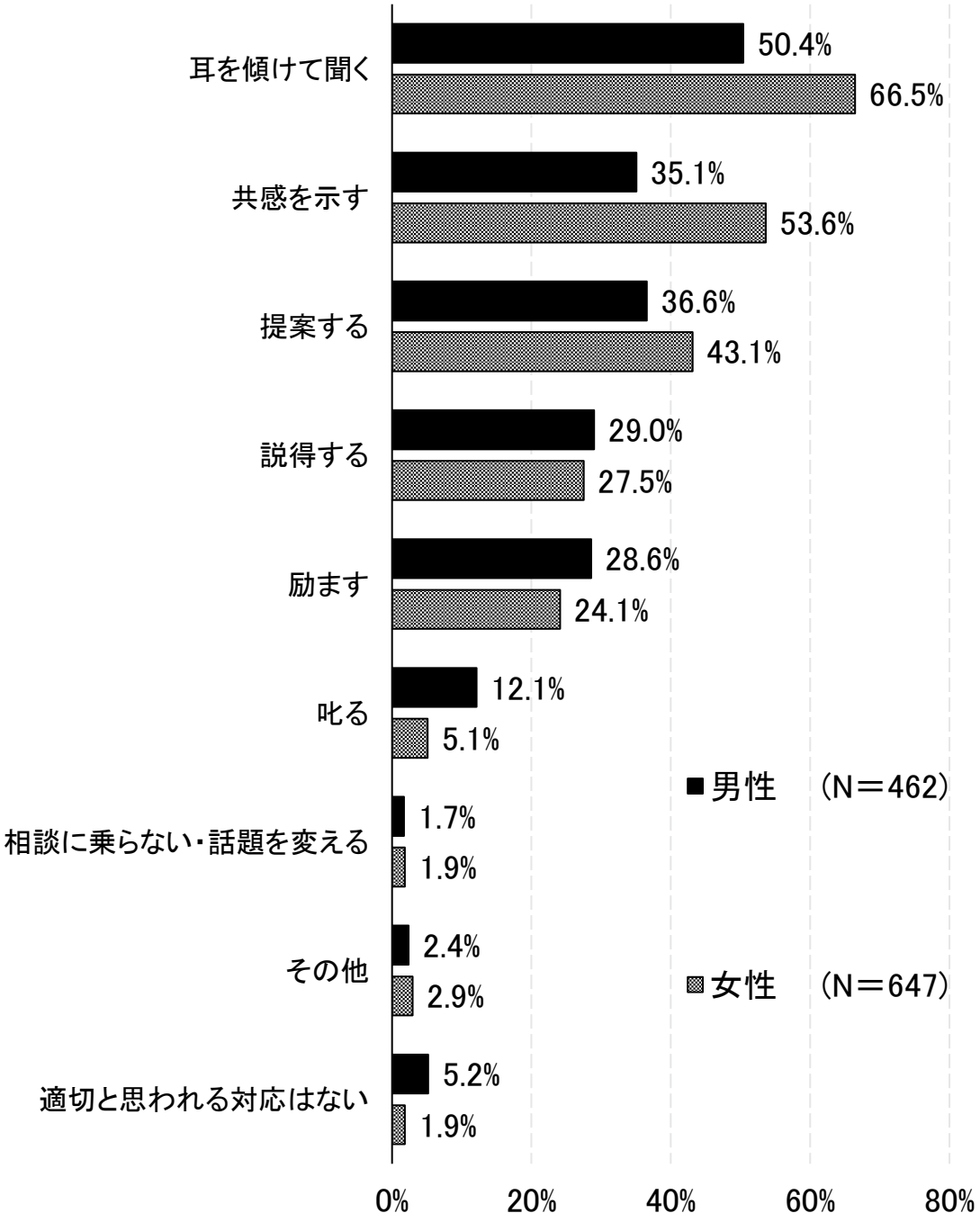


図 69　Q34 自殺願望を聞いたときの対応（複数回答・男女別）

Q34 の自殺願望を聞いたときの対応に関して、年代別でみると、「耳を傾けて聞く」は年代で差があり、40 代が 73.6%と最も高く、反対に 70 代以上は 43.6%と最も低い（図 70）。

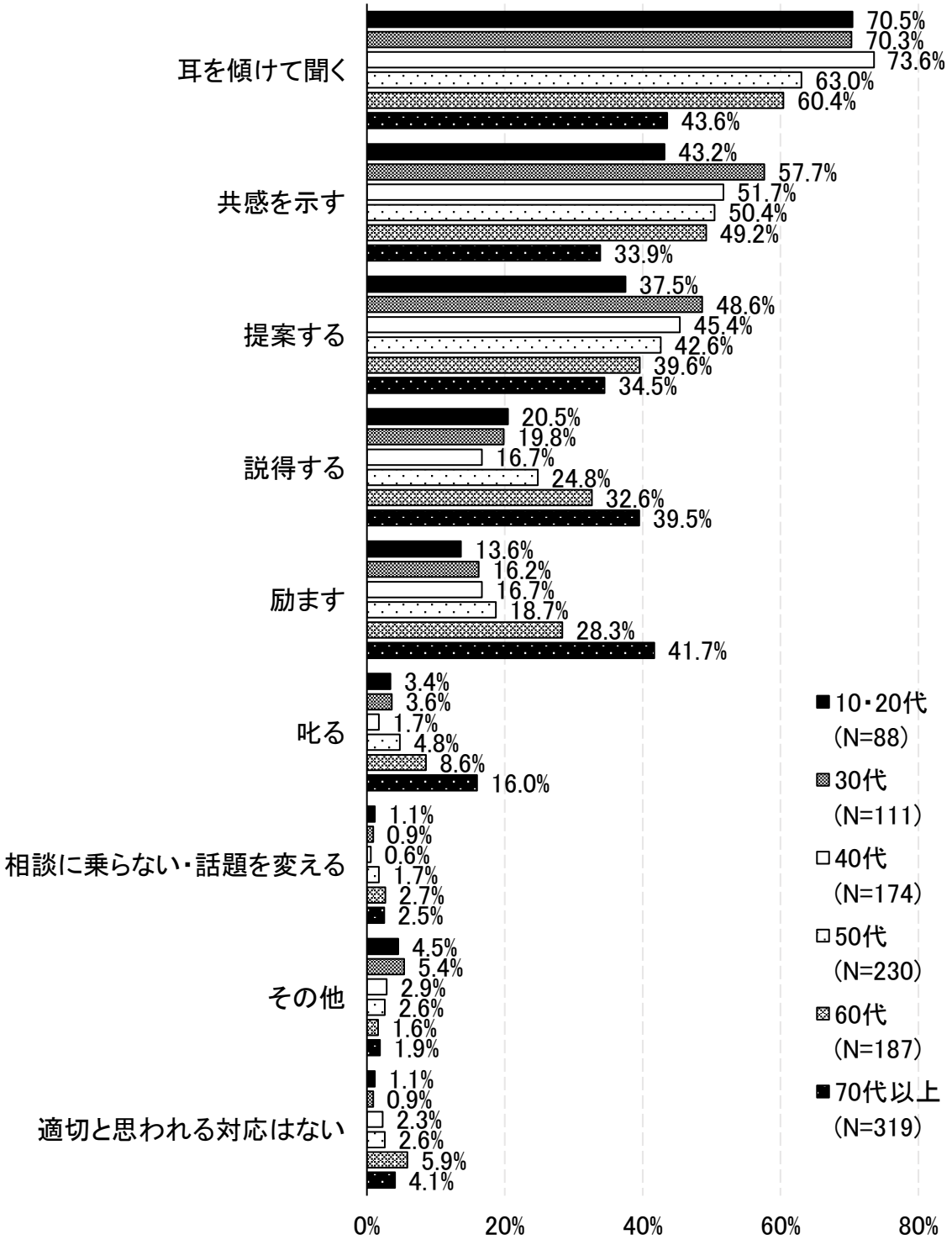


図 70　Q34 自殺願望を聞いたときの対応（複数回答・年代別）

Q35 の今後求められる自殺対策に関して、「様々な悩みに対応した相談窓口の設置」が43.3%で最も高く、「子どもの自殺予防」が 40.6%と続く（図 71）。

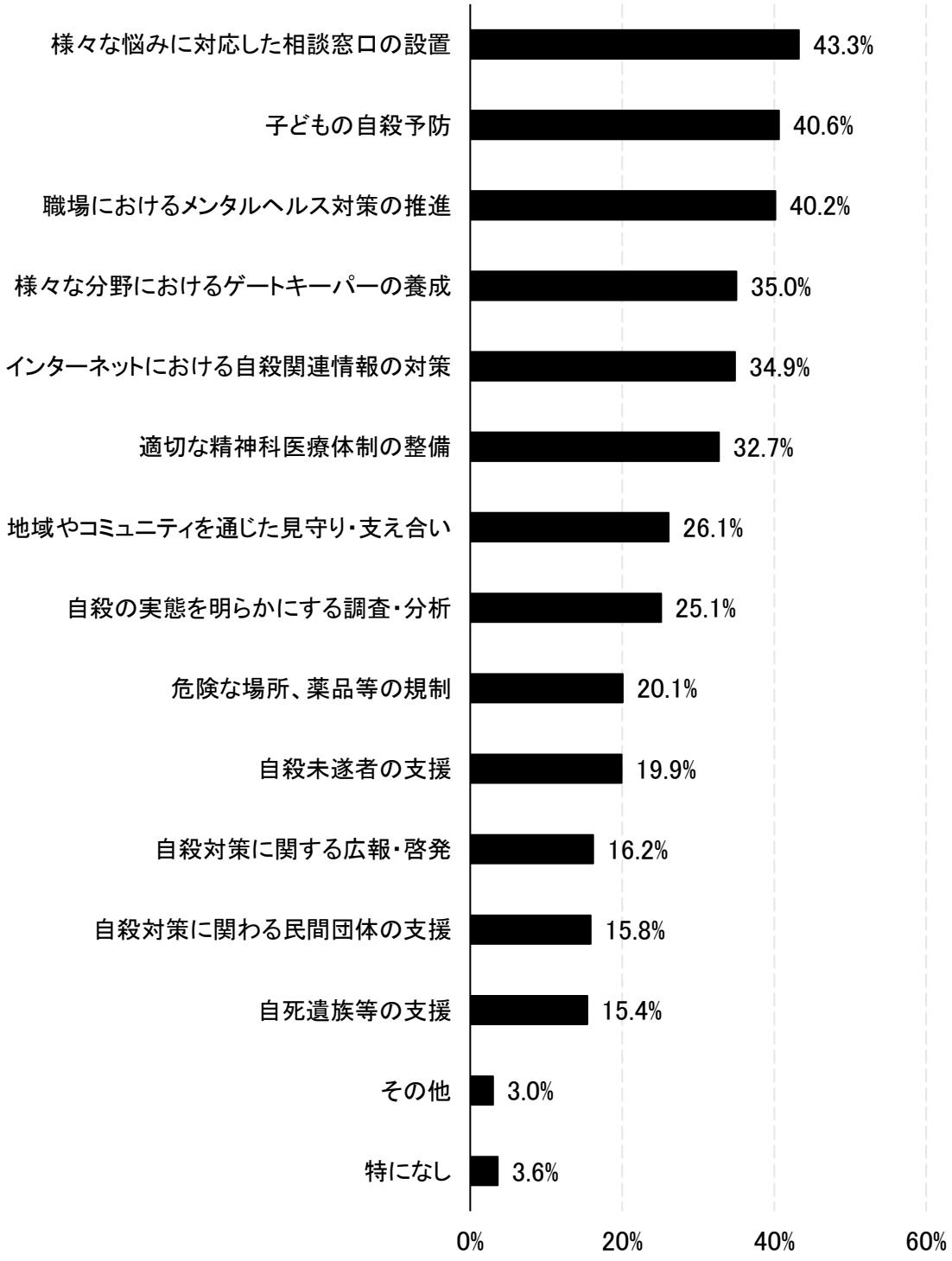


図 71　Q35 今後求められる自殺対策（複数回答・全体　N=1130）

Q35 の今後求められる自殺対策に関して、男女別でみると、「インターネットにおける自殺関連情報の対策」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 15.6 ポイント高い（図 72）。

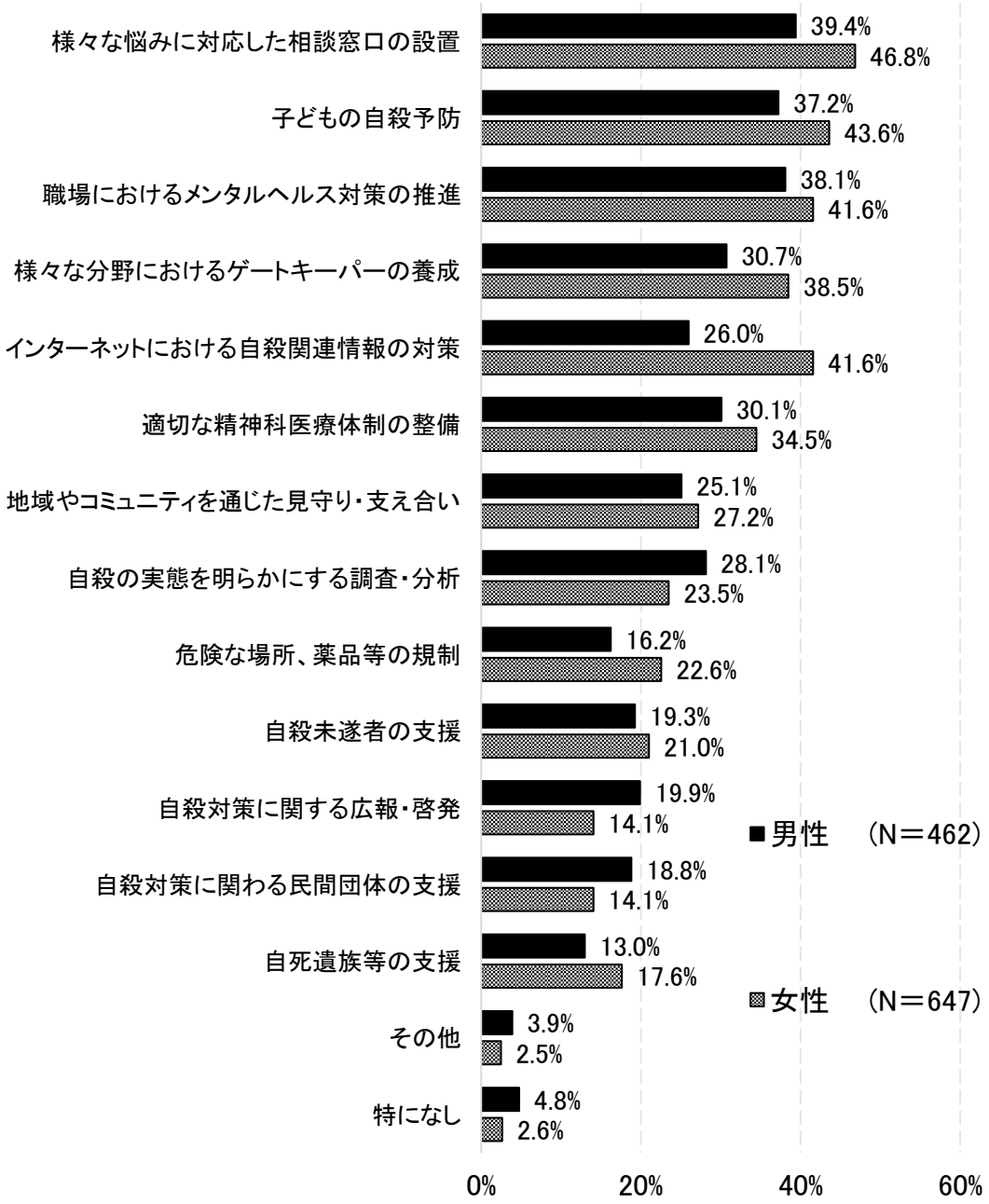


図 72　Q35 今後求められる自殺対策（複数回答・男女別）

Q35 の今後求められる自殺対策に関して、「子どもの自殺予防」は年代で差があり、30 代が 57.7%と最も高く、70 代以上は 29.5%と最も低い（図 73）。

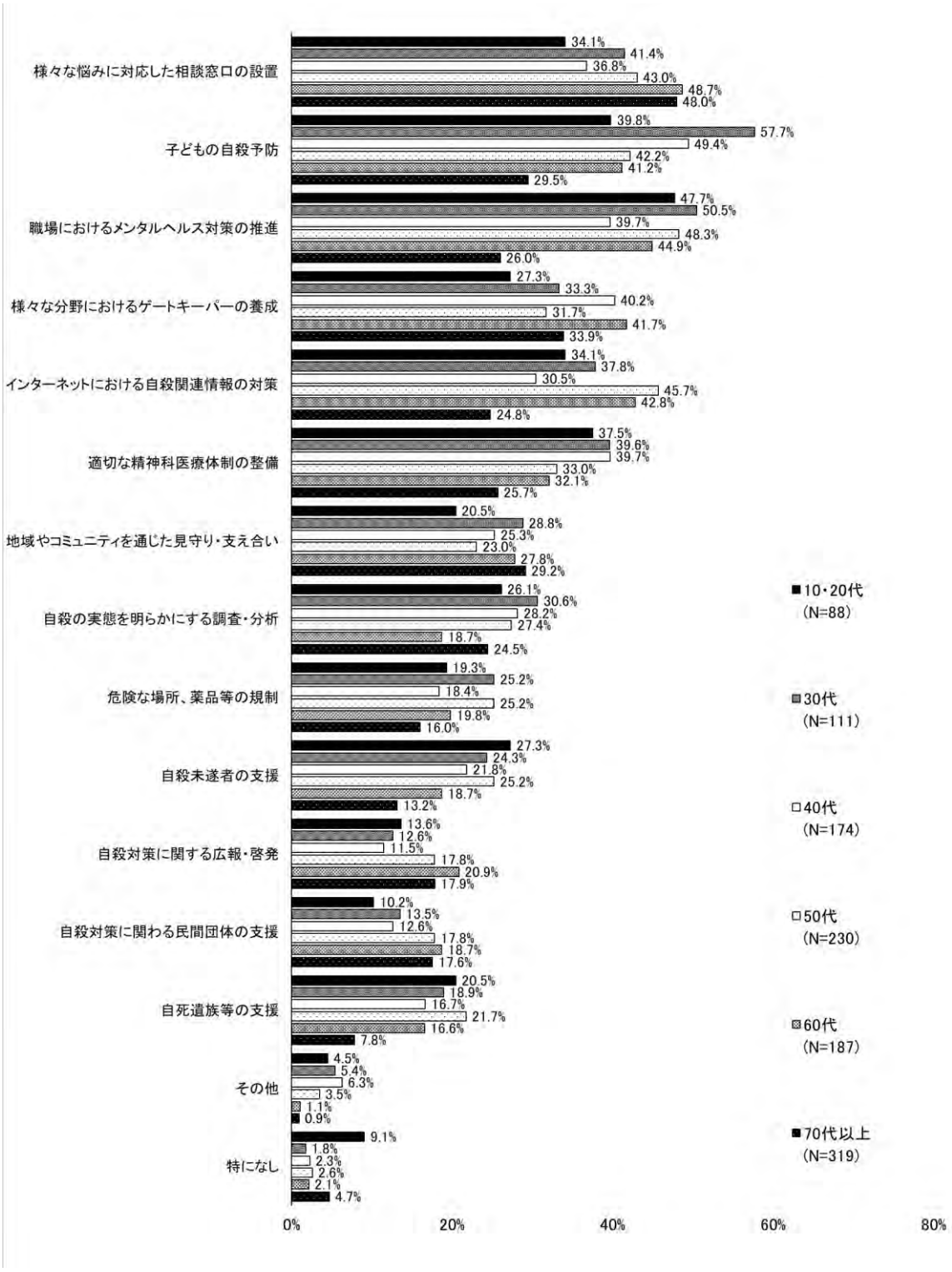


図 73　Q35 今後求められる自殺対策（複数回答・年代別）

Q36 の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、「身近な人に悩みを聞いてもらう」が 64.1%で最も高く、「心の健康の専門家に相談する」が 55.4%と続く（図 74）。

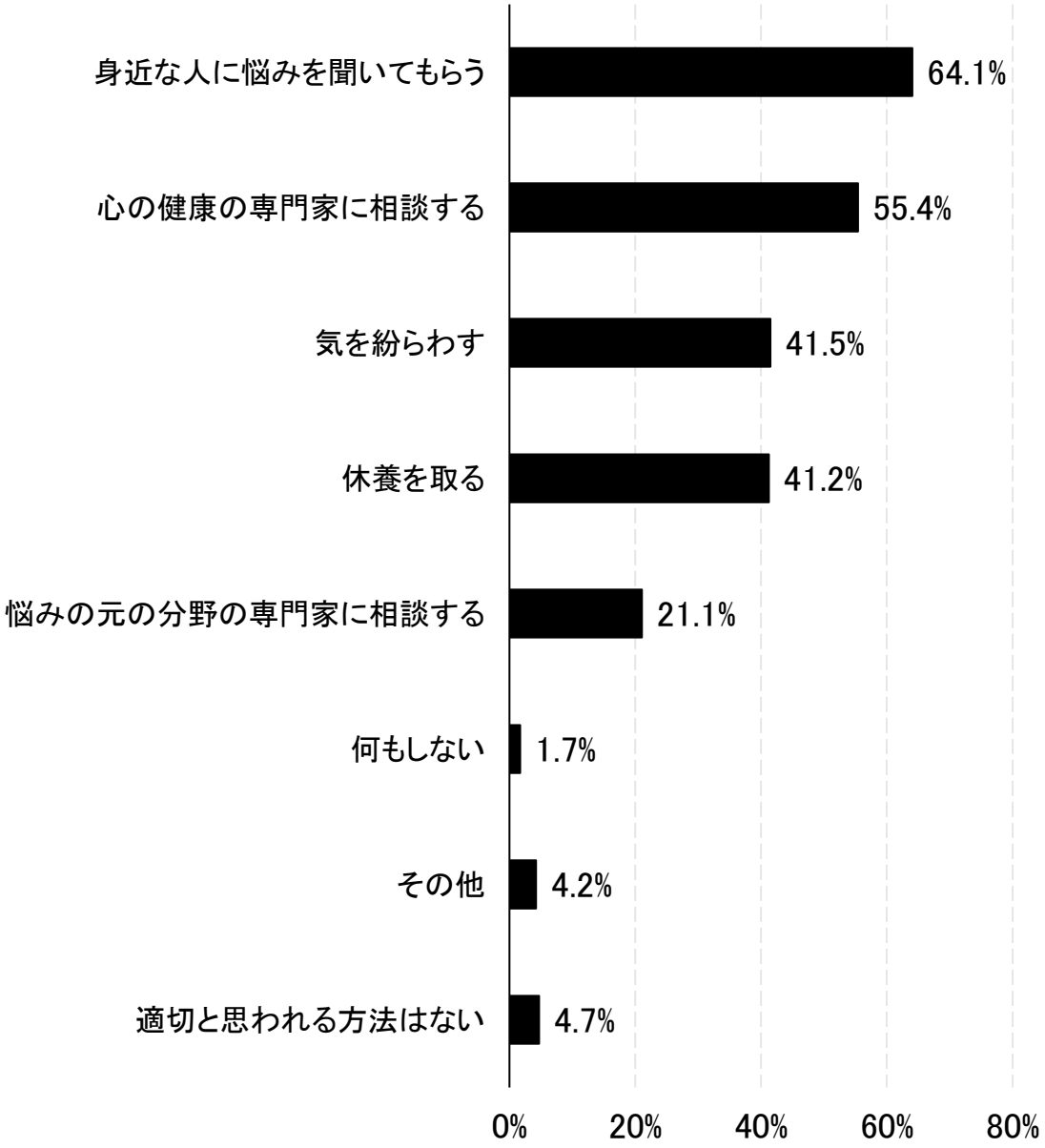


図 74　Q36 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・全体　N=1130）

Q36 の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、男女別でみると、「心の健康の専門家に相談する」は男女で差があり、男性よりも女性の方が 9.5 ポイント高い（図 75）。

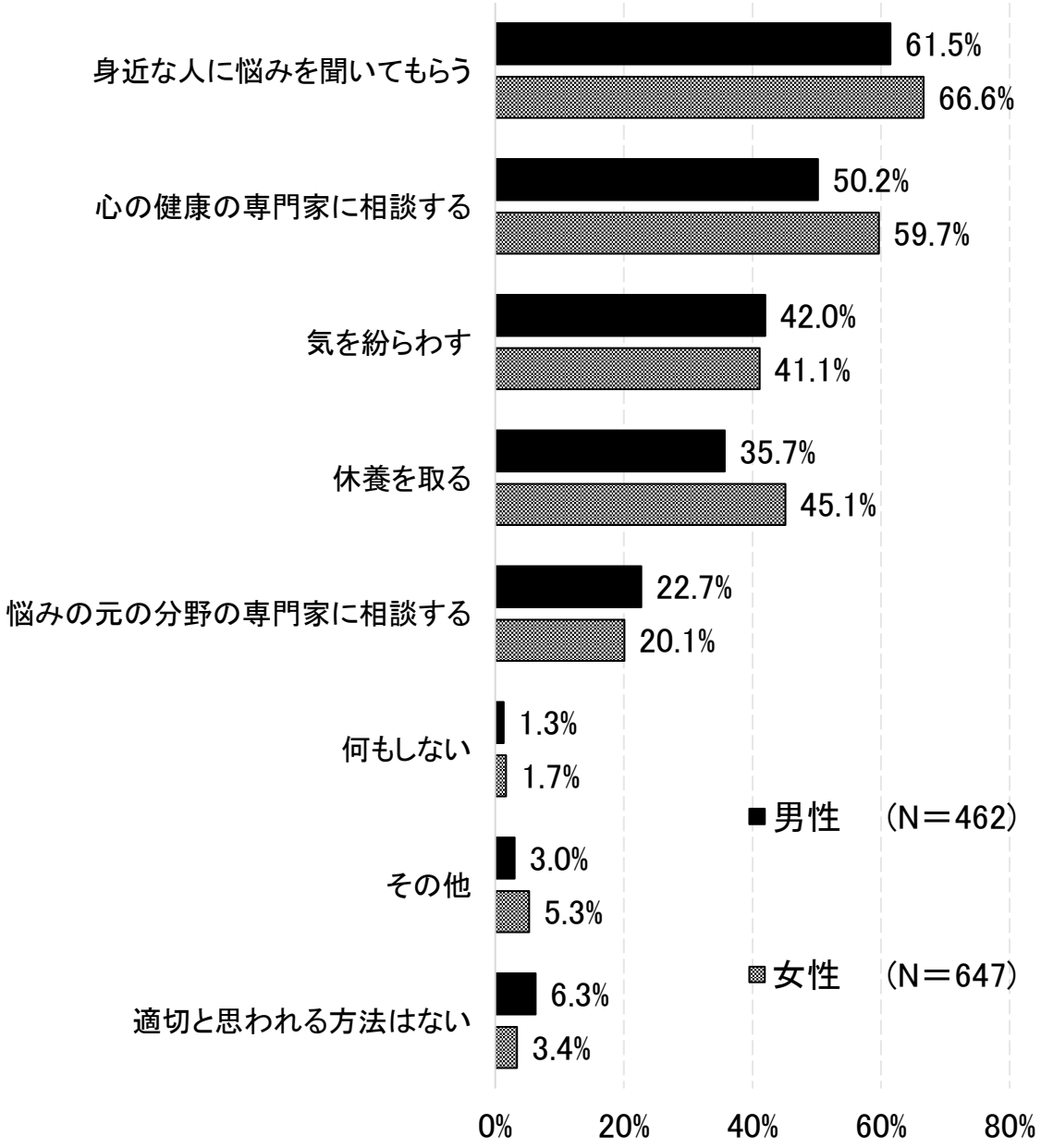


図 75　Q36 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・男女別）

Q36 の自殺したい気持ちを乗り越える方法に関して、年代別でみると、「休養を取る」は年代で差があり、30 代が 62.2%と最も高く、反対に 70 代以上は 23.8%と最も低い(図 76)。

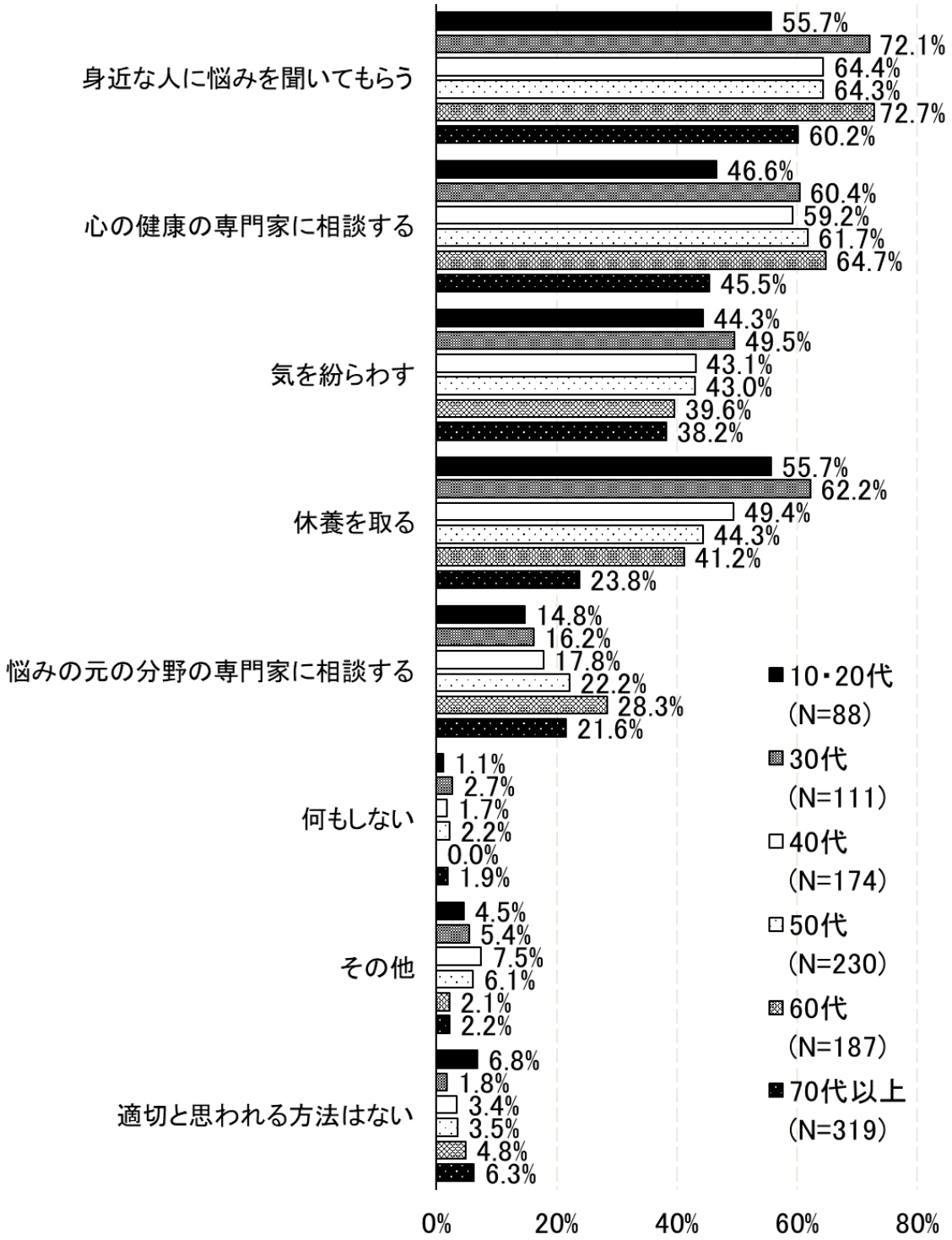


図 76　Q36 自殺したい気持ちを乗り越える方法（複数回答・年代別）

Q37①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、「駅前の整備、駐車・駐輪対策」が 26.3%と最も高く、「公園の整備や自然・緑の保全」が 26.0%と続く（図 77）。

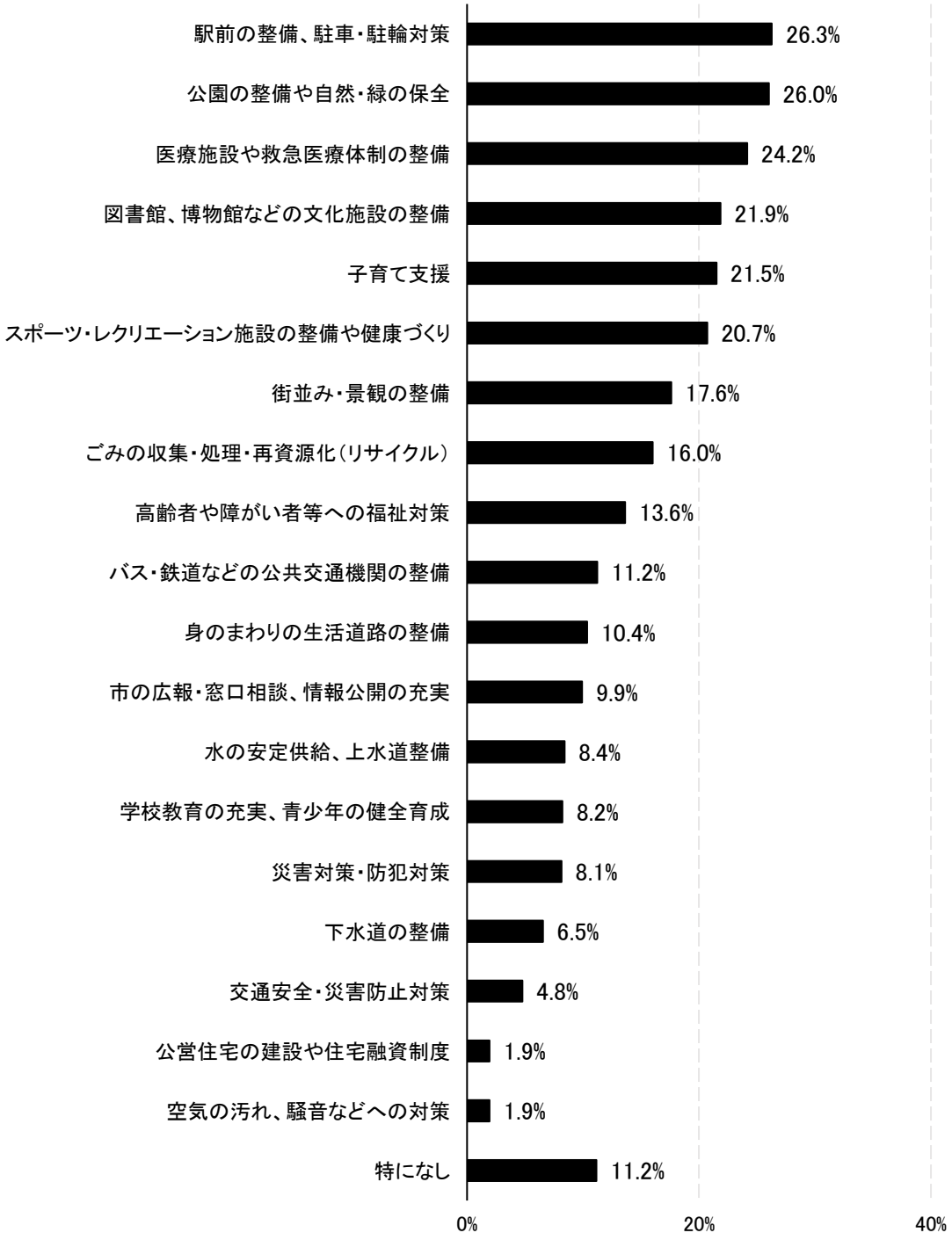


図 77　Q37① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
（複数回答・全体　N=1130）

Q37①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、男女別でみると、「子育て支援」では、男性よりも女性の方が 13.0 ポイント高い（図 78）。

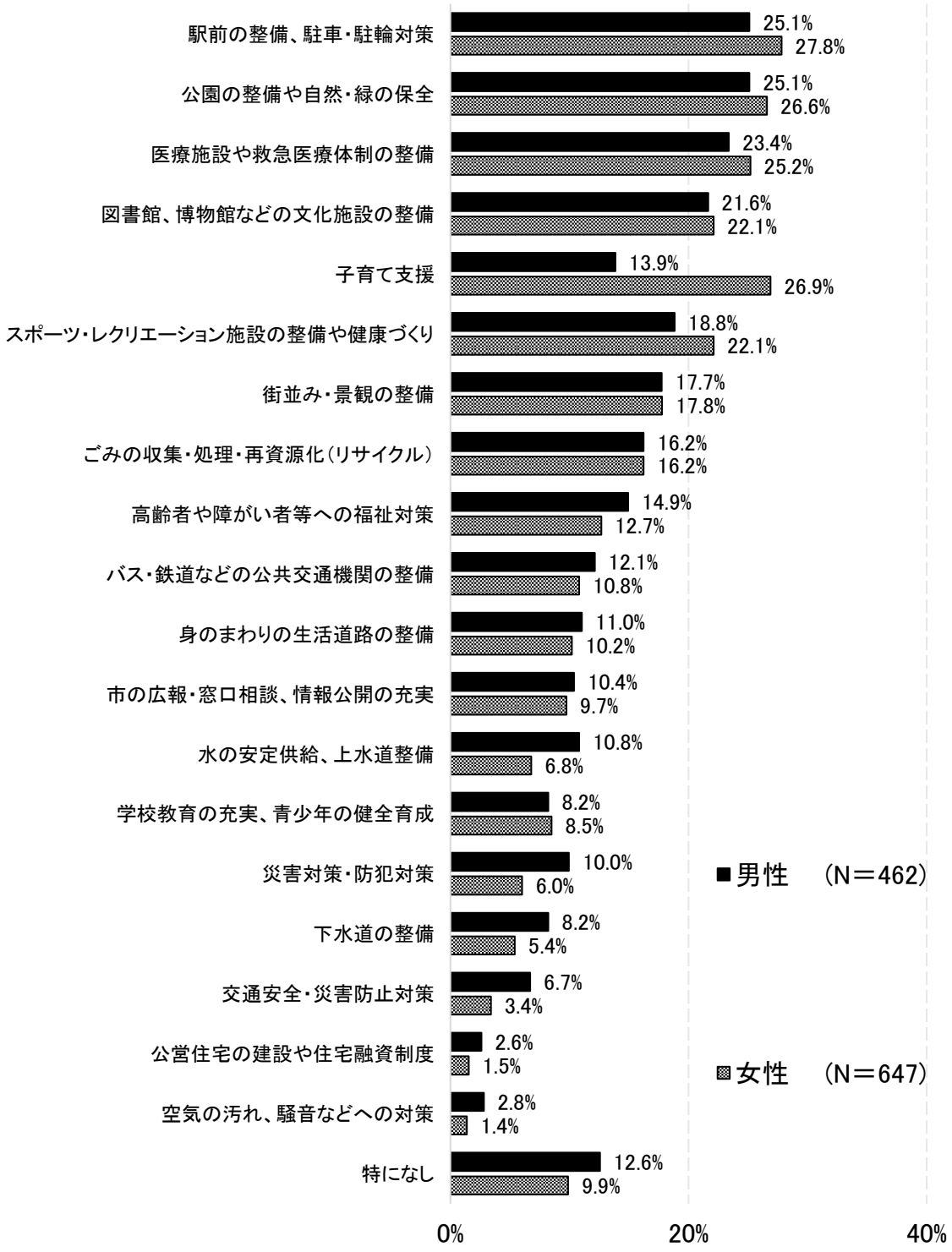


図 78　Q37① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・男女別）

Q37①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、年代別でみると、「ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）」は、70 代以上が 27.0%と最も高く、30 代が 6.3%と最も低い（**表 5, 図 79**）。

表 5　Q37① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・年代別）

(%)

	駅前の整備、駐車・駐輪対策	公園の整備や自然・緑の保全	医療施設や救急医療体制の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	街並み・景観の整備
10・20代 (N=88)	23.9	26.1	20.5	18.2	17.0	18.2	21.6
30代 (N=111)	21.6	27.9	19.8	25.2	25.2	20.7	18.9
40代 (N=174)	25.9	36.2	24.7	24.7	28.7	22.4	22.4
50代 (N=230)	25.2	27.8	29.1	20.0	23.5	19.1	20.4
60代 (N=187)	26.7	18.2	21.4	23.0	19.8	20.9	15.0
70代以上 (N=319)	30.7	23.5	25.4	21.6	16.6	22.3	13.5

	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	高齢者や障がい者等への福祉対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	身のまわりの生活道路の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	水の安定供給、上水道整備	学校教育の充実、青少年の健全育成
10・20代 (N=88)	11.4	18.2	15.9	15.9	9.1	8.0	6.8
30代 (N=111)	6.3	9.0	11.7	10.8	5.4	3.6	14.4
40代 (N=174)	9.8	12.6	10.9	8.6	8.0	6.9	10.9
50代 (N=230)	14.3	9.1	9.6	10.0	8.3	6.5	9.1
60代 (N=187)	14.4	11.2	7.5	8.6	9.6	9.1	3.7
70代以上 (N=319)	27.0	19.7	13.5	11.3	14.1	11.9	7.5

	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	特になし
10・20代 (N=88)	10.2	5.7	9.1	2.3	2.3	12.5
30代 (N=111)	3.6	2.7	4.5	2.7	0.9	15.3
40代 (N=174)	8.6	4.0	5.2	1.7	1.7	10.3
50代 (N=230)	8.3	3.5	3.0	1.3	1.7	13.0
60代 (N=187)	5.3	6.4	4.3	2.1	0.0	11.2
70代以上 (N=319)	9.7	11.9	4.7	2.2	3.8	7.5

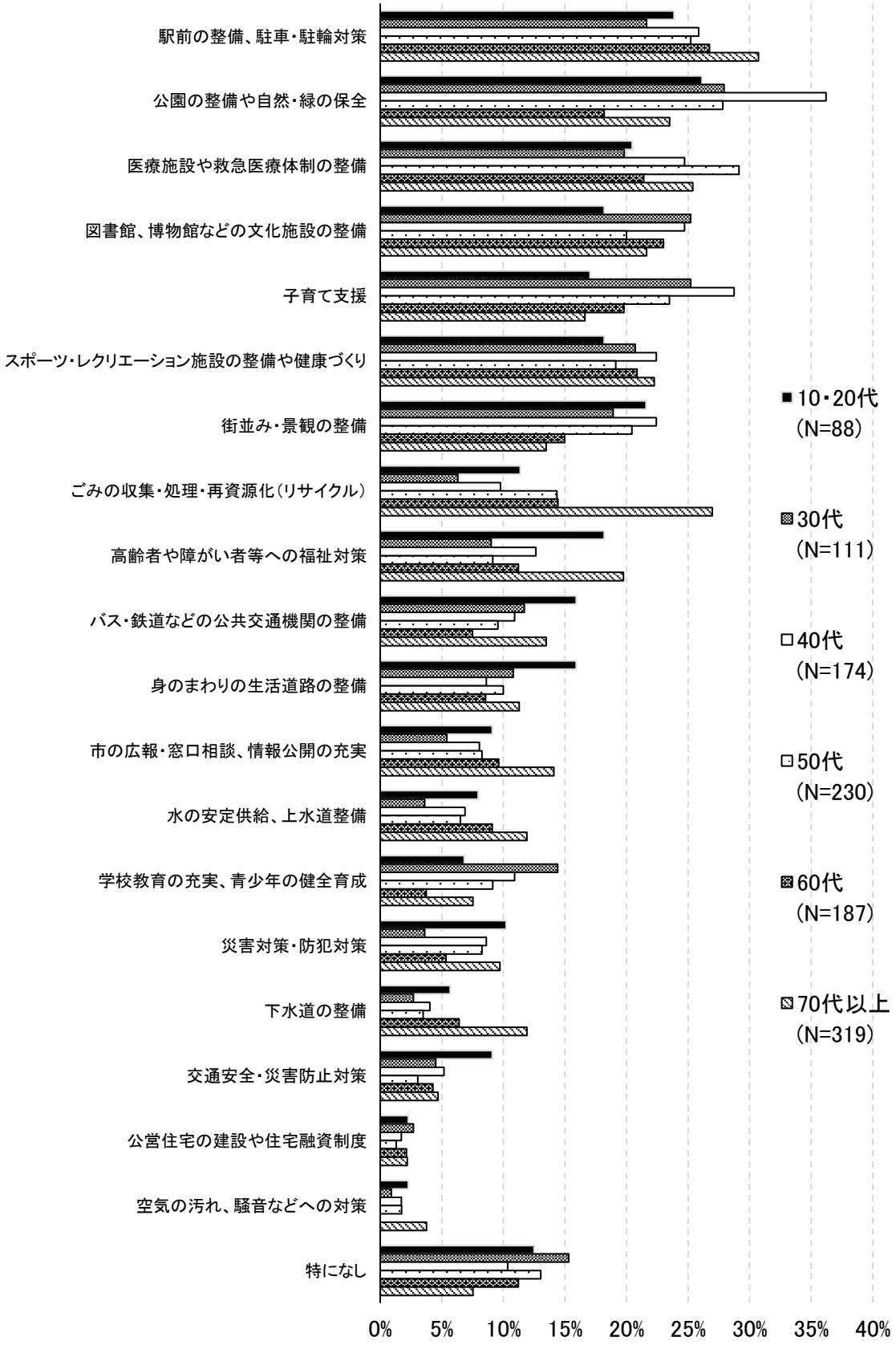


図 79　Q37① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・年代別）

Q37①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、居住地域別でみると、「子育て支援」は全地域で 20%を超え、三箇牧地域が 26.1%と最も高い（**表 6, 図 80**）。

表 6　Q37① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・居住地域別）

(%)

	駅前の整備、駐車・駐輪対策	公園の整備や自然・緑の保全	医療施設や救急医療体制の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	街並み・景観の整備
高槻北地区 (N=280)	36.1	27.5	25.7	28.6	22.1	22.9	18.2
高槻南地区 (N=294)	31.3	29.3	25.9	25.2	20.1	20.7	17.7
五領地区 (N=43)	18.6	27.9	25.6	18.6	20.9	9.3	14.0
高槻西地区 (N=181)	26.0	32.0	26.5	20.4	20.4	22.7	22.7
如是・富田地区 (N=241)	15.4	19.1	19.1	14.1	23.2	21.6	15.4
三箇牧地区 (N=23)	17.4	17.4	30.4	21.7	26.1	21.7	4.3

	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	高齢者や障がい者等への福祉対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	身のまわりの生活道路の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	水の安定供給、上水道整備	学校教育の充実、青少年の健全育成
高槻北地区 (N=280)	13.9	9.6	13.6	11.4	6.4	5.0	7.9
高槻南地区 (N=294)	15.6	14.6	15.0	11.6	11.9	7.1	7.5
五領地区 (N=43)	25.6	11.6	2.3	14.0	18.6	7.0	7.0
高槻西地区 (N=181)	17.1	19.9	10.5	11.0	9.4	11.0	8.3
如是・富田地区 (N=241)	17.4	14.5	7.1	7.5	11.6	11.6	10.8
三箇牧地区 (N=23)	21.7	21.7	13.0	4.3	8.7	17.4	13.0

	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	特になし
高槻北地区 (N=280)	6.1	6.1	2.9	1.1	2.1	12.1
高槻南地区 (N=294)	8.5	6.5	4.1	2.7	2.0	6.8
五領地区 (N=43)	4.7	7.0	0.0	0.0	2.3	14.0
高槻西地区 (N=181)	11.6	7.2	8.3	2.2	2.2	9.9
如是・富田地区 (N=241)	7.9	5.8	5.4	2.9	1.7	10.8
三箇牧地区 (N=23)	13.0	13.0	8.7	0.0	4.3	26.1

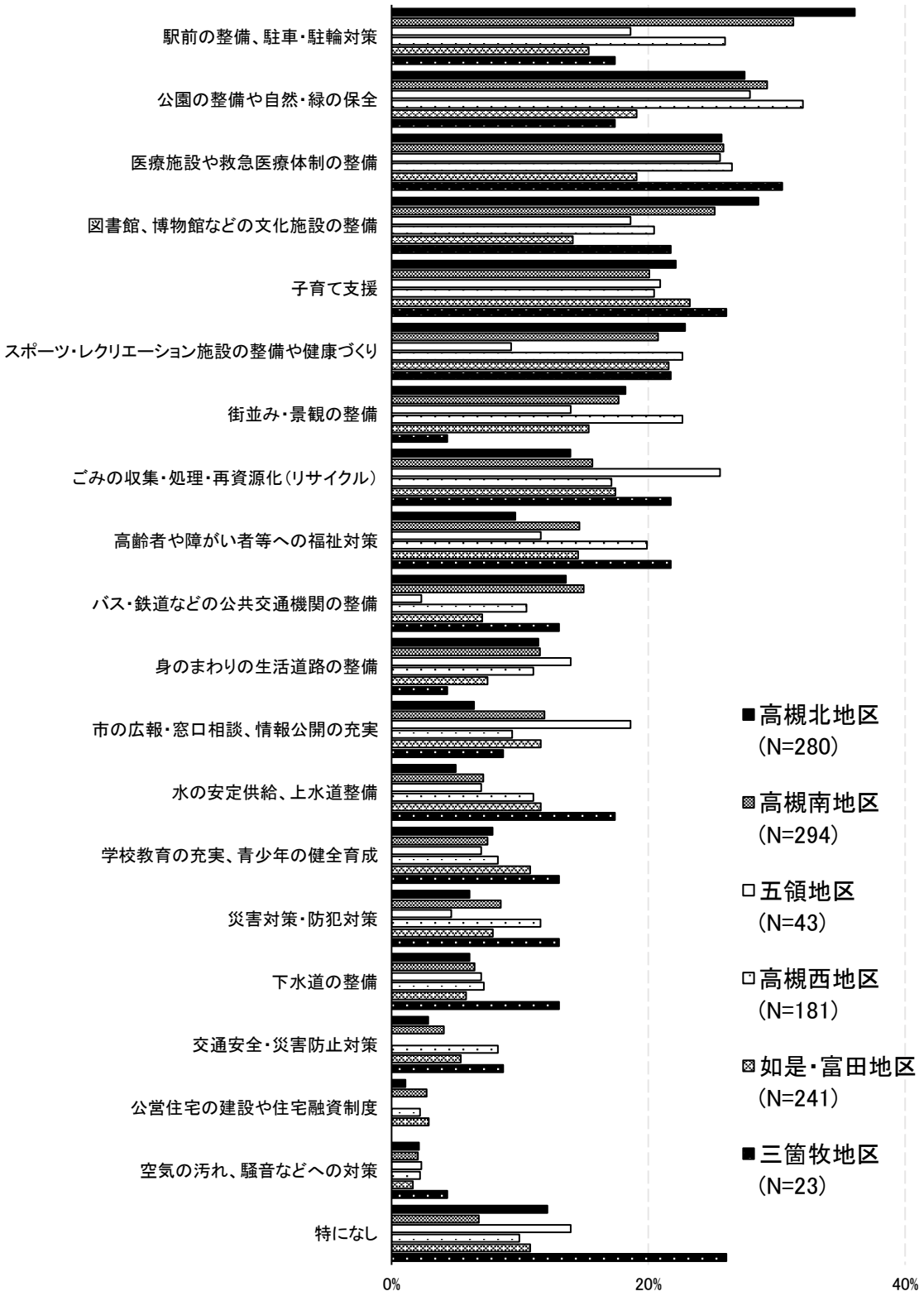


図 80　Q37①　市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
（複数回答・居住地域別）

Q37①の市の仕事のうち最近良くなってきたと思うものに関して、居住年数別でみると、「公園の整備や自然・緑の保全」は1年未満を除き20%以上であり、5年以上10年未満が33.9%と最も高い（**表 7, 図 81**）。

表 7　Q37① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの（複数回答・居住年数別）

(%)

	駅前の整備、駐車・駐輪対策	公園の整備や自然・緑の保全	医療施設や救急医療体制の整備	図書館、博物館などの文化施設の整備	子育て支援	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	街並み・景観の整備
1年未満 (N=24)	16.7	16.7	8.3	20.8	8.3	12.5	12.5
1年以上3年未満 (N=41)	9.8	26.8	14.6	14.6	12.2	17.1	14.6
3年以上5年未満 (N=40)	15.0	27.5	10.0	25.0	25.0	27.5	20.0
5年以上10年未満 (N=62)	22.6	33.9	22.6	16.1	25.8	17.7	14.5
10年以上20年未満 (N=156)	23.1	29.5	26.3	22.4	28.2	17.9	17.9
20年以上30年未満 (N=182)	28.6	28.0	24.2	25.3	21.4	19.2	25.3
30年以上40年未満 (N=156)	28.2	23.1	21.2	23.1	23.1	22.4	20.5
40年以上50年未満 (N=207)	30.4	24.2	28.0	20.3	18.8	22.2	14.5
50年以上 (N=241)	29.5	26.1	27.8	22.4	19.5	23.7	14.1

	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）	高齢者や障がい者等への福祉対策	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	身のまわりの生活道路の整備	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	水の安定供給、上水道整備	学校教育の充実、青少年の健全育成
1年未満 (N=24)	8.3	8.3	4.2	4.2	8.3	8.3	8.3
1年以上3年未満 (N=41)	9.8	7.3	4.9	0.0	2.4	4.9	12.2
3年以上5年未満 (N=40)	0.0	7.5	7.5	7.5	7.5	2.5	10.0
5年以上10年未満 (N=62)	14.5	8.1	9.7	11.3	6.5	3.2	8.1
10年以上20年未満 (N=156)	10.9	12.8	12.8	14.1	7.1	6.4	12.8
20年以上30年未満 (N=182)	7.7	14.3	9.3	13.2	7.1	4.9	6.6
30年以上40年未満 (N=156)	15.4	13.5	13.5	7.7	7.7	10.3	7.7
40年以上50年未満 (N=207)	21.7	16.4	14.0	7.2	14.0	10.1	7.7
50年以上 (N=241)	25.3	16.2	10.4	12.0	14.9	12.0	7.1

	災害対策・防犯対策	下水道の整備	交通安全・災害防止対策	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	特になし
1年未満 (N=24)	8.3	4.2	4.2	4.2	12.5	37.5
1年以上3年未満 (N=41)	7.3	4.9	7.3	2.4	0.0	31.7
3年以上5年未満 (N=40)	7.5	0.0	2.5	0.0	2.5	12.5
5年以上10年未満 (N=62)	6.5	4.8	3.2	0.0	0.0	6.5
10年以上20年未満 (N=156)	5.1	2.6	3.2	1.9	1.3	7.1
20年以上30年未満 (N=182)	9.9	5.5	6.6	3.3	1.6	12.6
30年以上40年未満 (N=156)	8.3	7.1	5.1	2.6	1.9	10.3
40年以上50年未満 (N=207)	8.7	7.7	2.4	1.4	1.0	10.1
50年以上 (N=241)	8.7	10.4	5.8	1.7	3.3	8.3

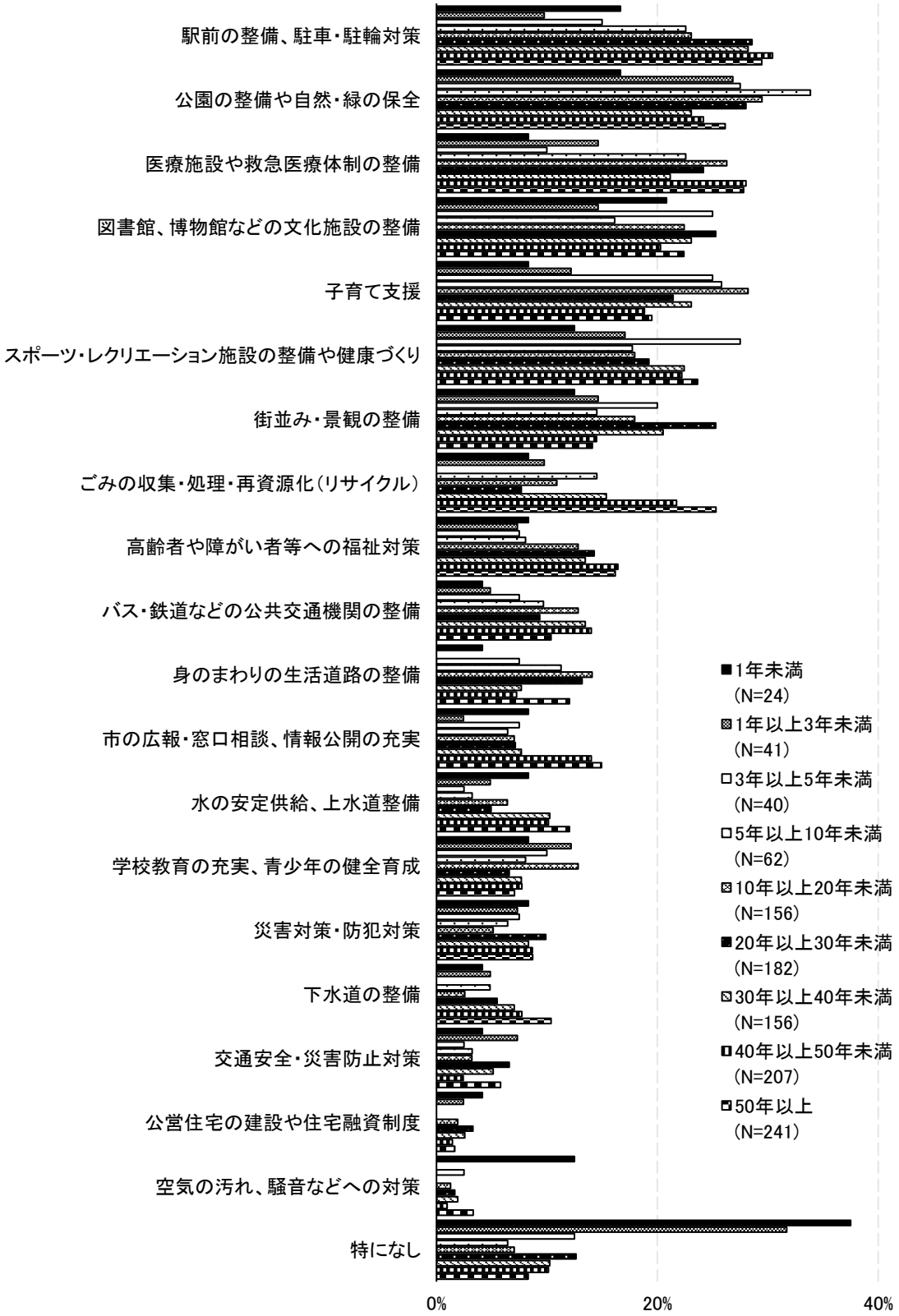


図 81　Q37① 市の仕事のうち最近良くなってきたと思うもの
（複数回答・居住年数別）

Q37②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、「高齢者や障がい者等への福祉対策」が 28.0%と最も高く、「災害対策・防犯対策」が 23.2%と続く（図 82）。

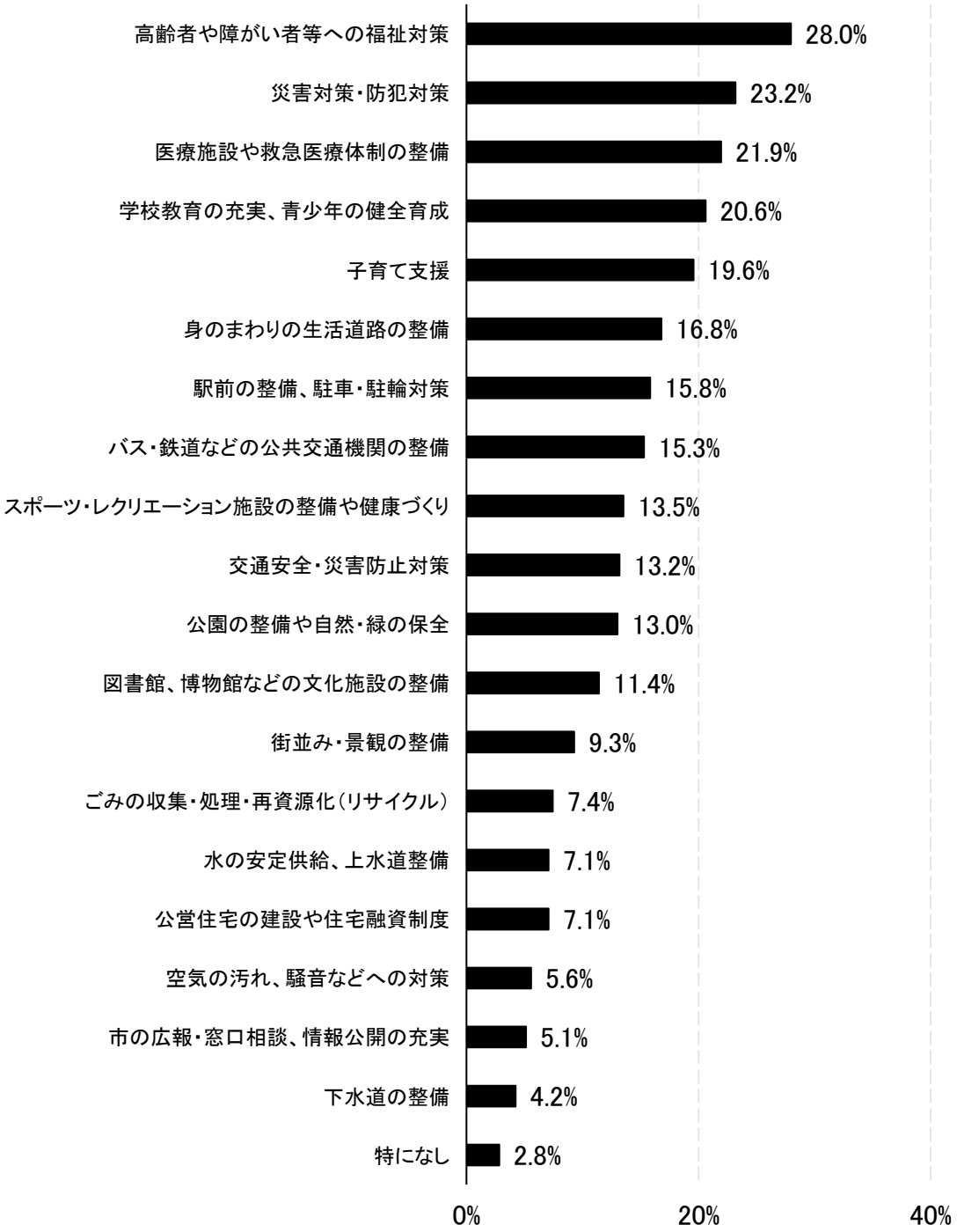


図 82　Q37② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・全体　N=1130）

Q37②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、男女別でみると、「高齢者や障がい者等への福祉対策」では、男性よりも女性の方が 6.6 ポイント高い（図 83）。

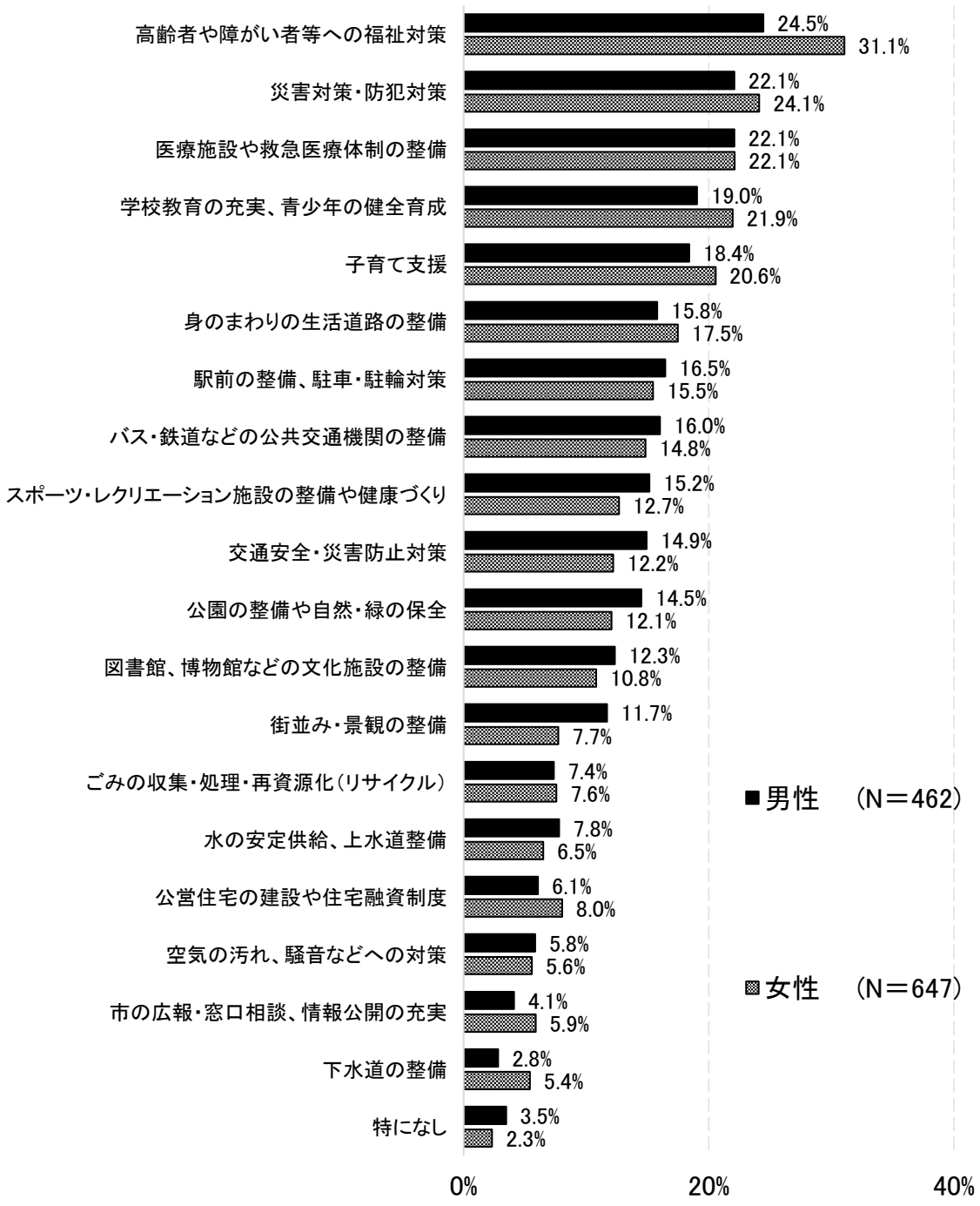


図 83　Q37② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・男女別）

Q37②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、年代別でみると、「子育て支援」は若い世代で高く、30 代が 49.5%と最も高い（**表 8, 図 84**）。

表 8　Q37② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

(%)

	高齢者や障がい者等への福祉対策	災害対策・防犯対策	医療施設や救急医療体制の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策
10・20代 (N=88)	8.0	14.8	15.9	20.5	40.9	14.8	12.5
30代 (N=111)	9.9	15.3	14.4	43.2	49.5	15.3	10.8
40代 (N=174)	19.0	18.4	14.4	28.2	30.5	16.7	20.1
50代 (N=230)	25.7	30.4	27.0	12.6	11.3	20.9	21.3
60代 (N=187)	32.6	27.3	30.5	13.4	9.1	16.0	17.6
70代以上 (N=319)	44.5	23.5	21.9	19.4	10.3	15.4	11.3

	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	交通安全・災害防止対策	公園の整備や自然・緑の保全	図書館、博物館などの文化施設の整備	街並み・景観の整備	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）
10・20代 (N=88)	23.9	14.8	9.1	15.9	17.0	12.5	3.4
30代 (N=111)	8.1	14.4	9.0	17.1	14.4	3.6	9.0
40代 (N=174)	16.7	14.9	12.6	12.1	13.8	10.3	9.2
50代 (N=230)	18.7	14.3	16.1	10.4	12.2	7.8	6.1
60代 (N=187)	17.6	10.7	17.1	14.4	8.0	9.1	9.1
70代以上 (N=319)	11.3	12.9	12.2	12.9	8.8	11.0	7.5

	水の安定供給、上水道整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	下水道の整備	特になし
10・20代 (N=88)	4.5	5.7	4.5	3.4	4.5	2.3
30代 (N=111)	4.5	5.4	9.0	0.9	1.8	0.9
40代 (N=174)	8.0	8.6	6.3	3.4	2.9	1.7
50代 (N=230)	5.7	7.4	7.4	6.1	4.8	3.0
60代 (N=187)	8.0	8.6	4.3	5.9	4.8	4.3
70代以上 (N=319)	9.1	6.0	4.1	7.2	5.3	3.1

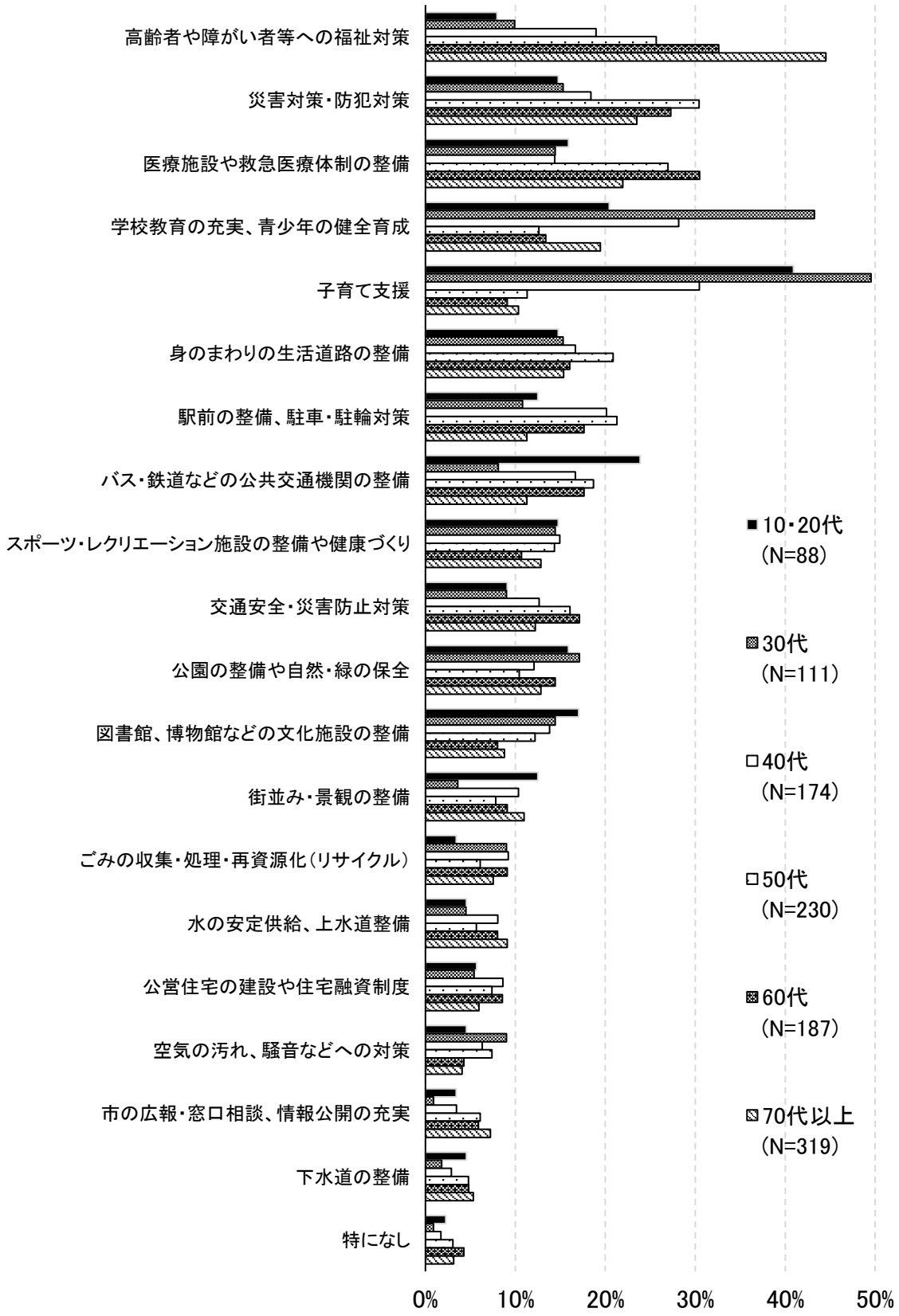


図 84　Q37② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・年代別）

Q37②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、居住地域別でみると、「災害対策・防犯対策」は全地域で20%を超える（**表 9, 図 85**）。

表 9　Q37② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

(%)

	高齢者や障がい者等への福祉対策	災害対策・防犯対策	医療施設や救急医療体制の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策
高槻北地区 (N=280)	22.9	22.5	25.4	25.4	21.4	17.9	13.9
高槻南地区 (N=294)	25.2	24.1	19.4	17.7	18.7	13.3	22.8
五領地区 (N=43)	34.9	27.9	27.9	11.6	23.3	4.7	11.6
高槻西地区 (N=181)	28.7	24.3	16.6	22.7	19.9	18.8	13.3
如是・富田地区 (N=241)	37.3	21.6	23.7	21.6	20.3	20.3	14.9
三箇牧地区 (N=23)	34.8	21.7	21.7	17.4	21.7	21.7	13.0

	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	交通安全・災害防止対策	公園の整備や自然・緑の保全	図書館、博物館などの文化施設の整備	街並み・景観の整備	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）
高槻北地区 (N=280)	16.8	11.8	11.4	15.0	11.1	13.2	7.1
高槻南地区 (N=294)	10.9	14.3	14.3	13.3	12.6	8.2	9.9
五領地区 (N=43)	25.6	11.6	16.3	4.7	20.9	7.0	4.7
高槻西地区 (N=181)	15.5	17.7	16.0	12.7	11.6	7.2	5.0
如是・富田地区 (N=241)	14.5	11.6	13.3	12.4	9.5	7.9	5.8
三箇牧地区 (N=23)	34.8	17.4	8.7	13.0	4.3	13.0	8.7

	水の安定供給、上水道整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	下水道の整備	特になし
高槻北地区 (N=280)	6.4	2.9	5.4	2.1	2.5	3.2
高槻南地区 (N=294)	8.2	9.2	7.8	4.1	6.8	2.0
五領地区 (N=43)	7.0	4.7	4.7	4.7	0.0	2.3
高槻西地区 (N=181)	7.7	8.3	4.4	6.1	3.9	3.9
如是・富田地区 (N=241)	7.5	10.0	4.6	9.5	5.0	3.3
三箇牧地区 (N=23)	0.0	4.3	8.7	4.3	4.3	0.0

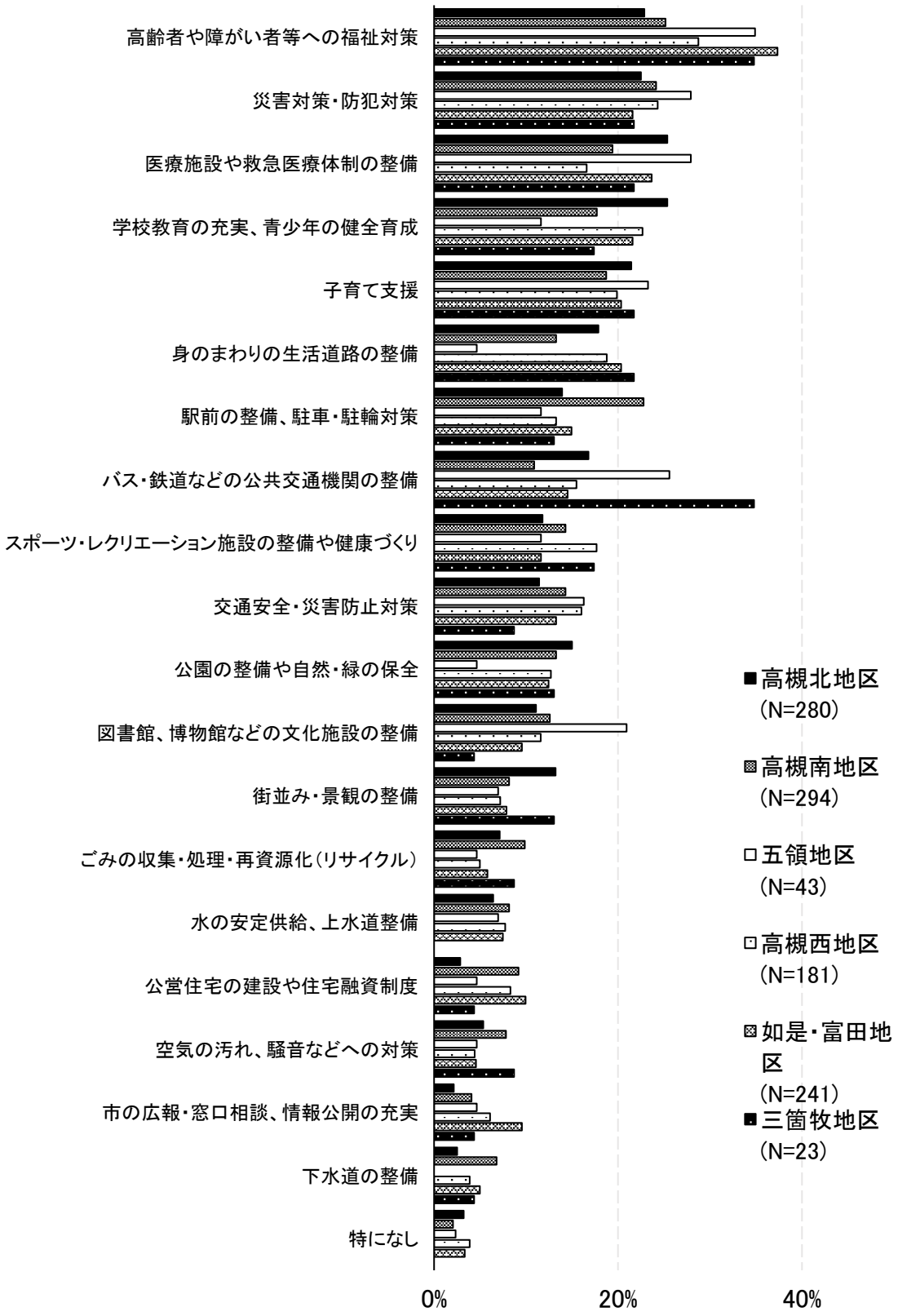


図 85　Q37② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住地域別）

Q37②の市の仕事のうち今後力を入れてほしいものに関して、居住年数別でみると、「子育て支援」は1年以上3年未満では46.3%と最も高く、40年以上50年未満では10.1%と最も低い（**表 10, 図 86**）。

表 10　Q37② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

(%)

	高齢者や障がい者等への福祉対策	災害対策・防犯対策	医療施設や救急医療体制の整備	学校教育の充実、青少年の健全育成	子育て支援	身のまわりの生活道路の整備	駅前の整備、駐車・駐輪対策
1年未満 (N=24)	8.3	20.8	12.5	29.2	29.2	25.0	16.7
1年以上3年未満 (N=41)	14.6	24.4	9.8	22.0	46.3	14.6	19.5
3年以上5年未満 (N=40)	10.0	7.5	17.5	42.5	40.0	25.0	10.0
5年以上10年未満 (N=62)	22.6	8.1	19.4	21.0	43.5	14.5	12.9
10年以上20年未満 (N=156)	21.2	21.8	20.5	21.8	21.2	19.9	22.4
20年以上30年未満 (N=182)	22.0	24.7	24.7	18.1	20.3	15.4	18.1
30年以上40年未満 (N=156)	32.1	22.4	19.9	25.0	21.2	19.2	12.8
40年以上50年未満 (N=207)	33.8	25.1	22.2	22.2	10.1	13.5	12.1
50年以上 (N=241)	38.6	29.0	26.6	13.7	11.2	16.2	16.6

	バス・鉄道などの公共交通機関の整備	スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	交通安全・災害防止対策	公園の整備や自然・緑の保全	図書館、博物館などの文化施設の整備	街並み・景観の整備	ごみの収集・処理・再資源化（リサイクル）
1年未満 (N=24)	25.0	8.3	29.2	4.2	20.8	16.7	12.5
1年以上3年未満 (N=41)	14.6	19.5	2.4	12.2	17.1	9.8	12.2
3年以上5年未満 (N=40)	12.5	7.5	7.5	15.0	10.0	2.5	5.0
5年以上10年未満 (N=62)	11.3	16.1	11.3	14.5	11.3	9.7	3.2
10年以上20年未満 (N=156)	17.9	15.4	13.5	13.5	13.5	11.5	4.5
20年以上30年未満 (N=182)	16.5	16.5	14.8	18.1	13.7	9.9	9.3
30年以上40年未満 (N=156)	15.4	7.7	7.1	12.2	10.9	10.3	5.8
40年以上50年未満 (N=207)	17.4	17.9	16.4	14.0	9.2	7.7	10.6
50年以上 (N=241)	12.0	10.4	15.4	9.1	9.1	8.7	5.8

	水の安定供給、上水道整備	公営住宅の建設や住宅融資制度	空気の汚れ、騒音などへの対策	市の広報・窓口相談、情報公開の充実	下水道の整備	特になし
1年未満 (N=24)	8.3	0.0	16.7	4.2	0.0	4.2
1年以上3年未満 (N=41)	4.9	12.2	2.4	2.4	0.0	2.4
3年以上5年未満 (N=40)	0.0	5.0	7.5	0.0	0.0	0.0
5年以上10年未満 (N=62)	8.1	16.1	6.5	4.8	6.5	4.8
10年以上20年未満 (N=156)	5.8	3.2	3.2	2.6	3.8	1.3
20年以上30年未満 (N=182)	7.1	7.7	7.7	3.8	4.9	2.7
30年以上40年未満 (N=156)	6.4	9.6	4.5	10.9	3.8	2.6
40年以上50年未満 (N=207)	8.2	7.2	4.3	5.8	3.9	2.9
50年以上 (N=241)	8.3	5.4	6.6	5.4	6.2	3.7

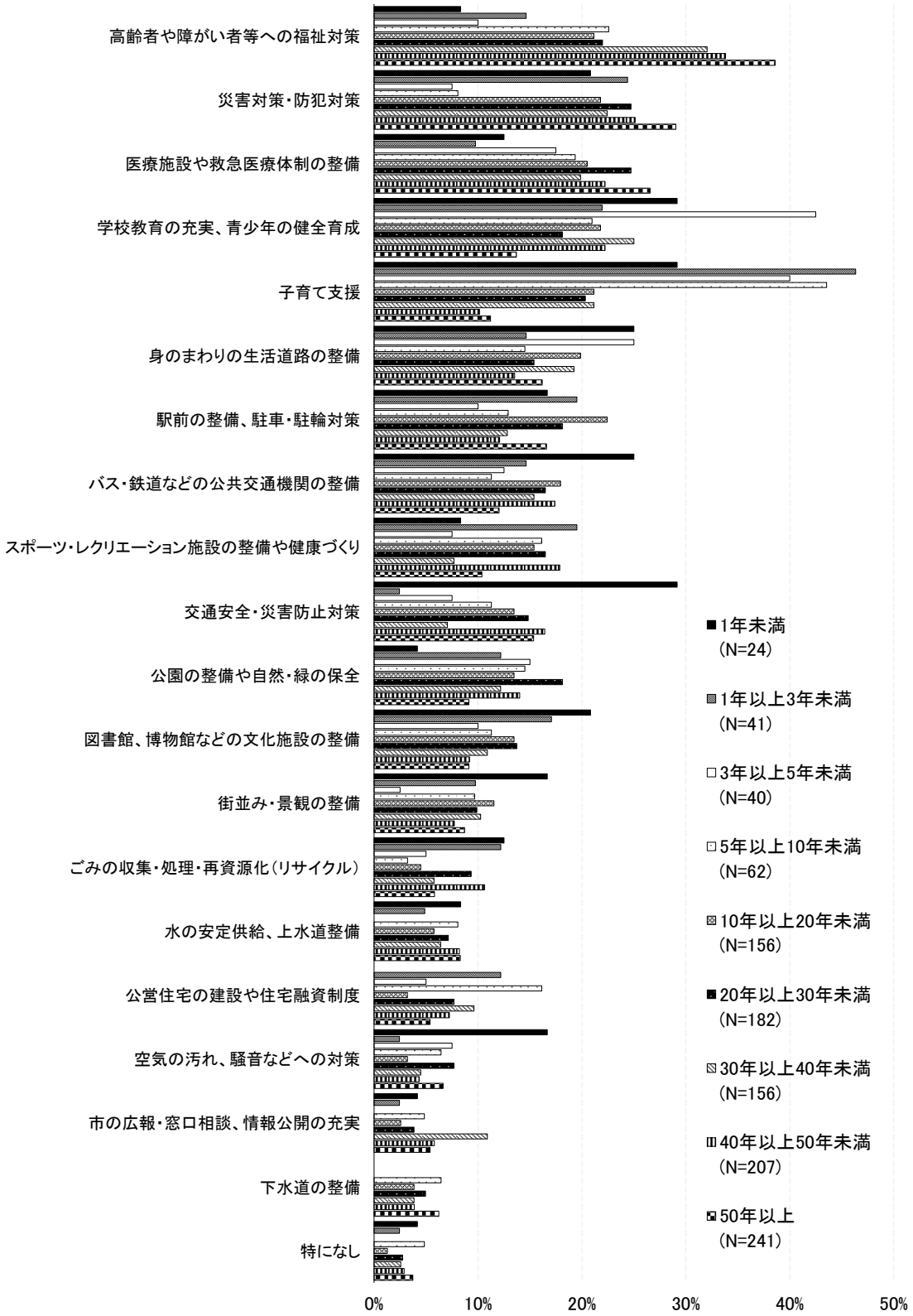


図 86　Q37② 市の仕事のうち今後力を入れてほしいもの（複数回答・居住年数別）

Q38 の「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知に関して、男女別・年代別のすべての層で「知らない」と回答した人が 7 割以上である。年代別でみると、「名前も内容も知っている」または「名前だけ知っている」と回答した人の割合は 70 代以上が 18.8%と最も高く、30 代が 9.9%と最も低い（図 87）。

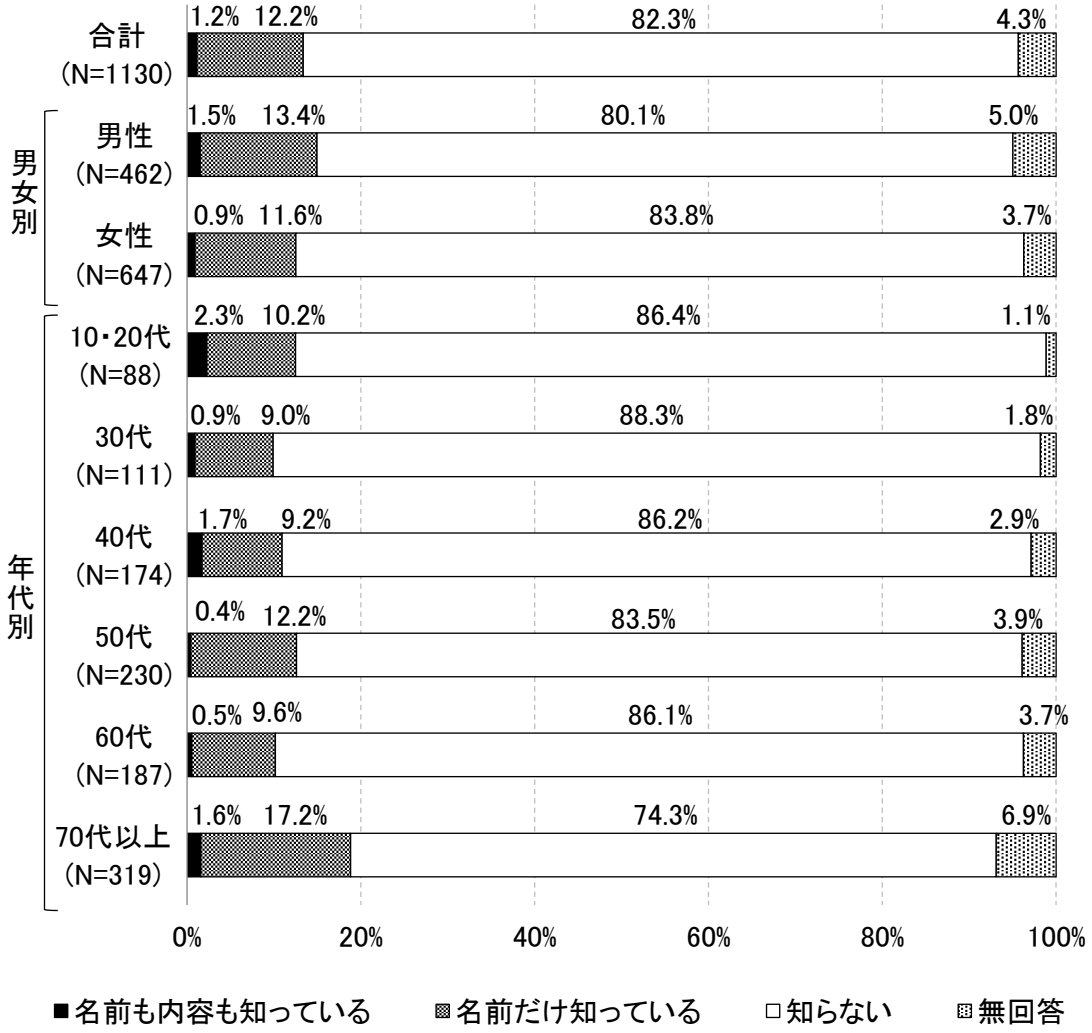


図 87　Q38 「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知

Q39 の高槻市の 20 年後・30 年後を見据えて行財政改革に取り組むべきかに関して、男女別・年代別のすべての層で「感じる」または「やや感じる」と回答した人が 7 割以上である。年代別でみると、「感じる」または「やや感じる」と回答した人の割合は 30 代が 85.6%と最も高く、70 代以上が 74.0%と最も低い（図 88）。

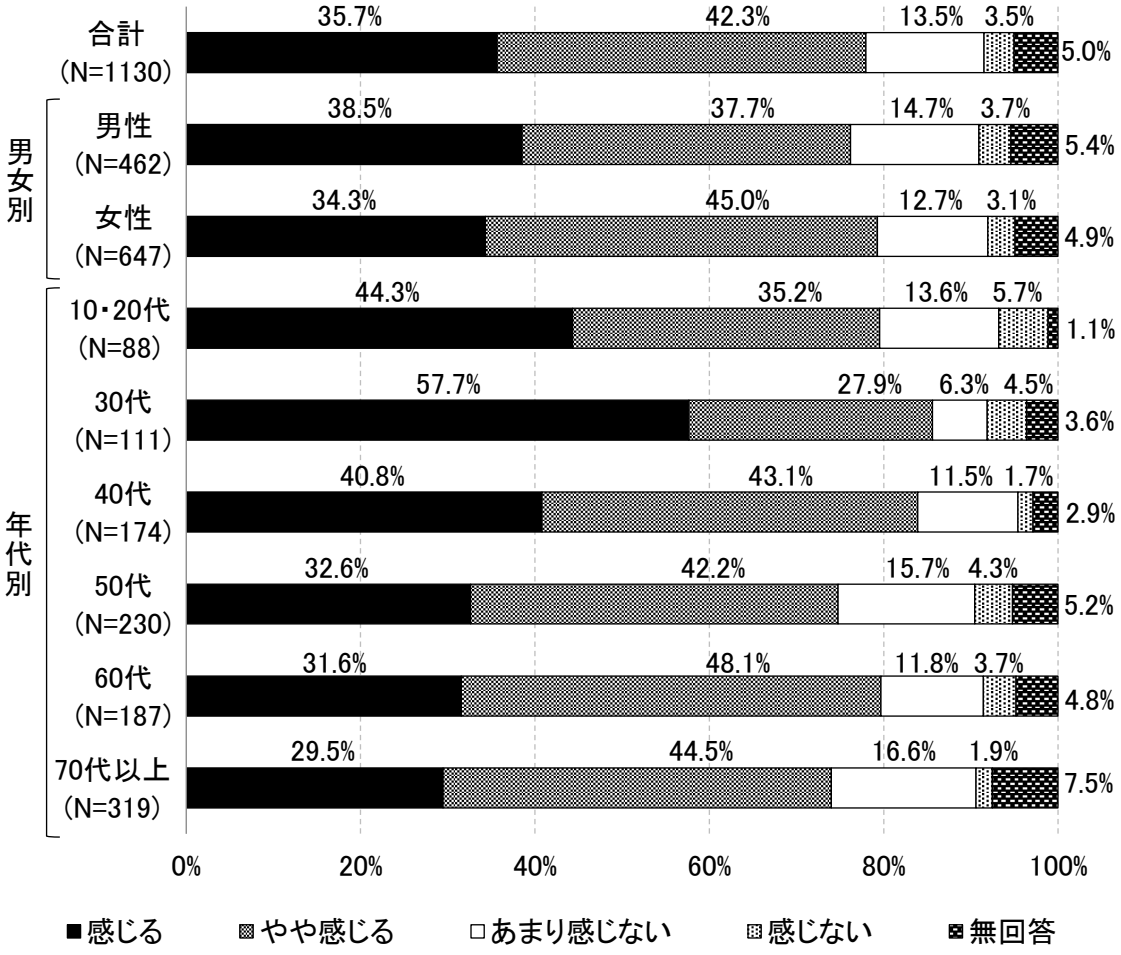


図 88　Q39 高槻市の 20 年後・30 年後を見据えて行財政改革に取り組むべきか

Q40 の居住地域で親しくしている人の数に関して、男女別・年代別のすべての層で「少ない」または「やや少ない」と回答した人が 4 割以上である。年代別でみると、「少ない」または「やや少ない」と回答した人の割合は 10・20 代が 58.0%と最も高く、反対に 70 代以上が 45.5%と最も低い（図 89）。

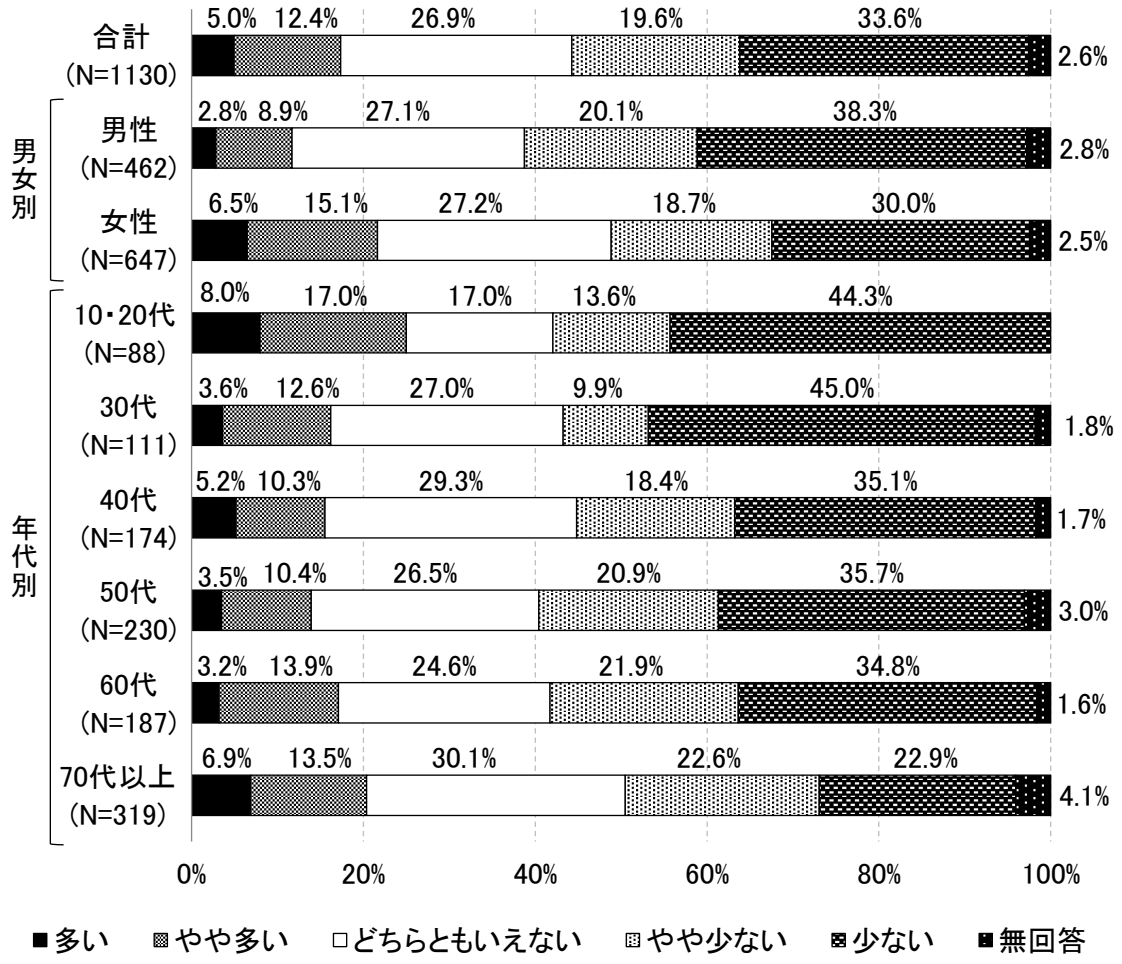


図 89　Q40 居住地域で親しくしている人の数

Q41 の今まで以上に近所づきあいを増やしたいかに関して、男女別・年代別のすべての層で「どちらともいえない」と回答した人の割合が 6 割以上である。年代別でみると、「増やしたい」または「少し増やしたい」と回答した人の割合は 60 代が 21.4%と最も高く、反対に 70 代以上が 14.1%と最も低い（図 90）。

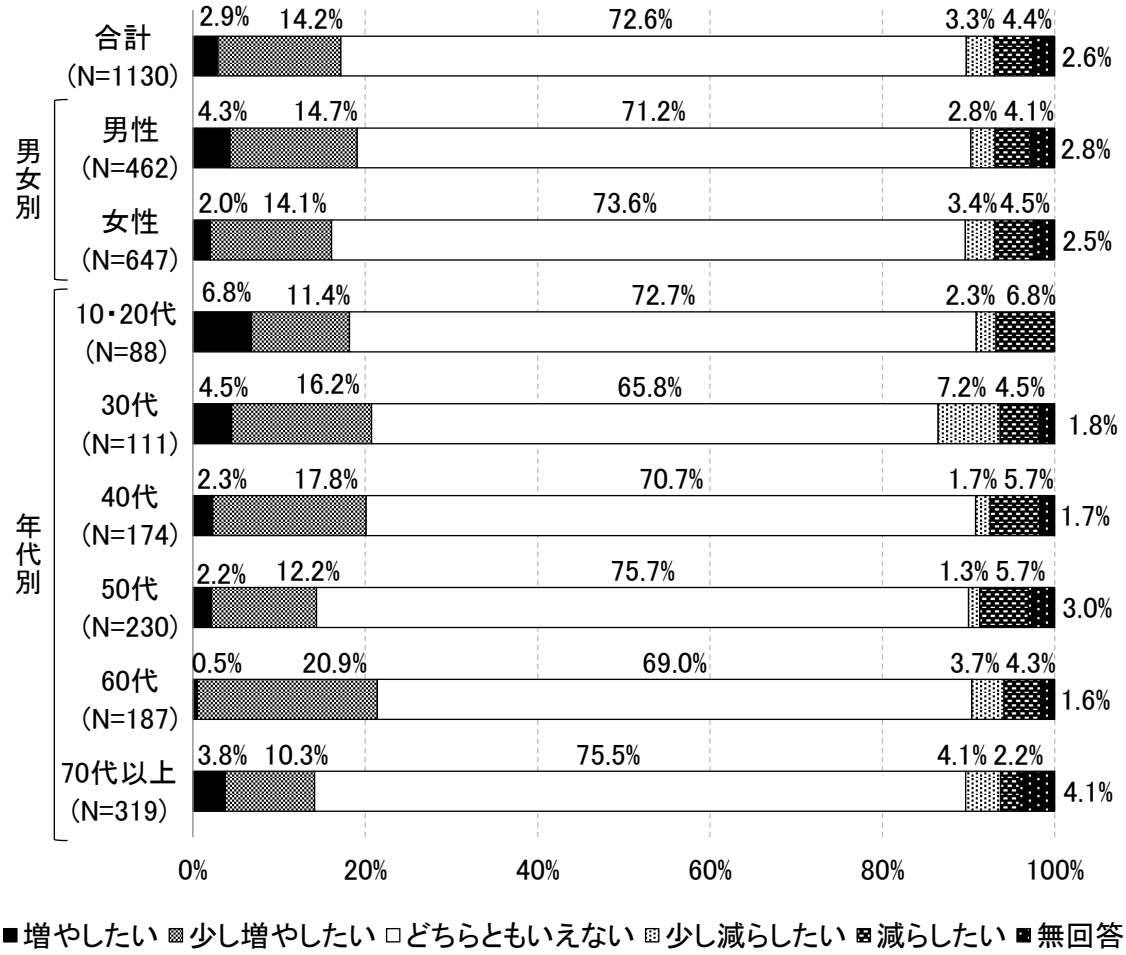


図 90　Q41 今まで以上に近所づきあいを増やしたいか

Q42 の屋外にいて人がまばらな時、マスクを着用するかに関して、男女別・年代別のすべての層で「常に着用する」または「たいてい着用する」と回答した人の割合は 2 割以上である。年代別でみると、「常に着用する」または「たいてい着用する」と回答した人の割合は 70 代以上が 47.3%と最も高く、反対に 30 代が 17.1%と最も低い（**図 91**）。

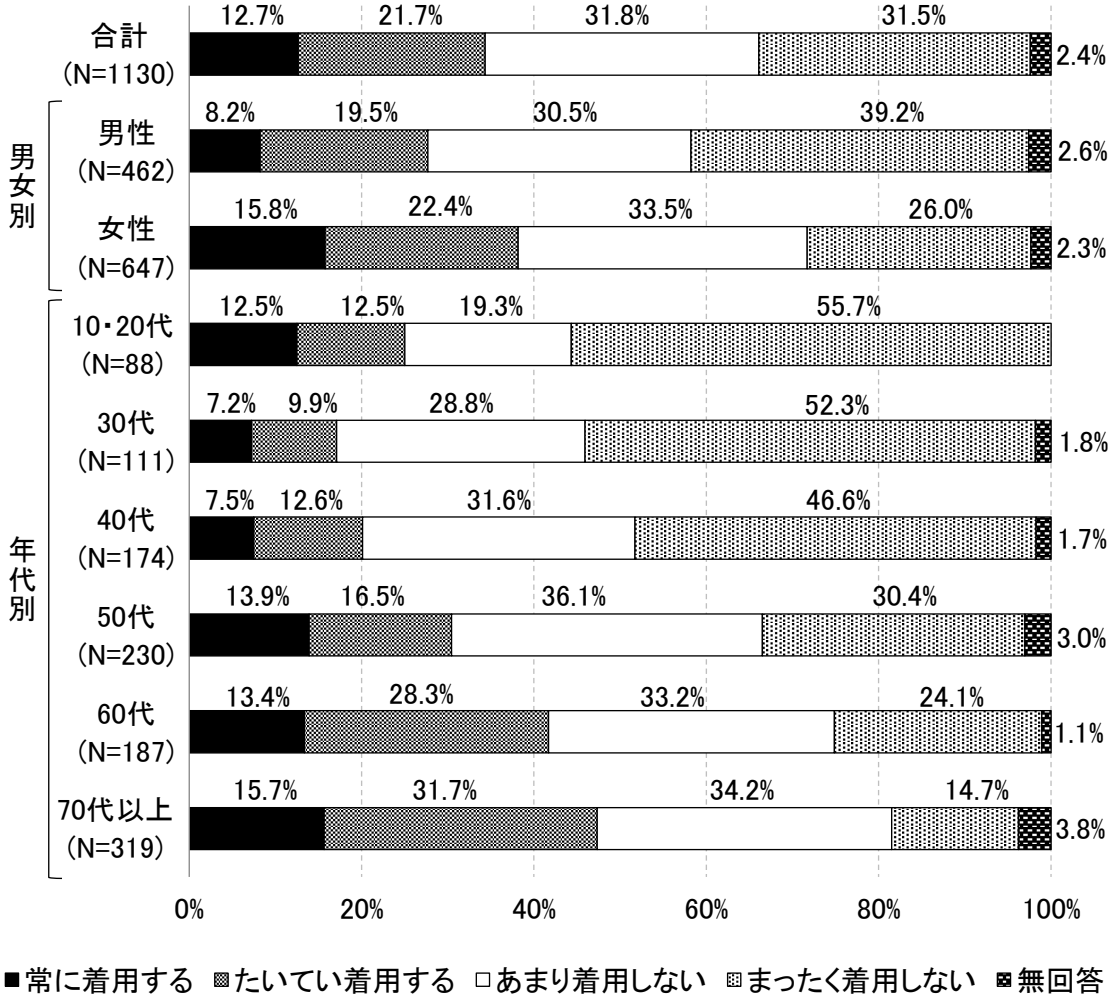


図 91　Q42 屋外にいて人がまばらな時、マスクを着用するか

Q43 の新型コロナウイルス感染に対する不安感に関して、男女別・年代別のすべての層で「非常に感じる」または「ある程度感じる」と回答した人の割合は 3 割以上である。年代別でみると、「非常に感じる」または「ある程度感じる」と回答した人の割合は 60 代が 63.1%と最も高く、反対に 10・20 代が 33.0%と最も低い（図 92）。

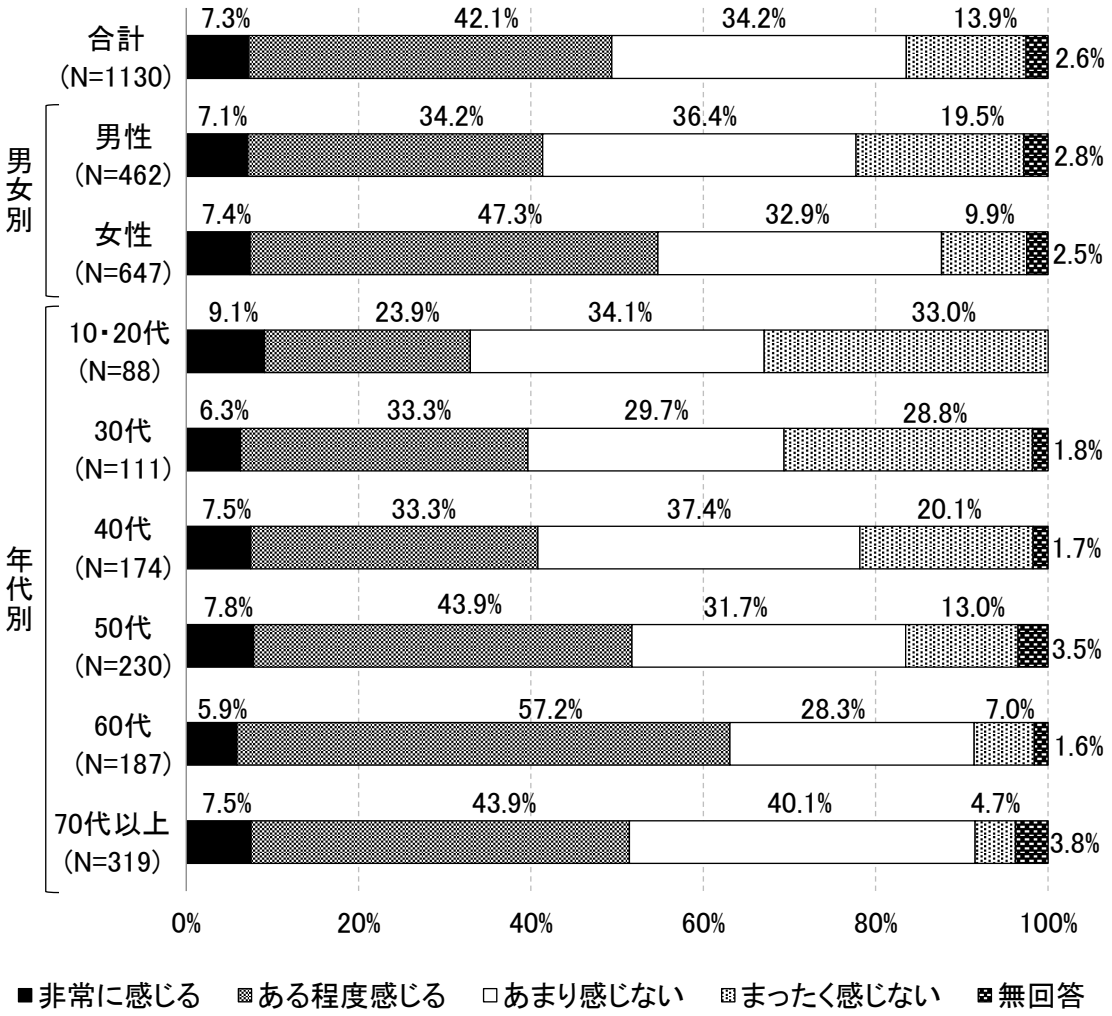


図 92　Q43 新型コロナウイルス感染に対する不安感

Q44 の集団行動が好きかに関して、男女別・年代別のすべての層で「好き」または「やや好き」と回答した人の割合は 2 割以上である。年代別でみると、「好き」または「やや好き」と回答した人の割合は 10・20 代が 37.5%と最も高く、反対に 50 代が 22.6%と最も低い（図 93）。

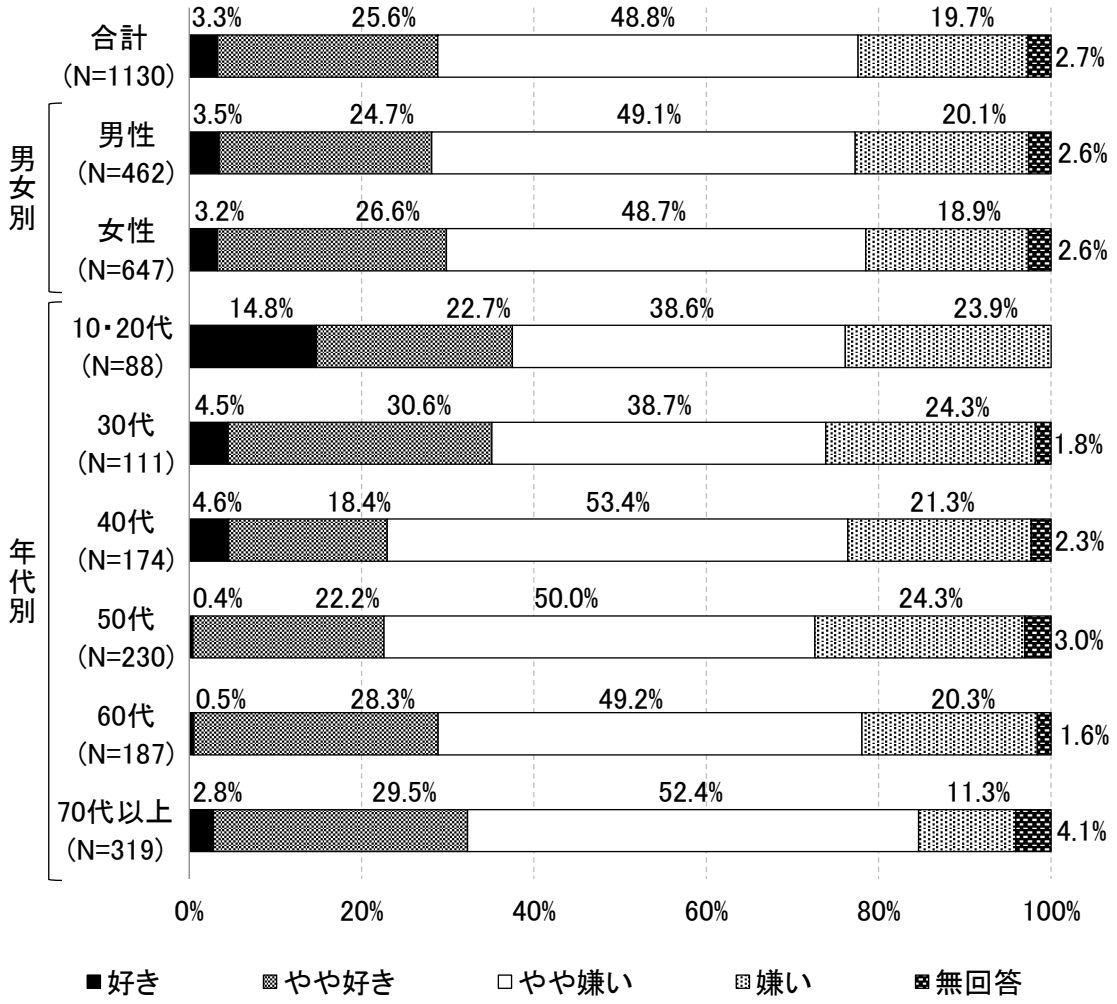


図 93　Q44 集団行動が好きか

Q45 の自分の判断が不安になり、人に合わせて自分の意見を変えることがあるかに関して、男女別・年代別のすべての層で「よくある」または「ときどきある」と回答した人の割合は 4 割以上である。年代別でみると、「よくある」または「ときどきある」と回答した人の割合は 10・20 代が 67.0%と最も高く、反対に 70 代以上が 40.4%と最も低い（図 94）。

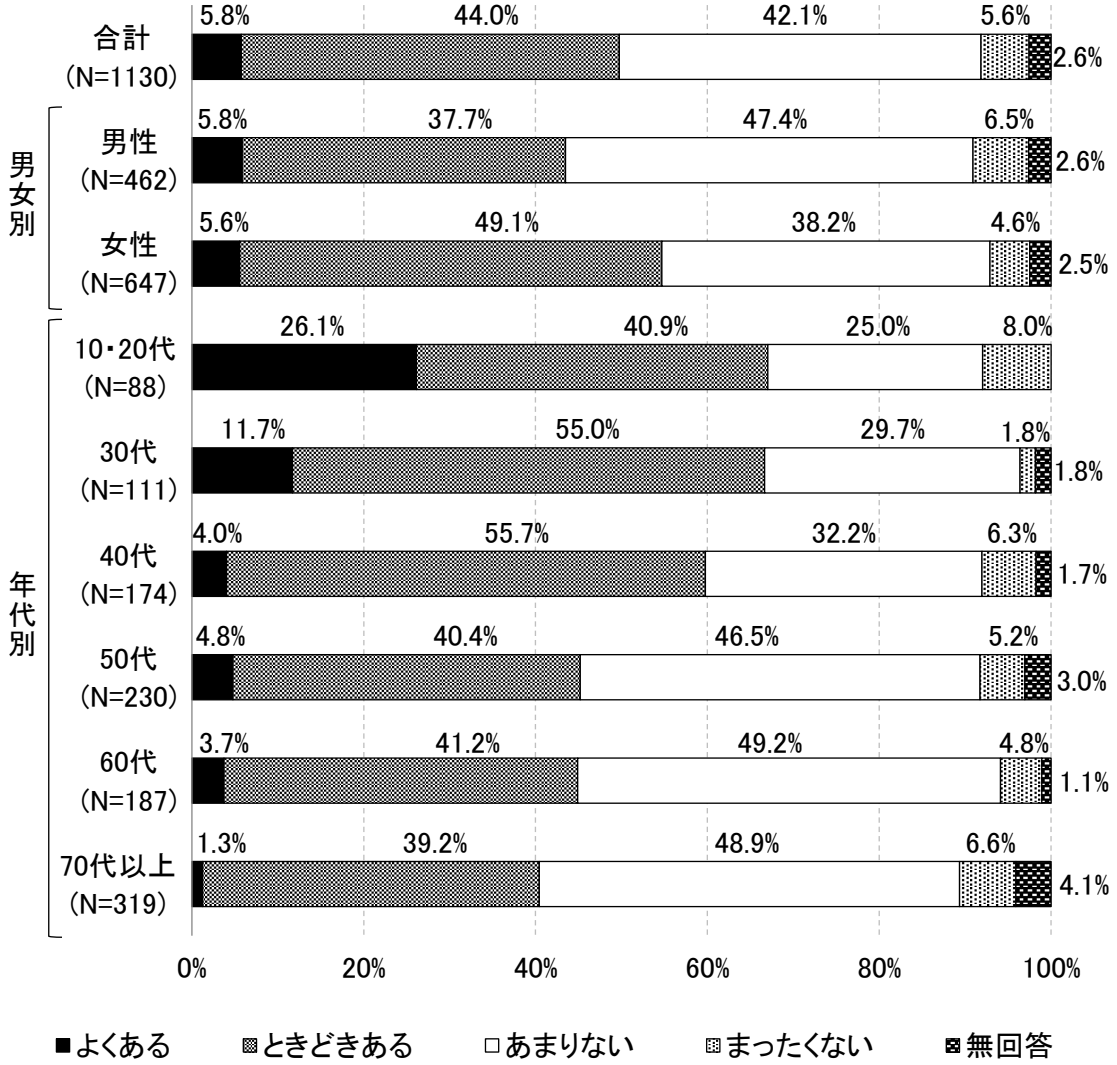


図 94　Q45 自分の判断が不安になり、人に合わせて自分の意見を変えることがあるか

Q46 の知り合いから聞いた情報に影響されやすい方だに関して、男女別・年代別でみると、70 代以上を除く、すべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 3 割以上である。年代別でみると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 30 代が 64.9%と最も高く、反対に 70 代以上が 25.7%と最も低い（図 95）。

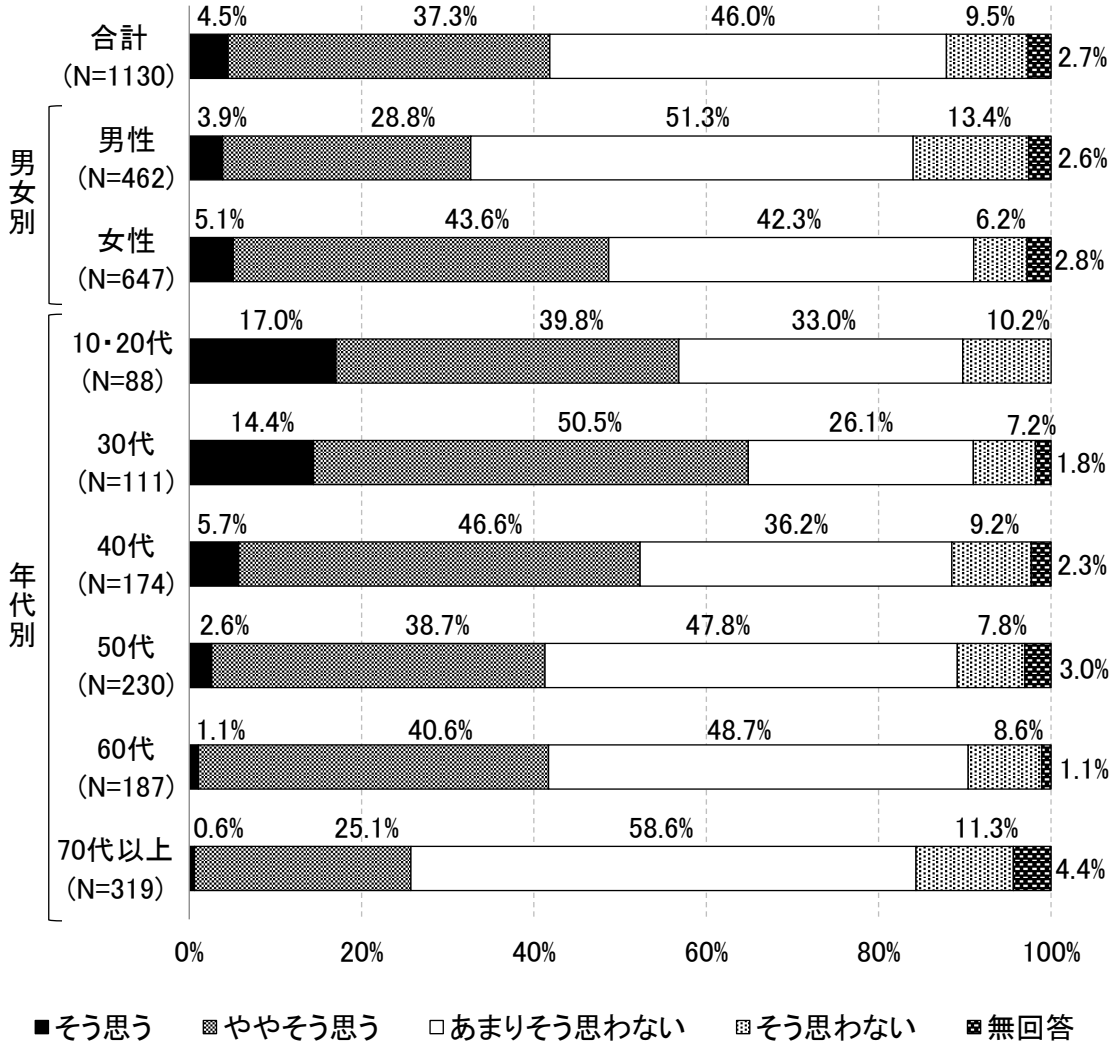


図 95　Q46 知り合いから聞いた情報に影響されやすい方だ

Q47 のご自身が詐欺の被害に遭うことはないと思うに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 4 割以上である。年代別でみると、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人の割合は 10・20 代が 59.1%と最も高く、反対に 30 代が 46.8%と最も低い（図 96）。

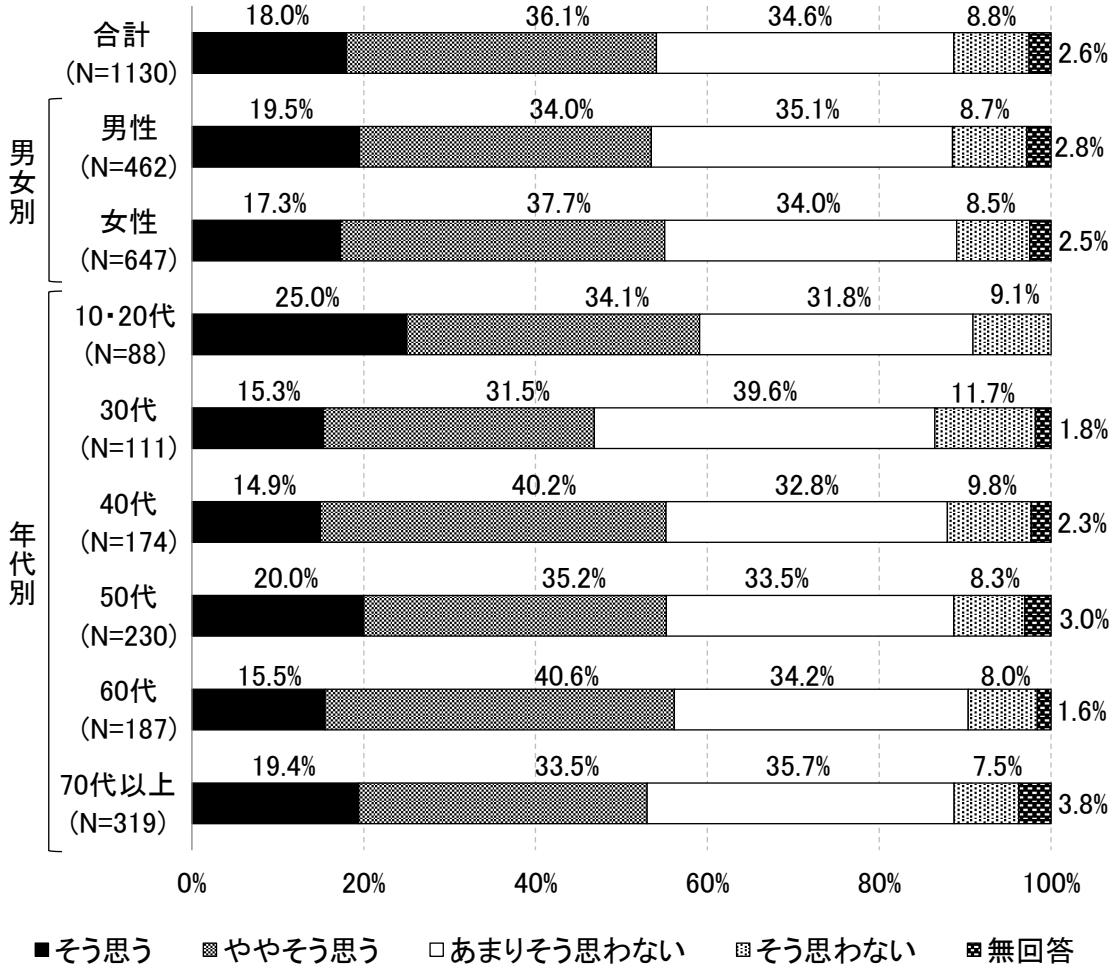


図 96　Q47 ご自身が詐欺の被害に遭うことはないと思う

Q48 の「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見についてどう思うかに関して、男女別・年代別のすべての層で「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は 7 割以上である。年代別でみると、「そう思わない」または「あまりそう思わない」と回答した人の割合は 60 代が 86.6%と最も高く、反対に 70 代以上が 76.5%と最も低い（図 97）。

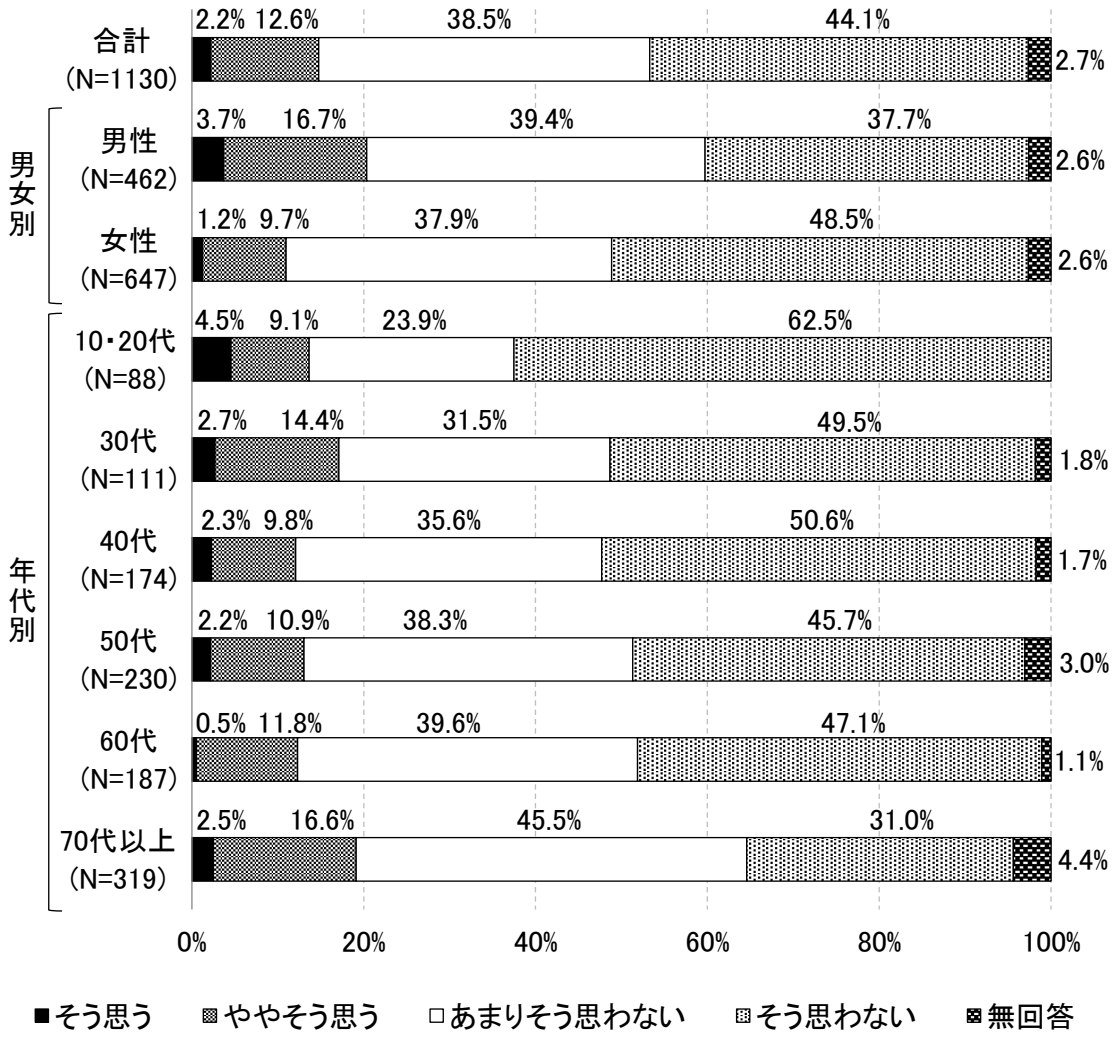


図 97　Q48 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見についてどう思うか

Q49 の子どもの頃、家族の誰かが本を読んでくれたかに関して、男女別・年代別でみると、10・20 代～40 代を除く、すべての層で「あまりなかった」または「まったくなかった」と回答した人の割合が 5 割以上である。年代別でみると、「よくあった」または「ときどきあった」と回答した人の割合は 10・20 代が 86.4%と最も高く、反対に 70 代以上が 22.3%と最も低い（図 98）。

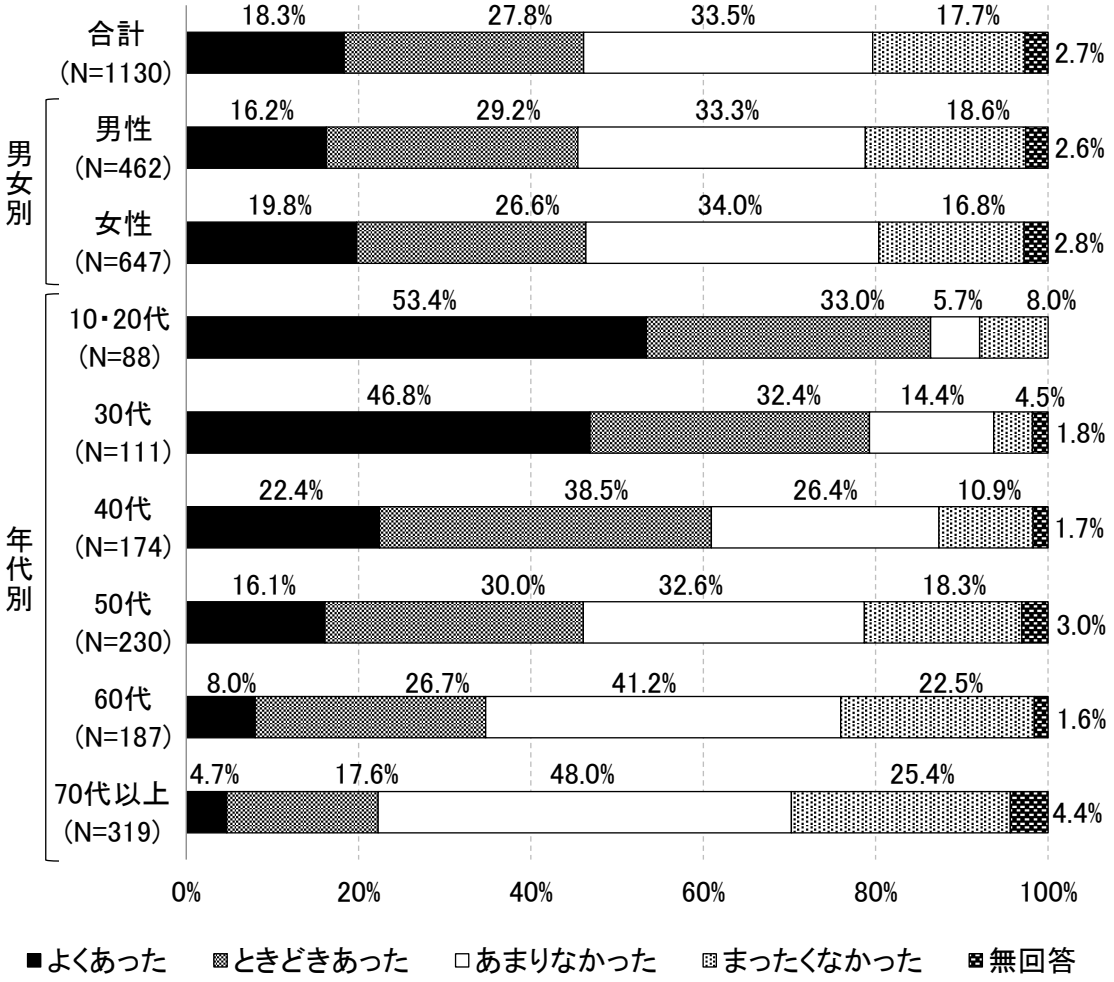


図 98　Q49 子どもの頃、家族の誰かが本を読んでくれたか

Q50 の世帯の収入の満足度に関して、男女別でみると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は、男性では 25.1%、女性では 32.8%である。また、年代別でみると、「満足」または「やや満足」と回答した人の割合は 30 代が 36.0%と最も高い。反対に 60 代が 23.5%と最も低い（図 99）。

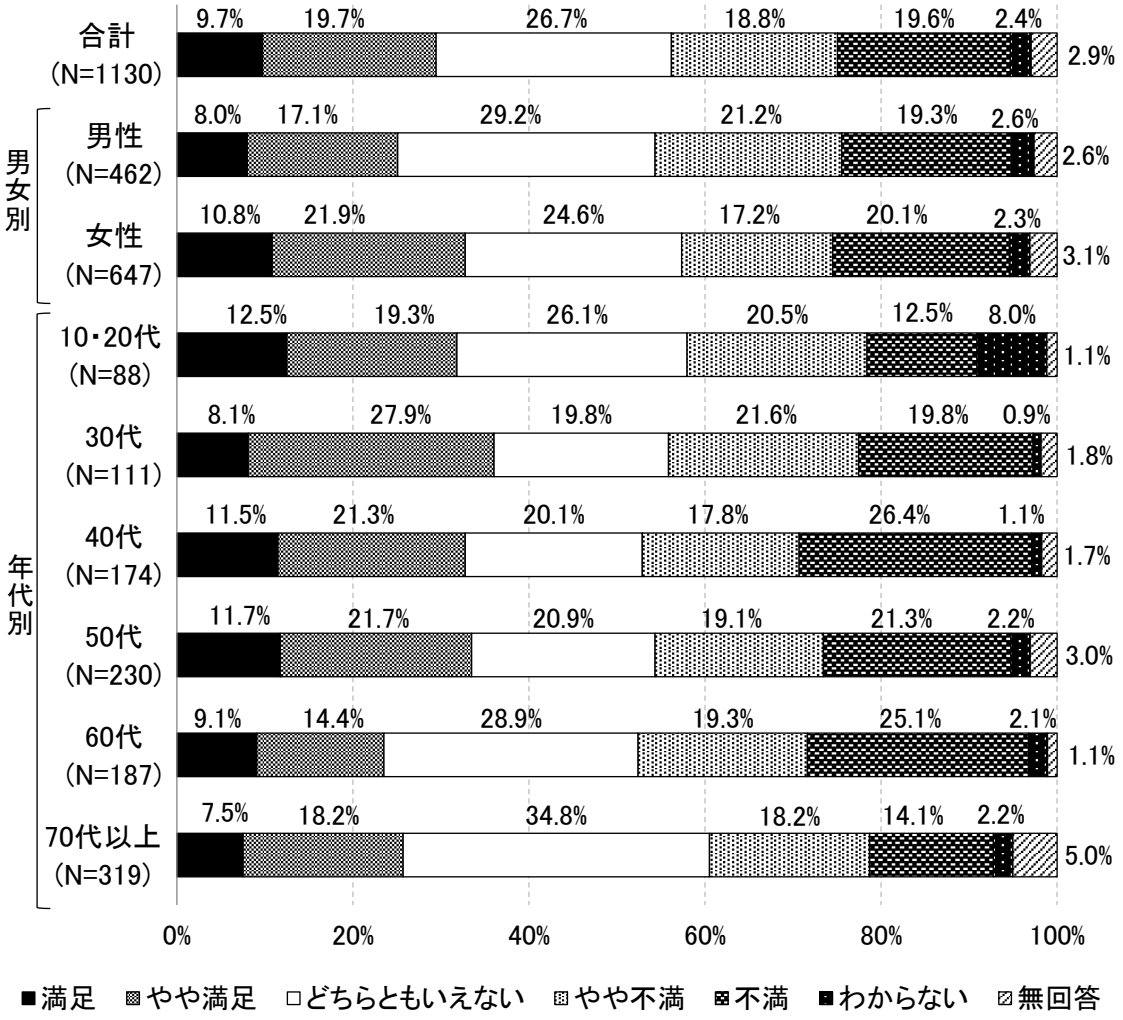


図 99　Q50 世帯の収入の満足度

最後に、質問項目ごとの設問提案者と例年の質問項目との対応関係の一覧を以下に示す。

No.	質問項目	高槻市	関西大学	R05	R04	R03	R02	R01	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23
Q1	生活満足度		○	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	Q1	
Q2	幸福度		○	Q2	Q2	Q2	Q2		Q33							
Q3	居住地域は暮らしやすいか		○	Q3	Q3	Q3	Q3	Q4	Q2	Q2	*Q2	*Q2	*Q3	*Q2	*Q2	
Q4	地域に住み続けたいか		○	Q4	Q4	Q4	Q4	Q5				*Q3	*Q4	*Q3	*Q3	*Q3
Q5	高槻市に地域ブランドがあると思うか	○		Q5	Q5		Q5	Q9				Q23				
Q6	中心市街地に行く頻度が7年前と比べて増加したか	○		Q6	Q6		Q6	Q10				Q16				
Q7A	中心市街地の向上：防災面での安全性や快適性	○		Q7A	Q7A		Q7A	Q11A	Q10A			Q17A				
Q7B	中心市街地の向上：防犯面での安全性や快適性	○		Q7B	Q7B		Q7B	Q11B	Q10B			Q17B				
Q7C	中心市街地の向上：居住環境	○		Q7C	Q7C		Q7C	Q11C	Q10C			Q17C				
Q7D	中心市街地の向上：公共交通機関の利便性	○		Q7D	Q7D		Q7D	Q11D	Q10D			Q17D				
Q7E	中心市街地の向上：歩行者にとっての歩きやすさ	○		Q7E	Q7E		Q7E	Q11E	Q10E			Q17E				
Q7F	中心市街地の向上：風紀や治安	○		Q7F	Q7F		Q7F	Q11F	Q10F			Q17F				
Q8A	中心市街地で7年前と比べて増加したか　文化活動	○		Q8A	Q8A		Q8A	Q12A				Q18A				
Q8B	中心市街地で7年前と比べて増加したか　コミュニティ活動	○		Q8B	Q8B		Q8B	Q12B				Q18B				
Q8C	中心市街地で7年前と比べて増加したか　商店街の魅力	○		Q8C	Q8C		Q8C	Q12C				Q18C				
Q8D	中心市街地で7年前と比べて増加したか　百貨店などの大型店の魅力	○		Q8D	Q8D		Q8D	Q12D				Q18D				
Q8E	中心市街地で7年前と比べて増加したか　買い物やイベントでのにぎわい	○		Q8E	Q8E		Q8E	Q12E				Q18E				
Q8F	中心市街地で7年前と比べて増加したか　魅力的な飲食店	○		Q8F	Q8F		Q8F	Q12F				Q18F				
Q8G	中心市街地で7年前と比べて増加したか　オフィスなど業務施設	○		Q8G	Q8G		Q8G	Q12G				Q18G				
Q8H	中心市街地で7年前と比べて増加したか　病院などの医療機関	○		Q8H	Q8H		Q8H	Q12H				Q18H				
Q8I	中心市街地で7年前と比べて増加したか　道路の渋滞	○		Q8I	Q8I		Q8I	Q12I				Q18I				
Q8J	中心市街地で7年前と比べて増加したか　駐輪場	○		Q8J	Q8J		Q8J	Q12J				Q18J				
Q8K	中心市街地で7年前と比べて増加したか　駐車場	○		Q8K	Q8K											
Q8L	中心市街地で7年前と比べて増加したか　街なかの緑や潤い	○		Q8L	Q8L		Q8K	Q12K				Q18K				
Q10	JR高槻駅の利用	○		Q10												
Q11	JR高槻駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるか	○		Q11												
Q12	阪急高槻市駅の利用	○		Q12												
Q13	阪急高槻市駅周辺が高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間だと感じるか	○		Q13												
Q14	高槻市のイメージ	○												Q8		
Q15	高槻市に愛着を感じるか	○		Q46				Q7	Q3	Q3	Q6	Q8	*Q19			
Q16	「はにたん」に愛着を感じるか	○											Q20			
Q17	高槻市営バスへの満足度	○				Q8		***Q8 A-R	***Q6	***Q5 A-E	***Q8 I-L	***Q10	***Q12B	***Q9B	***Q4B	
Q18	高槻市営バスの利用頻度	○				Q9				Q6		***Q12	***Q25	***Q11		***Q13
Q19_A	高槻市営バス: 運行本数が少ない	○				Q7E								***Q10		
Q19_B	高槻市営バス: 近くに路線やバス停がない	○				Q7F		***Q8 K		***Q5 C	***Q8 K					
Q20	環境に関する問題への関心度	○		Q22	Q12	Q11		Q14	Q12	Q33		**Q26				

Q21_A	高槻市の環境：身近な自然環境とのふれあいがあるか	○		Q23_A	Q16A	Q15A		Q18A	Q11A	Q30A		**Q5	**Q7				
Q21_B	高槻市の環境：不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちか	○		Q23_B	Q16B	Q15B		Q18B	Q11B	Q30B							
Q21_C	高槻市の環境：良好な環境づくりを目指した活動が豊富か	○		Q23_C	Q16C	Q15C		Q18C	Q11C	Q30C							
Q21_D	高槻市の環境：環境活動に関する情報や呼びかけが十分か	○		Q23_D	Q16D	Q15D		Q18D	Q11D	Q30D							
Q22	朝食の頻度		○													Q54A	
Q23	運動の頻度		○				Q41										
Q24_A	演劇を見に行く		○														高槻市調査（R05）Q30_Aを参考
Q24_B	宿泊をともなう旅行		○														高槻市調査（R05）Q30_Aを参考
Q25	自宅の近くに、運動ができる公園・緑地・広場はあるか		○														都市的ライフスタイルの選好に関する地理的社会調査
Q26	テレビ視聴時間		○			Q26	**Q19A		***Q25A			***Q44B				**Q26	
Q27	SNS利用時間		○		Q32		Q19C*										
Q28	ドラマを見る頻度		○														ウェブ利用と政治知識に関する調査
Q29	購入の際、インターネット情報を参考にするか		○														令和5年消費者意識基本調査Q3
Q30	どんなメディアでニュースを見聞きするか		○														テレビ60年調査
Q31	年間の自殺者数の認知度	○		Q37	Q23	Q35	Q26			Q47							
Q32	自殺に関する相談機関の認知度	○		Q38	Q24	Q36	Q27			Q49							
Q33	本気で自殺を考えたことがあるか	○		Q39	Q25	Q37	Q28			Q52							
Q34	身近な人から「死にたい」と打ち明けられたときの対応方法	○		Q40	Q26	Q38	Q29			Q53							
Q35	今後求められる自殺対策	○		Q41	Q27	Q39	Q30										
Q36	自殺願望の気持ちを乗り越える方法	○		Q42	Q28	Q40	Q31			Q51							
Q37_1	最近良くなってきたと思うもの	○		Q43_1	Q29①	Q41①	Q34①	Q38①	Q32①			Q40①	**Q49①	**Q36①	**Q28①		
Q37_2	今後力を入れてほしいもの	○		Q43_2	Q29②	Q41②	Q34②	Q38②	Q32②			Q40②	**Q49②	**Q36②	**Q28②		
Q38	「『高槻市みらいのための経営革新』に向けた改革方針」の認知	○		Q44	Q30	Q42	Q32	Q36	Q30								
Q39	高槻市の20年後・30年後を見据えて行政改革に取り組むべきか	○		Q45	Q31	Q43	Q33	Q37									
Q40	地域で親しくしている人の数		○											Q7	Q6		
Q41	今まで以上に近所づきあいを増やしたいか		○								Q5						
Q42	外にいて人がまばらな時、マスクを着用するか		○	Q34	Q36												マスク着用場面質問票
Q43	新型コロナウイルス感染に対する不安感		○	Q36	Q35												
Q44	集団行動が好きですか		○					Q43									
Q45	自分の判断が不安になり、人に合わせて自分の意見を変えることがあるか		○														同調志向尺度
Q46	知り合いから聞いた情報に影響されやすい方だ		○														同調志向尺度
Q47	ご自身が詐欺の被害に遭うことはないと思う		○														「犯罪報道の評価と犯罪不安感」調査
Q48	「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見についてどう思うか		○					Q47						*Q48			JGSS-2018G 留置調査票 Q9A
Q49	子どもの頃、家族の誰かが本を読んでくれたか		○														1995年SSM調査
Q50	世帯収入の満足度		○														平成28年国民生活に関する世論調査

Q51	性別	○	○	Q53	Q40	Q53	Q54	Q55	Q53	Q64	Q58	Q53	Q72	Q64	Q61	**Q64	
Q52	年齢	○	○	Q54	Q41	Q54	Q47	Q56	Q50	Q65	Q59	Q54	Q73	Q65	Q62	Q65	
Q53	職業(雇用形態)	○	○	Q55	Q42	Q55	Q55	Q57	Q55	Q66	Q60	Q55	Q74	Q66	Q63	Q66	＊R02までの項目名は、「職業」
Q54	最終学歴		○	Q56	Q43	Q56	Q56	Q58	Q56	Q67	Q62	Q57	Q76	Q69	Q65	Q67	
Q55	居住地域	○	○	Q57	Q44	Q57	Q57	Q59	Q57	Q68	Q63	Q58	Q77	Q70	Q66	Q69	
Q56	市内居住年数	○	○	Q58	Q45	Q58	Q58	Q60	Q58	Q69	Q64	Q59	Q78	Q71	Q67	Q68	
Q57	住居		○	Q59	Q46	Q59	Q60	Q61	Q59	Q70	Q65	Q60	Q79	Q72	Q68	Q70	
Q58	居住形態		○	Q60	Q47	Q60	Q59	Q62	Q60	Q71	Q66	Q61	Q80	Q73	Q69	Q71	
Q59	婚姻状況		○	Q61	Q48	Q61	Q49	Q63	Q61	Q72	Q51	Q51	Q67	Q53	Q52	Q59	
Q60	子どもの有無		○	Q62	Q49	Q62	Q53	Q64	Q62	Q73	Q54	Q52	Q71	Q58	Q56	Q73	
Q61	世帯人数		○	Q63	Q50	Q63	Q61	Q65	Q63	Q74	Q67	Q62	Q81	Q63	Q70	Q72	
Q62	世帯年収		○	Q64	Q51	Q64	Q63	Q66	Q64	Q75	Q68	Q63	Q82	Q74	Q71	Q74	

注）＊印は、質問文の表現・形式が異なるため、比較する際に注意が必要である。変更の程度は、＊の数に応じて、下記の通りである。

＊　　：分析にそのまま使用できる（「てにをは」、濁点の位置、末尾などの変更）

＊＊　：分析には注意が必要である（選択肢の数が異なるなどの変更）

＊＊＊：同一の変数として分析に使用するのは難しい（概念範囲が異なる）

第３章　属性と朝食習慣の関連性

數岡 美咲

1. はじめに

朝食は単なる栄養補給だけでなく、私たちの日々のエネルギー代謝にも重要な影響を与えている。朝食を摂ることで体内の栄養がしっかりと補給され、特に脳においては集中力や認知機能の向上をもたらす。また、朝から適切な栄養を摂取することが生活習慣病の予防にもつながるとされている。そのため朝食の重要性は近年ますます高まっている。

しかし厚生労働省（2019）によると、昨今の朝食の欠食率は 12.1%と高い。毎日とはいかずとも週に数回朝食を抜く人も多いのではないだろうか。このように、忙しく時間に余裕がないと感じる日々では、朝食を抜く人々がいるのが実情だ。

そこで本研究では実際に朝食を摂取している人の割合を調べ、生活満足度に朝食が及ぼす影響を深く掘り下げていく。また、属性が朝食習慣にどのように影響を与えるのかを明らかにしていく。

2. 仮説

2.1. 先行研究

中出（2020）によると、20～40 代の成人を対象とした調査の結果、年齢階級と朝食欠食の有無との間に有意な関連が認められたが、仕事の有無は有意な関連が認められなかった。また朝食時に家族と共に食事をしない人に欠食者が多くみられる。厚生労働省（2018）によると、主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を 1 日 2 回以上食べることが「ほとんど毎日」と答えた人の割合は男女ともに 50%を下回り、若い世代ほどその割合が低いことがわかる。また、世帯年収が高い人ほど主食・主菜・副菜を組み合わせて食べている食事の頻度の割合は有意に高い。年齢階級での調査においてこのような結果となった理由としては「時間がない」「手間がかかる」、所得階級においては「食費の余裕がない」「外食が多く難しい」という選択が多くみられた。

Takako（2019）によると、朝食を抜くとうつ病のリスクが高まることが判明している。この結果は食事や生活習慣の要因を考慮に入れても、関連性は維持された。また、西（2008）によると、朝食を毎日摂る群の抑うつ程度は最も軽かった。しかし最も抑うつ程度が重かったのは朝食をほとんど摂らない群であり、全く摂らない群は生活リズムが却って規則的であるため、毎日朝食を摂る群の次に抑うつの程度が軽かった。

2.2. 仮説

これらの先行研究から、若者の方が健康に対する関心が低く、朝食の摂取率が減っている

理由として、朝に朝食を用意する時間や費用がないことが予想される。よって朝食摂取にはライフサイクルの規則性が求められると考えられ、その規則性のためには収入が多く安定していることが形成要因のひとつだと推測される。

また、細谷（2004）によると、栄養や調理に関する関心や栄養的満足度は高齢になるほど高く、女性のほうが男性よりもそれら関心だけでなく知識が多いことがわかる。このことから女性の方が男性よりも健康に対する関心が高いと考えられる。

その他にも、朝食を摂る頻度が高い人ほど抑うつ程度が低い理由として、生活が安定しており満足度が高いのではと考えられる。

よって上述より以下の仮説を設定した。

仮説 1　世帯年収が高い人ほど朝食を摂る頻度が高い。
仮説 2　高齢者の方が朝食を摂る頻度が高い。
仮説 3　女性の方が朝食を摂る頻度が高い。
仮説 4　朝食を摂る頻度が高い人ほど生活満足度が高い。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q1：あなたは、現在の生活全体にどのくらい満足していますか。（生活満足度反転）

1.満足　2.やや満足　3.どちらともいえない　4.やや不満　5.不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q22：あなたは、普段、どの程度朝食をとっていますか。（朝食頻度反転）

1.毎日　2.週に 5～6 回　3.週に 3～4 回　4.週に 1～2 回　5.まったく食べない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q51：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性　2.女性

上記の選択に対して、男性を 0、女性を 1 とする男性ダミーを作成した。

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢実数）

1.18 歳、19 歳　2. 20 代　3. 30 代　4. 40 代　5. 50 代　6. 60 代　7. 70 代以上

上記の選択肢を、1.18.5 歳、2.24.5 歳、3.34.5 歳、4.44.5 歳、5.54.5 歳、6.64.5 歳、7.74.5 歳の年齢実数に変換した。

Q62：過去一年間のあなたの世帯年収はどれぐらいですか。（世帯年収）

1.100 万円未満　2.100 万円~200 万円未満　3.200 万円~400 万円未満　4.400 万円~600 万円未満　5.600 万円~800 万円未満　6.800 万円~1000 万円未満　7.1000 万円~1500 万円未満　8.1500 万円以上　9.わからない

上記の選択肢を、1.200 万円未満、2.200 万円~400 万円未満、3.400 万円~600 万円未満、4.600 万円~800 万円未満、5.800 万円~1000 万円未満、6.1000 万円以上、の 6 カテゴリに合併した上で、9.わからないは欠損値として処理した。

4. 分析

はじめに世帯年収と朝食頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は世帯年収と朝食の頻度の二変数間でクロス集計表を作成したものである。まず朝食を「毎日食べる」と回答した人は、世帯年収が「1000 万円～1500 万円未満」と回答した人は 69.6%だが、それ以外の世帯年収を回答した人たちは 79.0%以上であった。一方、朝食を「まったく食べない」と回答した人は、世帯年収が「1500 万円以上」と回答した人たち内での割合が一番高く 10%であった。

またカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 27.714 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.086 と関連の強さは見られなかった。以上のことから、世帯年収と朝食頻度の二変数間の関連は、統計的にあまり有意な関連ではないと考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果にはならなかった。

次に年齢と朝食頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は年齢と朝食の頻度の二変数間でクロス集計表を作成したものである。朝食を「毎日食べる」と回答した人たちは、年齢が上がるにつれてその割合が上昇していることがわかる。また朝食を「まったく食べない」と回答した人は、20 代の 10.7%が、一番割合が高かった。

またカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 145.093 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.182 とある程度の関連の強さがみられる。以上のことから、年齢と朝食頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

次に性別と朝食頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は性別と朝食の頻度の二変数間でクロス集計表を作成したものである。朝食を「毎日食べる」と回答した人は、男性が 77.7%で女性が 82.4%と、女性のほうがその割合が高いことがわかる。また「まったく食べない」と回答した人は、男性が 6.3%で女性が 3.0%であった。

またカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 10.173 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.96 とある程度の関連の強さがみられる。以上のことから、年齢と朝食頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 1　Q62 世帯年収 と Q22 朝食の頻度 のクロス表

			Q22 朝食の頻度					合計
			毎日	週に5～6日	週に3～4日	週に1～2日	まったく食べない	
Q62 世帯年収	100万円未満	N	48	5	1	4	2	60
		%	80%	8%	2%	7%	3%	100%
	100万円～200万円未満	N	100	10	5	1	5	121
		%	83%	8%	4%	1%	4%	100%
	200万円～400万円未満	N	222	9	11	12	9	263
		%	84%	3%	4%	5%	3%	100%
	400万円～600万円未満	N	123	7	7	6	8	151
		%	81%	5%	5%	4%	5%	100%
	600万円～800万円未満	N	101	8	5	8	4	126
		%	80%	6%	4%	6%	3%	100%
	800万円～1000万円未満	N	79	9	4	4	4	100
		%	79%	9%	4%	4%	4%	100%
	1000万円～1500万円未満	N	55	6	6	5	7	79
		%	70%	8%	8%	6%	9%	100%
	1500万円以上	N	33	2	1	0	4	40
		%	83%	5%	3%	0%	10%	100%
合計		N	761	56	40	40	43	940
		%	81%	6%	4%	4%	5%	100%

x^2(df=28, N=940)=27.714*, Cramer V=.086*

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 2　Q52 年齢 と Q22 朝食の頻度 のクロス表

			Q22 朝食の頻度					合計
			毎日	週に5～6日	週に3～4日	週に1～2日	まったく食べない	
Q52 年齢	18歳、19歳	N	8	2	2	0	0	12
		%	66.7%	16.7%	16.7%	0.0%	0.0%	100.0%
	20代	N	34	13	11	9	8	75
		%	45.3%	17.3%	14.7%	12.0%	10.7%	100.0%
	30代	N	75	14	8	10	4	111
		%	67.6%	12.6%	7.2%	9.0%	3.6%	100.0%
	40代	N	128	14	8	7	16	173
		%	74.0%	8.1%	4.6%	4.0%	9.2%	100.0%
	50代	N	180	13	10	16	10	229
		%	78.6%	5.7%	4.4%	7.0%	4.4%	100.0%
	60代	N	163	8	6	0	8	185
		%	88.1%	4.3%	3.2%	0.0%	4.3%	100.0%
	70代	N	294	9	4	5	2	314
		%	93.6%	2.9%	1.3%	1.6%	0.6%	100.0%
合計		N	882	73	49	47	48	1099
		%	80.3%	6.6%	4.5%	4.3%	4.4%	100.0%

x^2(df=24, N=1099)=145.093***, Cramer V=.182***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 3　Q51 性別 と Q22 朝食の頻度 のクロス表

			Q22 朝食の頻度					合計
			毎日	週に5～6日	週に3～4日	週に1～2日	まったく食べない	
Q51 性別	男性	N	358	37	18	19	29	461
		%	77.7%	8.0%	3.9%	4.1%	6.3%	100.0%
	女性	N	526	36	30	27	19	638
		%	82.4%	5.6%	4.7%	4.2%	3.0%	100.0%
合計		N	884	73	48	46	48	1099
		%	80.4%	6.6%	4.4%	4.2%	4.4%	100.0%

x^2(df=4, N=1099)=10.173*, Cramer V=.096*

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に朝食頻度と生活満足度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 4 は朝食の頻度と生活満足度の二変数間でクロス集計表を作成したものである。全体として、朝食を食べる頻度がいずれであっても、「やや満足」と答える人の割合が一番高

いことがわかる。しかし「生活に満足している」と回答した人のなかで、朝食を「毎日食べる」と回答した人が 21.7%と一番割合が高かった。

またカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 10.283 であり、統計的に有意ではない。また、Cramer の連関係数は 0.48 で関連の強さはみられなかった。以上のことから、年齢と朝食頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連ではないと考えられる。これは、仮説 4 を支持する結果とはならなかった。

表 4　Q22 朝食の頻度 と Q1 生活満足度 のクロス表

			Q1 生活満足度					
			満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	合計
Q22 朝食の頻度	毎日	N	195	416	164	88	35	898
		%	22%	46%	18%	10%	4%	100%
	週に5～6日	N	16	33	16	6	4	75
		%	21%	44%	21%	8%	5%	100%
	週に3～4日	N	8	26	6	7	2	49
		%	16%	53%	12%	14%	4%	100%
	週に1～2日	N	7	20	9	9	2	47
		%	15%	43%	19%	19%	4%	100%
	まったく食べない	N	9	21	11	6	1	48
		%	19%	44%	23%	13%	2%	100%
合計		N	235	516	206	116	44	1117
		%	21%	46%	18%	10%	4%	100%

x^2(df=16, N=1117)=10.283, Cramer V=.048

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表5は、朝食の頻度（反転）を従属変数、世帯収入実額、女性ダミー、年齢（実数）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済みR2値は0.074であり、投入した独立変数によって従属変数である朝食の頻度（反転）の分散の7.4%が説明されている。

結果をみると、年齢（実数）、女性ダミーが正で有意であった。これは、高年齢で女性であるほど朝食の頻度が高いことがわかる。一方、世帯年収実額は有意な効果がみられなかった。標準化係数（β）をみると、年齢実数が 0.266 と大きく、年齢が朝食の頻度に与える影響が強いといえる。

上記の結果は仮説 2 を支持する結果である。

表6は、生活満足度（反転）を従属変数、朝食の頻度（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済みR2値は0.081であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度（反転）の分散の8.1%が説明されている。

結果をみると、朝食の頻度は有意な効果がみられなかった。標準化係数（β）をみると、-0.45 であった。

上記の結果は仮説 4 を支持しない結果である。

表 5　Q22 朝食の頻度（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
（定数）	3.459	0.153		***
Q62 世帯年収実額（100万円）	0.000	0.008	-0.010	
Q52 年齢（実数）	0.018	0.002	0.266	***
Q51 女性ダミー	0.143	0.068	0.067	*
調整済みR^2	0.074			
N	934			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 6　Q1 生活満足度（反転）の単回帰分析

	B	SE	β	
（定数）	3.500	0.138		***
Q22 朝食の頻度（反転）	0.044	0.030	-0.450	
調整済みR^2	0.081			
N	1116			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究は属性が朝食の頻度にどのような影響を及ぼしているのか、また朝食の頻度が生活満足度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「世帯年収が高い人ほど朝食を摂る頻度が高い」仮説 2「高齢者の方が朝食を摂る頻度が高い」仮説 3「女性の方が朝食を摂る頻度が高い」仮説 4「朝食を摂る頻度が高い人ほど生活満足度が高い」という 4 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、世帯年収の高さと朝食の頻度に関連性は見られず、仮説 1 を支持する結果にはならなかった。また、高年齢である人や女性のほうが、朝食頻度が高いと回答する割合が多いことから、仮説 2、3 が支持された。朝食頻度と生活満足度には関連が見られず、仮説 4 を支持する結果にはならなかった。

重回帰分析の結果をまとめると、高年齢で女性であるほど朝食の頻度が高い傾向にあることがわかる。これらから、女性の方が調理や栄養にへの関心があり、時間の余裕がある高齢者のほうが朝食の頻度が高いと考えられる。しかし、現在朝食の習慣がない若者が年を取

った際に、時間があるからとはいえ、朝食の頻度を高くするのかどうかは不明だ。現高齢者の方が朝食の頻度が高い理由として、幼い頃から毎日朝食を食べる習慣があったからこそ、今でもその習慣で、朝食の頻度が高いという結果になったのではないかとも考えられる。

また、全体として朝食頻度が低い人は少ないという結果がみられた。今回は朝食と生活満足度の関連性は見られなかったものの、朝食を毎日食べることは、健康的関心など、生活満足度以外のものに関連する可能性もある。朝食が生活にもたらす影響や、属性が朝食頻度にもたらす影響は、ほかの視点からも研究していく必要がある。

6. 文献

[1]…厚生労働省（2019）「令和元年国民健康・栄養調査報告」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/eiyou/r1-houkoku_00002.html（2024 年 7 月 11 日閲覧）

[2]…中出麻紀子（2020）「朝食時における家族との共食状況と成人の朝食欠食との関連」『日本健康教育学会誌』28(3):pp.198-206

[3]…厚生労働省（2020）「平成 30 年「国民健康・栄養調査」の結果」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/eiyou/h30-houkoku_00001.html（2024 年 7 月 11 日閲覧）

[4]…Takako MIki, et al. （2019）「Breakfast consumption and the risk of depressive symptoms: The Furukawa Nutrition and Health Study」『Psychiatry Research』273:pp.551-558

[5]…西基（2008）「朝食摂取と勤労者のメンタルヘルス」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』4(1):pp.79-80

[6]…細谷他（2004）「生涯における食生活に対する関心・意識・知識が健康的な食行動に及ぼす影響」『和歌山大学教育学部紀要. 自然科学』pp.53-61

第４章　市営バスの利用頻度の関係について

井上　勝喜

1.　はじめに

本章では、バスの利用頻度が年齢、利便性、満足度といった要因によってどのように影響されるかを分析し、今後のバスの利用者数を増加させるための方策について考察する。

近年、地方ではバスの利用者が減少するなどの背景から、バス路線の廃止が目立つ。減便や路線の廃止の背景には、いくつかの要因がある。中でも高槻市（2024）は、「2024 年問題」と呼ばれる時間外労働に年 960 時間の上限が課される問題を挙げていた。2024 年 4 月からは、拘束時間や休息期間が厳格化され、乗務員の労働時間が変化したと述べており、その結果、始発便の繰り下げや繰り上げが必要となり、また、他のバス会社では乗務員不足からバス事業からの撤退や大幅な減便、路線廃止なども発生したと述べている。

内閣府(2019)のデータによれば、高齢者の利用交通手段は、徒歩が 56%、自動車が 57%、自転車が 22%、電車やバスはいずれも 20%となっている。近年は高齢者の自動車免許の返納が増加しており、自動車以外の交通手段を利用する人が増えると予想されるため、今後ますます公共交通機関の利用が増えるのではないかと考えられる。

したがって、本研究では、どのような人がバスを利用するのかを調べるために、バスの利用頻度と年齢、利便性、満足度との関係性について明らかにすることを目的とする。そして、バスの利用者数の増加をさせるための方策について考察する。

2.　仮説

2.1. 先行研究

現在、バスは高齢化社会において必要不可欠な移動手段である。先に述べた通り、自動車免許の返納が増える中で、公共交通機関は高齢者を含む多くの人々の生活にとって欠かせない存在となっている。しかし、バスの減便が目立ち、バスの利便性の低下が目立つ。金井ら(2003)によるとバス路線の廃止、減便により利便性が低下し、これがバスの利用環境の悪化を招き、さらに利用者数の減少を引き起こす悪循環を生んでいると述べている。

金井(2003)によると、バス路線の認知度が利用者に影響を与えていることを述べていた。バスの情報不足によって、その利便性を過小評価し、自動車の利便性と比較することで、さらにバスの利便性を過小に認識していることにより、利用可能交通手段として認識されていないのが現状であると述べている。

鼻崎(2014)によると、週に 1~2 日と週に 3~4 日の高い頻度で市バスを利用する人は、60 代、70 代以上が半分以上を占めているため、高齢者の方がバスを利用する頻度が高いと考えられ、通勤や通学で市バスを利用する場面を除いた場合、高齢者の方がバスを利用する頻

度が高まることが示されていた。

下仲(2013)によると、バスの利用頻度が多いほど、バスの満足度が大きいことが明らかにされている。また、川口(2013)によると、バスに対する満足度が高いほど、高槻市営バスの利用頻度が高いことが明らかにされていた。よって、この二つの要因は相互に関係していると考えられる。

2.2. 仮説

先行研究より、年齢がバスの利用頻度に影響を与え、高齢者であるほどバスの利用頻度が多くなるということが明らかとなった。また、バスの満足度が高いほど、バスの利用頻度が高いことが明らかとなった。金井(2003)の研究により、認知度が利便性を過小評価していることが分かったが、そもそも運行本数が少ない、近くに路線やバス停がないから利用頻度が下がると考えた。

本調査では、バスの利用頻度が年齢、利便性、満足度といった要因にどのように影響されるかを明らかにすることを目的としている。特に、新型コロナウイルスの流行が収束しつつある中で、再びバスの利用者数の増加が見込まれる現状に注目する。また、先に述べた 2024 年問題により、バスの減便や路線廃止が進んでいることが、バスの利用頻度に与える影響を様々な要因を用いて考察する。よって、本研究の仮説は以下の通りである。

仮説 1　高齢者であるほどバスの利用頻度は高い
仮説 2　バスの満足度が高いほど利用頻度が高い
仮説 3　利便性が高いと利用頻度が高い

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q17：あなたは、高槻市営バスについて、どのくらい満足していますか。（満足度（反転））

1.満足　2.やや満足　3.やや不満　4.不満

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q18：あなたは、普段、高槻市営バスをどのくらいの頻度で利用していますか。（利用頻度（反転））

1.ほぼ毎日 2.週に 3~4 日 ３.週に 1~2 日 4.月に数日 5.利用しない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、利用頻度が多くなるように尺度の反転を行った。

Q19：高槻市営バスに関する以下の項目について、あなたのお考えをおうかがいします。

Ａ．運行本数が少ない

1.そう思う 2.ややそう思う 3.どちらともいえない 4.あまりそう思わない 5.そう思わない

Ｂ．近くに路線やバス停がない

1.そう思う 2.ややそう思う 3.どちらともいえない 4.あまりそう思わない 5.そう思わない

Q51：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性 2.女性

上記の選択肢に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢（実数））

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 4.40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

上記の選択肢に対して、18歳、19歳を18.5、20代を24.5、30代を34.5、40代を44.5、50代を54.5、60代を64.5、70代を74.5として、実数化を行った。

Q62: 過去一年間のあなたの世帯の収入はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。（世帯収入額（万円））

1.100 万円未満 2.100 万円~200 万円未満 3.200 万円~400 万円未満 4.400 万円~600 万円未満 5.600 万円~800 万円未満 6.800 万円~1000 万円未満 7.1000 万円~1500 万円未満 8.1500 万円~以上 9.わからない

上記の選択肢に対して、100万円未満を50、100万円～200万円未満を150、200万円～400万円未満を300、400万円～600万円未満を500、600万円～800万円未満を700、800万円～1000万円未満を900、1000万円～1500万円未満を1250、1500万円以上を1750として、実数化した上で、わからないは欠損値として処理した。

4. 分析

はじめに、年齢と高槻市営バスの利用頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、年齢と高槻市営バスの利用頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、年齢の設問に「70 代」と回答した人で、バスの利用頻度が「ほぼ毎日」「週に 3 日～4 日」と回答した人は合わせて 11%であり、年齢が「20 代」や「30 代」と回答した人で、バスの利用頻度が「ほぼ毎日」「週に 3 日～4 日」と回答した人は,それぞれ 13%と 8%である。また、年齢の設問に「70 代」と回答した人で、バスの利用頻度が「利用しない」と回答した人は、25%であるが、年齢の設問に「20 代」「30 代」と回答した人で、バスの利用頻度が「利用しない」回答した人は,それぞれ 42%,50%である。ここから、高齢者であるほどバスの利用頻度は高いということはわからなかったが、高齢者であるほどバスを利用するということはわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 113.815 のであり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.162 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから年齢とバスの利用頻度の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。

表 1　Q18 高槻市営バスの利用頻度と Q52 年齢のクロス集計表

			Q18 高槻市営バスの利用頻度					
			ほぼ毎日	週に3～4日	週に1～2日	月に数日	利用しない	合計
Q52 年齢	18歳、19歳	N	0	0	0	5	7	12
		%	0%	0%	0%	42%	58%	100%
	20代	N	7	3	3	30	31	74
		%	9%	4%	4%	41%	42%	100%
	30代	N	6	2	2	44	55	109
		%	6%	2%	2%	40%	50%	100%
	40代	N	11	2	7	60	93	173
		%	6%	1%	4%	35%	54%	100%
	50代	N	8	10	11	76	120	225
		%	4%	4%	5%	34%	53%	100%
	60代	N	6	9	7	65	98	185
		%	3%	5%	4%	35%	53%	100%
	70代	N	10	26	48	149	79	312
		%	3%	8%	15%	48%	25%	100%
合計		N	48	52	78	429	483	1090
		%	4%	5%	7%	39%	44%	100%

x2(df=24, N=1074)=113.815***, Cramer V=.162***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、バスの満足度とバスの利用頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、バスの満足度とバスの利用頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を作成したものである。まず、バスの満足度の設問に「満足」「やや満足」と回答した人で、バスの利用頻度を「ほぼ毎日」「週に 3～4 日」と回答した人は合わせて、24%であるが、満足度が「やや不満」「不満」と回答した人がバスの利用頻度を「ほぼ毎日」「週に 3～4 日」と回答した人は合わせて、18%である。ここから、バスの満足度が高いほどバスの利用頻度が高いことがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 80.083 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.158 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、バスの満足度とバスの利用頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 2　Q18 高槻市営バスの利用頻度と Q17 高槻市営バスの満足度のクロス集計表

			Q18 高槻市営バスの利用頻度					
			ほぼ毎日	週に3～4日	週に1～2日	月に数日	利用しない	合計
Q17 高槻市営バスへの満足度	満足	N	18	22	34	104	54	232
		%	8%	9%	15%	45%	23%	100%
	やや満足	N	13	21	31	207	239	511
		%	3%	4%	6%	41%	47%	100%
	やや不満	N	11	10	9	99	125	254
		%	4%	4%	4%	39%	49%	100%
	不満	N	7	1	8	21	40	77
		%	9%	1%	10%	27%	52%	100%
合計		N	49	54	82	431	458	1074
		%	5%	5%	8%	40%	43%	100%

x2(df=12, N=1074)=80.083***, Cramer V=.158***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、バスの運行本数が少ないとバスの利用頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は,バスの運行本数が少ないとバスの利用頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。バスの本数が少ないという設問に「そう思う」「ややそう思う」と回答した人で、バスの利用頻度が「ほぼ毎日」「週に 3～4 日」と回答した人は合わせて 27%である一方で、バスの本数が少ないという設問に「あまりそう思わない」「そう思わない」と回

答した人で、バスの利用頻度が「ほぼ毎日」「週に 3～4 日」と回答した人は合わせて 22%である。ここから、バスの運行本数が少ないと思うほどバスの利用頻度が高いことがわかる。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 81.577 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.137 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、バスの運行本数が少ないとバスの利用頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。

表 3　Q18 高槻市営バスの利用頻度と Q19_A 高槻市営バスの運行本数のクロス集計表

			Q18 高槻市営バスの利用頻度					
			ほぼ毎日	週に3～4日	週に1～2日	月に数日	利用しない	合計
Q19_A 高槻市営バス: 運行本数が少ない	そう思う	N	19	9	12	86	78	204
		%	9%	4%	6%	42%	38%	100%
	ややそう思う	N	11	20	23	92	70	216
		%	5%	9%	11%	43%	32%	100%
	どちらともいえない	N	2	13	21	124	212	372
		%	1%	3%	6%	33%	57%	100%
	あまりそう思わない	N	11	6	21	93	65	196
		%	6%	3%	11%	47%	33%	100%
	そう思わない	N	7	6	5	36	49	103
		%	7%	6%	5%	35%	48%	100%
合計		N	50	54	82	431	474	1091
		%	5%	5%	8%	40%	43%	100%

x2(df=16, N=1074)=81.577***, Cramer V=.137***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、近くに路線やバス停がないと思うかとバスの利用頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。表 4 は、近くに路線やバス停がないと思うかとバスの利用頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。

まず、近くに路線やバス停がないと思うかという設問に「そう思う」「ややそう思う」と回答した人で、バスの利用頻度が「ほぼ毎日」「週に 3～4 日」と回答した人は合わせて 15%であるが、近くに路線やバス停がないと思うかという設問に「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した人で、バスの利用頻度が「ほぼ毎日」「週に 3～4 日」と回答した人は合わせて、22%である。ここから、近くに路線やバス停がないと思わない人はバスの利用頻度は高いことがわかる。

表 4 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 49.174 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.106 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、近くに路線やバス停がないと思うかとバスの利用頻度の二変数間の関連は、統計

的に有意な関連であると考えられる。

表 4　Q18 高槻市営バスの利用頻度と Q19_B 近くに路線やバス停ないと思うかのクロス集計表

			Q18 高槻市営バスの利用頻度					
			ほぼ毎日	週に3～4日	週に1～2日	月に数日	利用しない	合計
Q19_B 高槻市営バス: 近くに路線やバス停がない	そう思う	N	4	3	5	18	54	84
		%	5%	4%	6%	21%	64%	100%
	ややそう思う	N	4	4	8	52	68	136
		%	3%	3%	6%	38%	50%	100%
	どちらともいえない	N	7	10	12	75	121	225
		%	3%	4%	5%	33%	54%	100%
	あまりそう思わない	N	14	15	33	136	109	307
		%	5%	5%	11%	44%	36%	100%
	そう思わない	N	21	22	22	150	127	342
		%	6%	6%	6%	44%	37%	100%
合計		N	50	54	80	431	479	1094
		%	5%	5%	7%	39%	44%	100%

x2(df=16, N=1074)=49.174***, Cramer V=.106***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 5 は、高槻市営バスの利用頻度（反転）を従属変数、女性ダミー、高槻市営バスの満足度（反転）、世帯収入実額（万円）、年齢（実数）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R 2 値は 0.031 であり、投入した独立変数によって従属変数である利用頻度の分散の 3.1%が説明されている。

結果をみると、年齢、満足度が正で有意、世帯収入額が負で有意であった。これは、高年齢で満足度が高い人ほどバスの利用頻度が高いことがわかる。標準化係数（β）をみると、満足度が 0.152 と大きく、満足度がバスの利用頻度に与える影響が強いといえる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説 2 を支持する結果である。

表 5　Q18 高槻市営バスの利用頻度の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	1.052	0.214		***
Q51女性ダミー	0.033	0.070	0.015	
Q52年齢(実数)	0.005	0.002	0.082	*
Q17高槻市営バスの満足度(反転)	0.152	0.041	0.122	***
Q62世帯収入(万円)	-0.015	0.009	-0.059	†
調整済みR^2	0.031			
N	990			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究はバスの満足度や利便性、年齢といった違いがバスの利用頻度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「高齢者であるほどバスの利用頻度は高い」仮説 2「バスの満足度が高いほど利用頻度が高い」仮説 3「利便性が高いと利用頻度が高い」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、高齢者であるほどバスの利用頻度は高いということはわからず、仮説 1 が支持されなかった。しかし、高齢者であるほどバスを利用するということはわかった。高齢者は移動手段としてのバスを利用するが、頻度は高くないのではと考えられる。また、バスの満足度が高いほど、バスの利用頻度が高いということがわかるので仮説 2 が支持された。バスの運行本数が少ないと思うほど、近くに路線やバス停がないと思わない人ほどバスの利用頻度が高いということがわかった。これは、特に都市部における傾向であると考えられる。都市部ではバスの運行本数や停留所の数が多く、利用者にとって利便性が高い環境が整っているが、路線によっては運行本数が少ないと感じることもある。普段からバスを利用しているからこそ、運行本数の少なさを感じつつも、逆に利用頻度が高まっているのではないかと考えられる。

以上のことから、バスの利用者数を増やすための方策として、まず、高齢者層をターゲットにした施策が重要であると考えられる。高齢者は、移動手段としてバスを利用する傾向があり、免許返納に伴い、公共交通機関の利用がますます増加すると見込まれている。したがって、高齢者をターゲットにしたサービスを提供することは、バスの利用頻度を高め、結果的に利用者数の増加に繋がると考えられる。

また、特に郊外部の利便性向上が重要ではないかと考えた。都市部ではすでに十分な運行本数や停留所の数が整備されているが、郊外部ではこれが不足している。そこで、巡回バスの導入や、主要な交通機関と連携した送迎バスの運行が効果的ではないかと考える。これにより、郊外部でも利用者の利便性を高め、利用者数の増加を図ることができると考えられる。

こうした、取り組みは利用者の満足に繋がり、利用頻度の向上に繋がるのではと考えられる。

6. 文献

[1]…国土交通省[地域交通の現況について]
https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/transport/content/001484125.pdf （2024 年 6 月 20 日閲覧）

[2]…廣森海斗（2021）「市営バスへの認知度と満足度・利用頻度」『2021 年度社会調査実習』第 13 章:p208

[3]…内閣府「令和元年版高齢社会白書（全体版）（2019）」

https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf_index.html（2024 年 6 月 27 日閲覧）
[4]…金井昌信・青島縮次郎・杉木直・柳澤一貴（2003）「バス非利用者の態度・行動変容に関するバス利用モニター実験の効果分析」2003 巻 737 号 p. 67-78
[5]…河本一郎・藤井聡・北村隆一（2001）「一時的構造変化政策の行動と心理への影響: 運転者への無料バス定期券配布実験」『土木計画学・講演集』Vo1. 24,
[6]…金井昌信・青島縮次郎・杉木直（2002)「バス非利用者のバス路線に対する認知度を考慮した今後のバス利用意向とバス路線存続意向との関連分析」『土木計画学研究・講演集』Vol. 26
[7]…高槻市営バスホームページ IR 情報
https://www.citybus.city.takatsuki.osaka.jp/koutsuu-bu/ir/ （2024 年 6 月 20 日閲覧）
[8]…高槻市交通部「高槻市営バス経営戦略」
https://www.citybus.city.takatsuki.osaka.jp/koutsuu-bu/detail/2020112600019/
（2024 年 6 月 20 日閲覧）
[9]…鼻崎将（2014）「バスの利用頻度に関する調査」『2014 年度社会調査実習』19 章:p183~186
[10]…川口千里（2013）「高槻市営バスの利用要因」『2013 年度社会調査実習』第 29 章:p231~2235
[11]…下仲悠希（2013）「高槻市営バスの満足度に関する要因についての分析」『2013 年度社会調査実習』第 29 章:p236~240
[12]…高槻市営バス（2024）「「2024 年問題」高槻市営バスへの影響」
https://www.citybus.city.takatsuki.osaka.jp/koutsuu-bu/detail/2024020800189/
（2024 年 7 月 10 日閲覧）

第５章　劇場へ足を運ぶ人の特徴

石崎璃

1.　はじめに

文化庁（2012）によると、劇場、音楽堂等は、文化芸術を継承、創造、発信する場であるとともに，人々が集い，人々に感動と希望をもたらし，人々の創造性を育み，人々が共に生きる絆を形成するための地域の文化拠点である。しかし近年、コロナウイルスによる客足減少などの不況に伴うスポンサー企業の撤退で劇場の維持が困難となり、小劇場が次々と閉鎖に追い込まれている。そしてぴあ総研(2023)のデータによると、ライブ・エンタテインメント市場規模の音楽の分類はほぼコロナ渦前の勢いを取り戻しているのに対し、ステージ関係はそこまで伸びが良くないのが現状である。

本章では、観劇に行く人にはどういった特徴があるのか、ということを３つの異なる要素によって検討していく。

2.　仮説

2.1. 先行研究

第１に竹澤、広田　（2022）の研究から、自由に好きな場所を見られること、早送りや巻き戻しができる利点に需要があることが分かった。

第２に片岡（1992）の研究からは、両親の学歴によって、子供に影響が出ており、高い学歴を持つ両親ほど、正統文化的活動（クラシック音楽のコンサートや美術館へ行くなど）を行う子供に育つ傾向があると分かった。これは両親の学歴によって子どもへの教育が変わったため、影響が出ているのではないかと考えた。

第３に山本、久木（2012）によると、観劇きっかけにはチラシが多いことが分かった。チラシを受け取り、目を通さず捨てる人もいる中で文章に目を通すのは普段から読書習慣があるからではないかと考えた。

第４に薄木、坂爪（2015）の研究から、現在の演劇は観客を呼べるようなタレントを主役にする等によって流行に流されやすい観客が増加していることが分かった。これより流行に敏感な若者の方が観劇するのではないかと考えた。

2.2. 仮説

コロナによってオンラインで楽しめる娯楽が増えたため、わざわざ劇場に訪れる意味がなくなってきているのではないかと考えた。しかし聖地巡礼のような推しのために現地に訪れる行為を行う人もいる。これは実際に赴く行動力がある若者が多いのではないかと考えた。

また、高い学歴を持つ両親ほど幼いころから子供に正統文化的活動にふれるきっかけを多く作るため、幼いことから行っていることが習慣になっているのではないかと推測した。そのため、チラシが観劇に行くきっかけになる人は幼いころから読書習慣がついており、受け取ったら読む癖があるからではないかと考えた。

仮説 1　ドラマを見る人ほど観劇しない。
仮説 2　幼いころからの読書習慣があった人ほど観劇する。
仮説 3　年齢が低い人ほど観劇する。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q24：あなたは、次のような活動をどのくらいしていますか。
A.演劇を見に行く（観劇頻度）
1.月に一回以上　2.年に数回ぐらい　3.年に一回ぐらい　4.数年に一回ぐらい　5.まったくない

Q28：あなたは、普段、テレビやインターネットで、ドラマをどのくらいごらんになりますか。（ドラマ視聴頻度）
1.ほぼ毎日　2.週数回程度　3.週 1 回程度　4.それ以下　5.まったく見ない

Q49：あなたはが子どもの頃、家族の誰かが本を読んでくれたことは、どの程度ありましたか。（読書習慣）
1.よくあった　2.ときどきあった　3.あまりなかった　4.まったくなかった

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢）
1. 18、19 歳　2. 20 代　3. 30 代　4. 40 代　5. 50 代　6. 60 代　7. 70 代以上

4.　分析

初めに、ドラマ視聴頻度と観劇頻度の単純な二変数間の関連について、クロス集計表を用

いて検討する。

表 1 はドラマ視聴頻度と観劇頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、観劇頻度とドラマ視聴頻度はばらついているが、ドラマ視聴頻度の設問で「まったく見ない」と回答した人で観劇頻度が「まったくない」と回答した人は 76%であるのに対し、「ほぼ毎日見る」と回答した人で観劇頻度が「まったくない」と回答した人は 52%と少なくなっている。また、ドラマ視聴頻度で「まったく見ない」と回答した人で、観劇頻度が「月に一回以上」「年に数回ぐらい」と回答した人は合わせて 9%であるが、ドラマ視聴で「ほぼ毎日」と回答した人で観劇頻度が「月に一回以上」「年に数回ぐらい」と回答した人は合わせて 14%である。ここから、ドラマ視聴頻度が高ければ観劇頻度が高くなる傾向にあることがわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗検定は 43.539 であり、1%水準で統計的に有意である。しかし Cramer の連関係数は 0.099 であり、あまり関連は見られない。これは仮設 1 を支持しない結果である。

表 1　Q28 ドラマ視聴頻度と Q24 観劇頻度のクロス集計表

			Q24 観劇頻度					
			月に1回以上	年に数回ぐらい	年に1回ぐらい	数年に1回ぐらい	まったくない	合計
Q28 ドラマ視聴頻度	ほぼ毎日	N	4	46	47	75	183	355
		%	1%	13%	13%	21%	52%	100%
	週数回程度	N	5	42	28	52	163	290
		%	2%	14%	10%	18%	56%	100%
	週1回程度	N	1	27	19	24	77	148
		%	1%	18%	13%	16%	52%	100%
	それ以下	N	2	12	10	19	76	119
		%	2%	10%	8%	16%	64%	100%
	まったく見ない	N	2	16	12	20	155	205
		%	1%	8%	6%	10%	76%	100%
合計		N	14	143	116	190	654	1117
		%	1%	13%	10%	17%	59%	100%

x^2(df=21, N=1117)=43.539***, Cramer V=.99***
*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、読書習慣と観劇頻度の単純な二変数間の関連について、クロス集計表を用いて検討する。

表 2 は読書習慣と観劇頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、読書習慣に「よくあった」「まったくなかった」と回答した人で観劇頻度に「月に 1 回以上」「まったくない」と回答した人は同じであり、あまり傾向は見られない。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、関連はみられない。これは仮設 2 を支持しない結果である。

表 2　Q49 読書習慣と Q24 観劇頻度

			Q24 観劇頻度					
			月に1回以上	年に数回ぐらい	年に1回ぐらい	数年に1回ぐらい	まったくない	合計
Q49 読書習慣	よくあった	N	4	24	17	31	129	205
		%	2%	12%	8%	15%	63%	100%
	ときどきあった	N	2	46	33	54	176	311
		%	1%	15%	11%	17%	57%	100%
	あまりなかった	N	4	51	42	66	211	374
		%	1%	14%	11%	18%	56%	100%
	まったくなかった	N	4	16	21	32	126	199
		%	2%	8%	11%	16%	63%	100%
合計		N	14	137	113	183	642	1089
		%	1%	13%	10%	17%	59%	100%

x^2(df=21, N=1089)=11.238, Cramer V=0.59
*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、年齢と観劇頻度の単純な二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は年齢と観劇頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。年齢に「10 代」と回答した人で、観劇頻度に「年に数回ぐらい」「まったくない」と回答した人は合わせて 66%である一方で、年齢に「60 代」と回答した人で観劇頻度に「年に数回ぐらい」「まったくない」と回答した人は合わせて 68%である。また、年齢に「20 代」と回答した人で観劇頻度に「月に 1 回以上」「年に数回ぐらい」と回答した人は合わせて 8%である一方で、年齢に「60 代」と回答した人で観劇頻度に「月に 1 回以上」「年に数回ぐらい」と回答した人は合わせて 15%である。ここから、年齢が高くなるほど観劇頻度が高くなることがわかる。

表 3 のカイ二乗検定をみると 51.779 であり、1%水準で有意であり、Cramer の連関係数は 0.109 と関連がみられる。よって年齢が高くなるほど観劇に行く人が多いということが分かり、これは仮説 3 を支持しない結果である。

表 3　Q52 年齢と Q24 観劇頻度のクロス集計表

			Q24 観劇頻度					
			月に1回以上	年に数回ぐらい	年に1回ぐらい	数年に1回ぐらい	まったくない	合計
Q52 年齢	18,19歳	N	0	2	2	2	6	12
		%	0.0%	16.7%	16.7%	16.7%	50.0%	100.0%
	20代	N	0	6	5	9	55	75
		%	0.0%	8.0%	6.7%	12.0%	73.3%	100.0%
	３０代	N	2	7	10	12	80	111
		%	1.8%	6.3%	9.0%	10.8%	72.1%	100.0%
	４０代	N	2	16	10	28	117	173
		%	1.2%	9.2%	5.8%	16.2%	67.6%	100.0%
	５０代	N	4	33	25	40	127	229
		%	1.7%	14.4%	10.9%	17.5%	55.5%	100.0%
	６０代	N	2	34	12	29	108	185
		%	1.3%	14.1%	15.7%	20.8%	48.2%	100.0%
合計		N	14	142	113	185	644	1098
		%	1.3%	12.9%	10.3%	16.8%	58.7%	100.0%

x^2(df=21, N=1098)=51.779***, Cramer V=.109***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5.　考察

本研究はどういった人が感激にいくかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「ドラマを見る人ほど観劇しない。」仮説 2「幼いころからの読書習慣があった人ほど観劇する。」仮説 3「年齢が低い人ほど観劇する。」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、年齢が高い人ほど観劇することがわかり、仮説 3 とは逆のことが支持された。また、仮説 1 は緩やかな相関がみられたため、見ているドラマの種類や時間帯、録画かどうかなどさらに限定して分析していくと相関がみられるのではないかと思われる。また、仮説 2 に関してはポスターやチラシを目にする機会がある前提で行われていたため、まず目にすることがあるかどうかから調べていくべきだと思った。

全体を見てみると相関がでたデータが少なく、支持された仮説がないため、今後は異なった視点からアプローチしていく必要がある。

6.　文献

[1]…竹澤智美・広田すみれ（2022）「演劇のオンライン配信と劇場という場の違い(1)」『日心第 86 回大会』p835

[2]…片岡栄美（1992）「社会階層と文化的再生産」『特集　階層・移動研究の展望』第 7 巻 1 号 p.33-55
[3]…山本健太・久木元美琴（2012）「東京における小劇場演劇観劇者の行動特性」『日本地理学会発表要旨集』
[4]…薄木梓・坂爪裕（2014）「演劇における観客創出装置：やる演劇から見る演劇へ」『修士学位論文.2014 年度経営学第 2914 号』
[5]…ぴあ株式会社（2023）「ライブ・エンタテインメント市場は力強く回復。2023 年予測値は前水準より一段の上振れ濃厚」
(https://corporate.pia.jp/news/detail_live_enta20231222.html 2024/12/12)
[6]…文化庁（2012）「劇場，音楽堂等の制度的な在り方に関するまとめ」『劇場・音楽堂等の制度的な在り方に関する検討会』

第 6 章　詐欺不安の傾向とメディア利用の関係

田井 豊浩

1.　はじめに

本章では、詐欺不安の傾向とメディア利用について分析を行う。現代社会において、詐欺の手法や事例が巧妙化しており、詐欺被害に係る認知数も年々増加傾向にある。警視庁によると令和 5 年度の詐欺被害件数は 19,038 件、被害額は 452.6 億円となっており、社会問題となっている。また高齢者の法人被害を除いた総認知件数に占める割合は 78.3%を占めており、高齢者に対する脅威は日々強大になりつつある。阪口祐介（2008）によれば、日本社会における人びとの犯罪不安や治安悪化に対する意識は、1990 年代後半より急激に上昇し、犯罪を深刻な社会問題として捉えるようになったと指摘している。詐欺犯罪報道についても、マスメディアが犯罪を報じない日はない。そして、日々繰り返される犯罪報道は、それに接する人びとに対して何かしらの影響を与えている。

本章では詐欺に対する不安意識について調査し、不安意識を抱く傾向について考察する。また、メディア利用と詐欺犯罪に対する不安意識への影響についてメディア利用時間の調査から詐欺不安とメディア利用の因果関係について検討していく。

2.　仮説

2.1. 先行研究

木村敦（2022）は加齢に伴う認知機能低下による詐欺被害の増加を指摘しており、加齢に伴う前頭前野腹内側部の機能低下により意思決定が熟慮型でなく直感型に偏りやすいことが一因とされる。オレオレ詐欺などでは身内のトラブルという情報と詐欺師が装う弁護士・警察など権威者という情報が提示されることで、熟慮を伴わない短絡的な意思決定がなされやすくなるという。意思決定能力の強弱によって詐欺に対する不安意識がどのように変化するかを調査し、傾向について検討する。

また大谷奈緒子ら（2016）によると、個人属性による犯罪との距離感も、メディア接触と同じく、人びとの犯罪不安を増す要因になっていると考えられると述べている。メディア利用の時間によって詐欺に対する不安意識がどのように変化するかも調査し、不安意識の傾向についてメディア利用という側面からも検討する。

2.2. 仮説

木村（2022）の先行研究から、詐欺の被害意識は加齢を伴うほど詐欺被害の増加傾向であるため、その分詐欺に対する不安意識が高まるのではないかと考えられる。不安意識の傾向を考察するために、意思決定尺度と詐欺不安意識を定義し、仮説を設定した。

また、大谷ら（2016）の研究よりメディア利用の時間によって詐欺に対する不安意識がどのように変化するかを考察するためには報道を日常的に触れている人詐欺に対する不安意識について関係調査のため、メディア利用尺度を設定し、仮説を設定した。

仮説１　周りに流されやすいと感じる人は詐欺に対して不安意識を感じやすい。
仮説２　高齢者は詐欺に対して不安意識を感じている。
仮説３　高齢者は周りに流されやすいと感じている。
仮説４　報道を日常的に見ている人は詐欺に対する不安意識が強い。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Ｑ２６：あなたのテレビの視聴時間は、一日あたりどのくらいですか。（メディア利用尺度）

０.まったく見ない 1.30 分未満 2.30 分以上 1 時間未満 3.1 時間以上 2 時間未満 4.2 時間以上 3 時間未満 5.3 時間以上 5 時間未満 6.5 時間以上 7 時間未満 7.7 時間以上

Ｑ３０．あなたは、普段、どんなメディアでニュースを見聞きしますか。最も多く接するメディアを１つ選んでください。（メディア利用尺度（テレビダミー））

1.テレビ　2.新聞（電子版も含む） 3.ラジオ 4.インターネット（ネットニュース、Youtube などの動画サイト、SNS など） 5.その他 6.ニュースはまったく見聞きしない
上記の選択に対して、テレビを 1、その他を 0 とするとするテレビダミーを作成した

Ｑ４５：あなたは、自分の判断が不安になり、人に合わせて自分の意見を変えることが、どの程度ありますか。（意識決定尺度）

1.よくある 2.ときどきある 3.あまりない 4.まったくない

Ｑ４６：あなたは、知り合いから聞いた情報に影響されやすい方ですか。（意思決定尺度）

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思う 4.そう思わない

Ｑ４７．あなたは、ご自身が詐欺の被害に遭うことはないと思いますか。（詐欺不安尺度（反

転））

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1.18 歳、19 歳 2.20 代 3.30 代 .40 代 5.50 代 6.60 代 7.70 代以上

Q61：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1. 男性 2. 女性

上記の選択に対して、男性を0、女性を1とする女性ダミーを作成した。

4. 分析

はじめに、意思決定尺度と詐欺被害不安尺度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、意思決定の強弱と詐欺不安の二変数についてクロス集計表を作成したものである。意思決定の質問で「よくある」と回答した人で詐欺不安の質問で「そう思う」「ややそう思う」と回答した割合の合計は 57%であった。しかし、意思決定の質問で「あまりない」「まったくない」と回答した割合はそれぞれ 55%、46%であり、意思決定尺度の強弱によって詐欺不安の強弱に違いが生じていない事が分かる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 28.922 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.162 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、意思決定尺度と詐欺不安尺度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持しない結果となる。

表 1　Q47 詐欺不安尺度と Q45 意思決定尺度のクロス集計表

			Q47 ご自身が詐欺の被害に合うことはないと思う				
			非常に感じる	ある程度感じる	あまり感じない	まったく感じない	合計
Q45 自分の判断が不安になり、人に合わせて自分の意見を変えることがあるか	よくある	N	15	22	19	9	65
		%	23%	34%	29%	14%	100%
	ときどきある	N	83	200	167	45	495
		%	17%	40%	34%	9%	100%
	あまりない	N	86	174	183	33	476
		%	18%	37%	38%	7%	100%
	まったくない	N	19	10	22	12	63
		%	30%	16%	35%	19%	100%
合計		N	203	406	391	99	1099
		%	19%	37%	36%	9%	100%

x^2(df=9, N=1099)=28.922***, Cramer V=.162***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、年齢と詐欺不安尺度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は年齢と詐欺不安尺度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。木村（2022）の先行研究によると、加齢が伴うと詐欺被害に合いやすくなると述べていたが、詐欺不安についてはどの年齢層であっても、大きな違いが見られない。ここから加齢が伴っても詐欺不安意識については影響がない事が分かる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 16.240 で有意差は見られなかった。また、Cramer の連関係数は 0.071 と一定の関連が認められない。以上のことから年齢と詐欺不安尺度の二変数間の関連は、統計的には有意な関連が無いと考えられる。これは仮説 2 を支持しない結果である。

表 2　Q47 詐欺不安尺度と Q52 年齢のクロス集計表

			Q33ご自身が詐欺の被害に遭うことはないと思う				
			非常に感じる	ある程度感じる	あまり感じない	まったく感じない	合計
Q52 年齢	18歳、19歳	N	1	3	6	2	12
		%	8%	25%	50%	17%	100%
	20代	N	21	27	22	6	76
		%	28%	37%	29%	8%	100%
	30代	N	17	35	44	13	109
		%	16%	32%	40%	12%	100%
	40代	N	26	70	57	17	170
		%	15%	41%	34%	10%	100%
	50代	N	46	81	77	19	223
		%	21%	36%	35%	9%	100%
	60代	N	29	76	64	15	184
		%	16%	41%	35%	8%	100%
	70代	N	62	107	114	24	307
		%	20%	35%	37%	8%	100%
合計		N	202	399	384	96	1081
		%	19%	37%	36%	9%	100%

x^2(df=18, N=1081)=16.240*, Cramer V=.071*

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、年齢と意思決定尺度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は年齢と意思決定尺度の二変数間についてクロス集計表を作成したものである。まず 20 代と 30 代の「そう思う」「ややそう思う」と回答した割合の合計は、それぞれ 55%と 66%であった。一方で 60 代と 70 代の「そう思う」「ややそう思う」と回答した割合の合計は 42%と 27%であった。ここから、年齢層が上がるにつれて他者から聞いた情報に影響されにくくなることが分かる。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 127.388 であり 1%水準で統計的に有

意である。また Cramer の連関係数は 0.198 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから年齢と意思決定尺度の二変数間の関連は統計的に有意な関連であると言える。これは、仮説 3 とは逆の結果を指示する結果である。

表 3　Q45 意思決定尺度と Q52 年齢のクロス集計表

			Q33 知り合いから聞いた情報に影響されやすいほうだ				
			非常に感じる	ある程度感じる	あまり感じない	まったく感じない	合計
Q52 年齢	18歳、19歳	N	1	7	3	1	12
		%	8%	58%	25%	8%	100%
	20代	N	14	28	26	8	76
		%	18%	37%	34%	11%	100%
	30代	N	16	56	29	8	109
		%	15%	51%	27%	7%	100%
	40代	N	10	81	63	16	170
		%	6%	48%	37%	9%	100%
	50代	N	6	89	110	18	223
		%	1%	41%	49%	8%	100%
	60代	N	2	76	91	16	185
		%	1%	41%	49%	8%	100%
	70代	N	2	80	61	36	305
		%	1%	26%	61%	12%	100%
合計		N	51	417	509	103	1080
		%	5%	39%	47%	10%	100%

x^2(df=18, N=1080)=127.388***, Cramer V=.198***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 4 は、詐欺不安尺度を従属変数、テレビ視聴時間、テレビダミー、年齢(実数)、女性ダミーを独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2値は 0.016 であり、投入した独立変数によって従属変数である詐欺不安尺度の分散の 1.6%が説明されている。

結果を見ると、**全ての項目について**有意ではなかった。これはテレビ視聴や年齢、性別といった要因が、詐欺不安尺度に直接的な影響を及ぼさないと指摘することができる。つまり、これらの変数のみでは詐欺不安について説明することができない。標準化係数（β）をみるといずれも 0 に近く、どの変数も影響を与えていない事が分かる。

上記の結果は、仮説 4 を支持しない結果である。

表 4 Q47 詐欺不安尺度(反転)の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	2.603	0.106		***
Q26 テレビ視聴時間	0.018	0.018	0.034	
Q30 テレビダミー	0.056	0.061	0.032	
Q52 年齢(実数)	0.000	0.002	-0.009	
Q61 女性ダミー	-0.016	0.055	-0.009	
調整済みR^2	-0.001			
N	1063			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究は意思決定能力の強弱やメディア利用の時間によって詐欺に対する不安意識がどのように影響を与えるかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「周りに流されやすいと感じる人は詐欺に対して不安意識を感じやすい。」仮説 2「高齢者は詐欺に対して不安意識を感じている。」仮説 3「高齢者は周りに流されやすいと感じている。」仮説 4「報道を日常的に見ている人は詐欺に対する不安意識が強い。」という 4 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、仮説 1 と仮説 2 が支持されないことから年齢に関わらず、周りに流れやすいと感じていても詐欺不安の強弱に影響を与えない事がわかった。重回帰分析の結果からも、メディア利用についても利用時間の相違によって詐欺不安に影響をあまり与えない事がわかった。一方で年齢層が上がると他者から聞いた情報から流されにくいと考える割合が増える事から仮説 3 とは逆の結果が得られた。

これらの分析結果から、意思決定能力の強弱やメディア利用の時間によって詐欺に対する不安意識に影響を与えない事が明らかになった。一方で仮説 3 とは逆の結果が得られた事から、高齢者は周りに流されにくい事が考察できる。木村（2022）が提示する認知機能低下による詐欺被害の増加を指摘しており，加齢に伴う前頭前野腹内側部の機能低下により意思決定が熟慮型でなく直感型に偏りやすいといった先行研究と照らし合わせると、認知機能の低下により初めて聞いた情報を鵜呑みにしてしまい、後に第三者から聞いた情報から影響を受けにくく、そのまま詐欺被害に直結してしまうのではないかと考えられる。そのため、詐欺被害を減らすための効果的な手法として、認知機能の低下を前提とした高齢者の情報提供が求められる。具体的には、地域コミュニティや家族を介した情報共有の場を増やすといった手法が挙げられる。大久保智生ら（2016）によると、特殊詐欺撲滅ネットワーク会議と高齢者の防犯教育推進のための研修会を実施し、参加者に対しアンケート調査行っ

た結果を分析すると参加者は会議全体の評価と対策の実感が高いことが判明した。また、全体の評価と対策の実感との関連では、会議参加者、研修会参加者ともに、正の関連が認められたことから、全体の評価と対策の実感がつながっていることが明らかとなった。このことからも地域での交流や積極的な情報提供が詐欺被害の低下に繋げることができるといえる。

高齢者の被害が多いからこそ、高齢者に対する適切な情報提供や地域コミュニティの形成が必要となる。メディアを用いた情報発信に対する影響力は強くないため、テレビをはじめとするメディアからの詐欺に関する情報発信のみに鵜呑みにするのではなく、様々な視点からの積極的な声掛けが詐欺被害を減らす大きな要因になると考えられる。

6. 文献

[1]…阪口祐介（2008）「メディア接触と犯罪不安：「『全国ニュース』と『重要な他者への犯罪不安』の結びつき」『年報人間科学』p.61-74

[2]…警視庁 組織犯罪対策第二課生活安全企画課（2023）「令和５年における特殊詐欺の認知・検挙状況等について（確定値版）」『令和５年の犯罪情勢』p.1-12

[3]…木村敦（2022）「特殊詐欺対策研究における詐欺脆弱性認知をめぐる課題についての一考察」『危機管理学研究』p.98-115

[4]…大谷奈緒子・川島安博・小川祐喜子・川上孝之・松本憲始・福田朋実（2016）「犯罪報道の評価と犯罪不安感」『東洋大学学術情報リポジトリ』p.57-68

[5]…横田晋大・中西大輔（2010）「同調志向尺度の作成――規範的影響と情報的影響――」『広島修大論集』p.23-36

[6]…大久保智生・石岡良子・堀江良英・垣見真博・岩田健嗣・山地秀一・木村光宏・山口真由・三好弘美・森田浩充（2016）「特殊詐欺撲滅ネットワーク会議および高齢者の防犯教育推進のための研修会の効果の検討 ―地域ぐるみの特殊詐欺対策推進のために―」『香川大学教育学部研究報告 第Ⅰ部』第 146 号，p.1-8

第７章　学歴と性別役割分業意識の関連

細川　夏実

1.　はじめに

近年「女性活躍社会」への関心が高まっている。その影響からか「仕事」の領域において、性別役割分業は変化しつつある。しかし家庭内での性別役割分業はあまり変化していない。つまり、家事や育児、介護は女性がする事という世間の意識はあまり変化していないということである。事実、内閣府「共同参画」によると 2016 年時点では夫の家事・育児時間は妻の家事・育児時間より約 300 分少ないことがわかっている。さらに、食事の支度や掃除・洗濯への参加程度は、性別役割分業観を否定する傾向と高学歴によって高まることが白波瀬（1999）によって明らかにされた。

女性の高学歴化が少子化を招いていると言われることがよくある。このことについて白波瀬（1999） は高学歴を獲得することによって、価値観がよりリベラルになり従来の「男性は外、女性は内」という分業規範を否定し、ひいては実際に結婚を止めるか、遅らせる一方で男性と同等にキャリア指向を深めていくと述べている。

以上のことを踏まえると、学歴と性別役割分業意識は少なからず関連があると考えることができる。従って、本章では学歴という視点に注目し、学歴が性別役割分業意識に対してどのように影響を及ぼすのかを明らかにする。

2.　仮説

2.1. 先行研究

宮川（2020）の分析によると、最も性役割分業意識が弱かった層（最終学歴が大卒以上の 30 代）においても、性役割分業意識が弱いとはいえ 24.8%にとどまっている。簡単に言えば 10 人に 2 人、多く見積もっても 3 人以外は「育児・介護は女性の役割である」と強く思っているということである。宮川（2020）の研究は、調査対象の年齢が絞られている。従って、本章では年齢を絞らずに幅広い世代で検討する。さらに、男性の家庭内労働への参加に着目すると、価値観が実態に反映されやすい部分とそうでない部分があり、食事の支度や掃除・洗濯への参加程度は、性別役割分業観を否定する傾向と高学歴化によって高まると白波瀬（1999）は述べている。

子どもがいない場合は、夫との分担傾向が高くみられるが、子どもがいる場合は、妻が主として行う傾向が高くなることを指摘し、母親役割の強調により、育児に伴う追加的家事を妻が遂行することによって、その他の日常的な家事も妻が主として行うようになってしまうと考えているということであると松信（1995）は述べている。この研究は、2 人キャリア夫婦に焦点を当て調査しているので、キャリア夫婦以外の性別分業役割意識については検

討されていない。したがって本章では、幅広い層の性別分業役割意識も含め検討する。子どもがいない場合は、夫との分担意識が高くみられるとあるの。つまり、子どもの有無が夫婦間での性別役割分業意識を変化させるということであることが示唆されている。しかし、既婚者と未婚者での性別役割分業意識に相関があるのかについて言及されていないので、断定はできない。したがって本章では、既婚か未婚かで性別役割分業意識に
相関があるのかを検証する。

2.2. 仮説

学歴が大卒以上の人は、性別分業役割意識が大卒以上でない人よりも平等的であると考えた。仮説 2 では、社会や文化の中で長い間続き、確立されてきた性別役割の周囲からの期待や圧力を未婚者より既婚者の方が受けやすいため、既婚者は未婚者よりも性別役割分業に対し肯定的であると考えた。また、仮説 3 は妊娠出産などについては女性の役割であることは変えられない。さらに、男性の育児休暇の取りにくさなどで、子供と接する時間が減少する。自然と女性は子育てをするべきという意識が高まるのではないかと考えた。

本研究では上記の定義をもとに研究を行う。

仮説 1　学歴が大卒以上であれば、性別役割分業に否定的である。
仮説 2　既婚者は、未婚者に比べ性別役割分業に肯定的である。
仮説 3　子供がいる人の方が、いない人よりも性別役割分業に肯定的である。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q48：あなたは、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見についてどう思いますか。（性別分業意識（反転））

1.そう思う　2.ややそう思う　3.あまりそう思わない　4.そう思わない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、性別分業意識に肯定的になるように、尺度の反転を行った。

Q 54：あなたの最終学歴を教えてください。（在学中の方は、いま通っている学校を選んで

ください）（教育年数）

1.中学（旧小学校など）　2.高校（または旧制中学など）　3.専門学校　4.短大・高専（5年制）　5.大学（旧高専）・大学院　6.わからない

上記の選択肢に対して、中学（旧小学校など）を9、高校（または旧制中学など）を12、専門学校を13、短大・高専（5年制）を14、大学（旧高専）・大学院を16として教育年数の実数化を行った上で、わからないは欠損値として処理した。

Q 59：あなたは現在、結婚していらっしゃいますか。（結婚の有無）

1.既婚（配偶者あり）　2.既婚（死別・離別）　3.未婚

Q 60：あなたは現在、結婚していらっしゃいますか。（結婚の有無）

1.いる　2.いない

4. 分析

はじめに、最終学歴と性別分業意識の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表１は最終学歴と性別分業意識という二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、最終学歴が中学と回答した人で、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という質問に対し、「そう思わない」と回答した人が 41%であり、最終学歴が高校、専門学校、短大・高専（5 年制）と回答した人もおおむね同じ割合であった。一方で、最終学歴が大学（旧高専）・大学院と回答した人で、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という質問に対し、「そう思わない」と回答した人は 50%であった。

表１のカイ二条検定の結果をみると、カイ二乗値は 20.453 であり、有意差がない。Cramer の連関係数は 0.080 と強い関連は認められない。以上のことから、最終学歴と「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられない。これは仮説１を支持しない結果である。

表 1　Q54 婚姻状況と Q48 性別役割分業意識のクロス集計表

			Q48「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見についてどう思うか				
			そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
Q54 最終学歴	中学(旧制小学校など)	N	1	6	26	23	56
		%	1.8%	10.7%	46.4%	41.1%	100.0%
	高校(または旧制中学など)	N	14	50	141	140	345
		%	4.1%	14.5%	40.9%	40.6%	100.0%
	専門学校	N	2.0	14	53	59	128
		%	1.6%	10.9%	41.4%	16.1%	100.0%
	短大・高専(5年生)	N	0	14	64	67	145
		%	0.0%	9.7%	41.4%	46.2%	100.0%
	大学(旧高専)・大学院	N	7.0	54	134	198	393
		%	1.8%	13.7%	34.1%	50.4%	100.0%
合計		N	24	138	418	487	1067
		%	2.2%	12.9%	39.2%	45.6%	100.0%

x^2(df=12, N=1067)=20.453***, Cramer V=.080***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、結婚状況と性別分業意識という意見についてどう感じるかの二変数間の関連について、クロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、結婚状況と性別分業意識という意見についてどう感じるかの二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という設問に対し、既婚者と回答した人のなかで「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という質問に対し「そう思う」と回答した人が、2%であり、婚姻状況の既婚者以外を回答した人も若干の差はみられるがおおむね近い数字である。既婚と答えた人と未婚と答えた人の中で「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という質問に対し、「あまりそう思わない」、「そう思わない」回答した人は「そう思う」「ややそう思う」と回答した人よりどちらも多いという事がわかる。

表 2 カイ二条検定の結果をみると、カイ二乗値は 20.453 であり、5%水準で統計的に有意である。Cramer の連関係数は 0.080 と関連は認められない。以上のことから、最終学歴と「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えることもできるが、そこまで有意な関連がみられるわけではない。

表 2　Q59 婚姻状況と Q48 性別役割分業意識のクロス集計表

			Q48「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見についてどう思うか				
			そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
Q59 最終学歴	既婚(配偶者あり)	N	15	110	291	325	741
		%	2.0%	14.8%	39.3%	43.9%	100.0%
	既婚(死別・離別)	N	1	18	65	53	137
		%	0.7%	13.1%	47.4%	38.7%	100.0%
	未婚	N	7.0	13	64	106	190
		%	3.7%	16.8%	33.7%	55.8%	100.0%
合計		N	23	141	420	483	1068
		%	2.2%	13.2%	39.3%	45.3%	100.0%

x^2(df=12, N=1068)=20.453***, Cramer V=.140***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、子どもの有無と性別分業意識という意見についてどう感じるかの二変数間の関連について、クロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、子どもの有無と性別分業意識という意見についてどう感じるかの二変数についてクロス集計表を作成したものである。子どもがいると回答した人の中で、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という質問に対し「そう思う」と答えた人は 1.8%であり、「ややそう思う」と答えた人は 14.2%である。一方で、「あまりそう思わない」と答えた人は 40.5%、「そう思わない」と答えた人は 43.5%であった。こどもがいないと回答した人の中で、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という質問に対し「そう思う」と答えた人は 3.2%であり、「ややそう思う」と答えた人は 10.4%である。一方で、「あまりそう思わない」と答えた人は 36.1%、「そう思わない」と答えた人は 50.4%であった。

表 3 カイ二条検定の結果をみると、カイ二乗値は 7.476 で有意差がない。Cramer の連関係数は 0.084 と関連は認められない。以上のことから、子どもの有無と性別分業意識の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であるとは言えない。

表 3　Q60 子供の有無と Q48 性別役割分業意識のクロス集計表

			Q48「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見についてどう思うか				
			そう思う	ややそう思う	あまり感じない	あまりそう思わない	合計
Q60 子供の有無	いる	N	14	112	319	342	786
		%	1.8%	14.2%	40.5%	43.5%	100.0%
	いない	N	9	29	101	141	280
		%	3.2%	10.4%	36.1%	50.4%	100.0%
合計		N	23	141	420	483	1066
		%	2.2%	13.2%	39.3%	45.3%	100.0%

x^2(df=3, N=1066)=7.476***, Cramer V=.084***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 4 は、性別役割分業意識度を従属変数、教育年数、子供ダミー、配偶者ありダミーを独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.005 であり、投入した独立変数によって従属変数である性別役割分業意識度の分散の 0.5% が説明されている。

結果をみると、子ども有ダミーと配偶者ありダミーが正で有意、教育年数が負で有意であった。配偶者なしに比べて配偶者ありの方が性別役割分業意識度が高いことがわかる。標準化係数（β）をみると、配偶者ありダミーが 1.4891 と大きく、性別役割分業意識度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 2 を支持する結果である。

表 4　Q48 性別役割分業意識（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	1.976	0.173		***
Q54 教育年数	-0.024	0.012	-0.064	
Q62 子ども有ダミー	0.019	0.066	0.011	
Q61 配偶者ありダミー	0.094	0.063	1.489	*
調整済みR^2	0.005			
N	1042			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究は最終学歴や婚姻状況、子どもの有無の違いが性別役割分業意識にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「学歴が大卒以上であれば、

性別役割分業に否定的である。」仮説 2「既婚者は、未婚者に比べ性別役割分業に肯定的である。」仮説 3「子供がいる人の方が、いない人よりも性別役割分業に肯定的である。」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、最終学歴が大学（旧高専）・大学院と回答した人と中学（旧制小学校）と答えた人とでは少し性別役割分業に否定的であったが、カイ二乗値は 20.453 であり、有意差がない。Cramer の連関係数は 0.080 と強さの関連は認められない。以上のことから、最終学歴と性別分業意識の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられない。このことから仮説 1 が支持されなかった。また、結婚の有無に関しては、既婚者の方が若干の差で、性別役割分業に否定的であった。よって仮説 2 を支持されない。仮説 3 に関しては、子供がいる人の方が、いない人よりも性別役割分業意識に否定的であった。これは仮説 3 を支持しなかった。

重回帰分析の結果をまとめると、配偶者なしに比べて配偶者ありの方が性別役割分業意識度が高く、子どもがおり、配偶者がいる人である人ほど性別役割分業意識に肯定的であるという事がわかった。

しかし、仮説１、２、３のいずれの仮説の分析も基本的に性別役割分業意識に否定的な意識が強く、性別役割分業意識に肯定的な回答をしている人は全体の割合を見ると非常に低かった。

近年、社会全体が性別役割分業意識に否定的であるべきという風潮になっている。したがって意識的に性別役割分業意識に肯定する人がかなり減ってきていると考える。今後は、無意識のうちに性別役割分業意識に肯定してしまっている人も視野にいれ性別役割分業意識について研究していく必要がある。

6. 文献

[1]…内閣府, 男女共同参画局「共同参画」2018 年 5 月号「共同参画」2018 年 5 月号 ｜ 内閣府男女共同参画局
(https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2018/201805/201805.html)（2024 年６月１日閲覧）.

[2]…松田（2001）「性別役割分業と新・性別役割分業」『ライフデザイン研究所』pp39-55.

[3]…宮川（2020）「学歴が性役割意識に与える影響に関する分析」, 滋賀大学

[4]…白波瀬佐和子（1999）「女性の高学歴化と少子化に関する考察」『社会保障研究/国立社会保障・人口問題研究所』pp.392-399.

[5]…三山叡央　(2019)「幼少期の父親の家事参加と性別役割分業意識の関連」『高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査　令和 1 年度社会調査実習報告書』pp208-212.

[6]…中井美樹（2000）「若者の性役割観の構造とライフコース観 および結婚観」『立命館産業社会論集』pp117-127.

[7]…松信ひろみ（1995）「二人キャリア夫婦における役割関係」『家族社会研究』pp47-56.

第 8 章　収入と幸福度

松村　咲希

1.　はじめに

私たちの日常生活で、お金は必ず必要なものであり、なくてはならないものである。お金がなければ、娯楽はもちろん、食べたいものが食べれなかったり、服や家など生活に必要なものも必要最低限しか買えなかったり、と満足のいく生活をおくることができないだろう。しかし、お金を稼ぐことも残業や加工な労働を強いられることになるかもしれない。その中で、どういう人が幸福と感じているのだろうか。今回は収入と幸福度には関連性があるのか、他にどのような要因が関連をしているのか深く掘り下げていこうと思う。引地ら（2009）は、物理的環境の要因として景観と医療施設の充実度を高く評価する人ほど、地域に強い愛着を持つことを示した。社会的環境要因では、住民交流やイベント、住民人柄、治安といった分野全てにおいて地域への愛着へと繋がることを示した。また、社会的環境の要因は物理的環境要因と比べて、地域への愛着に強く影響していることも示した。これらは標本について、単純に地域への愛着度を測定している。

本章では、第 1 に不満がある人に関して、数ある種類の中でも居住や地域の利便性による不満に注目を置いて考察する。また、第 2、3 に地域への愛着という視点を異なる 2 つの要素によって検討していく。

2.　仮説

2.1. 先行研究

第 1 の問題視点について、所得の増加は幸福度に影響があるのかに対し、西村（2018）は 2 万人の日本人の調査を行い、所得と「全体として、あなたは普段どの程度幸福だと感じていますか。番号（0～10）から最も近いものを 1 つ選んでください。」という質問により主観的幸福感も調査している。分析を行った結果、所得と主観的幸福感との関係は、所得が増加するにつれて、主観的幸福感が増加するが、所得の増加率ほどには主観的幸福感は増加せず、その変化率の比も 1100 万円で最大となることがわかった。よって、世帯収入と幸福度について検討する。

第 2 の問題視点について、収入満足度の増加は幸福度に影響を与えるのかに対し、小林・ホメリヒ（2013）によると、世帯収入別では、多くなるほど生活満足度も幸福度も高い人がふえた。また、不満だが幸福な人は、学歴が高いほど、自営や無職ほど、世帯収入がおおむね多いほど、多かった。そして、満足だが不幸な人は、高卒や短大卒ほど、正規雇用や自営ほど、世帯収入が少ないほど多かった。世帯収入が多いほど、ポジティブな不一致がふえネガティブがへった。たとえ生活に不満があっても、収入によって幸福感がカバーされるとい

う結果が得られた。

第 3・第 4 の問題視点について、既婚と未婚や性別の違いは所得の増加に伴い幸福度に差が生じるのかに対し、筒井・大竹・池田ら（2005）は結婚している人はしていない人より幸福であるという結論を出した。また、夫は自分の所得が多いと幸福になるが、妻は自分の所得額は結婚幸福度に影響しない。また，配偶者の所得は男性の幸福度には影響しないが，女性の幸福度を有意に上げるという結果を得た。よって、性別によって収入による幸福度に差があるのかと既婚・未婚によって収入による幸福度に差があるのかを検討する。

2.2. 仮説

先行研究より、収入が高いほど自由に使える金額が上がるため幸福度が上がると考えた。また、収入に満足すると生活に困ることはないと考えて、仮説 1 と仮説 2 を立てた。

次に、収入が同じでも性別によって幸福度が変わってくるのではないかと思った。次に、収入が同じでも既婚・未婚によって幸福度が違うのではと考えた。

既婚者だと一緒に生活している人がふえるため、出費が多く未婚の方が幸福と感じている人が多いのではないかと考えた。

本研究では上記の定義をもとに研究を行う。

仮説 1　収入が高い人ほど幸福度が高い。
仮説 2　収入に満足している人ほど幸福度が高い。
仮説 3　性別によって収入による幸福度の差がある。
仮説 4　既婚・未婚によって収入による幸福度に差がある。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5%である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q2：あなたは、現在どのくらい幸せですか。

1.幸せ　2.やや幸せ　3.どちらともいえない　4.やや不幸せ　5.不幸せ

Q50：あなたは、ご世帯の収入に、どのくらい満足していますか。

1.満足　2.やや満足　3.どちらともいえない　4.やや不満　5.不満　6.わからない

Q51：あなたの性別はどちらですか

1. 男性　2. 女性

上記の選択に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q59：あなたは現在、結婚していらっしゃいますか。

1. 既婚　2. 既婚（死別・離別）　3. 未婚

Q62：過去一年間のあなたの世帯の収入はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください

1.100万円未満　2.100万円～200万円未満　3.200万円～400万円未満　4.400万円～600万円未満　5.600万円～800万円未満　6.800万円～1000万円未満　7.1000万円～1500万円未満　8.1500万円以上　9.わからない

4. 分析

はじめに収入とどのくらい幸せかを二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表1は、世帯年収と幸福度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、世帯年収の回答に「800万円以上」と回答した人で、幸福度の設問に「幸せ」と答えた人は50%を上回っているのに対し、「400万円未満」と回答した人は20%程にとどまる結果が出た。また、世帯年収の回答に「800万円以上」と回答した人で、幸福度の設問に「やや不幸せ」「不幸せ」と答えた人は合わせて0%であるが、「400万円未満」と回答した人は5%弱いることから、収入が高い人ほど幸福度が高い傾向にあるということがわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 133.399 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.188 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、世帯年収と幸福度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 1　Q62 世帯収入と Q2 幸福度のクロス集計表

			Q2 幸福度					
			幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	5 不幸せ	合計
Q62 世帯年収	100万円未満	N	12	22	16	6	3	59
		%	20%	37%	27%	10%	5%	100%
	100万円～200万円未満	N	24	51	26	19	2	122
		%	20%	42%	21%	16%	2%	100%
	200万円～400万円未満	N	54	128	59	17	6	264
		%	21%	49%	22%	6%	2%	100%
	400万円～600万円未満	N	47	68	27	9	2	153
		%	31%	44%	18%	6%	1%	100%
	600万円～800万円未満	N	45	66	14	2	1	128
		%	35%	52%	11%	2%	1%	100%
	800万円～1000万円未満	N	54	32	13	1	0	100
		%	54%	32%	13%	1%	0%	100%
	1000万円～1500万円未満	N	43	34	2	0	0	79
		%	54%	43%	3%	0%	0%	100%
	1500万円以上	N	21	17	1	1	0	40
		%	53%	43%	3%	3%	0%	100%
合計		N	300	418	158	55	14	945
		%	32%	44%	17%	6%	2%	100%

x^2(df=28, N=945)=133.399***, Cramer V=.188***
*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、収入に満足しているかと幸せかを二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、世帯収入満足度と幸福度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、幸福度の設問に「幸せ」と答えた人で世帯収入の満足度の設問に「満足」と答えた人は 70.9%であり、「幸せ」「やや幸せ」と答えた人は 96.4%であった。また、幸福度の設問に「幸せ」と答えた人で世帯収入の満足度の設問に「不満」と答えた人は 13.5%であり、「幸せ」「やや幸せ」と答えた人は合わせて 47.7%である。このことから、幸福度が高い人は世帯収入満足度が高くなることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 317.850 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.539 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、世帯収入の満足度と幸福度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 2　Q50 世帯年収の満足度と Q2 幸福度のクロス集計表

			Q2 幸福度					
			幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	不幸せ	合計
Q50 世帯収入の満足度	満足	N	78	28	3	1	0	110
		%	71%	26%	3%	1%	0%	100%
	やや満足	N	115	95	12	1	0	223
		%	52%	43%	5%	0%	0%	100%
	どちらともいえ	N	68	166	59	7	2	302
		%	23%	55%	20%	2%	1%	100%
	やや不満	N	44	103	48	15	2	212
		%	21%	49%	23%	7%	1%	100%
	不満	N	30	76	65	37	14	222
		%	14%	34%	29%	17%	6%	100%
	わからない	N	5	12	2	4	3	26
		%	19%	46%	8%	15%	12%	100%
合計		N	340	480	189	65	21	1095
		%	31%	44%	17%	6%	2%	100%

x^2(df=20, N=1095)=317.850***, Cramer V=.539***
*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、性別と幸福度の単純な二変数間の関連についてクロス集計を用いて検討する。

表 3 は、性別と幸福度の二変数間の関連についてクロス集計表を作成したものである。まず、幸福度の質問に対し、「幸せ」と回答し、「男性」と答えた人は 27.1%で、「女性」と回答した人は 33.9%であった。また、幸福度の設問に対し、「不幸せ」と回答し、「男性」と回答した人は 2.8%で「女性」と回答した人は 1.1%であった。若干、男性より女性のほうが幸福度が高いことが分かった。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 10.271 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.96 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、性別と幸福度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 3　Q51 性別と Q2 幸福度のクロス集計表

			Q2 幸福度					合計
			幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	不幸せ	
Q51 性別	男性	N	125	208	83	32	13	461
		%	27%	45%	18%	7%	3%	100%
	女性	N	219	278	108	34	7	646
		%	34%	43%	17%	5%	1%	100%
合計		N	344	486	191	66	20	1107
		%	31%	44%	17%	6%	2%	100%

X 2 (df=28.N=945)＝10.271***,CramerV＝.96***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、既婚・未婚ごとに収入をわけて、幸せかをそれぞれ二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 4 は、婚姻状況と幸福度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、幸福度の設問に「幸せ」と答えた人で「既婚」と答えた人は 35.2%で、「幸せ」「やや幸せ」と答えた人は 79.6%という結果が出た。一方で幸福度の設問に「幸せ」と答えた人で「未婚」と答えた人は 21.6%であり、「幸せ」「不幸せ」と答えた人は合わせて 61.8%という結果が出た。このことから、幸福度が高い人は若干結婚していることがわかる。

表 4 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 41.608 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.195 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、婚姻状況と幸福度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 4 を支持する結果である。

表 4　Q59 婚姻状況と Q2 幸福度のクロス集計表

			Q2 幸福度					合計
			幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	不幸せ	
Q59 婚姻状況	既婚（配偶者あり）	N	267	337	112	37	6	759
		%	35%	44%	15%	5%	1%	100%
	既婚（死別・離別）	N	33	66	26	12	4	141
		%	23%	47%	18%	9%	3%	100%
	未婚	N	42	78	52	14	8	194
		%	22%	40%	27%	7%	4%	100%
合計		N	342	481	190	63	18	1094
		%	31%	44%	17%	6%	2%	100%

X 2 (df=28.N=945)＝41.608***,CramerV＝.195***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 5 は、幸福度（反転）を従属変数、世帯年収（反転）、世帯年収満足度（反転）、女性ダミー、配偶者ダミー、離死別ダミーを独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2値は 0.007 であり、投入した独立変数によって従属変数である幸福度の分散の 8.8%が説明されている。

結果をみると、すべて正で有意であった。これは、幸福度が高い人ほど幸福度が高いことがわかる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。標準化係数（β）をみると、世帯収入満足度が 0.146 と大きく、世帯収入満足度が幸福度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 3 を支持する結果である。

表 5　Q2　幸福度の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	3.538	0.661		***
Q59 離死別ダミー	0.024	0.171	0.020	
Q59 配偶者ありダミー	0.107	0.152	0.106	
Q50 世帯年収満足度(反転)	0.180	0.132	0.146	
Q51 女性ダミー	0.137	0.115	0.131	
Q62 世帯年収(反転)(万円)	0.017	0.061	0.031	
調整済みR^2	0.007			
N	92			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5.　考察

本研究は世帯年収、世帯年収満足度、性別、婚姻状態といった様々な要因が幸福度にどのような影響をおよぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「世帯年収が高い人ほど幸福度が高くなる。」仮説 2「世帯年収満足度が高くなるほど幸福度が高くなる。」仮説 3「性別により幸福度に差がある。」仮説 4「婚姻状態により幸福度に差がある。」という 4 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、世帯年収が高い人ほど幸せ、やや幸せと回答する割合が高いことから仮説 1 が支持された。また、世帯年収満足度が高い人ほど幸せ、やや幸せと回答している割合が高いことから仮説 2 が支持された。そして、性別と幸福度を比較すると、女性の方が幸福度が高いという結果が出た。最後に、婚姻状況と幸福度を比較すると、配偶者がいる人ほど幸福度が高いということがわかった。重回帰分析の結果をまとめると、男性に比べて女性の方が幸福度難きことがわかった。また、世帯年収が幸福度に与える影響が強いと言えることがわかった。

しかし全体の割合を見ると、世帯年収が 1000 万円以上 1500 万円未満と答えている人と

1500 万円以上と答えている人が幸せ、やや幸せと回答している人の割合は変わらないことがわかった。また、世帯年収が 600 万円以上 800 万円未満と回答している人と 800 万円以上 1000 万円未満と回答している人も同様のことが言える事がわかった。このことから、年収が一定以上ある人の幸福度はさほど変わらないことがわかった。そして、幸福度を決定する要因として、所得以外にも人間関係や健康、学齢、自己決定などにも焦点を当てて分析してみるべきだと思った。国連の世界幸福度報告書での、国際ランキングでは、日本の幸福度がそれほど高くなく、危機感を持つべきだと考える。そういう日本社会でどのようにすれば日本の幸福度が上がっていくのか考えて行くべきだと思う。

6. 文献

[1]…林田吉恵（2019）「幸福度と所得の関係：所得は適応するのか」『経済学論究』73(1):pp51-64.

[2]…小林盾・カローリ.ホメリヒ（2014)）「生活に満足している人は幸福か― SSP-W2013-2nd 調査データの分析」『成蹊大学文学部紀要』49:pp229-237

[3]…西村和雄・八木匡（2018）「幸福度と自己決定―日本における実証研究」『RIETI Discussion Paper Series 18-J-026』

[4]…上野雄己・髙橋 亜希・小塩 真司（2020）「Highly Sensitive Person は主観的幸福感が低いのか？―感覚処理感受性と人生に対する満足度，自尊感情との関連から―」『感情心理学研究』27(3):pp104-109

[5]…内閣府（2014）「人々の幸福と所得について（中長期、マクロ的観点からの分析②）」https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/0214/shiryou_03.pdf（2014 年 2 月 14 日閲覧）

[6]…筒井義郎・大竹文雄・池田新介（2009）「なぜあなたは不幸なのか」『大阪大学経済学』58(4):pp20-57

[7]…水谷徳子（2011）「所得と女性の幸福度」『家計経済研究』92:pp59-68

第 9 章　公園がもたらす運動への影響

山岡 由依

1. はじめに

私たちは大人になるにつれて運動をする機会が減っている。スポーツ庁の調査によると、77.9%が運動不足を感じると回答しており、30 代から 50 代で運動不足を感じるとする割合は 8 割を超えている。実際、WHO が発表した報告書によると、成人の 27.5%と青少年の 81%が身体活動に関する WHO 勧告を満たしておらず、過去 10 年でほとんど改善が見られなかった。これにより運動不足が世界的に問題となっているといえる。また、各国政府が国民の運動不足を解消するための緊急対策を講じなければ、2020 年から 2030 年の間に約 5 億人が運動不足に起因する心臓病、肥満、糖尿病、その他の非感染性疾患（NCD）を発症すると予測されている。身体活動政策がある国は 5 割弱であり、そのうち運用されているのは 4 割弱である示されている。そのうち、日本は身体活動政策が不十分だと評価されており、下位の成績であるといえる。

このように、運動不足という問題について日本では改善のための政策が確立しておらず、ほかの先進国と比べても身体活動の改善活動は劣っており、運動不足という問題に対する取り組みが不十分であるといえる。

本章では運動を行う場所の一つである公園に焦点を当て、公園が運動という観点で周辺住民にどのような影響を与えているかを調査することで運動不足解消の手がかりを見つけることを目指す。

2. 仮説

2.1. 先行研究

小堀ら（2023）は国立公園の利用者の利用志向とどのような体験を期待するかについて調査した結果、運動志向型は自然の中でゆったりと健康の回復や増進を図ることや、レジャースポーツを体験することを期待していると示した。また利用志向別の訪問意向について調査では、運動志向型では特定の国立公園の訪問意向に差はなかった。このことから、公園で運動する人は自然の中で運動することを重視しており、公園が有する資源が重要なのではないと考えられる。この自然の中で運動できることは公園特有の特徴であるため、運動場所に公園を選ぶ要因の 1 つではないかと考えられる。

また、運動志向型に分類される年齢層は 20 代、30 代が特に多く、60 代、70 代が少なく、高齢者は心身回復志向型に分類される割合が高いことが分かった。このことから、高齢者は公園を運動目的で利用しておらず、他社との交流の場として利用していると考えられる。

松本ら（2023）は子供や友人と一緒に公園を訪れると、活動時間が長くなり身体活動量

が増えると示した。このことから、集団行動に対しての選好が運動頻度に影響するのではないかと考えられる。

2.2. 仮説

自宅の近くに公園がある人は運動をしなければならないという意識が高い、また運動することへのハードルが低いことにより運動頻度が高くなるのではないかと考えた。

子どもや友人と一緒に公園を訪れると身体活動量が増えるという先行研究から、集団行動が好きな人は、複数人で運動をする傾向にあり、運動をする動機が多くなることにより運動頻度が高くなるのではないかと考えた。

年齢が高いほど公園を心身回復目的で使用しており運動目的で利用していないため、運動頻度が下がるのではないかと考えた。

仮説 1　自宅の近くに公園がある人は運動頻度が高い。
仮説 2　集団行動が好きな人は運動頻度が高い。
仮説 3　年齢が高いほど運動頻度が低い。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q23： あなたは、普段、どのくらいの頻度で運動をしていますか。

1.週に 5 日以上　2.週に 3～4 日　3.週に 1～2 日　4.月に 1～3 日　5.3 か月に 1～2 日　6.まったくしない

Q25： あなたの自宅の近くに（徒歩 3 分以内）、運動ができる公園・緑地・広場はありますか。

1.ある　2.ない

Q44： あなたは、集団行動が好きですか。嫌いですか。

1.好き　2.やや好き　3.やや嫌い　4.嫌い

Q51：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性　2.女性

上記の選択に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1. 18、19 歳　2. 20 代　3. 30 代　4. 40 代　5. 50 代　6. 60 代　7. 70 代以上

4. 分析

はじめに、自宅近くの公園の有無と運動頻度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、自宅近くの公園の有無と運動の頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、自宅近くの公園の有無の設問に「ある」と回答した人で、運動の頻度を「週に 5 日以上」と回答した人が 15%である一方で、「ない」と回答した人で「週に 5 日以上」と回答した人は 11%である。また、自宅近くの公園の有無の設問に「ある」と回答した人で、運動の頻度を「3 か月に 1～2 回」「まったくしない」と回答した人は合わせて 26%である一方で、「ない」と回答した人で「3 か月に 1～2 回」「まったくしない」と回答した人は合わせて 33%である。ここから、わずかではあるが自宅近くに公園がある人は運動頻度が高くなる傾向にあることがわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 10.792 であり、10%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.98 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、自宅近くの公園の有無と運動の頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 1　Q25 公園の有無と Q23 運動の頻度のクロス集計表

			Q23 運動の頻度						
			週に5日以上	週に３～４日	週に１～２日	月に１～３日	３か月に１～２日	まったくしない	合計
Q25 自宅の近くに、運動ができる公園・緑地・広場はあるか	ある	N	105	137	171	95	31	151	690
		%	15%	20%	25%	14%	4%	22%	100%
	ない	N	46	72	97	67	20	121	423
		%	11%	17%	23%	16%	5%	29%	100%
合計		N	151	209	268	162	51	272	1113
		%	14%	19%	24%	15%	5%	24%	100%

x^2(df=5, N=1113)=10.792†, Cramer V=.98†

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、集団行動への選好と運動頻度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、集団行動の好みと運動の頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、集団行動の好みの設問に「好き」と回答した人で、運動の頻度を「週に 5 日以上」「週に 3〜4 日」と回答した人は合わせて 42%である一方で、「嫌い」と回答した人で「週に 5 日以上」「週に 3〜4 日」と回答した人は合わせて 27%である。また、集団行動の好みの設問に「好き」と回答した人で、運動の頻度を「3 か月に 1〜2 回」「まったくしない」と回答した人は合わせて 22%である一方で、「嫌い」と回答した人で「3 か月に 1〜2 回」「まったくしない」と回答した人は合わせて 44%である。ここから、集団行動が好きな人は運動頻度が高くなる傾向にあることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 37.901 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.108 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、集団行動の好みと運動の頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 2　Q44 集団行動の選好と Q23 運動の頻度のクロス集計表

			Q23 運動の頻度						
			週に5日以上	週に３〜４日	週に１〜２日	月に１〜３日	３か月に１〜２日	まったくしない	合計
Q44 集団行動が好きですか	好き	N	5	10	8	5	2	6	36
		%	14%	28%	22%	14%	6%	17%	100%
	やや好き	N	42	62	81	35	10	54	284
		%	15%	22%	29%	12%	4%	19%	100%
	やや嫌い	N	71	97	138	89	26	126	547
		%	13%	18%	25%	16%	5%	23%	100%
	嫌い	N	29	31	38	27	13	83	221
		%	13%	14%	17%	12%	6%	38%	100%
合計		N	147	200	265	156	51	269	1088
		%	14%	18%	24%	14%	5%	25%	100%

x^2(df=15, N=1088)=37.901***, Cramer V=.108***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、年齢と運動頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、年齢と運動の頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、年齢の設問に「20 代」と回答した人で、運動の頻度を「週に 5 日以上」「週に 3〜4 日」と回答した人は合わせて 24%である一方で、「70 代」と回答した人で「週に 5 日以上」「週に 3〜4 日」と回答した人は合わせて 46%である。また、年齢の設問に「20 代」と回答した人で、運動の頻度を「3 か月に 1〜2 回」「まったくしない」と回答した人は合わせて 40%である一方で、「70 代」と回答した人で「3 か月に 1〜2 回」「まったくしない」と回答した人は合わせて 16%である。ここから、年齢が高い人は運動頻度が高くなる傾向にあることがわかる。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 98.085 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.299 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、年齢と運動の頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持しない結果である。

表 3　Q52 年齢と Q23 運動の頻度のクロス集計表

			Q23 運動の頻度						
			週に5日以上	週に３～４日	週に１～２日	月に１～３日	３か月に１～２日	まったくしない	合計
Q52 年齢	18歳、19歳	N	0	3	3	4	1	1	12
		%	0%	25%	25%	33%	8%	8%	100%
	20代	N	7	11	16	11	9	21	75
		%	9%	15%	21%	15%	12%	28%	100%
	30代	N	5	25	17	21	8	35	111
		%	5%	23%	15%	19%	7%	32%	100%
	40代	N	22	18	49	31	4	49	173
		%	13%	10%	28%	18%	2%	28%	100%
	50代	N	29	32	50	37	13	68	229
		%	13%	14%	22%	16%	6%	30%	100%
	60代	N	23	34	42	24	10	52	185
		%	12%	18%	23%	13%	5%	28%	100%
	70代	N	61	83	87	33	6	43	313
		%	19%	27%	28%	11%	2%	14%	100%
合計		N	147	206	264	161	51	269	1098
		%	13%	19%	24%	15%	5%	24%	100%

x^2(df=30, N=1098)=98.085***, Cramer V=.299***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 4 は運動の頻度を従属変数、公園の有無、集団行動の選好、年齢、女性ダミーを独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2値は 0.064 であり、投入した独立変数によって従属変数である運動の頻度の分散の 6.4%が説明されている。

結果を見ると、公園の有無、集団行動の選好、女性ダミーが正で有意、年齢が負で有意であった。これは、集団行動が好きである人が運動の頻度が高いことがわかる。標準化係数(β)をみると、集団行動の選好が 0.139 と大きく、集団行動の選好が運動の頻度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 2 を支持する結果である。

表 4　Q23 運動の頻度の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	3.187	0.312		***
Q25公園の有無	0.292	0.107	0.082	**
Q44 集団行動の選好	0.317	0.068	0.139	***
Q52年齢	-0.019	0.003	-0.18	***
Q51女性ダミー	0.192	0.105	0.055	†
調整済みR^2	0.064			
N	1058			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

5.　考察

本研究は公園に関する意識の違いが運動頻度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「自宅の近くに公園がある人は運動頻度が高い。」仮説 2「集団行動が好きな人は運動頻度が高い。」仮説 3「年齢が高いほど運動頻度が低い。」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、自宅の近くに公園がある人ほど運動頻度が高いと回答する割合が多いことから仮説 1 が支持された。また、集団行動が好きな人ほど運動頻度が高いと回答する割合が多いことから仮説 2 が支持された。しかし、年齢が高いほど運動頻度が高いと回答する割合が多いことから仮説 3 は支持されない結果となった。

仮説 3 は先行研究から高齢者は心身回復目的のために公園を訪れる割合が高いことがわかり、立てた仮説であるが、これが支持されなかったため、高齢者の運動頻度が高くなる要因が他にあると考えられる。今後、高齢者が運動を行う場所や、仮説 1，2 で指示された要因が高齢者の運動頻度の高さに影響を及ぼしているかなどもあわせて多面的に評価する必要があると考える。

仮説 1，2 は支持されたが、この結果が独立変数以外の検証されていない属性に影響された可能性もある。より細かく場合分けをして検証し、支持された仮説をより説得力のあるものとすることで、運動頻度への影響に関して実用可能な状態になると考えるため、さらに研究をしていく必要がある。

6.　文献

[1]…スポーツ庁(2021)『スポーツの実施状況等に関する世論調査』
https://www.mext.go.jp/sports/content/20220310-spt_kensport01-000020487_5.pdf
（2024 年 12 月 1 日閲覧）

[2]…WHO(2020)『WHO guidelines on physical activity and sedentary behaviour：at a glance（要約版）』
https://iris.who.int/bitstream/handle/10665/336656/9789240015128-eng.pdf?sequence=1（2024 年 12 月 1 日閲覧）
[3]…WHO(2022)『Global status report on physical activity 2022：country profiles』
https://iris.who.int/bitstream/handle/10665/363607/9789240059153-eng.pdf?sequence=1（2024 年 12 月 1 日閲覧）
[4]…小堀貴子・山島有喜・劉銘・山本清龍（2023）「国立公園に対する多様な利用志向の把握と国立公園の管理・運営に関する考察」『2023 年度環境情報科学研究発表大会』37: pp.239-244
[5]…松尾 薫・松本 千之輔・武田 重昭・加我 宏之（2023）「利用者による身体活動量から捉えた郊外住宅地の住区基幹公園の役割」『都市計画論文集』58(3): pp.812-818

第 10 章　ＳＮＳの利用が人々にもたらす影響

吉田百花

1.　はじめに

総務省の令和４年年通信利用動向調査[1]によれば、SNS の利用状況は 80.0%であり、前年度からほぼ全ての年齢階層で増加している。特に、70～79 歳の年齢層でも 63.9%が SNS を利用しており、高齢者にとっても SNS が一般的なツールとなっていることがわかる。現在、SNS は人々の生活にとって必要不可欠な存在であり、その社会的および個人的な影響は大きいと考えられる。

もし、SNS を長時間利用することが幸福度にプラスの影響を与えるのであれば、SNS は人々の生活にポジティブな影響をもたらしていると言える。逆に、SNS の長時間利用が幸福度にマイナスの影響を与える場合、SNS の利用が人々の幸福度に悪影響を与えている可能性がある。

本章では、年齢や職業などの個人属性が、SNS の利用時間にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。加えて、SNS の利用時間の違いが人々の幸福度にどのような影響を与えているのかを解明し、SNS の健全な利用に関するアドバイスや理想的な利用時間の目安を提示することを目的としている。

2.　仮説

2.1. 先行研究

SNSの利用時間が長いほど幸福度が減少する傾向についてはこれまでも調査されている。大野志郎（2019）は、SNSが現代社会において重要なコミュニケーションツールとなっている一方で、SNS依存が新たな社会問題として浮上していることを指摘する。特に若年層において、SNSの過剰利用が精神的および社会的な問題を引き起こすことが懸念されている。

また、Lin et al.（2016）は、19歳から32歳の成人1,787人を対象にSNSの使用とうつ病について調査した結果、SNSの使用はうつ病の増加に有意に関連していることを明らかにした。さらに、Emily Stella Scott（2020）は、スウェーデンの若者を対象にSNSの利用と精神的健康の関連性を調査し、SNSの利用時間が長い人は短い人に比べて精神的健康のリスクが高いことを示した。

これらのことから、長時間に及ぶSNS使用は幸福度に悪影響をもたらすことが考えられる。一方で、先行研究の多くは調査対象が若年層に限られており、幅広い年齢層での調査が行われていない傾向にある。

2.2. 仮説

総務省の令和４年度通信利用動向調査より､若い世代ほどSNSの利用率が高いことから、SNSに馴染みのある若い世代は、SNSの１日の利用時間も長くなると考える。

また、水落ら（2010）では自身の労働時間が長くなるほど余暇時間が短いと述べていることから、学生や家事専業など自由な時間が比較的多い職業の人々は、家事や勉強の合間にSNS を利用する機会が多いと考える。一方、会社員や公務員などの定時労働者は、仕事に追われる日々が続くため、SNSの利用時間が比較的短いと考える。

その他、Mattingly and Bianchi （2003）で指摘されているように男性の方が女性よりも平均余暇時間が長いことから、男性の方がSNSの１日の利用時間が長いと考える。

仮説 1.　年齢が若いほど、SNSの１日の利用時間が長い
仮説 2.　学生や家事専業などの職業の人ほどSNSの１日の利用時間が長い
仮説 3.　男性の方が女性よりもSNSの１日の利用時間が長い
仮説４．　SNSの１日の利用時間が長い人ほど幸福度は低い

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Ｑ２．あなたは、現在どのくらい幸せですか。

1.幸せ　2.やや幸せ　3.どちらともいえない　4.やや不幸せ　5.不幸せ

Ｑ２７．あなたは、普段、1日にどのくらいの時間、SNSに触れていますか。
（X（旧Twitter）,Instagram ,Facebook など）

1.全く使用しない　2.20分未満　3.20分以上40分未満　4.40分以上1時間未満　5.1時間以上2時間未満　6.2時間以上

Ｑ５１．あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性　2.女性

上記の選択に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Ｑ５２．あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1. 18、19 歳　2. 20 代　3. 30 代　4. 40 代　5. 50 代　6. 60 代　7. 70 代以上

Ｑ５３．あなたの現在の職業はどれにあたりますか。（複数の職業に就かれている場合は、主なもの１つにマル）

1.常時雇用の勤め人　2.臨時雇用、パート、アルバイト　3.自営業主　4.自営業の家族従業者　5.経営者、役員　6.家事専業　7.学生　8.無職　9.その他（ ）

4. 分析

はじめに、年齢（独立変数）と SNS の１日の利用時間（従属変数）の関連についてクロス集計表を用いて検討する。カイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 257.582 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.217 と強い関連が認められる。以上のことから年齢と SNS の１日の利用時間の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。30 代以下の SNS の１日の利用時間は 2 時間以上と回答した割合がほかの項目に比べて最も高く、年齢が若いほど SNS を長時間利用する割合は高くなっている。さらに、18 歳、19 歳に関しては 2 時間以上と回答した割合が半数を占めている。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表１　Q52 年齢と Q27SNS の１日の利用時間のクロス集計表

			Q27 SNS利用時間						
			まったく利用しない	20分未満	20分以上40分未満	40分以上1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上	合計
Q52 年齢	18歳、19歳	N	0	1	0	2	3	6	12
		%	0%	8%	0%	17%	25%	50%	100%
	20代	N	3	2	6	11	19	33	74
		%	4%	3%	8%	15%	26%	45%	100%
	30代	N	7	9	9	19	27	40	111
		%	6%	8%	8%	17%	24%	36%	100%
	40代	N	35	30	18	23	38	29	173
		%	20%	17%	10%	13%	22%	17%	100%
	50代	N	61	34	25	29	46	34	229
		%	27%	15%	11%	13%	20%	15%	100%
	60代	N	69	25	20	24	31	17	186
		%	37%	13%	11%	13%	17%	9%	100%
	70代	N	175	39	25	28	33	14	314
		%	56%	12%	8%	9%	11%	4%	100%
合計		N	350	140	103	136	197	173	1099
		%	32%	13%	9%	12%	18%	16%	100%

x2(df=30, N=1118)=257.582***, Cramer V=.217***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、職業（独立変数）と SNS の 1 日の利用時間（従属変数）の関連についてクロス集計表を用いて検討する。カイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 174.703 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.179 と強い関連が認められる。また、学生は SNS の 1 日の利用時間が 2 時間以上と回答した人が 60.7%を占めており、比較的長時間利用していることが明らかになった。一方で、家事専業の人は SNS を全く利用しないと回答した人が 43.8%を占めており、SNS を長時間利用しているという傾向はみられなかった。以上のことからの職業と SNS の 1 日の利用時間の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であるが、仮説を完全に支持する結果とはならなかった。

表 2 Q53 職業（雇用形態）と Q27SNS の 1 日の利用時間のクロス集計表

			Q27 SNS利用時間						
			まったく利用しない	20分未満	20分以上40分未満	40分以上1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上	合計
Q53 職業（雇用形態）	常時雇用の勤め人	N	59	57	44	50	69	60	339
		%	17%	17%	13%	15%	20%	18%	100%
	臨時雇用、パート	N	58	27	16	27	47	41	216
		%	27%	13%	7%	13%	22%	19%	100%
	自営業主	N	12	8	3	10	8	4	45
		%	27%	18%	7%	22%	18%	9%	100%
	自営業の家族従事者	N	6	2	4	2	3	5	22
		%	27%	9%	18%	9%	14%	23%	100%
	経営者、役員	N	8	2	3	3	9	4	29
		%	28%	7%	10%	10%	31%	14%	100%
	家事専業	N	56	11	11	13	19	18	128
		%	44%	9%	9%	10%	15%	14%	100%
	学生	N	1	1	0	2	7	17	28
		%	4%	4%	0%	7%	25%	61%	100%
	無職	N	143	28	20	28	31	18	268
		%	53%	10%	7%	10%	12%	7%	100%
	その他	N	4	1	1	2	2	2	12
		%	33%	8%	8%	17%	17%	17%	100%
	合計	N	347	137	102	137	195	169	1087
		%	32%	13%	9%	13%	18%	16%	100%

x2(df=40, N=1186)=174.703***, Cramer V=.179***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

性別（独立変数）と SNS の 1 日の利用時間（従属変数）の関連についてクロス集計表を用いて検討する。カイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 23.672 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.147 と強い関連が認められる。以上のことからの性別と SNS の 1 日の利用時間の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。一方で、SNS を 1 日当たり 2 時間以上利用する割合は、女性が 19.7%、男性が 10%となっており、仮説は支持されず女性の方が男性よりも SNS の 1 日の利用時間が長い傾向にあるといえる。

表 3 Q51 性別と Q27SNS の 1 日の利用時間のクロス集計表

			Q27 SNS利用時間						
			まったく利用しない	20分未満	20分以上40分未満	40分以上1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上	合計
Q51 性別	男性	N	149	71	49	65	81	46	461
		%	32%	15%	11%	14%	18%	10%	100%
	女性	N	202	69	53	74	114	126	638
		%	32%	11%	8%	12%	18%	20%	100%
合計		N	351	140	102	139	195	172	1099
		%	32%	13%	9%	13%	18%	16%	100%

x2(df=5, N=1186)=23.672***, Cramer V=.147***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、SNS の 1 日の利用時間（独立変数）と幸福度（従属変数）の関連についてクロス集計表を用いて検討する。カイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 23.381 であり、5% 水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.072 と強い関連は認められなかった。以上のことからの SNS の 1 日の利用時間と幸福度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連とは言えず、仮説を支持する結果とはならなかった。

表４　Q27SNS の１日の利用時間と Q２幸福度のクロス集計表

			Q2 幸福度					
			幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	不幸せ	合計
Q27 SNS 利用時間	まったく利用しない	N	97	166	64	23	8	358
		%	27%	46%	18%	6%	2%	100%
	20分未満	N	43	62	26	9	2	142
		%	30%	44%	18%	6%	1%	100%
	20分以上40分未満	N	34	45	22	4	1	106
		%	32%	42%	21%	4%	1%	100%
	40分以上1時間未満	N	55	56	22	7	0	140
		%	39%	40%	16%	5%	0%	100%
	1時間以上2時間未満	N	62	89	37	9	2	199
		%	31%	45%	19%	5%	1%	100%
	2時間以上	N	56	71	24	14	8	173
		%	32%	41%	14%	8%	5%	100%
合計		N	347	489	195	66	21	1118
		%	31%	44%	17%	6%	2%	100%

x2(df=20, N=1118)=23.381*, Cramer V=0.072*

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表５は、SNS の１日の利用時間を従属変数、女性ダミー、年齢、職業を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R2 値は 0.199 であり、投入した独立変数によって従属変数である SNS の１日の利用時間の分散の 19.9%が説明されている。

結果をみると、女性ダミーと職業（雇用形態）が正で有意、年齢が負で有意であった。これは、男性に比べて女性が、SNS の１日の利用時間が長く、職業（雇用形態）によっても SNS の１日の利用時間が左右されることを示唆している。標準化係数（β）をみると、年齢が-0.450 と大きく、年齢が SNS の１日の利用時間に与える影響が強いといえる。一方、女性ダミーや職業（雇用形態）は有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説１を支持する結果である。

表５　Q27 SNS の１日の利用時間の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	4.702	0.186		***
女性ダミー	0.258	0.106	0.067	*
Q52 年齢	-0.527	0.037	-0.450	***
Q53 職業（雇用形態）	0.011	0.021	0.016	
調整済みR^2	0.199			
N	1087			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表６は、幸福度を従属変数、SNS の１日の利用時間、女性ダミー、年齢、職業を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R2 値は 0.166 であり、投入した独立変数によって従属変数である SNS の１日の利用時間の分散の 16.6%が説明されている。

結果をみると、年齢、職業（雇用形態）、SNS の１日の利用時間が正で有意、女性ダミーが負で有意であった。標準化係数（β）をみると、女性ダミーが-0.159 と大きく、年齢が幸福度に与える影響が強いといえる。一方、女性ダミーや職業（雇用形態）は有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説１を支持する結果である。

表 6　Q2 幸福度の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	1.589	0.127		***
女性ダミー	-0.159	0.057	-0.085	*
Q52 年齢	0.079	0.022	0.139	***
Q53 職業（雇用形態）	0.011	0.011	0.036	
Q27 SNS利用時間	0.031	0.016	0.064	*
調整済みR^2	0.166			
N	1087			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究は年齢や職業などの個人属性が、SNS の利用時間にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「年齢が若いほど、SNS の 1 日の利用時間が長い」仮説 2「学生や家事専業などの職業の人ほど SNS の 1 日の利用時間が長い」仮説 3「男性の方が女性よりも SNS の 1 日の利用時間が長い」仮説 4 「SNS の 1 日の利用時間が長い人ほど幸福度は低い」という 4 つの仮説を立てて分析を行った。分析の結果、年齢が若いほど、SNS の 1 日の利用時間は長くなる傾向がみられ、特に 18 歳、19 歳の利用時間は他の年代と比較して SNS を長時間利用していることが明らかになった。これにより、仮説 1 は支持された。また、職業と SNS の 1 日の利用時間には一定の関連が認められたものの、家事専業などの職業の人よりも学生の方が SNS の 1 日の利用時間との関連が強いことが示され、仮説 2 は完全には支持されなかった。さらに、性別については女性の方が男性よりも SNS の 1 日の利用時間が長い傾向が認められ、仮設 3 は支持されなかった。次に仮設 4 で明らかになったよう、SNS の 1 日の利用時間と幸福度に一定の関連は認められなかったことから、幸福度には SNS の 1 日の利用時間ではない世帯年収や年齢などといった他の要因が影響を与えている可能性も示唆された。一方で、不幸せと回答した人の割合が最も高かったのは、SNS の 1 日の利用時間が「2 時間以上」と回答した人と「全く利用しない」と回答した人であった。このことから、SNS の「使いすぎ」や「使わなすぎ」はいずれも幸福度に悪影響を与える可能性があると考えられる。

6. 文献

[1]…総務省(2022)通信利用動向調査の結果（2024 年 12 月 12 日閲覧）
[2]…大野志郎(2019)「SNS 依存および諸問題と利用動機の関係」『日本情報教育学会誌』pp.10-17

[3]…Emily Stella Scott, Catarina Canivet , Per-Olof Ostergren (2020). Investigating the effect of social networking site use on mental health in an 18-34 year-old general population: A cross-sectional study using the 2016 Scania Public Health Survey. *BMC Public Health,* 20, Article 1759.
[4]…水落正明（2010）「夫婦の家事・余暇時間に関する分析：「社会生活基本調査」個票を用いて」『三重 大学法経論叢』28(1): pp. 1-14.
[5]…Mattingly, M. J., & Bianchi, S. M. (2003). Gender Differences in the Quantity and Quality of Free Time: The U.S. Experience. *Social Forces, 81*(3), 999–1030.
[6]…Lin L. Y., Sidani J. E., Shensa A., Radovic A., Miller E., Colditz J. B., Hoffman B. L., Giles L. M., & Primack B. A. (2016). Association between Social Media Use and Depression among U.S. Young Adults. *Depress Anxiety*, 33(4) 323-331.

第 11 章　情報収集におけるメディア選択

和田　枝里子

1.　はじめに

インターネットが普及し、誰でも情報を発信できる現代では、身の回りに情報が溢れている。それらをどのように取捨選択しているのか。また、世の中の動きを伝えるニュースにどこで接しているのか。テレビ、新聞、ラジオ、インターネットメディアなど、使用する媒体によって得られる情報は異なり、日々のメディア選択が民意形成に影響している可能性がある。

そこで本章では、年齢、所得に着目し、それらの個人属性によって選択するメディアがどのように異なるのかを明らかにする。その中で、世代間または社会階層間での傾向や特徴が見られたら、特定の層に向けた効果的な情報伝達方法を検討することにも繋がるだろう。

2.　仮説

2.1. 先行研究

保高（2018）は、40 代を境に上の年層と下の年層で、テレビや新聞などのマスメディアと、SNS や動画などのインターネット系メディアとの位置づけが大きく異なっており、日常的に利用するメディアに違いがあることを示した。若年層では、「知りたいことだけ知っておけばよい」という意識が高く、ネット系メディアを用いてニュースに対し選択的接触を図る人が多かった。

渡辺（2019）は、最も使われているニュースメディアはテレビであるが、ニュースに最も多く接するメディアは性別、年層などで異なり、「新聞」「NHK 報道番組」「民放報道番組」「民放情報番組・ワイドショー」と「Yahoo!ニュース」「LINE NEWS」などに分かれる、とした。

税所（2022）によると、ニュース源として過去一週間に利用した媒体を複数回答で尋ねると、テレビ、新聞・雑誌、ラジオの「伝統メディア」離れが進んでいる。一方ネットでは、ソーシャルメディアを含むオンライン全体がテレビを上回っており、ソーシャルメディア単体でも新聞・雑誌と並ぶ利用率となっている。また、オンラインでのニュースの入手経路を尋ねると、「ソーシャルメディアでニュースを見つけた」と答えた人は、18～24 歳の層が圧倒的に多かった。

2.2. 仮説

保高（2018）によって、年齢によって日常的に利用するメディアが異なり、マスメディアとインターネットの位置づけに違いがあることが示された。そこで、ニュース接触における

メディア選択は年齢による影響を受けると考えた。
　また、新聞は継続的に利用する有償メディアである。そのため、日々の情報源として選択する上で所得による影響を受けると考えた。

仮説 1　若年層ほど、インターネット経由でニュースに接している割合が高い。
仮説 2　所得が高いほど、新聞を利用する割合が高い。

3.　データと変数

3.1. データ

　データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

　使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q30：あなたは、普段、どんなメディアでニュースを見聞きしますか。最も多く接するメディアを１つ選んでください。（インターネットダミー）（新聞ダミー）
　1.テレビ　2.新聞（電子版も含む）　3.ラジオ　4.インターネット（ネットニュース、YouTube などの動画サイト、SNS など）　5.その他　6.ニュースはまったく見聞きしない
　上記の選択肢に対して、インターネットを 1、それ以外を 0 とするインターネットダミー、新聞を 1、それ以外を 0 とする新聞ダミーを作成した。

Q51：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）
　1.男性　2.女性
　上記の選択肢に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢（実数））
　1.18 歳、19 歳　2.20 代　3.30 代　4.40 代　5.50 代　6.60 代　7.70 代以上
　上記の選択肢に対して、18 歳、19 歳を 18.5、20 代を 24.5、30 代を 34.5、40 代を 44.5、50 代を 54.5、60 代を 64.5、70 代を 74.5 として、実数化を行った。

Q62：過去一年間のあなたの世帯の収入はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。（世帯収入実額（万円））
　1.100 万円未満　2.100 万円~200 万円未満　3.200 万円~400 万円未満　4.400 万円~600 万円未満　5.600 万円~800 万円未満　6.800 万円~1000 万円未満　7.1000 万円~1500 万円

未満　8.1500 万円以上　9.わからない

上記の選択肢に対して、100 万円未満を 50、100 万円～200 万円未満を 150、200 万円～400 万円未満を 300、400 万円～600 万円未満を 500、600 万円～800 万円未満を 700、800 万円～1000 万円未満を 900、1000 万円～1500 万円未満を 1250、1500 万円以上を 1750 として、実数化した上で、わからないは欠損値として処理した。

4. 分析

はじめに、年齢とニュースを視聴するメディアの二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、年齢とニュースを視聴するメディアの二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、どんなメディアでニュースを見聞きするかとの設問に「インターネット」と回答した人は、18 歳、19 歳では 66.7%、20 代では 69.3%、30 代では 76.6%、40 代では 61.8%である一方で、50 代では 41.9%、60 代では 30.1%、70 代では 10.8%である。また、それぞれの年代で最も割合の高い媒体を比較すると、18 歳、19 歳では 66.7%が「インターネット」、20 代では 69.3%が「インターネット」、30 代では 76.6%が「インターネット」、40 代では 61.8%が「インターネット」、50 代では 51.1%が「テレビ」、60 代では 62.4%が「テレビ」、70 代では 69.9%が「テレビ」と回答していた。これらのことから、40 代以下の人のうち 6 割以上はインターネットでニュースに接しており、50 代を境に主なニュースの接点がインターネットからテレビに移行していることがわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 304.926 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.235 であり、強い関連が認められる。以上のことから、年齢とニュースを視聴するメディアの二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 1　Q52 年齢と Q30 ニュースを視聴するメディアのクロス集計表

			Q30 どんなメディアでニュースを見聞きするか						
			テレビ	新聞（電子版も含む）	ラジオ	インターネット	その他	ニュースはまったく見聞きしない	合計
Q52 年齢	18歳、19歳	N	3	1	0	8	0	0	12
		%	25%	8%	0%	67%	0%	0%	100%
	20代	N	21	1	0	52	0	1	75
		%	28%	1%	0%	69%	0%	1%	100%
	30代	N	21	1	2	85	0	2	111
		%	19%	1%	2%	77%	0%	2%	100%
	40代	N	56	5	2	107	1	2	173
		%	32%	3%	1%	62%	1%	1%	100%
	50代	N	117	11	5	96	0	0	229
		%	51%	5%	2%	42%	0%	0%	100%
	60代	N	116	8	5	56	1	0	186
		%	62%	4%	3%	30%	1%	0%	100%
	70代	N	221	57	4	34	0	0	316
		%	70%	18%	1%	11%	0%	0%	100%
合計		N	555	84	18	438	2	5	1102
		%	50%	8%	2%	40%	0%	0%	100%

x^2(df=30, N=1102)=304.926***, Cramer V=.235***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、世帯年収とニュースを視聴するメディアの二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、世帯年収とニュースを視聴するメディアの二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、どんなメディアでニュースを見聞きするかとの設問に「新聞（電子版も含む）」と回答した人は、100 万円未満では 10.0%、100 万円～200 万円未満では 7.4%、200 万円～400 万円未満では 12.5%、400 万円～600 万円未満では 6.6%、600 万円～800 万円未満では 4.8%、800 万円～1000 万円未満では 3.0%、1000 万円～1500 万円未満では 7.6%、1500 万円以上では 12.5%であった。世帯年収が高いほど、新聞の割合が高いとは言えない。また、それぞれの階層で最も割合の高い媒体を比較すると、100 万円未満では 48.3%が「テレビ」、100 万円～200 万円未満では 67.2%が「テレビ」、200 万円～400 万円未満では 54.5%が「テレビ」、400 万円～600 万円未満では 50.3%が「テレビ」、600 万円～800 万円未満では 47.6%が「テレビ」、800～1000 万円未満では 61.0%が「インターネット」、1000 万円～1500 万円未満では 49.4%が「インターネット」、1500 万円以上では 47.5%が「インターネット」と回答していた。世帯年収によって、ニュースの接点のボリューム層がテレビからインターネットに移行していることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 82.798 であり、1%水準で統計的に

有意である。また、Cramer の連関係数は 0.133 であり、強い関連が認められる。以上のことから、世帯年収とニュースを視聴するメディアの二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。しかし、これらの結果は仮説 2 を必ずしも支持するとは言えない。

表２　Q62 世帯年収と Q30 ニュースを視聴するメディアのクロス集計表

			Q30 どんなメディアでニュースを見聞きするか						
			テレビ	新聞（電子版も含む）	ラジオ	インターネット	その他	ニュースはまったく見聞きしない	合計
Q62 世帯年収	100万円未満	N	29	6	3	20	1	1	60
		%	48%	10%	5%	33%	2%	2%	100%
	100万円～200万円未満	N	82	9	3	28	0	0	122
		%	67%	7%	3%	23%	0%	0%	100%
	200万円～400万円未満	N	144	33	3	83	0	1	264
		%	55%	13%	1%	31%	0%	0%	100%
	400万円～600万円未満	N	76	10	1	62	1	1	151
		%	50%	7%	1%	41%	1%	1%	100%
	600万円～800万円未満	N	60	6	1	59	0	0	126
		%	48%	5%	1%	47%	0%	0%	100%
	800万円～1000万円未満	N	35	3	1	61	0	0	100
		%	35%	3%	1%	61%	0%	0%	100%
	1000万円～1500万円未満	N	33	6	1	39	0	0	79
		%	42%	8%	1%	49%	0%	0%	100%
	1500万円以上	N	14	5	1	19	0	1	40
		%	35%	13%	3%	48%	0%	3%	100%
合計		N	473	78	14	371	2	4	942
		%	50%	8%	2%	39%	0%	0%	100%

x^2(df=35, N=942)=82.798***, Cramer V=.133***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 3 は、ニュースを視聴するメディア（インターネットダミー）を従属変数、女性ダミー、年齢（実数）、世帯収入実額（万円）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.207 であり、投入した独立変数によって従属変数であるインターネットを経由したニュース接触の分散の 20.7%が説明されている。

結果をみると、年齢（実数）が負で有意であった。これは、年齢が低いほどインターネットを通してニュースに接触していることを示している。標準化係数（β）をみると、-0.436 と大きく、年齢がインターネットを経由したニュース接触に与える影響は強いといえる。上記の結果は、仮説 1 を支持する結果である。

表 3　Q30 ニュースを視聴するメディア（インターネットダミー）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	1.144	0.065		***
Q51 女性ダミー	-0.064	0.029	-0.066	
Q52 年齢(実数)	-0.013	0.001	-0.436	***
Q62 世帯収入実額（万円）	0.007	0.004	0.062	
調整済みR^2	0.207			
N	937			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 4 は、ニュースを視聴するメディア（新聞ダミー）を従属変数、女性ダミー、年齢（実数)、世帯収入実額（万円）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2 値は 0.045 であり、投入した独立変数によって従属変数である新聞を経由したニュース接触の分散の 4.5%が説明されている。

結果をみると、年齢（実数）が正で有意であった。これは、年齢が高いほど新聞を通してニュースに接触していることを示している。標準化係数（β）をみると、0.208 であり、年齢が新聞を経由したニュース接触にある程度影響を与えているといえる。一方、世帯収入実額は有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説 2 を支持する結果ではない。

表 4　Q30 ニュースを視聴するメディア（新聞ダミー）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	-0.104	0.040		
Q51 女性ダミー	-0.040	0.018	-0.073	
Q52 年齢(実数)	0.004	0.001	0.208	***
Q62 世帯収入実額（万円）	0.001	0.002	0.015	
調整済みR^2	0.045			
N	937			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究は年齢や所得といった属性の違いがニュース接触におけるメディア選択にどのような影響を及ぼしているのか明らかにすることを目的とし、仮説 1「若年層ほど、インターネット経由でニュースに接している割合が高い。」仮説 2「所得が高いほど、新聞を利用する割合が高い。」という 2 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果より、年齢が低いほどインターネット経由でニュースに接していると回答する割合が高いことから仮説 1 が支持された。一方、世帯年収が高いほど新聞経由でニュースに接していると回答する割合が高いとは言えないため仮説 2 は支持されなかった。重回帰分析の結果をまとめると、年齢が低いほどニュース視聴にインターネットを用いており、年齢が高いほど新聞を用いている傾向が見られた。これらのことから、ニュース接触におけるメディア選択には年齢が与える影響が大きいことが分かった。また、世帯年収とニュースを視聴するメディアの二変数についてのクロス集計表から、世帯年収によって、ニュースの接点のボリューム層がテレビからインターネットに移行していることが読み取れた。しかし、インターネットダミーを従属変数とする重回帰分析より、世帯年収がインターネットを経由したニュース接触に有意な影響を与えていることは確認できなかった。今回行ったインターネットダミー、新聞ダミーによる分析では、渡辺（2019）にあるような性別による有意な影響は見られなかった。他のメディアにおける影響の有無についても検証したい。

6. 文献

[1]…保高隆之（2018）「情報過多時代の人々のメディア選択「情報とメディア利用」世論調査の結果から」『放送研究と調査』68(12):pp.20-45.

[2]…渡辺洋子（2019）「SNS を情報ツールとして使う若者たち「情報とメディア利用」世論調査の結果から②」『放送研究と調査』69(5):pp.38-56.

[3]…渡辺洋子・政木みき・河野啓（2019）「ニュースメディアの多様化は政治的態度に違いをもたらすのか～「ニュースメディア接触と政治意識」調査から～」『放送研究と調査』69(6):pp.2-31.

[4]…税所玲子（2022）「デジタル化の中でのニュースの読まれ方（2）国際比較調査『ロイター・デジタルニュースリポート』より」『放送研究と調査』72(11):pp.52-65.

第 12 章　ネット情報からの人々の購買行動

喜多　涼陽

1.　はじめに

私たち人間は日々購買行動によって生活を成り立たせている。企業や小売店などは消費者に買い支えられており、サービスが利用されなければ成り立たない。したがってより多くの顧客を得るためには、その企業や商品のことを知ってもらう必要があり、効果的な宣伝をすることが求められる。そのためにはより多くの人が利用するメディアを活用することが大事だろう。

今日では SNS やネット記事、口コミによって購買を決定する層が増加してきた。テレビ CM における芸能人が、昨今では SNS のインフルエンサーに置き換えられてきており、「案件」といった言葉は元々、「問題とされている事象」を指す言葉であったが、徐々に「インフルエンサーが企業から金銭を貰って行う PR」を指す新しい意味で用いられることが増えているとされている。

そこで本研究では商品購入時にネットから情報を得ている人の割合を調べ、さらにどのような属性や特徴を持つ人が商品購入時にネットの情報を参考にする傾向があるのかを明らかにする。

2.　仮説

2.1. 先行研究

似たような研究として、Tee Kian Heng ら（2018）が、調査対象が学生であるものの、因果関係も含め詳しく調査している。 研究結果では、男性はネット記事、女性は SNS から商品情報を得ていることがわかった。また、友人・知人のおすすめ投稿や SNS 上の企業公式アカウントによる投稿が購入のきっかけになるそうだ。また、「いいね」を多くするユーザーは SNS をきっかけにした購買行動が多い。企業側、特にローカルな企業は広告だけでなく、口コミをさせる（ユーザーに促す）ような、思わず SNS に投稿したくなるような商品を生み出す必要があるとした。

2012 年には SNS がきっかけでの購買行動を市場開発研究所（2012）というところがまとめている。ここでは SNS の登録経験が若年層を中心にアカウント登録されていることがわかる。ただ、インターネットに比べて SNS がきっかけの購買行動はなかなか多くないようだった。今回は SNS だけでなく、インターネットがきっかけで購買行動をしているかを調べたい。

消費者庁 （2023）では「商品を知る or 購入を検討する際、どこから情報を入手していますか？」という質問で選択肢として、インターネット記事や価格を比較できるサイトなどを

挙げている。特に「SNS」「インフルエンサー」「口コミ・レビューサイト」は注釈をつけることであまり馴染みのない人にも配慮している。また、通販やフリマアプリなど、ネット媒体で購買するときに「デジタルプラットフォーム」という言葉を使っていた。

また、購買行動において、情報が SNS から得たものでも、ネットで購入するわけではなく、店舗に行って購入することがあると、三坂昇司 （2020）によって述べられている。それにより、「SNS やネットからの影響を受けた=ネットで買っている」とは限らない。また、商品購買の全体的な流れを正確に捉えるなら、インフルエンサーの個々の性質も捉える必要がある。

2.2. 仮説

他人からの影響を受けやすい人はインフルエンサーの PR 動画、オンラインショッピングサイトのレビューなどの意見に左右されやすいと考え、そういった人は商品購入時にネットの情報を参照しやすいと考える。

また、女性のほうが 1 日の中でネットを利用する時間が多いことがわかっているので、商品購入時にネットの意見を参考にする傾向にあるのではないかと考えた。

また、年齢が低いほどネットを利用時間が多い。またインフルエンサーも若い人が若い人向けに動画を出している事が多いため、ネットの情報を商品購入時に参考にしている年齢層は若いのではないかと考える。

仮説 1　他人から影響を受けやすい人は、ネットの情報を購買時に参考にしている。
仮説 2　女性のほうが、ネットの情報を購買時に参考にしている。
仮説 3　若い人のほうが、ネットの情報を購買時に参考にしている。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q29.あなたは、商品やサービスの購入を検討する際、ブログや口コミサイト、ＳＮＳなど、インターネットの情報を参考にしますか。

1.よくする　2.ときどきする　3.あまりしない　4.まったくしない

Q46.あなたは、知り合いから聞いた情報に影響されやすい方ですか。

1.そう思う　2.ややそう思う　3.あまりそう思わない　4.そう思わない

Q51：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性　2.女性

上記の選択に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢）

1. 18、19 歳　2. 20 代　3. 30 代　4. 40 代　5. 50 代　6. 60 代　7. 70 代以上

4. 分析

はじめに、他人からの影響の受けやすさと商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の二変数間の関連について、クロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、他人からの影響の受けやすさと商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討したものである。まず、他人からの影響の受けやすさに「そう思う」と回答した人の商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の割合は「よくする」が 65%、「まったくない」が 8%となっており、対照的に、他人からの影響の受けやすさに「そう思わない」と回答した人の商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の割合は「よくする」が 21%、「まったくない」が 30%となっているため、他人からの影響を受けやすい人ほど、商品購入時にネットの情報を参考にする頻度が高い傾向にあることがわかる。

次に、性別と商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、性別にネットの情報を参考にする頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、男性において「よくする」と回答した人が 29%、「まったくない」と回答した人が 18%。女性において「よくする」と回答した人が 34%、「まったくない」と回答した人が 15%。この結果より、女性のほうが商品購入時にネットの情報を参考にする頻度が高い傾向にあることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 9.045 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.091 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、他人からの影響の受けやすさと商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。この結果は仮説 2 を支持する結果である。

表 1　Q46 他人からの影響の受けやすさと Q29 商品購入時にネットの情報を参考にする頻度のクロス集計表

			Q29 購入の際、インターネットの情報を参考にするか				
			よくする	ときどきする	あまりしない	まったくない	合計
Q46 知り合いから聞いた情報に影響されやすい方だ	そう思う	N	33	12	2	4	51
		%	65%	24%	4%	8%	100%
	ややそう思う	N	172	158	52	38	420
		%	41%	38%	12%	9%	100%
	あまりそう思わない	N	123	189	100	104	516
		%	24%	37%	19%	20%	100%
	そう思わない	N	22	33	20	32	107
		%	21%	31%	19%	30%	100%
合計		N	350	392	174	178	1094
		%	32%	36%	16%	16%	100%

x^2(df=9, N=1094)=91.091***, Cramer V=.167***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 2　Q51 性別と Q29 商品購入時にネットの情報を参考にする頻度のクロス集計表

			Q29 購入の際、インターネットの情報を参考にするか				
			よくする	ときどきする	あまりしない	まったくない	合計
Q51 性別	男性	N	133	155	88	85	461
		%	29%	34%	19%	18%	100%
	女性	N	220	234	91	96	641
		%	34%	37%	14%	15%	100%
合計		N	353	389	179	181	1102
		%	32%	35%	16%	16%	100%

x^2(df=3, N=1102)=9.045*, Cramer V=.091*

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、年齢と商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は年齢と商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の二変数についてクロス集計

表を作成したものである。まず、「18、19 歳」「20 代」と回答した人の商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の割合はそれぞれ「よくする」が 50%、64 %、「まったくない」が 8%、4 %となっており、対照的に、年齢が「70 代」と回答した人の商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の割合は「よくする」が 8%、「まったくない」が 35%となっているため、年齢が若い人ほど、商品購入時にネットの情報を参考にする頻度が高い傾向にあることがわかる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 342.395 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.322 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、年齢と商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 3 を支持する結果である。

表 3　Q52 年齢と Q29 商品購入時にネットの情報を参考にする頻度のクロス集計表

			Q29 購入の際、インターネットの情報を参考にするか				
			よくする	ときどきする	あまりしない	まったくない	合計
Q52 年齢	18歳、19歳	N	6	5	0	1	12
		%	50%	42%	0%	8%	100%
	20代	N	48	20	4	3	75
		%	64%	27%	5%	4%	100%
	30代	N	70	33	4	4	111
		%	63%	30%	4%	4%	100%
	40代	N	81	74	11	7	173
		%	47%	43%	6%	4%	100%
	50代	N	77	99	34	19	229
		%	34%	43%	15%	8%	100%
	60代	N	44	82	26	34	186
		%	24%	44%	14%	18%	100%
	70代	N	26	79	100	111	316
		%	8%	25%	32%	35%	100%
合計		N	352	392	179	179	1102
		%	32%	36%	16%	16%	100%

x^2(df=18, N=1102)=342.395***, Cramer V=.322***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 4 は、品購入時にネットの情報を参考にする頻度（反転）を従属変数、知り合いから聞

いた情報に影響されやすい方だ(反転)、女性ダミー、年齢（実数)、1 日当たりのテレビ視聴時間を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R2 値は 0.262 であり、投入した独立変数によって従属変数である商品購入時にネットの情報を参考にする頻度の分散の 26.2%が説明されている。

結果をみると、知り合い反転が正で有意、年齢が負で有意であった。これは、知り合いから聞いた情報に影響されやすい人は、購入の際にインターネットの情報を参考にしやすく、年齢が高いほど、購入の際にインターネットの情報を参考にしにくいことがわかる。標準化係数（β）をみると、年齢が-0.456 と大きく、年齢が購入の際にインターネットの情報を参考にする頻度への影響が強いといえる。一方、女性ダミーは有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説 1 および 3 を支持する結果である。

表 4　Q29 商品購入時にネットの情報を参考にする頻度（反転）の重回帰分

	B	SE	β	
(定数)	3.961	0.155		***
知り合い反転	0.206	0.040	0.142	***
女性ダミー	0.073	0.057	0.034	
年齢(実数)	-0.030	0.002	-0.456	***
調整済みR^2	0.262			
N	1066			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5.　考察

本研究では、他人からの影響の受けやすさ、性別、年齢の違いが、商品購入時にネットの情報を参考にする頻度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「他人から影響を受けやすい人は、ネットの情報を購買時に参考にしている。」仮説 2「女性のほうが、ネットの情報を購買時に参考にしている。」仮説 3「若い人のほうが、ネットの情報を購買時に参考にしている。」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、他人から影響を受けやすい人や女性、年齢が若い人ほど、商品購入時にネットの情報を参考にする頻度が高いと回答する割合が多いことから仮説 1,2,3 が支持された。重回帰分析の結果をまとめると、知り合いからの影響を受けやすく若い人ほど、商品購入時にネットの情報を参考にする頻度が高い傾向にあることが分かった。また、年齢が高い人ほど商品購入時にネットの情報を参考にする頻度が低い傾向にあることがわかった。

しかし、性別は優位水準が 5%であり、他 2 つの仮説よりも影響が強くないと考えられる。これは、近年スマートフォンやインターネットの普及が、急速に進められており、性別に関係なく、SNS に接する頻度が増えているからではないか、と考えられる。逆に、高齢

層は、スマートフォン自体は持っているものの、従来の携帯電話と役割が変わっておらず、ブラウジングを用いた口コミの閲覧や、SNS の利用には至ってないのではないかと考えられる。

今後の展望としては、商品を食べ物や日用品、家電などのジャンルに分け、どのような属性を持つ商品を購入する時に、ネットの情報を参考にするのかを調べていくことで、実際の市場において、ターゲットやニーズの分析をする際に役立てられるのではないかと考える。

6. 文献

[1]…Tee Kian Heng・高嶋祐一（2018）「若者の SNS 利用と消費行動　―平成 29 年度経営・経済調査実習報告書―」『岩手県立大学総合政策学会』pp.1-43

[2]…株式会社市場開発研究所（2012）「平成生まれの若者と SNS、消費者情報」Vol.23

[3]…消費者庁（2023）「令和 5 年度消費者意識基本調査」
https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_research/research_report/survey_002/assets/consumer_research_cms201_240614_11.pdf（2024 年 12 月 5 日閲覧）

[4]…関西大学総合情報学部（2015）「平成 27 年度社会調査実習報告書 ―高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査―」pp.124-130.

[5]…三坂昇司（2020）「調査用の SNS 内の発言と購買行動の事例分析」『流通情報』51(5) pp.25-35.

第 13 章　宿泊旅行頻度の傾向

久保侑汰

1.　はじめに

皆さんはどのくらいの頻度で旅行に行くだろうか。新型コロナウイルスの流行が過ぎ、旅行に再び行く人が増えてきている。また、日本に旅行に来る外国人観光客の数も増加した。観光庁の宿泊旅行統計調査（2023）によると、2023 年 12 月、2024 年 1 月の延べ宿泊者数はコロナ前の 2019 年同月と比べて同水準以上と宿泊旅行がコロナから回復傾向にあることが分かる。下島（2023）によると、コロナ渦前とコロナ渦の比較において後者の旅行行動者の割合は減少している。コロナの感染不安などコロナの影響により減少していることが見てとれた。しかし、コロナの影響が少なくなってきている今は回復にむかっているだろう。

高槻市は新幹線の駅がある京都駅、新大阪駅へのアクセスも良く、また、伊丹空港へも約 1 時間で行くことができ、旅行に行きやすい市であると考える。では、実際に宿泊旅行へ出かける割合はどのくらいなのか、どのくらいの頻度でいくのだろうか。また、どのような傾向があるのだろうか。

本章では、宿泊をともなう旅行の頻度に関して、性別、年齢、世帯年収に注目を置いて考察する。

2.　仮説

2.1. 先行研究

森下（2014）では世代別家族の旅行について述べられているが、旅行の妨げとなるものとして、費用や親の時間、子供の時間と回答している割合が高かった。費用については 40 代以下の若い世代では 50%以上が回答している。費用が妨げになるということは年収が影響を与える要因になっていると考える。50 代では子供の時間と答えている割合が高かった。年代の高い親世代ほど中学生、高校生世代の子供が多く、子供が忙しいことはもちろん、子供同士で旅行に行くことも影響していると考える。子育て世代においては 40 代よりも 50 代のほうが家族旅行の意欲が低下していることも分かった。これは古屋ら（2014）でも言及されており、30~59 歳までの子育て世代は仕事等で時間的な制約が大きいことから、十分な時間を旅行行動に費やすことが出来ないためと考えられるとされている。

古屋ら（1993）から、年収が個人属性の中で最も個人属性ごとの発生回数の落差が大きいとされており、年収が高いほど回数が多くなることがわかった。観光発生回数に関しては、年間複数回旅行を行う人全体に対する比率が約 30%弱にもかかわらず、総発生量に対する割合が高くなっており、特に 2 回から 4 回である割合が総発生回数に対して 50%を占めていることがわかった。また、ここでも女性の方が男性よりも全ての世代において回数が多か

った。

原田ら（2011）は 65 歳以上の高齢者を対象に余暇活動と生きがいについて研究されていたが、「あなたの趣味は何ですか？」という質問に対し、男女ともに 50%以上が「旅行」と回答し、1 位であった。高齢者は時間的余裕、経済的余裕があることから非日常型レジャーである「旅行」への参加の人気が高いことがわかったとされている。問題提起でも挙げた通り、高槻市は旅行へ行きやすい環境にあると考える。森下（2014）では費用、時間が旅行の妨げになっているとされており、両方の影響を受けない高齢者世代は他の世代と比較し、宿泊をともなう旅行の頻度は高いと考えた。

2.2. 仮説

先行研究より、宿泊をともなう旅行の妨げになる大きな要因として、費用と時間が挙げられた。もちろん、旅行に興味がない人は一定数居るが、これらの負の要因を被らない人に関しては宿泊をともなう旅行の頻度は多くなると考えた。

また、男性よりも女性のほうが友達の付き合いが多く、子育て世代においてもママ友などを同行者とし、宿泊をともなう旅行に出かける割合が高いと考えた。

仮説 1　年収が高いほど宿泊をともなう旅行の頻度が多い。
仮説 2　高齢世代は他の世代と比べて宿泊をともなう旅行の頻度が高い。
仮説 3　男性より女性のほうが宿泊をともなう旅行の頻度が多い。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q24：あなたは、次のような活動をどのくらいしていますか。

B.　宿泊をともなう旅行現在の生活全体にどのぐらい満足していますか。（宿泊旅行頻度（反転））

1.月 1 回以上　2.年に数回ぐらい　3.年に 1 回ぐらい　4.数年に 1 回ぐらい　5.まったくない

Q51：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1 .男性　2　.女性

上記の選択に対して、女性を 1、男性を 0 とする女性ダミーを作成した。

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢（実数））

1 .18、19 歳　2 .20 代　3 .30 代　4 .40 代　5 .50 代　6 .60 代　7 .70 代以上

Q75：過去一年間のあなたの世帯年収はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。（世帯収入実額（万円））

1 .100 万円未満　2 .100 万円~200 万円未満　3 .200 万円~400 万円未満

4 .400 万円~600 万円未満　5 .600 万円~800 万円未満　6 .800 万円~1000 万円未満

7 .1000 万円~1500 万円未満　8 .1500 万円以上　9 .わからない

4.　分析

はじめに世帯年収と宿泊旅行頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、世帯年収と宿泊旅行頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、世帯年収が 800 万円~1000 万円未満、1000 万円~1500 万円未満、1500 万円以上と回答した人で、宿泊旅行頻度を「月 1 回以上」、「年に数回くらい」、「年に 1 回くらい」と回答した人を合わせると、80%となった。一方で、世帯年収が 400 万円未満の選択肢を回答した人で宿泊旅行頻度を「数年に 1 回くらい」、「まったくない」と回答した人はそれぞれ合わせると 50%程度となり、高世帯年収と対象的となった。したがって、世帯年収が高いほど宿泊旅行頻度が高いことがわかる。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 137.295 であり、1%水準で統計的に

有意である。また、Cramer の連関係数は 0.191 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、世帯年収と宿泊旅行頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられ、これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 1　Q62 世帯年収と Q24_B 宿泊旅行頻度のクロス集計表

			Q24_B 宿泊をともなう旅行					
			月に1回以上	年に数回ぐらい	年に1回ぐらい	数年に 1回ぐらい	まったくない	合計
Q62 世帯年収	100万円未満	N	0	10	8	16	26	60
		%	0.0%	16.7%	13.3%	26.7%	43.3%	100.0%
	100万円～200万円未満	N	2	27	21	29	42	121
		%	1.7%	22.3%	17.4%	24.0%	34.7%	100.0%
	200万円～ 400万円未満	N	6	66	58	76	57	263
		%	2.3%	25.1%	22.1%	28.9%	21.7%	100.0%
	400万円～ 600万円未満	N	1	52	53	29	16	151
		%	0.7%	34.4%	35.1%	19.2%	10.6%	100.0%
	600万円～ 800万円未満	N	3	38	34	33	18	126
		%	2.4%	30.2%	27.0%	26.2%	14.3%	100.0%
	800万円～1000万円未満	N	2	55	16	16	11	100
		%	2.0%	55.0%	16.0%	16.0%	11.0%	100.0%
	1000万円～1500万円未満	N	3	40	24	8	4	79
		%	3.8%	50.6%	30.4%	10.1%	5.1%	100.0%
	1500万円以上	N	2	20	9	7	2	40
		%	5.0%	50.0%	22.5%	17.5%	5.0%	100.0%
合計		N	19	308	223	214	176	940
		%	2.0%	32.8%	23.7%	22.8%	18.7%	100.0%

x^2(df=28, N=940)=137.295***, Cramer V=.191***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, † p<.10

次に、年齢と宿泊旅行頻度の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は性別と宿泊旅行頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、若い世代である 20、30 代で宿泊旅行頻度が「月 1 回以上」、「年に数回くらい」と回答した人を合わせると、両年代とも 50%を超えている。一方、高齢世代である 60、70 代では 30%程度と低いことが理解できる。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 72.099 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.128 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、年齢と宿泊旅行頻度の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 は支持されない結果となった。

表 2　Q52 年齢と Q24_B 宿泊旅行頻度のクロス集計表

			Q24_B 宿泊をともなう旅行					
			月に1回以上	年に数回ぐらい	年に1回ぐらい	数年に1回ぐら	まったくない	合計
Q52 年齢	18歳、19歳	N	0	6	2	1	3	12
		%	0.0%	50.0%	16.7%	8.3%	25.0%	100.0%
	20代	N	3	37	14	8	13	75
		%	4.0%	49.3%	18.7%	10.7%	17.3%	100.0%
	30代	N	5	37	38	21	10	111
		%	4.5%	33.3%	34.2%	18.9%	9.0%	100.0%
	40代	N	1	59	48	37	28	173
		%	0.6%	34.1%	27.7%	21.4%	16.2%	100.0%
	50代	N	4	74	53	64	34	229
		%	1.7%	32.3%	23.1%	27.9%	14.8%	100.0%
	60代	N	4	61	35	43	42	185
		%	2.2%	33.0%	18.9%	23.2%	22.7%	100.0%
	70代	N	3	72	73	72	94	314
		%	1.0%	22.9%	23.2%	22.9%	29.9%	100.0%
合計		N	20	346	263	246	224	1099
		%	1.8%	31.5%	23.9%	22.4%	20.4%	100.0%

x^2(df=24. N=1099)=72.099***. Cramer V=.128***
*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に性別と宿泊をともなう旅行の二変数間の関連について条件を設け、クロス集計表を用いて検討する。

表 3 は性別と宿泊旅行頻度の二変数についてクロス集計表を作成したものである。まず、男女ともに「年に数回くらい」と回答した人が多く、男性が 30.8%、女性が 32.1%であり、大きな差はなかった。他の選択肢についても同様のことがいえる。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 0.543 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.022 である。以上から性別と宿泊旅行頻度の二変数間の関連は統計的に有意な関連であると考えられず、仮説 3 は支持されない。

表 3　Q51 性別と Q24_B 宿泊旅行頻度のクロス集計表

			Q24_B 宿泊をともなう旅行					
			月に1回以上	年に数回ぐらい	年に1回ぐらい	数年に1回ぐらい	まったくない	合計
Q51 性別	男性	N	7	142	110	108	94	461
		%	1.5%	30.8%	23.9%	23.4%	20.4%	100%
	女性	N	12	205	13	142	130	638
		%	0.0	32.1%	21.7%	22.3%	20%	100%
合計		N	19	673	219	250	224	1099
		%	1.7%	56.7%	18.5%	22.7%	20.4%	100%

x^2(df=4, N=1099)=.543***, Cramer V=.022***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 4 は、宿泊旅行頻度（反転）を従属変数、女性ダミー、年齢（実数）、世帯収入実額を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2値は 0.099 であり、投入された独立変数によって従属変数である宿泊旅行頻度の分散の 9.9%が説明されている。

結果を見ると、世帯収入実額が正で有意、年齢が負で有意であった。これから世帯収入実額が多いほど宿泊旅行頻度が高いことがわかる。一方、女性ダミーは有意な効果が見られなかった。標準化係数（β）をみると、世帯収入実額が 0.255 と大きく、世帯収入実額が宿泊旅行頻度に与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 1 を支持する結果である。

表 4　Q24_B 宿泊旅行頻度の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	2.919	0.163		***
Q51 女性ダミー	0.270	0.072	0.012	
Q52 年齢（実数）	-0.100	0.002	-0.138	***
Q64 世帯収入実額（100万円）	0.071	0.009	0.255	***
調整済みR^2	0.099			
N	935			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究では宿泊旅行頻度はどのような属性の人が高いかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「年収が高いほど宿泊をともなう旅行の頻度が多い。」仮説 2「高齢世代は他の世代

と比べて宿泊をともなう旅行の頻度が高い。」仮説 3「男性より女性のほうが宿泊をともなう旅行の頻度が多い。」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、世帯年収が高いほど宿泊旅行頻度が高い選択肢を回答している割合が多く、仮説 1 は支持された。また、年齢が高いほど宿泊旅行頻度が低い選択肢の回答をしている割合が多く、年齢が低いほど宿泊旅行頻度が高い選択肢を回答している割合が多く、仮説 2 は支持されない結果となった。そして、性別では、男女で宿泊旅行頻度に大きな差はなく、仮説 3 も支持されない結果となった。

全体的に見ると、年に 1 回以上宿泊旅行をする割合が半数を超えていることが多く、旅行への関心は高いことが分かった。また、旅行の妨げとなっているのは分析前は、時間とお金であると想定していたが、分析によって、年齢とお金であることも分かった。地域活性化や宿泊旅行を促したい際には、景品のプレゼントなど物品の面ではなく、クーポンなど金銭の面で支援を行うことが有効であると考えられる。コロナ渦の際に政府が行った Go To トラベルは非常に有効的であったと考えられる。今後も更に支援を行うほか、高齢世帯が気軽に旅行することが出来るバスツアーなどのパッケージなどを企画することによって更に旅行の需要は高くなると考えた。地方活性化のためにも、政府の積極的な支援に期待したい。

6. 文献

[1]…国土交通省・観光庁（2024）「宿泊旅行統計調査」（2023 年（令和 5 年）12 月・第 2 次速報、2024 年（令和 6 年）1 月・第 1 次速報）

[2]…古屋秀樹・全相鎮（2014)「旅行者の志向と宿泊観光旅行との関連性分析」『土木計画学研究・論文集・第 31 巻』70(5):pp.I_ 267-I_277.

[3]…森下晶美（2014）「世代別家族旅行実施状況から見る若年家族旅行の可能性」『日本国際観光学会論文集)』(21):pp.87-92.

[4]…下島康史 (2023)「コロナ渦における首都圏居住者の宿泊観光旅行に関する一考察」『桜美林大学研究紀要,社会科学研究』(3):pp.51-60.

[5]…原田隆・加藤恵子・小田良子・内田初代・大野知子（2011）「高齢者の生活習慣に関する調査(2),余暇活動と生きがい感について」『名古屋文理大学紀要』(11):pp27-33.

[6]…古屋秀樹・兵藤哲朗・森地茂（1993）「発生回数の分布に着目した観光交通行動に関する基礎的研究」『都市計画論文集』(28):pp. 319-324.

第 14 章　近隣住民との親密度

角田　渉睦

1.　はじめに

本章では、近年での近隣住民との親密度についての分析を行う。近年では近所付き合いが希薄化している印象を受ける。マイナビ子育て（2022）によると、背景としては①少子高齢化②共働き世帯の増加③単身者世帯の増加といった社会構造の変化が挙げられ、さらに、直近ではコロナ禍もご近所付き合いの希薄化に影響を与えている。

社会が変わり近所付き合いは減って行っているが、リンクハウス（2020）によると、近所付き合いのメリットとして次のことが上げられる。まず詐欺や不審者、勧誘の情報を共有できることである。これは近隣住民同士がお互いに注意し合うことで空き巣、泥棒などの犯罪を事前に対策できる。また自身の子供が犯罪に巻き込まれることも少なくなる。次にご近所でトラブルが起こりにくくなることである。ご近所トラブルにかかわらず、一般的なトラブルは相手のことをよく知らない、分からない時に発生し友達同士・親しい仲同士であるとトラブルはあまり起こらない。最後に何かあったときに助けあえるということである。これは主に災害時などの有事の際に近所付き合いをしていると助け合いができるためである。また高槻市の公式ホームページによると、高槻ジャズストリートや高槻シティハーフマラソン、高槻まつりなどに加えて関西大学が行っている高槻キャンパス祭、高槻キャンパスミューズ祭など動員数の大きなイベントも多く開催されていて地域活動は活発である。上田（2013）によると、大震災発生後 72 時間を過ぎると重症を負った被災者の 99%は助からないといわれており、また行政による支援が始まるのも 72 時間後と言われている。つまり 72 時間以内は近隣住民同士で助け合えるかが生存率を大きく左右する。また、高槻市は田舎と都会の場所があり、イベントもたくさんある。高槻市としては地域コミュニティーを活発にしたいと見受けられるが、実際はどうなのだろうか。

本研究では年齢、性別などとの関係性を調査し、明らかにすることを目的とする。

2.　仮説

2.1. 先行研究

吉井（2013）は「近所付き合いをしている人が増やしたいですか」に対して「どちらともいえない」が一番多く少し増やしたいが次いで多かった。しかし「親しい人は多いか」に対しては「やや少ない」、「少ない」が 50%を超えているため意識と行動が噛み合っていないことがわかる。吹田市公式ウェブサイトによると実際の近所付き合いで「ほとんど付き合いはない」と答えた人が 30 歳未満では 23.1%であるのに対し、70 歳以上は 1.2%であった。また、「訪問したり助け合う」と答えた人は 30 歳未満では 12.1%であるのに対し、70 歳以

上は 32.6%であった。しかし、望ましい近所付き合いの項目では「訪問したり助け合う」と答えた人は 30 歳未満では 41.8%、70 歳以上は 47.1%であった。この結果から分かることは、年齢層が低い方が理想と現実が乖離しているということである。若年層では 4、5 人に 1 人が近所付き合いをしていないことの理由としては、仕事、余暇時間の少なさに加えて、人間関係の構築に消極的になっていることが考えられる。澤岡詩野ら（2015）によると、近隣との支え合いへの意識は男性においては、居住年数ではなく年齢の影響が認められ、家には寝に帰るだけで、地域社会とのかかわりがほとんどなく、地域や近隣に対する意識が醸成されにくかったという企業退職者の青壮年期の生活の影響が示唆された。このことから高齢者男性だけではなく、地域との関わりが少ない青壮年期なども含めて、男性の方が近所付き合いが少ないと考えた。

2.2. 仮説

若年層や中年層よりも高齢層の方が近所付き合いが多いと考える。高齢層の方が、近所付き合いをしようという意識が高く、また余暇時間も他の層よりも長いためと予想する。女性の方が近所付き合いが多いと考える。なぜなら、女性の方が居住地域に長く滞在している傾向があり、子育てをとっても子どもについての情報を周りから収集しないといけないため近所付き合いが必然と多くなるためである。最後に、近所付き合いを増やしたいと考える人はすでに近所付き合いが多いと考える。これは近所付き合いを増やしたい人は意識が高いため、近所付き合いを増やしたいと思わない人たちよりも既に近所付き合いが多い。

仮説 1　高齢者の方が近所付き合いが多い。
仮説 2　女性の方が近所付き合いが多い。
仮説 3　近所付き合いが多い人ほど、さらに近所付き合いを増やしたいと考えている。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した

Q40 : あなたは、現在のお住まいの地域で親しくしている人の数が、どちらかといえば多い方だと思いますか、それとも少ない方だと思いますか。（地域で親しくしている人の数（反転））

1. 多い　2. やや多い　3. どちらともいえない　4. やや少ない　5. 少ない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q41；あなたは、今まで以上に近所づきあいを増やしたいですか。それとも減らしたいですか。（今まで以上に近所づきあいを増やしたいか（反転））

1.増やしたい　2.少し増やしたい　3.どちらともいえない　4.少し減らしたい　5.減らしたい

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q51：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性　2.女性

上記の選択に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢（実数））

1.18 歳、19 歳　2.20 代　3.30 代　4.40 代　5.50 代　6.60 代　7.70 代以上

上記の選択肢に対して、18 歳、19 歳を 18.5、20 代を 24.5、30 代を 34.5、40 代を 44.5、50 代を 54.5、60 代を 64.5、70 代を 74.5 として、実数化を行った。

4. 分析

はじめに、年齢と地域で親しくしている人の数の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、年齢と地域で親しくしている人の数（反転）の二変数間についてクロス集計表を作成したものである。「18、19 歳」で「多い」、「やや多い」と回答した人が合計で「33.4%」であり、20 代では「23.7%」、30 代、40 代、50 代、はそれぞれ「16.5%」、「15.8%」、「14.4%」と減少傾向であった。しかし、60 代、70 代はそれぞれ「17.4%」、「21.3%」と再び増加傾向であった。ここから年齢が若い人ほど地域で親しくしている人がおおく、徐々に少なくなっていき、60 代以降は再び増えていることが分かった。

表 1 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 45.789 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.103 と一定の強さの関連が認められる。以上の ことから、年齢と地域で親しくしている人の数の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表１　Q52 年齢とQ40 地域で親しくしている人の数（反転）のクロス集計表

			Q40 地域で親しくしている人の数					
			多い	やや多い	どちらとも いえない	やや少ない	少ない	合計
Q５２年齢	18歳、19歳	N	2	2	3	1	4	12
		%	16.7%	16.7%	25.0%	8.3%	33.3%	100.0%
	20代	N	5	13	12	11	35	76
		%	6.6%	17.1%	15.8%	14.5%	46.1%	100.0%
	30代	N	4	14	30	11	50	109
		%	3.7%	12.8%	27.5%	10.1%	45.9%	100.0%
	40代	N	9	18	51	32	61	171
		%	5.3%	10.5%	29.8%	18.7%	35.7%	100.0%
	50代	N	8	24	61	48	82	223
		%	3.6%	10.8%	27.4%	21.5%	36.8%	100.0%
	60代	N	6	26	46	41	65	184
		%	3.3%	14.1%	25.0%	22.3%	35.3%	100.0%
	70代	N	22	43	96	72	73	306
		%	7.2%	14.1%	31.4%	23.5%	23.9%	100.0%
合計		N	56	140	299	216	370	1081
		%	5.2%	13.0%	27.7%	20.0%	34.2%	100.0%

x^2(df=24, N=1081)=45.789**, Cramer V=.103**

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

次に、性別と地域で親しくしている人の数（反転）の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 2 は、性別と地域で親しくしている人の数（反転）の二変数間についてクロス集計表を作成したものである。まず、「男性」で「多い」、「やや多い」と回答した人が、「13%」、「女性」で「多い」、「やや多い」と回答した人が、「22.2%」であった。したがって、女性の方が地域で親しくしている人が多いことが分かった。

表 2 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 21.694 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.142 と一定の強さの関連が認められる。以上の ことから、性別と地域で親しくしている人の数の二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説を支持する結果である。

表 2　Q51 性別とQ40 地域で親しくしている人の数（反転）のクロス集計表

			Q40 地域で親しくしている人の数					
			多い	やや多い	どちらとも いえない	やや少ない	少ない	合計
Q51性別	男性	N	13	41	125	93	177	449
		%	2.9%	9.1%	27.8%	20.7%	39.4%	100.0%
	女性	N	42	98	176	121	194	631
		%	6.7%	15.5%	27.9%	19.2%	30.7%	100.0%
合計		N	55	139	301	214	371	1080
		%	5.1%	12.9%	27.9%	19.8%	34.4%	100.0%

x2(df=4, N=1080)=21.694***, Cramer V=.142***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

最後に地域で親しくしている人の数（反転）と今まで以上に近所づきあいを増やしたいか（反転）の二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 3 は、地域で親しくしている人の数（反転）と今まで以上に近所づきあいを増やしたいか（反転）の二変数間についてクロス集計表を作成したものである。まず、「親しくしている人の数」が、「多い」、「やや多い」と回答した人で「増やしたい」が、「13.6%」であり、「少し増やしたい」が、「31.8%」であり、「親しくしている人の数」が、「少ない」、「やや少ない」と回答した人で「増やしたい」が、「3.5%」であり、「少し増やしたい」が、「30.7%」であった。ここから分かることは現在地域で親しくしている人の数が多い人の方がさらに近所づきあいを増やしたいという結果になった。

表 3 のカイ二乗検定の結果をみると、カイ二乗値は 112.397 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.160 と一定の強さの関連が認められる。以上のことから、地域で親しくしている人の数と今まで以上に近所づきあいを増やしたいかの二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 3　Q40 地域で親しくしている人の数（反転）と
Q41 今まで以上に近所づきあいを増やしたいか（反転）のクロス集計表

			Q41 今まで以上に近所づきあいを増やしたいか					
			増やしたい	少し増やしたい	どちらともいえない	少し減らしたい	減らしたい	合計
Q40 地域で親しくしている人の数	多い	N	10	7	36	1	2	56
		%	17.9%	12.5%	64.3%	1.8%	3.6%	100.0%
	やや多い	N	8	27	97	6	2	140
		%	5.7%	19.3%	69.3%	4.3%	1.4%	100.0%
	どちらともいえない	N	4	39	253	8	0	304
		%	1.3%	12.8%	83.2%	2.6%	0.0%	100.0%
	やや少ない	N	3	40	156	14	8	221
		%	1.4%	18.1%	70.6%	6.3%	3.6%	100.0%
	少ない	N	8	48	278	8	38	380
		%	2.1%	12.6%	73.2%	2.1%	10.0%	100.0%
合計		N	33	161	820	37	50	1101
		%	3.0%	14.6%	74.5%	3.4%	4.5%	100.0%

x2(df=16, N=1101)=112.397***, Cramer V=.160***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 4 は、地域で親しくしている人の数（反転）を従属変数、年齢、女性ダミーを独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2値は 0.024 であり、投入した独立変数によって従属変数である抑うつ度の分散の 2.4%が説明されている。

結果をみると、年齢と女性ダミーが正で有意であった。これは、女性で年齢が高いほうが地域で親しくしている人の数が多いことがわかる。標準化係数（β をみると、女性ダミーが 0.137 と大きく、性別が地域で親しくしている人の数に与える影響が強いといえる。 上記の結果は、仮説 1 、2 を支持する結果である。

表 4　Q40 地域で親しくしている人の数（反転）の重回帰分析

	B	SE	β
(定数)	1.773	0.140	***
Q52 年齢（実数）	0.007	0.002	0.089 **
Q51 女性ダミー	0.338	0.074	0.137 ***
調整済みR^2	0.024		
N	1073		

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 5 は、今まで以上に近所づきあいを増やしたいか（反転）を従属変数、年齢、女性ダミー地域で親しくしている人の数（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。回帰式の調整済み R^2値は 0.034 であり、投入した独立変数によって従属変数である抑うつ度の分散の 3.4%が説明されている。

結果をみると、年齢と女性ダミーが負で有意、地域で親しくしている人の数が正で有意であった。これは、男性で年齢が低いほうが今まで以上に近所づきあいを増やしたいと考えている人が多いことがわかる。また、地域で親しくしている人の数が多い方が、今まで以上に近所づきあいを増やしたいと考えている人が多い。標準化係数（β）をみると、地域で親しくしている人の数が 0.186 と大きく、地域で親しくしている人の数が今まで以上に近所づきあいを増やしたいかに与える影響が強いといえる。上記の結果は、仮説 3 を支持する結果である。

表 5　Q41 今まで以上に近所づきあいを増やしたいか（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	2.939	0.085		***
Q52 年齢（実数）	-0.001	0.001	-0.002	
Q51 女性ダミー	-0.104	0.042	-0.074	*
Q40 地域で親しくしている人の数	0.106	0.017	0.186	***
調整済みR^2	0.034			
N	1073			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5. 考察

本研究では、年齢や性別といった要素が、近隣住民との親密度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とし、仮説 1「高齢者の方が近所付き合いが多い。」仮説 2「女性の方が近所付き合いが多い。」仮説 3「近所付き合いが多い人ほど、さらに近所付き合いを増やしたいと考えている。」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析の結果から、18 歳、19 歳、20 代といった若年層の方が近所付き合いが多いと回答する割合が多いことから仮説 1 は支持されなかった。また、女性のほうが少しだけ、近所付き合いが多いと回答する割合が多く、近所付き合いが多い人はさらに増やしたいと回答する割合が多かったことから仮説 2、3 は支持された。

6. 文献

[1] …リンクハウス.“「近所付き合いをしていてよかった」と思った瞬間”. インターステ

ーション.2020-08-07.
https://www.interstation.co.jp/kinjotukiaimerit/,（参照 2024-07-21）
[2] …高槻市役所.“カレンダーで探す”.高槻市ホームページ.
https://www.city.takatsuki.osaka.jp/calendar/,（参照 2024-07-21）
[3] …上田敏雄（2013）「大震災発生後の生死を分ける『黄金の 72 時間』とコミュニティ～ご近所づきあいが街（いのち）を救う～」『熊本大学政策研究』pp.1~10
[4] …吉井実南（2013）「高槻市内で行われるイベント参加と 近所づきあいの関係 」『平成 25 年度社会調査実習報告書 ―高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査― 』pp.112~121
[5] …吹田市.“平成 24 年度（2012 年度）市政モニタリング調査報告書　第 III 章　近所付き合いについて”.吹田市公式ウェブサイト.2013-03.
https://www.city.suita.osaka.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/007/153/201373171717.pdf,（参照 2024-07-21）
[6] …マイナビ子育て編集部.“ [近所付き合い希薄化]「ご近所の顔や名前を全く知らない」人は何割？近所付き合いは年々低下傾向に”. マイナビ子育て. 2022-10-20
https://kosodate.mynavi.jp/articles/22819,（参照 2024-07-21）

第 15 章　ご当地キャラクターの市民に対する影響

福壽　志穂

1.　はじめに

およそ 10 年前から「くまモン」を皮切りに始まった「ご当地キャラブーム」は定着し、高槻市にもご当地キャラが存在する。高槻市公式サイトによると、平成 23 年 6 月 8 日に「はにたん」と名付けられている。

また､2017 年 11 月から高槻市観光協会がはにたんの着ぐるみの貸し出しを行っており、以前は高槻市の知名度向上や地域貢献に資するイベントに限っていたが、個人事業者にも貸し出しが可能になったことで、市内の様々なイベントに登壇している。はにたんを目にする機会が増え、関心を持つ市民も増えているのではないだろうか。

東京市町村自治調査会（2015）によると、その自治体が何を目的としてご当地キャラを作成しているかによって、地域内での活動がメインであるのか、地域外をメインしているのか分かれる。地域住民の地域に対する愛着･郷土心の醸成を目的としている場合、地域内の活動もメインで行うことになる。そして、ご当地キャラの活用場面については、地域住民の幸せの実感を目的としている自治体も存在する。

本章では、ご当地キャラクターが地域住民に与える影響について着目し、ご当地キャラクターについてその地域住民がどのような感情を抱いているのか、その関係性を明らかにしていく。

2.　仮説

2.1. 先行研究

東京市町村自治調査会（2015）によると、ご当地キャラの印象に関して、地域住民がその地域の魅力を見直すきっかけになったと答えた人は約 62%であり、やや高い数字となっている。一方で、宮原・畔柳・櫛（2021）によれば、自治体が「ご当地キャラクターを制作しているにもかかわらず、地域住民が地域活性に関する取り組みが盛んでないこと、地域名が世間に広く知れ渡ってない」と感じており、地域住民らは地域に愛着を持ちにくい状況であるという研究結果も出ている。高槻市のご当地キャラクター「はにたん」を例に、高槻市民が高槻市やはにたんに愛着を持っているか調査する。

また、東京市町村自治調査会（2015）によると、子どもがいる回答者を対象に、ご当地キャラクターへの好意・興味の有無を聞いたアンケート結果によれば、子どもが専門学校以降の人は､｢好きなご当地キャラクターがいる｣と答えた割合が 20%を下回っている。一方で、子どもが幼稚園・保育園の人が 24%と最も高く、高校生でも 20.7%となっている。子どもがいる人は、はにたんへの愛着が強いかどうかについて調査する。

2.2. 仮説

先行研究から、自身の在住地域の印象について関心を持っている人は、ご当地キャラに対しても関心を持っていることが分かる。したがって、自身の在住地域に愛着を持ち、良いイメージを抱いている人は、その地域のご当地キャラにも愛着を持っている人が多いと推測する。

また、高校生以下の子どもを持つ人は、好きなご当地キャラクターがいる割合が高いということが分かる。つまり、子どもがいる人の中でも若い世代の人（40 歳以下と仮定する）は、自身の在住地域のご当地キャラに愛着を持ちやすいと推測する。

本章では、高槻市のご当地キャラ「はにたん」が高槻市民にどのような影響を与えているのかについて、以下の仮説をたてて検証する。

仮説 1　高槻市に愛着を感じる人は、はにたんにも愛着を感じる。
仮説 2　高槻市に関して良いイメージを抱えている人は、はにたんに愛着を感じる。
仮説 3　子どもがいる人は、はにたんに愛着を感じる。

3.　データと変数

3.1. データ

データは令和六年度・高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査を用いる。調査対象者は高槻市に居住する 18 歳以上 85 歳未満の男女で、計画標本は 2,000、有効回答数は 1,130、回収率は 56.5 である。

3.2. 変数

使用する変数は以下の通りである。なお、無回答や非該当は、欠損値として処理した。

Q14：あなたは、高槻市という地域についてどのようなイメージを持っていますか。（高槻イメージ（反転））

1.良い　2.やや良い　3.どちらともいえない　4.やや悪い　5.悪い

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q15：あなたは、高槻市に愛着を感じますか。それとも感じませんか。（高槻愛着（反転））

1.感じる　2.やや感じる　3.どちらともいえない　4.あまり感じない　5.感じない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q16：あなたは、高槻市のご当地キャラクター「はにたん」に愛着を感じますか。（はにた

ん愛着（反転））

1.感じる　2.やや感じる　3.どちらともいえない　4.あまり感じない　5.感じない

上記の選択肢に対して、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるように、尺度の反転を行った。

Q51：あなたの性別はどちらですか。（女性ダミー）

1.男性　2.女性

上記の選択に対して、男性を 0、女性を 1 とする女性ダミーを作成した。

Q52：あなたの年齢をお答えください。（年齢（実数））

1. 18、19 歳　2. 20 代　3. 30 代　4. 40 代　5. 50 代　6. 60 代　7. 70 代以上

上記の選択に対して、18 歳、19 歳を 18.5、20 代を 24.5、30 代を 34.5、40 代を 44.5、50 代を 54.5、60 代を 64.5、70 代を 74.5 として、実数化を行った。

Q60：同居していない場合も含めて、現在、お子様がおられますか。（子ども有ダミー）

1.いる　2.いない

上記の選択に対して、いるを 1、いないを 0 とする子ども有ダミーを作成した。

4.　分析

はじめに、高槻市に愛着を感じるかとはにたんに愛着を感じるかの二変数間の関連についてクロス集計表を用いて検討する。

表 1 は、「高槻市に愛着を感じるか」と「はにたんに愛着を感じるか」の二数間についてクロス集計表で分析を行ったものである。「高槻市に愛着を感じる」と答えた人の中で、「はにたんに愛着を感じる」と答えた割合は 51.4%であった。また、「高槻市に愛着を感じない」と答えた人の中で、「はにたんに愛着をあまり感じない」と答えた人の割合は 58.3%であった。ここから、高槻市に愛着を感じる人ほど、はにたんにも愛着を感じることがわかる。

カイ二乗検定の結果を見ると、カイ二乗値は 316.933 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.267 と強い関連が認められる。以上のことから、二変数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 1 を支持する結果である。

表 1　Q14 高槻市の愛着と Q16 はにたんへの愛着のクロス集計表

			Q16 「はにたん」に愛着を感じるか					
			感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	感じない	合計
Q15 高槻市に愛着を感じるか	感じる	N	236	135	70	16	2	459
		%	51.4%	29.4%	15.3%	3.5%	0.4%	100.0%
	やや感じる	N	83	200	131	32	4	450
		%	18.4%	44.4%	29.1%	7.1%	0.9%	100.0%
	どちらともいえない	N	9	48	62	24	3	146
		%	6.2%	32.9%	42.5%	16.4%	2.1%	100.0%
	4 あまり感じない	N	1	13	9	18	3	44
		%	2.3%	29.5%	20.5%	40.9%	6.8%	100.0%
	感じない	N	1	2	2	7	0	12
		%	8.3%	16.7%	16.7%	58.3%	0.0%	100.0%
合計		N	330	398	274	97	12	1111
		%	29.7%	35.8%	24.7%	8.7%	1.1%	100.0%

x^2(df=16, N=1111)=316.933***, Cramer V=.267***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 2　Q14 高槻市のイメージと Q16 はにたんへの愛着のクロス集計表

			Q16 「はにたん」に愛着を感じるか					
			感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	感じない	合計
Q14 高槻市のイメージ	良い	N	192	125	67	14	2	400
		%	48.0%	31.3%	16.8%	3.5%	0.5%	100.0%
	やや良い	N	122	216	141	36	5	520
		%	23.5%	41.5%	27.1%	6.9%	1.0%	100.0%
	どちらともいえない	N	14	48	63	35	5	165
		%	8.5%	29.1%	38.2%	21.2%	3.0%	100.0%
	やや悪い	N	1	5	2	12	0	20
		%	5.0%	25.0%	10.0%	60.0%	0.0%	100.0%
	悪い	N	0	2	0	0	0	2
		%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計		N	329	396	273	97	12	1107
		%	29.7%	35.8%	24.7%	8.8%	1.1%	100.0%

x^2(df=16, N=1107)=230.859***, Cramer V=.228***

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 2 は、「高槻市のイメージ」と「はにたんに愛着を感じるか」の二数間についてクロス集計表で分析を行ったものである。「高槻市のイメージが良い」と答えた人の中で、「はにたんに愛着を感じる」と答えた割合は 48.0%であった。また、「高槻市のイメージがやや良い」と答えた人の中で、「はにたんに愛着をやや感じる」と答えた人の割合は 41.5%であった。ここから、高槻市のイメージが良いと思う人ほど、はにたんにも愛着を感じることがわかる。

カイ二乗検定の結果を見ると、カイ二乗値は 230.859 であり、1%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.228 と強い関連が認められる。以上のことから、二数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは、仮説 2 を支持する結果である。

表 3 は、「子どもの有無」と「はにたんに愛着を感じるか」の二数間についてクロス集計表で分析を行ったものである。また、「子どもの有無」に関しては、幼い子どもを持つ人に焦点を当てたいため、40 代以下には範囲を設定し、分析を行った。「子どもがいる」と答えた人の中で、「はにたんに愛着を感じる」と答えた割合は 45.5%であった。一方で、「子どもがいない」と答えた人の中で、「はにたんに愛着を感じる」と答えた人の割合は 30.3%であった。ここから、子どもがいる人のほうが、はにたんにも愛着を感じることがわかる。

カイ二乗検定の結果を見ると、カイ二乗値は 16.118 であり、5%水準で統計的に有意である。また、Cramer の連関係数は 0.211 と強い関連が認められる。以上のことから、二数間の関連は、統計的に有意な関連であると考えられる。これは仮説 3 を支持する結果である。

表 3　Q60 子どもの有無と Q16 はにたんへの愛着のクロス集計表

			Q16「はにたん」に愛着を感じるか					
			感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	感じない	合計
Q60 子どもの有無	いる	N	96	74	23	15	3	211
		%	45.5%	35.1%	10.9%	7.1%	1.4%	100.0%
	いない	N	46	51	37	14	4	152
		%	30.3%	33.6%	24.3%	9.2%	2.6%	100.0%
合計		N	142	125	60	29	7	363
		%	39.1%	34.4%	16.5%	8.0%	1.9%	100.0%

x^2(df=4, N=363)=16.118**, Cramer V=.211**

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

表 4 は、はにたんへの愛着（反転）を従属変数、女性ダミー、年齢（実数）、子どもの有無（子ども有ダミー）、高槻市のイメージ（反転）、高槻愛着（反転）を独立変数として投入した重回帰分析の結果を示したものである。また重回帰分析に関しても、40 代以下の回答者に範囲を設定し分析している。回帰式の調整済み R2 値は 0.192 であり、投入した独立変数によって従属変数である生活満足度の分散の 19.2%が説明されている。

結果をみると、女性ダミーと年齢、イメージ、高槻愛着が正で有意であった。これは、高槻市に愛着や良いイメージを持っており、年齢の高い女性ほど、はにたんに愛着を持っていることがわかる。標準化係数（β）をみると、高槻愛着が 0.344 と大きく、高槻市への愛着がはにたんへの愛着に与える影響が強いといえる。これは仮説 1,2 を支持する結果である。一方、子ども有ダミーには有意な効果がみられなかった。上記の結果は、仮説 3 を支持しない結果である。

表 4　Q16 はにたんへの愛着（反転）の重回帰分析

	B	SE	β	
(定数)	0.798	0.369		*
Q51 女性ダミー	0.374	0.100	0.178	***
Q52 年齢(実数)	0.018	0.006	0.148	**
Q60 子ども有ダミー	0.142	0.111	0.068	
Q14 イメージ反転	0.150	0.081	0.109	†
Q15 高槻愛着反転	0.38	0.065	0.344	***
調整済みR^2	0.192			
N	357			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.10

5.　考察

本研究では、高槻市のご当地キャラクター「はにたん」を例に、ご当地キャラクターが地域住民に与える影響について着目し、ご当地キャラクターについて地域住民がどのような感情を抱いているのかについて明らかにした。仮説 1「高槻市に愛着を感じる人は、はにたんにも愛着を感じる」仮説 2「高槻市に良いイメージを抱えている人は、はにたんにも愛着を感じる」仮説 3「子どもがいる人は、はにたんにも愛着を感じる」という 3 つの仮説を立てて分析を行った。

分析結果から、高槻市に愛着や良いイメージを持っている人ほど、はにたんにも愛着を持つ傾向があり、仮説 1,2 は支持された。クロス集計表の分析では、子どもがいる人の方がはにたんに愛着を持つ傾向にあったが、重回帰分析ではその傾向が見られず、仮説 3 は部分的に支持する結果となった。仮説 3 が重回帰分析で支持されなかった理由として、年齢の若い子どもがいる人に範囲を絞るために、全てのデータを 40 代以下に設定して分析を行ったことが原因と考えられる。重回帰分析によると年齢が高くなるほど、はにたんに愛着を持つ傾向にあることがわかるため、年齢の範囲を変えると重回帰分析で仮説 3 も支持される可能性があると考える。

これらの結果により、自分の住んでいる地域に関心がある人は、地元のご当地キャラクタ

ーに関心を寄せている人が多いということがわかった。地域の PR を目的に作成されることの多いご当地キャラクターだが、その効果は十分に表れていると考えられる。

6. 文献

[1]…高槻市公式サイト「はにたんのプロフィール」
https://www.city.takatsuki.osaka.jp/soshiki/59/4333.html/（2024 年 12 月 9 日閲覧）
[2]…高槻市観光協会公式サイト
https://www.takatsuki-kankou.org/hanitan-kigurumi/（2024 年 12 月 9 日閲覧）
[3]…宮原佑貴子・畔柳加奈子・櫛勝彦（2021）「地域コミュニティにおける象徴的造形の生成と活用に関する理論構築―地域内外の生成目的を持つご当地キャラクターを事例として」『デザイン学研究』68(4) pp39
[4]…公益財団法人 東京市町村自治調査会（2015）「ご当地キャラクターの活用に関する調査研究報告書」pp18, pp70-74
[5]…関西大学総合情報学部（2014） 「平成 26 年度社会調査実習報告書 ―高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」pp171-172

資料：
予告はがき・調査票

郵　便　は　が　き

料金後納
郵便

□□□-□□□□

「高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査」
ご協力のお願い

高槻市と関西大学は、高槻市民の生活とものの見方についての調査を共同で実施することになりました。調査の対象は、無作為に選ばれた18歳以上の市民の方です。

近日中に調査票の入った**大きな茶封筒（ボールペン入り）**が届きます。ご多忙中、誠に恐縮ですが、届き次第、調査票に回答をご記入の上、ご返送頂きますようよろしくお願い申し上げます。

令和６年８月

高槻市 Takatsuki City　関西大学

市民生活環境部　市民生活相談課
〒569-0067　高槻市桃園町2-1
TEL　０７２－６７４－７１３０

関西大学　総合情報学部
〒569-1095　高槻市霊仙寺町2-1-1
TEL　０７２－６９０－２１５１

※あて所に尋ねあたらない場合は、**高槻市**へ返戻して下さい。

予告はがき

［令和６年度市民意識調査］

高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査

（調査実施）高槻市・関西大学総合情報学部

高槻市と関西大学は共同で、市政と市民生活に関する調査を行っています。市は、今後の施策を検討するうえでの基礎資料とすることを目的に、大学は、高槻市民の生活とものの見方に関する研究と教育を行うことを目的に実施するもので、調査の対象は、住民基本台帳から無作為に選ばれた１８歳以上の市民の方です。**封筒宛名のご本人様ご自身の回答を**、この調査票にご記入いただきますようお願いいたします。調査の回答は、調査の目的以外には、一切利用いたしませんので安心してお答えください。

調査結果につきましては、本年１２月頃に速報版を、翌年３月中に最終報告書を発行し、高槻市と関西大学で閲覧できるようにいたします。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

＊ボールペンを同封しております。回答の際にご利用ください（返却の必要はありません）。
＊ご回答は、とくに断りがなければ、選択肢番号を１つだけ選んでマルをつけてください。マルをつける個数が決められていたり、回答していただく方が限られていたりするものは、指示に従ってお答えください。
＊お忙しいところ誠に恐縮ですが、**９月６日（金）**までに、同封の封筒（切手貼付済み）でご返送いただきますようお願いいたします。
＊この調査票と封筒には、ご住所やお名前を記入されないようお願いいたします。
（どなたがどのような回答をされたかわからないようにするためです。）

＜調査に関するお問い合わせ＞　高槻市　市民生活環境部　市民生活相談課　tel：072-674-7130
関西大学　総合情報学部　tel：072-690-2151

Ｑ１．あなたは、現在の生活全体にどのくらい満足していますか。

１	２	３	４	５
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満

Ｑ２．あなたは、現在どのくらい幸せですか。

１	２	３	４	５
幸せ	やや幸せ	どちらともいえない	やや不幸せ	不幸せ

Ｑ３．あなたのお住まいの地域は、全体的に暮らしやすいと思いますか。

１	２	３	４	５
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Ｑ４．あなたは、現在お住まいの地域にどのくらい「住み続けたい」と思いますか。

１	２	３	４	５
ずっと住み続けたい	住み続けたい	まあ住み続けたい	どちらともいえない	機会があれば引っ越したい

Ｑ５．あなたは、高槻市には地域ブランドと呼べるような特産品や観光地があると思いますか。

１	２	３	４	５
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Ｑ６．あなたが買い物・食事・娯楽などで中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に行く頻度は、７年前と比べて増加しましたか。それとも減少しましたか。

１	２	３	４	５	６
増加した	少し増加した	変わらない	少し減少した	減少した	７年前を知らない

Ｑ７．あなたは、中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、７年前と比べて向上したと思いますか。それとも低下したと思いますか。

Ａ．防災面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	７年前を知らない

Ｂ．防犯面での安全性や快適性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	７年前を知らない

Ｃ．居住環境

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	７年前を知らない

Ｄ．公共交通機関の利便性

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	７年前を知らない

Ｅ．歩行者にとっての歩きやすさ

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	７年前を知らない

Ｆ．風紀や治安

1	2	3	4
向上した	変わらない	低下した	７年前を知らない

Ｑ８．あなたは、中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）に関する以下の点について、７年前と比べて増加したと思いますか。それとも減少したと思いますか。

Ａ．文化活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｂ．コミュニティ活動

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｃ．商店街の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｄ．百貨店などの大型店の魅力

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｅ．買い物やイベントでのにぎわい

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｆ．魅力的な飲食店

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｇ．オフィスなど業務施設

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｈ．病院などの医療機関

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｉ．道路の渋滞

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｊ．駐輪場

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｋ．駐車場

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｌ．街なかの緑や潤い

1	2	3	4
増加した	変わらない	減少した	７年前を知らない

Ｑ９．中心市街地（ＪＲ高槻駅・阪急高槻市駅周辺）を住み良い街にするために、あなたはどのような取り組みが必要だと思いますか。３つ以内にマルをつけてください。

１．街路樹や植栽、公園の整備など、緑豊かな住居環境の向上を図る

２．日常生活に困らないよう、スーパーマーケットや食料品店などの充実を図る

３．休日や夜間の突然の病気やケガで困らないよう、病院など医療機能の充実を図る

４．安心・安全に生活できるよう、治安・防犯の向上を図る

５．高齢者等も安全・快適に外出できるよう、歩行者空間の整備や街のバリアフリー化を図る

６．民間のマンションや公的住宅など、中心市街地での住宅の供給を促進する

７．その他（　　）

８．今以上の取り組みは必要ない

Ｑ１０．あなたは、普段、ＪＲ高槻駅を利用しますか。

１．利用する　　２．利用しない

Ｑ１１．ＪＲ高槻駅周辺について、高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間であると感じますか。

１	２	３	４
感じる	やや感じる	あまり感じない	感じない

Ｑ１２．あなたは、普段、阪急高槻市駅を利用しますか。

１．利用する　　２．利用しない

Ｑ１３．阪急高槻市駅周辺について、高槻の玄関口にふさわしい風格と魅力ある都市空間であると感じますか。

１	２	３	４
感じる	やや感じる	あまり感じない	感じない

Ｑ１４．あなたは、高槻市という地域についてどのようなイメージを持っていますか。

１	２	３	４	５
良い	やや良い	どちらともいえない	やや悪い	悪い

Ｑ１５．あなたは、高槻市に愛着を感じますか。それとも感じませんか。

１	２	３	４	５
感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	感じない

Ｑ１６．あなたは、高槻市のご当地キャラクター「はにたん」に愛着を感じますか。

１	２	３	４	５
感じる	やや感じる	あまり感じない	感じない	はにたんを知らない

Ｑ１７．あなたは、高槻市営バスについて、どのくらい満足していますか。

１	２	３	４
満足	やや満足	やや不満	不満

Ｑ１８．あなたは、普段、高槻市営バスをどのくらいの頻度で利用していますか。

１	２	３	４	５
ほぼ毎日	週に3～4日	週に1～2日	月に数日	利用しない

Ｑ１９．高槻市営バスに関する以下の項目について、あなたのお考えをおうかがいします。

Ａ．運行本数が少ない

１	２	３	４	５
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Ｂ．近くに路線やバス停がない

１	２	３	４	５
そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない

Ｑ２０．あなたの関心が高い、環境問題に関する話題は何ですか。３つ以内でマルをつけてください。

１．地球温暖化
２．ヒートアイランド現象
３．異常気象
４．省エネルギー（節電）
５．再生可能エネルギー
６．大気汚染、ＰＭ２．５
７．騒音、振動
８．悪臭
９．水質汚濁
１０．土壌汚染
１１．生物多様性、外来生物
１２．森林荒廃
１３．景観保全
１４．都市緑化
１５．食の安全性
１６．食品ロス
１７．ごみの減量、リサイクル
１８．不法投棄
１９．その他（　　）
２０．いずれにも関心がない

Ｑ２１へ

Ｑ２１．次に、現在の高槻市の環境に関するＡ～Ｄの項目について、あなたのお考えをおうかがいします。

Ａ．高槻市には、身近な自然環境とのふれあいがあると思いますか。

１	２	３	４
そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない

Ｂ．高槻市は、不法投棄やポイ捨ての少ない美しいまちだと思いますか。

１	２	３	４
そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない

Ｃ．高槻市には、良好な環境づくりを目指した活動が豊富にあると思いますか。

１	２	３	４
そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない

Ｄ．高槻市には、環境活動に関する情報や呼びかけが十分にあると思いますか。

１	２	３	４
そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない

Ｑ２２．あなたは、普段、どの程度朝食をとっていますか。

１	２	３	４	５
毎日	週に5～6回	週に3～4回	週に1～2回	まったく食べない

Ｑ２３．あなたは、普段、どのくらいの頻度で運動をしていますか。

１	２	３	４	５	６
週に5日以上	週に3～4日	週に1～2日	月に1～3日	3か月に1～2日	まったくしない

Ｑ２４．あなたは、次のような活動をどのくらいしていますか。

Ａ．演劇を見に行く

１	２	３	４	５
月1回以上	年に数回ぐらい	年に1回ぐらい	数年に1回ぐらい	まったくない

Ｂ．宿泊をともなう旅行

１	２	３	４	５
月1回以上	年に数回ぐらい	年に1回ぐらい	数年に1回ぐらい	まったくない

Ｑ２５．あなたの自宅の近くに（徒歩３分以内）、運動ができる公園・緑地・広場はありますか。

１．ある　　２．ない

Ｑ２６．あなたのテレビの視聴時間は、一日あたりどのくらいですか。

０．まったく見ない
１．30 分未満
２．30 分以上 1 時間未満
３．1 時間以上 2 時間未満
４．2 時間以上 3 時間未満
５．3 時間以上 5 時間未満
６．5 時間以上 7 時間未満
７．7 時間以上

Ｑ２７．あなたは、普段、1 日にどのくらいの時間、ＳＮＳ（X（旧 Twitter），Instagram，Facebook など）に触れていますか。

０．まったく利用しない
１．20 分未満
２．20 分以上 40 分未満
３．40 分以上 1 時間未満
４．1 時間以上 2 時間未満
５．2 時間以上

Ｑ２８．あなたは、普段、テレビやインターネットで、ドラマをどのくらいごらんになりますか。

1	2	3	4	5
ほぼ毎日	週数回程度	週 1 回程度	それ以下	まったく見ない

Ｑ２９．あなたは、商品やサービスの購入を検討する際、ブログや口コミサイト、ＳＮＳなど、インターネットの情報を参考にしますか。

1	2	3	4
よくする	ときどきする	あまりしない	まったくしない

Ｑ３０．あなたは、普段、どんなメディアでニュースを見聞きしますか。最も多く接するメディアを１つ選んでください。

１．テレビ
２．新聞（電子版も含む）
３．ラジオ
４．インターネット（ネットニュース、Youtube などの動画サイト、ＳＮＳなど）
５．その他
６．ニュースはまったく見聞きしない

Ｑ３１．自殺で亡くなる人の数は全国で年間約 2 万人となっています。あなたは毎年、このように多くの方が自殺で亡くなっていることをご存知ですか。

１．知っている　　２．知らない

Ｑ３２．あなたは、自殺について相談できる機関があるのをご存知ですか。（例えば、保健所　こころの健康相談など）

１．知っている　　２．知らない

Ｑ３３．あなたは、これまでの人生の中で本気で自殺したいと考えたことがありますか。

１．ある　　２．ない

Ｑ３４．あなたは、もし身近な人から「死にたい」と打ち明けられたとき、どう対応するのが良いと思いますか。適切と思われるものをいくつでもお選びください。

１．相談に乗らない、もしくは話題を変える
２．「死んではいけない」と説得する
３．「つまらないことを考えるな」と叱る
４．「がんばって生きよう」と励ます
５．「死にたいぐらい辛いんだね」と共感を示す
６．「医師など専門家に相談した方が良い」と提案する
７．ひたすら耳を傾けて聞く
８．その他（　　）
９．適切と思われる対応はない

Ｑ３５．今後の自殺対策について、おうかがいします。
今後、どのような自殺対策が求められるとあなたは思いますか。いくつでもお選びください。

１．自殺の実態を明らかにする調査・分析
２．危険な場所、薬品等の規制
３．インターネットにおける自殺関連情報の対策
４．自殺対策に関する広報・啓発
５．適切な精神科医療体制の整備
６．職場におけるメンタルヘルス対策の推進
７．自殺対策に関わる民間団体の支援
８．様々な分野におけるゲートキーパー※の養成
９．様々な悩みに対応した相談窓口の設置
10．地域やコミュニティを通じた見守り・支え合い
11．子どもの自殺予防
12．自殺未遂者の支援
13．自死遺族等の支援
14．その他（　　）

15．特になし

※「ゲートキーパー」とは、悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聴いて、必要な支援につなげ、見守る人のことです。

Ｑ３６．自殺したいという気持ちを乗り越えるには、どのような方法が適切と思われますか。適切と思われるものをいくつでもお選びください。

１．家族や友人、職場の同僚など身近な人に悩みを聞いてもらう
２．医師やカウンセラーなど心の健康に関する専門家に相談する
３．弁護士や司法書士、公的機関の相談員など、悩みの元となる分野の専門家に相談する
４．できるだけ休養を取るようにする
５．趣味や仕事など他のことで気を紛らわすよう努める
６．特に何もしない
７．その他（　　）
８．適切と思われる方法はない

Ｑ３７．次のａ～ｓは、市の仕事のうち、生活に関係の深いものをあげています。
以下から、①あなたが、最近良くなってきたと思うもの（マルはいくつでも）、また、②あなたが、今後力を入れてほしいもの（マルは３つまで）をそれぞれ選んでください。

②　力を入れてほしいもの（３つまで）		
①　良くなってきたもの（いくつでも）		↓
a. 学校教育の充実、青少年の健全育成	１	１
b. 図書館、博物館などの文化施設の整備	２	２
c. スポーツ・レクリエーション施設の整備や健康づくり	３	３
d. 高齢者や障がい者等への福祉対策	４	４
e. 医療施設や救急医療体制の整備	５	５
f. 空気の汚れ、騒音などへの対策	６	６
g. 公園の整備や自然・緑の保全	７	７
h. 街並み・景観の整備	８	８
i. 駅前の整備、駐車・駐輪対策	９	９
j. ごみの収集･処理･再資源化(リサイクル)	１０	１０
k. 下水道の整備	１１	１１
l. 水の安定供給、上水道整備	１２	１２
m. バス・鉄道などの公共交通機関の整備	１３	１３
n. 身のまわりの生活道路の整備	１４	１４
o. 交通安全・災害防止対策	１５	１５
p. 公営住宅の建設や住宅融資制度	１６	１６
q. 市の広報・窓口相談、情報公開の充実	１７	１７
r. 災害対策・防犯対策	１８	１８
s. 子育て支援	１９	１９
t. 特になし	２０	２０

Ｑ３８．あなたは、『「高槻市みらいのための経営革新」に向けた改革方針』をご存知ですか。

１	２	３
名前も内容も知っている	名前だけ知っている	知らない

Ｑ３９．あなたは、高槻市が２０年後、３０年後を見据えて行財政改革に取り組む必要性を感じますか。

１	２	３	４
感じる	やや感じる	あまり感じない	感じない

Ｑ４０．あなたは、現在のお住まいの地域で親しくしている人の数が、どちらかといえば多い方だと思いますか、それとも少ない方だと思いますか。

1	2	3	4	5
多い	やや多い	どちらともいえない	やや少ない	少ない

Ｑ４１．あなたは、今まで以上に近所づきあいを増やしたいですか。それとも減らしたいですか。

1	2	3	4	5
増やしたい	少し増やしたい	どちらともいえない	少し減らしたい	減らしたい

Ｑ４２．あなたは、屋外にいて人がまばらな時、普段マスクを着用しますか。

1	2	3	4
常に着用する	たいてい着用する	あまり着用しない	まったく着用しない

Ｑ４３．あなたは、普段、新型コロナウイルスに感染するのではないかという不安を感じますか。

1	2	3	4
非常に感じる	ある程度感じる	あまり感じない	まったく感じない

Ｑ４４．あなたは、集団行動が好きですか。嫌いですか。

1	2	3	4
好き	やや好き	やや嫌い	嫌い

Ｑ４５．あなたは、自分の判断が不安になり、人に合わせて自分の意見を変えることが、どの程度ありますか。

1	2	3	4
よくある	ときどきある	あまりない	まったくない

Ｑ４６．あなたは、知り合いから聞いた情報に影響されやすい方ですか。

1	2	3	4
そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない

Ｑ４７．あなたは、ご自身が詐欺の被害に遭うことはないと思いますか。

1	2	3	4
そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない

Ｑ４８．あなたは、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見についてどう思いますか。

1	2	3	4
そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない

Ｑ４９．あなたが子どもの頃、家族の誰かが本を読んでくれたことは、どの程度ありましたか。

1	2	3	4
よくあった	ときどきあった	あまりなかった	まったくなかった

Ｑ５０．あなたは、ご世帯の収入に、どのくらい満足していますか。

1	2	3	4	5	6
満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	わからない

◆最後に、今回の調査結果を統計的に処理するために、いくつかおうかがいします。答えたくない質問や答えにくい質問は空欄のままでも構いません。

Ｑ５１．あなたの性別はどちらですか。

１．男性　　２．女性

Ｑ５２．あなたの年齢をお答えください。

１．18 歳、19 歳
２．20 代
３．30 代
４．40 代
５．50 代
６．60 代
７．70 代以上

Ｑ５３．あなたの現在の職業はどれにあたりますか。（複数の職業に就かれている場合は、主なもの１つにマル）

１．常時雇用の勤め人
２．臨時雇用、パート、アルバイト
３．自営業主
４．自営業の家族従業者
５．経営者、役員
６．家事専業
７．学生
８．無職
９．その他（　　）

Ｑ５４．あなたの最終学歴を教えてください。（在学中の方は、いま通っている学校を選んでください）

１．中学（旧小学校など）
２．高校（または旧制中学など）
３．専門学校
４．短大・高専（５年制）
５．大学（旧高専）・大学院
６．わからない

Ｑ５５．あなたのお住まいの地域はどこですか。（　）内の小学校区を参考にしてお答えください。

１．樫田地区（樫田小学校）
２．高槻北地区（芥川・真上・磐手・奥坂・清水・北清水・安岡寺・日吉台・北日吉台小学校）
３．高槻南地区（高槻・桃園・大冠・北大冠・松原・桜台・竹の内・西大冠・若松・南大冠・冠小学校）
４．五領地区（五領・上牧小学校）
５．高槻西地区（郡家・赤大路・阿武野・南平台・川西・土室・阿武山小学校）
６．如是・富田地区（芝生・丸橋・寿栄・富田・柳川・玉川・如是・津之江・五百住小学校）
７．三箇牧地区（三箇牧・柱本小学校）

Ｑ５６．高槻市には現在までどのくらいお住まいですか。

１．１年未満
２．１年以上３年未満
３．３年以上５年未満
４．５年以上 10 年未満
５．10 年以上 20 年未満
６．20 年以上 30 年未満
７．30 年以上 40 年未満
８．40 年以上 50 年未満
９．50 年以上

Ｑ５７．あなたの現在のお住まいは、一戸建てですか、集合住宅ですか。

１．一戸建て　　２．集合住宅（アパート・マンションなど）

Ｑ５８．そのお住まいは、次のどれにあたりますか。

１．持ち家（親などが持ち主の場合も含む）
２．民間の賃貸住宅
３．社宅・公務員住宅等の給与住宅
４．公社・公団等の公営の賃貸住宅
５．その他

Ｑ５９．あなたは現在、結婚していらっしゃいますか。

１	２	３
既婚（配偶者あり）	既婚（死別・離別）	未婚

Ｑ６０．同居していない場合も含めて、現在、お子様がおられますか。

１．いる　　２．いない

Ｑ６１．あなたの世帯の人数を、あなたも含めてお答えください。

□　人

Ｑ６２．過去一年間のあなたの世帯の収入はどれくらいですか。臨時収入、副収入も含めてお答えください。

１．100 万円未満
２．100 万円～200 万円未満
３．200 万円～400 万円未満
４．400 万円～600 万円未満
５．600 万円～800 万円未満
６．800 万円 ～1000 万円未満
７．1000 万円～1500 万円未満
８．1500 万円以上
９．わからない

お忙しいなか、ご協力いただきありがとうございました。
ご回答いただきました調査票は、返信用封筒に入れて、９月６日（金）までにご返送ください。早目にご投函いただければ幸いです。
なお、同封のボールペンは、返信用封筒に入れずに、日頃の生活の中でご利用ください。

◆調査結果資料（速報版）発行予定：令和６年１２月頃
◆調査報告書発行予定：令和７年３月
◆閲覧窓口：高槻市役所本館１階行政資料コーナー
関西大学総合情報学部事務室
（高槻市・関西大学総合情報学部のウェブページでも閲覧可能となる予定です。）

執筆者紹介

阪口 祐介	（さかぐち ゆうすけ）	編集・はじめに・第 1 章	（関西大学総合情報学部教授）
松本 渉	（まつもと わたる）	編集・第 1 章	（関西大学総合情報学部教授）
高山 理名	（たかやま りな）	第 2 章	（関西大学ティーチング・アシスタント）
數岡 美咲	（かずおか みさき）	第 3 章	（関西大学総合情報学部生）
井上 勝喜	（いのうえ かつき）	第 4 章	（関西大学総合情報学部生）
石崎 璃	（いしざき あき）	第 5 章	（関西大学総合情報学部生）
田井 豊浩	（たい とよひろ）	第 6 章	（関西大学総合情報学部生）
細川 夏実	（ほそかわ なつみ）	第 7 章	（関西大学総合情報学部生）
松村 咲希	（まつむら さき）	第 8 章	（関西大学総合情報学部生）
山岡 由依	（やまおか ゆい）	第 9 章	（関西大学総合情報学部生）
吉田 百花	（よしだ ももか）	第 10 章	（関西大学総合情報学部生）
和田 枝里子	（わだ えりこ）	第 11 章	（関西大学総合情報学部生）
喜多 涼陽	（きた りょうや）	第 12 章	（関西大学総合情報学部生）
久保 侑汰	（くぼ ゆうた）	第 13 章	（関西大学総合情報学部生）
角田 渉睦	（すみた あゆむ）	第 14 章	（関西大学総合情報学部生）
福壽 志穂	（ふくじゅ しほ）	第 15 章	（関西大学総合情報学部生）

2024 年度社会調査実習報告書
―高槻市と関西大学による高槻市民郵送調査―

編集　関西大学総合情報学部、発行　関西大学総合情報学部、発行年月　2025 年 3 月

※ 関連する資料として、同時期に発行された『高槻市と関西大学による市民意識調査報告書―令和 6 年度―』（関西大学総合情報学部[編集]，高槻市・関西大学総合情報学部[発行]）があります。本報告書の 3 章～15 章が省略されたものになります。